
神なんて死んでしまえ

キサラギ職員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神なんて死んでしまえ

【Nコード】

N0711U

【作者名】

キサラギ職員

【あらすじ】

自殺を考えた現代人の男性が、なんとか生きようと決意した矢先、神様を名乗る存在に殺されてしまう。ふと気が付くと彼はエルフの少女にさせられて異世界にいたのだった。悪いことに、その世界ではエルフは迫害を受ける対象であった。彼は地べたを這いずりまわりながらも、現代に帰還する手段を探し続ける。神なんて死んでしまえと心の底から叫びつつ。もちろん雑草だって食べますよ。蜘蛛もおいしく頂けます。

第二章突入。

当作品は「Arcadia」の方にも投稿してあります。同名の作者です。

「Arcadia」とはあらすじや文頭のローマ数字の有無という違いがあります。仕様です。

< 1 > 転生、そして……

その青年は、生きたかったはずなのだ。

よくある話だ。いじめられて、人生に絶望した拳句の自殺。迷惑をかけないように、それでいていじめをしてきた連中の心に一生とれないような傷を残す自殺をしようと思った。

電車自殺。否。

その瞬間をいじめしてきた連中に見せることは難しく、むしろ関係無い人に迷惑がかかる。

リストカット。否。

中々死ねない。しかも痛い。恐怖感は与えど、よほど深く切らねば出血ショックで死亡にはならぬ。

薬物自殺。否。

最近の薬は余ほど飲まねば死ねないし、そもそもそんなことはできない。

薬局で大量に購入したり、コンビニで大量に購入したら怪しまれることは確実である。

青年は悩んだ末、生きることを選んだ。

死んだら生き還らない。命は代用不能で、取り返しのつかない美しく気高いもの。

それをやすやすと捨てるなど、生命に対する冒瀆であり、また自分で自分が許せなくなる。親が泣くことは分かった。命は一つだけと思った。だから、生きようと思った。

人間、なんとか生きていけるものだ。特に日本では仮に家も職も家族も無くして社会から切り離されても、生きて行く道はいくらで

もある。

だというのに、死んだ。

道端を歩いていたら突如トラックが突っ込んできた。

あ、と思った次の瞬間彼は見事に轢かれ、地面に叩きつけられた拳句郵便ポストに背中から突っ込み背骨を損傷した。内臓もほぼ潰れていた。

彼は自分の不運を嘆きながら、『背骨って折れるとき音がするんだな』とどうでもよいことを考えながらこの世を去った。

高校生になって二年目の真冬のことだった。

彼の死体には雪が降り注ぎ、血が郵便ポストを染めていたという。

どこだここは、と思った。

彼が目を覚ますと、そこは一面の白であった。

記憶を手繰る。思い出した。自分はトラックに轢かれた拳句郵便ポストに突っ込み背骨をボキリと折って死んだのだったと。

だが、妙ではないか。死んだのならそこでお終いではないのだろうか。仮に非科学があるにしても、裁かれるのではないのか。

何故自分は真っ白な空間に全裸で浮遊しているのか。

青年は自分が全裸であることに気がつくのと、とりあえず前かがみになり股間を隠した。みっともない格好ではあったが、服も無くまた隠すものすらないのではこうするしかない。

十分、否、二十分？

どれだけの時間が経過したのかはさっぱり分からないが、突如目の前に男が現れた。

男？ それは変だ。何しろその“男”は輪郭が極めて曖昧で、ノイズがかかったようにおぼつかない。

霧を人の形にしたと言うべきか、白いクレヨンで人を描いているようにも見えた。

「やあ」

「……………」

その存在が理解出来なかった。

その“男”はニヤリと笑うと（そう見えた）と、親しげな様子で握手を求めてきた。無視した。

と言うより、白の空間に白の男が浮いているのに、一体全体、どうして輪郭や性別を判断できたのかがさっぱり分からない。淵があるわけでもないというのに。

“男”は残念そうに頭を振ると、歩み寄ってきた。地面があるような歩調であるのに、青年が足を動かしても地面など無かった。

“男”が口を開いた。果たして、物理的な口なのかは青年に分かる訳もなかった。

「君にはこれから別の世界に転生して貰いたい」

「……………はい？ はい？ あの、テンセイ……………？ というかあんた誰なんですか？」

死んだと思っただけなら妙な“男”に別の世界にテンセイしろと言われるた。

笑えない。最高に笑えない。これから人生頑張ろうとした時に、どうしてこんなことになったのか。

もう、死ぬほど笑えない。死んでるか。

“男”はひらりと手を振るとまた口を開いた。

「君はね、死んだんだよ」

「はあ、そうなんですか。じゃあ天国に行きたいんですが。それ

か家族を見守る守護靈的なのをお願いできますか。あんだ、神様の存在なんでしょう？」

「エラく現実的だなあ、君は。神様って言ったら確かに神だがね」

「ところで、誰が僕を殺したんですか？」

「私だよ」

「あ？」

「私だよ」

青年は一瞬あつげにとられたが、すぐに表情を怒り染めた。

すぐにも殴りかかりたかったが、白の空間においては推進力を得るための地面も壁もないので腕を振り回すしかできなかった。

怒りの理由は山ほどあった。生きたかったのに死んだ。家族も友人からも切り離されて、しかも謝罪の言葉すらなくむしる楽しげに言ってみせた“男”を殴りたかった。

しかしこうも考えた。これが神なら、運命で殺したのではないかと。

神が世界の運命を決めるなら、なるほど、『殺す』のも神様の仕事かもしれない。ならば怒っても無意味ではないか。

そう考えてなんとか怒りを抑える青年。

だが、続いて“男”が言ったセリフで青年は完全にキレた。

「……つまり？」

「暇だったからなあ……： 人生に絶望してたし、いいじゃないか。おまけに美少女でエルフで転生させてやるからさ。な、悪い話じゃないだろ？」

「はあ！？ 死ね！ 今すぐ死ね！ 暇だったから！？ ふざけんなよクソつたれ！ おまえが死ねよ！ 絶望なんていつしたんだよ！ 立ち直って歩きだそうとしてたんだぞ！」

「あー聞こえないなあ。いいだろ？ 人生をやり直させてやるんだから感謝しろよ」

「殺してやる……！」
「ハイ転生」

青年は股間を隠すことも忘れ、目の前の傲慢な“男”を睨み、傷一つでも良いからつけてやらんともがいたが、一寸たりとも前進しなかった。

“男”は青年の怒号に耳を塞ぐと、最後に『精々楽しませてくれよ』と高らかに笑いつつ指を鳴らした。

畜生め、いつか殺してやる。

アンナモノ神様だとは認めない。

青年は自分の知る限りの罵り言葉を吐き出しつつも、勝手な理由で殺されたことを心に深く刻みこんだ。そして世界を認識できなくなるその瞬間まで、自分を産んでくれた両親と、今まで支えてくれた全ての人に心からの謝罪をした。

殺されてごめんなさい。

世界が、暗転した。

< 2 > 火炎とナイフと

目が覚めた。痛かった。頭が死ぬほど痛かった。

全てが焼け落ちようとしている西洋風の集落の片隅で“青年”は目を覚ました。頭が痛い。思考が定まらない。唾液が出ない。

視界に映る全てが赤と朱色で埋め尽くされて、

「……………どこ、……………だ……………？」

思い出せば、自分がカミサマとやらにテンセイさせられたということが鮮明に蘇ってくる。

となると、ここはテンセイ先なんだろうか。

青年はもつと考えておきたかったが、そもいられないと気がついた。

理由は極めて単純明快。自分が居るのが室内であり、なおかつ燃えているからだ。理由は知らない。原因も知らない。が、燃える室内にいつまでも居れば死ぬのは道理である。

青年はすぐに逃げようと腰を上げて、その異常に気がつくことになった。

身体が違うのだ。男性のそれは既に無く、不思議と違和感の無い小学生かもつと小さいくらいの女の子の身体が自分のモノになっている。

「からだ……………からだか……………どうなってるんだ」

自己と言うアイデンティティが崩壊する。

男性の身体で十数年生きてきたはずが、ふと気がつけば幼女。吐き気がする。キグルミが自分の身体に同化したような感覚。気持ち

悪い。

熱気満ちる室内なのに、吐き気が止まらない。涙が止まらない。性別も人生も何から何までを否定されて、しかも妙な世界に転生。自分そのものが完全否定された、その事実が吐き気を催させた。頭の中がぐるぐると廻る。

「うう……っ」

“少女”は、目の前でカーテンが黒の灰と消えるのを目にしつつも、胃の中身を床に吐きださなければならなかった。吐しゃ物が床にぼとぼと落ちた。

口の中が酸性の液で満たされて、鼻につんとくる臭いが涙を滲ませる。

これがゲームならいいのに、と思う。これが他人事ならどれだけ楽だったか。だがこれが現実。全て現実なのだ。

「逃げよう。死ぬ」

わざと口に出すと、“エルフ族の少女”は、火炎が壁から天井に広がっていくのを見て、手じかなナイフを握りしめた。

脱出経路を確保しなくてはならぬ。ドアは燃えた。ならば、窓を破るしかない。

カーテンは瞬く間に焼け落ち、床に転がった。好機、窓に手を伸ばすと、一気に開け放ち外に飛び出して地面に無様に倒れ込んだ。膝をすりむいた。

次の瞬間天井の梁が力尽きたようにぼきりと折れて、部屋に火の粉と濃密な焔を滝のように流し、窓が爆撃を受けたようにけし飛ぶ。硝子の破片が少女に降り注ぐ。

「ッ……っ！」

手の中のナイフを宝物のように握りしめ、少女はその家屋から逃げ出した。

暗闇の中、その家屋は完全に火に包まれ、またその家屋が所属していた村は火炎に沈んで地図から完全に消えた。黒煙が闇夜に昇り、星空を覆い隠していた。

どれだけ走った事か。

事情も右も左も分からぬ“少女”は、エルフ特有の長い耳を揺らしながら、集落からほど近い場所をとぼとぼと歩いていった。

深夜なのだろうか、空は暗く、蝙蝠が空を元気よく泳いでいるのが見えた。星空が近い。現代日本ではありえない。全く違う世界なのだろうか。

道が舗装されているなんてことも無い訳で、岩でごつごつした場所を歩かねばならなかった。

行くあてなんてない。あのカミサマとやらの話が本当なら、“少女”は完全に孤独であった。

エルフがいるということはファンタジー世界。家の造りから推測するに中世。

ということとは法律は曖昧で、あての無い女の子を引き取ってくれる施設なんぞある訳も無い。勉強は得意で無い“少女”でも、歴史の教科書ではそんなことが書いてあったことくらいは思い出せる。

「どつしよじ……」

熱射病にかかったのか、足元がおぼつかない。

ナイフ一本を握りしめ、草の生い茂った場所をただ歩く。

水が欲しい。水さえあればいい。でも、水道もコンビニも無く、井戸も無い。

熱に浮かされた頭は水を求め続け、染み出すことを止めた唾液を飲み込むことを続ける。疲労が強く、思考に無駄な情報が錯綜して意味が分からない。

自分が死んだことは理解できても、悲しみや怒りよりも先に水を求める原始的欲求の方が勝った。

なんで村が焼き払われていたのか、自分のこの身体の親や友人はどこにいったのか、それすら分からぬまま、歩く。

「……………？ ……………… 声がする」

舌と口蓋が張り付くほどに口が渴いている。

耳に拾ったのは男たちの声。村の様子を見に来た近隣の村人ももしれない。ならば助けてくれるかもしれない。

少女はふらふらと歩いて行くと、その男達の声のする場所を探した。ベト付く草木が服や皮膚を汚し、地面の凹凸は体力を奪い去っていく。

「……………！」

だが少女の予想は完全に違っていた。

大木の陰に身を潜めるようにして声の元に顔を向けて見れば、そこには馬に乗った男たちが、『血に濡れた』剣から丹念に血を落としているところだったのだ。

出来る限り身を小さくして、草むらから耳を澄ます。虫の声が少女の雑音を打ち消してくれた。

「あっけなかつたなあ、エルフなんてあんなもんか」

「そうでもないぜ？　女はヤバかつたな。いい声で鳴いてくれたよ」

「おい、持ち帰るとか考えるな。皆殺しにしるとの命令なんだ」

「殺したよ。死ぬ時もいい声で鳴いてくれた」

「そうかい。でもさア、俺にはどうも生き残りが居る気がするんだが……」

「気のせいだろ？」

「だといいんだがね」

少女は草むらで震撼した。

つまり中身の青年は震えあがった。フィクションの世界でしか滅多にお目にかかれない殺戮の現場に自分は居たと言うことになるのだ、恐怖を覚えない方がどうかしている。

しかも皆殺しときたのだから、もう震えが止まらない。

少女は震えの止まらない手で自分の耳を触り　ヒツと息を漏らした。ファンタジーに出てくるような耳があった。そしてそれは自分がエルフであると確信させるに足りる証拠であった。

指先から熱が漏れていき、筋肉が震え始めた。歯が鳴る。心臓が痛いほど脈打っている。

「……に、……にげないと……殺される……ッ」

火災。皆殺し。血濡れの剣。男たちの会話。

何かが弾けた。

「ッ！　おい、止まれ！」

居てもたつても居られない。

少女は男二人に位置がばれるような動きで草むらから飛び出すと、

あても無い逃走を開始した。だが水分が足りず、しかも疲れた幼女の足ではたかがしれている。

馬に命じ少女の前を取ったその二人は、馬の前足を脅す様に掲げた。

「あつ」

目の前に馬の巨体が広がり、さらに偶然にも足を地に取られ倒れ込む。ナイフは足元に転がった。

少女は慌てて立ち上がるうとして失敗して、また立ち上がるうとして男に腕を掴まれ、しかも腹部に蹴りを入れられた。胃液と唾液を吹いた。

「ぐっ……………」

「おい、お前生き残りか？」

男の一人が少女の美しいブロンド髪の毛を掴むと、無理矢理顔を上げさせた。

腹部に突き刺さった蹴りの余波は凄まじく、意識が朦朧とするほどで、髪の毛を掴まれて頭皮が悲鳴を上げたことに抵抗することすらできなかつた。

男は少女を検分するような汚らわしい目で観察した。

「精々いい声で鳴け。そうすれば許してやるかもしれん」

「はは、そんなチビをヤンのかよ？ 裂けちまうぜ？」

「エルフってのは頑丈だから大丈夫だろ」

“少女”は悟った。

こいつらは散々犯してから殺すつもりなんだと。男から女になって、犯されて死ぬ。その未来予想図がまじまじと浮かびあがった。

「止めるッ、止めるお!!」

「やかしいぞガキ」

今度は手刀が首に落とされて、危うく意識が消えかけた。

悲鳴を上げる間もなく、あっという間に上半身の汚れた服が切り裂かれ、成長前のおだやかな胸部が露わになった。男二人は下品な口笛を吹いた。

「いいねえ……若いと食いがいいがある」

少女は腕をもがき、脚をばたつかせ、今にも噛みつかんと言っ顔をしたが男にはつまようじほどの影響力を持たない。鍛えられた筋肉が全てを吸収し、森と言っ障壁が凶行を覆い隠しているのだ。

なんとか打開せねば犯された拳句死ぬことは必至。

ナイフさえあれば首筋を斬ってやれるのに！

目を地に這わして探す。あつた。数十センチのところにと土で薄汚れた小型ナイフが光っていた。

少女は咄嗟に手を伸ばすと、自分を抱く男の首筋にそれを突きつけた。

ずぶり、嫌な感触が手に伝わる。

「……ぐっ!? ……な、ガキ、が……なまいき……」

「ジャック!」

血が吹き出る。生温かい鮮血がナイフの先から噴水のように吹き出るや、少女と男二人をこれでもかと濡らす。

少女はナイフから伝わる感触に震え、男の憎しみに満ちた瞳と対峙してしまった。血走った瞳。汚れた欲望渦巻く虹彩。それらが脳裏に刻まれ、閃光と化する。

血が少女のブロンドの髪を染め、男はあっという間に絶命した。少女を拘束していた手が離れ、男が地面にへたり込む。

「おいしっかりしろ!!」

少女が男を刺し殺すと言う瞬間を目撃したもう一人の男は、首から血を流し続ける男に駆けよると、必死で首を押さえて血を止めようとした。

だが、止まらない。

「にげなくちゃ……早く動けッ、もっとな早くッ」

少女が、血濡れのナイフ片手に全力で地を蹴り逃げ出す。

逃げさせた要因の一つに恐怖が挙げられる。殺されると言う現実が迫り、さらに相手を殺害した事実までが重くのしかかり、逆に、竦んだ脚の動くことを認めたのである。

相棒が死ぬ行く様を無力な男が一人、星空の下座っている。血が地面へと流れ、とうとう首から流れる血すら勢いを衰え。最後には残った男の叫びが響いた。

どれだけ逃げたのだろう。

「……ハッ、はっ、はっ……」

赤に染まったナイフ片手に、上半身裸、しかも脱水症状まで併発。腹部と首に貫った一撃は青痣になり、噴出した血が全身をぬらりと濡らしている。

「はっ、ハッ……あッ……ぐっ!？」

少女が石に躓きすつ転んだ。

悲鳴を上げつつ地面を転がると、目の前の木に顔から衝突、小川に転げ落ちた。ざばん。水音が響く。

「なんで俺がこんな目に遭わなくちゃいけないんだよ………なんで俺がこんな目に………」

幸い小川は浅く、溺れることはなかった。

顔面を小川につけて水を思う存分飲み込むと、小川の真ん中に腰掛けて咳く。血が落ちて行き、小川を赤茶に染めて、辺りに鉄の臭いを振りまいた。

天に昇った満月は憎々しいほど大きく、星空は清浄であった。

「……ヒッ」

そこで自分の姿をじっくり検分した少女は、右手に汚れたナイフがあることに気が付き、悲鳴をあげて草むらに投げ捨てた。

「……う」

そしてまた嘔吐する。

自分が男の首にナイフを突きたてた時の感触と、血の噴出したことから恐らく死んだのであろうという不確かな予想が胃袋を引っ掻き回した。

冷たい小川に胃の中身をすっかり吐きだしても止まらず、胃液を吐き続ける。涙が大量に溢れ、鼻水まで垂れて顔を汚す。こうしている間にも身体から血が流れて行くが、人を殺めた手は汚れたまま。少女、つまり青年は人を殺したことなんてない。

ましてやナイフを使ったことも無く、殺す殺されるはテレビの中の出来事と信じていた。でも違った。自分は人を刺し、相手は死んだ。

男の黒い瞳がナイフを投げた方向から覗いている気がして、逃げようとしたが、小川の砂に足を取られて転倒してしまう。派手に水しぶきが上がった。

震える両手を顔の前に持ってきた少女は、必死に川の流れに手を突っ込み、血を落としていく。

「落ちない……クソっ落ちない……」

手の皮を剥いてしまいたい。

少女は気が違ったように川の中で手を洗い続ける。指紋の間。爪と指の隙間。全てを洗い流しても、まだ洗い続ける。

手首を洗い、肩を洗い、上半身を洗い、下半身も構わず洗う。全身から血が落ちても臭いが消えない。だからまだ洗った。

数十分ほど経って少女は体を洗うのをやめると、小川の淵にへたり込んだ。

緊張の糸が切れたらしく、しかし震えている。小川の水は冷たくて、そして風が容赦なく吹き付けてくる。体温が下がる。

服を全て脱いでしまい、手頃な木の陰に隠れ、全身を抱きしめて震える。タオルなんて無いし、毛布なんてない。今の少女には服とナイフと自分の身体しかないのだ。

少女は震えていたが、やがて疲れて眠ってしまった。

もしも獣でも来ようものなら食われるなんて知ってたし、追手が来るかもしれないなんて分かっていた。でも眠かったのだ。

何の皮肉か、天から流れ星が零れると一条の線を描いた。

少女が最後に認識した感覚は、吐き過ぎて焼けた喉の存在であった。

青年なのか少女なのか曖昧なその人物を尻目に、夜はこうして更けていった。

<3>方針を決めよ(前書き)

小説家になろうって使い難し

<3>方針を決めよ

「う」

目が覚めたのは、空腹と疲労と寒さからだった。

目を冷ませば誰かが救ってくれる。奇跡が起きてくれる。そんな甘い考えがどこかにあったのかもしれない。

しかし、現実是非情である。

“青年” 便宜上“少女”と呼称しよう が身体を震わせながら目を開けると、一面の緑があった。雑草だらけ。蟻のようで蟻じゃない虫が草の葉の上で触角を揺らしている。

「チクシヨウ……寒い」

今なんの季節なのかは知らないが、空気は寒かった。身体は一晩経ったことで乾いていたにしても、寒かった。

とりあえず身を起こし、体中にへばりついていた良く分からない虫を指で落とすと関節がこきりと鳴った。

寒い理由はいくつかあるが、大きいものは全裸であるということ。全身を洗う為に服を脱いでそこに放置してしまっただ。その服はどこにあるのだろう。

小川の周囲を探索して数十秒、分厚い草の上に乗った布の服が見つかった。

「あつた」

手で取ってみると、湿気を吸って草の臭いまで染みついでいて、お世辞にも言い心地とは言えなかったが、着ないと寒くて耐えられ

ないので着た。

例の男が上半身の服を破いたのは直って無くて、胸が丸見えだったが、針一本無いのどう直せというのか。身体こそ少女でも心は男のままの彼には余り関係なかったが。

「……………クソ」

男の死に際が突如フラッシュバックした。

少女はまたしても地に膝をつくと言液を少量吐いた。不幸中の幸いか、胃の中身が空だったのでそれしか出てこなかったが、喉が胃酸でひりひりと焼けた。

連続した吐いたせいなのか、『吐けばいいじゃん』などと考えるようにもなってきた。人の適応力は凄まじいと言うべきか、それを『処理』と考える辺り吹っ切れたのかもしれない。

小川で口を濯ぎ、比較的平らな岩に腰掛けて今後の事を考える。どこかで鳥が鳴いている。空は青く、風で生まれる草原の吐息は何から何まで清浄 だった。

「俺……………もう帰れないのか？ あいつに頼めば帰れるか？」

脳裏に浮かぶのは白い霧のような“神”の腹立たしいニヤケ顔。なるほど確かに、命まで奪い少女の身体を与えた上に記憶を保持したまま異世界に転生させたほどなのだから、頼み込めば帰れるかもしれない。

では、どう頼めば良いのか。人間なら会話なり通話なり手紙なりで意思の疎通は可能だが、“神”となるとさっぱり分からない。呪文を唱えつつ土下座すればよいのか。

……………ものは試した。

これで家族の元に帰れて、日常を取り戻せるのならなんでもやろう。土下座でも盆踊りでもなんでもやっついでいい。頼むからお願いし

ます、と祈る。

少女はその場に両足揃えて座ると、深々と土下座した。

「お願いします帰らせて下さい！」

返事は無かった。あつたのは空腹に耐えかねて胃袋がぐうと鳴る音だけだった。

結局、口に出来たのは木の実と水だけだった。

あの後、血濡れのナイフを半泣きで回収した少女は、付近を探索して食べられそうな木の実を手に入れて、食事をした。

毒があつたらどうしようと考えるよりも先に食べてしまったその毒々しい赤の木の実は、すっぱかったが確かに美味しかった。

ナイフだけでは心許ないので身長ほどの木の枝を担いだ少女は、今後の方針を考えるべく、また小川の元に居た。

男を殺害した記憶は心に深い傷をつけたらしく、時折涙を浮かばせ、両顔を覆う始末。無柄のナイフを見れば記憶は鮮明な映像として再生されるので、なるべく見ない。

しかし心のどこかでは『正当防衛だ』と思う自分が居たことも事実である。

太陽は既に真上。

「……人里に行って、働く」

方針を口に出してみた。岩の椅子は少女の身体に堪えたが、他に座る場所が無いので仕方が無い。

人里に行けばボロボロの少女に同情して働かせてくれる可能性は

ある。現代日本と違い戸籍など無いだろうし、仮にあってもそこまで厳密ではない。

それに、労働基準法なんてある訳も無いという確信もあった。

同時に性的な事に従事させられるのではという恐怖もあった。水面に映した顔はゾツとするほど美しく、“神”が言っていたのが間違つてなかつたことが分かつた。

青い瞳、左右対称に限りなく近くまた鼻や口の位置や造形が整つた顔。白い肌。金色の髪。鈴を鳴らしたような声。どれも美しく、自分の身体とは思えなかつた。

だがそれが慰めになる訳も無い。

元の世界で普通の男として社会に出て暮らせればそれで満足だったのに、突然妙な世界に流されたのだ、“神”への憎しみは身を焦がすほどの怨恨にまで膨らんでいた。

少女は岩の上で胡坐をかくと、口を開く。

「旅をする」

旅に出て、元の世界に帰れるまで探求を続ける。

それもいいのだが、果たしてこの少女の身体が長き旅路に耐えられるかと言つたら否である。

第一資金はどう稼ぐのか。労働に耐えられない身体なのにどうすればいい。盗賊をやるにしても、一般人である“少女”は経験も才能も無かつた。

他にも不安要素はある。もしも魔術の類のあるファンタジー世界であつたなら、魔物でも出てきて殺されてしまう憐れな末路があるかもしれない。ナイフで応戦できるものか。

そうだ、と閃いた。

この身が美少女なら、外見でひっかければいいのではないだろうか。

鼻の下を伸ばしてきた男からカネをせびればいいのではないだろうか。

うか。そうすれば、旅の資金は楽に稼げるかもしれないではないか。待て、と少女は考える。

“神”とやらは他にも何か言っていた気がする。

エルフ。

エルフ。耳が長く、弓を得意とする高貴なる山の民。

そんな淡い知識しかないが、一つひっかかった。もしもエルフなら、魔術が使えるのではないかと。

冷静になって考えてみれば、耳が長いからエルフとは限らないのだが、例の男達が『生き残りか』と言っていたし、“神”もエルフと言っていたから、そうなのだろう。

人差し指を出すと、集中する。

「……呪文って……なんだ？　？灯れ？　？違うか、？燃える？　…違う」

火をつける呪文は初歩の初歩とどこかの小説に書いてあったの思い出し、使える限りの言葉で指先に火を生み出そうとするが、何も起きない。

ひよっとすると使えないのかもしれないと思った少女は、諦めた。何はともあれ人里に下りて情報を集めなければどうにもならない。しかし。

「道ってどつちだ……」

舗装された道路どこるか半分森に食い込んだこの場所で道を見つけるのは不可能なのではないかと思った。

科学技術が発展した未来なら人の居る場所はすぐさまコンクリートで舗装されたが、ここは科学技術の発展乏しき世界。というより、

未来だつて山中に大きい道を作ることは稀。

少女は途方に暮れて空を見上げると、木の棒を使って草を叩き倒しつつ前進し始めた。

草を薙ぎ倒している最中で少女は声を上げて泣いた。なぜなら、家族と過ごした日々や、なんでもない日常の一幕を思い出したから。そしてその涙の中には、追手が来るのではないかと言う恐怖も含まれていた。

完全真白空間にて、一つ、否、到底形容しがたい何者かが佇んでいた。

それは“青年”が神と呼んだ存在であった。

“神”はその“青年”の姿を見て笑っていた。

“神”にとって“青年”は駒であり、道化でしかなかった。死のうが生きようが関係なく、道楽の一つでしかなかった。

そう、“神”は清々しいほど傲慢だった。

力を持ち過ぎたものは暇を持て余す。寿命も無く、またやることすら無いその“神”にはこうして人間を弄くり倒して遊ぶことこそ至上の娯楽なのだ。

人ほど弱く、また強く、そして不安定な存在は無い。それを弄るのは無限の楽しさを持っている。

“神”は視点を切り替えると、今度は別の人物を見遣った。次は何をしようか。

車に轢かせるのは飽きた。

誰かの身代わりとなって死に、別の世界に送れば、両方で楽しめる。そこに強力な力を与えれば大暴れしてくれるだろう。

病でも良い。末期の癌でも面白いドラマが拝める。

いつその事痴情のもつれで刺されて死んだ方が面白いかもしれな
い。

それが、人生を逆戻しにして観察するのも楽しそうだ。

そう考えている“神”の顔は醜い愉悦に歪んでいた。

視点を切り替えると、その中で“青年”が土下座をしているのが
見えた。

「いいね、実に良い」

“神”はそう呟くと口元を緩やかに曲げ、指を鳴らした。

< 4 > 情報収集（前書き）

情報を一人で集めるのは途方もない時間が必要。

< 4 > 情報収集

山を降りるのに迷い迷って数日。

“少女”は全身あちらこちら擦り剥いて、良く分からない虫の大量に襲われたりしながら、やっとのことで町に出ることに成功していた。

と言っても簡単ではなく、自転車どころか馬すらいない為徒歩で道を歩いて、やっとのことで辿り着いたのだ。

道中で拾った布を頭に被り、泥だらけになりながら歩くその姿は物乞いと大差ない格好だったが、お金も援助者も頼れる人が居ないのでどうしようもなかった。食べ物も途中で拾った葉っぱを袋に仕立てた中に木の実を入れて食べていたのでなんとかあった。

無論、歩き続けの身体には到底足りるものではなく、お腹が少々緩くなっていたが。

排泄に関係することには大して驚きもなかった。そもそも野外でするのだし、見ることもしない。羞恥心が麻痺しているのかもしれなかった。

「……………カレーライス食べたいな」

町に入る前に、守衛の居る門の前にあった馬小屋の傍らに座って休憩中、少女は呟いた。

カレーライスの辛いような甘いような味が舌に広がった気がして生唾を呑む。

今さら驚くことなどないが、道を歩く人たちの扮装は皆中世の頃そのもので、街並みもレンガや石造りだった。甲冑を馬にぶら提げた人が通って、少女をいぶかしむように見てきたが、すぐに歩いて

行った。

危ない。

どうやらこの世界には亜人や獣人が居るらしいが、どうも嫌われているらしく街中でバレルのは自殺と同意義なのだ。特に、先天的に“魔術”を身につけているというエルフは。

魔術は一種の才能であり、使える人間は使えるが使えない人間はとことん使えず、また血筋や受け継げるものではないらしい。

魔術とやらがどのようなものかは不明だが、推測するに凄まじい威力を持つのだろう。

つまり先天的に全員が魔術を使えるエルフは圧倒的な力を持つとされ、人間社会に盾突く邪魔ものでしかなかった。結果、敵対し、迫害される。

ここまでの情報は道中の旅人や、出店で耳に挟んだ会話から推測したものだ。

他にも宗教や生活様式、またエルフの集落の位置なども正確に把握しておきたかったが、その為にはまず、町に入るしかない。

しかし、町への入り口である門の前には騎士姿の男二人が立っており、中に入る人を厳格そうな目で観察している。もしもエルフであることがバレたら殺されかねない。

だがやらねばならぬ。常識を手に入れるにはまずは一步を踏み出さなくてはならないのだ。そうでもしなければ、元の世界に帰る方法、元の体に戻る方法の一つも分かるまい。

観察して居る限りでは孤児や物乞いの連中が門の中に入っても咎められていない様子なので、出来る限り怪しい動きをせずに歩きだす。

「……………」

布を童話赤ずきんのようにしっかりと巻き付け耳を隠し、門に近づく。もちろんヘマがあってはいけないのでしっかりと手で確認して

から。

丁度騎士姿の一人が大欠伸をし、もう一人がそれに気を取られた。“少女”は好機とばかりに足を進めると、門を潜り、町へと入り込むことに成功した。

大通り……なのだろうか、門から入ってすぐの道はある程度広く、商店が並ぶ活気ある場所だった。店では良く分からない品を売っていたり、肉を串に刺して焼いているのも売っていた。

匂いを嗅いでいると虚しくなるので早足に立ち去る。

それなりに履き心地の良かった靴が泥だらけになっているのが見えた。きつと、他の人から見たら少女は酷く薄汚れた鼠のように見えているに間違いなかった。

水浴びの一つでもすれば話は変わっただろうが、街中でそんなことをすれば目立つこと間違いなく、最悪の場合は耳が露出し迫害の対象であるエルフとして捕縛されかねない。

エルフである以上、一般の人間社会ではまともな暮らしが出来ない。

何がエルフにしてやるだ、何が転生だ、誰にも聞こえないほどの声量で呪いの言葉を呟くが、変化なんて無い。

少女は町を巡るべく、人目を気にしながら歩み始めた。

少女は己の迂闊さを呪った。

例の、エルフの集落を焼き打ちした連中と全く同じ格好の男達が町に来たのである。なんでも生き残りを探しているらしい。

当然である。少女は集落を襲撃した一人をナイフで刺殺しているのだ、その時に命からがら逃げ出したのをばつちり目撃されている。町から出る門は二つあるが、そのいずれも男達が見張りに付き、

片っ端から顔を見せるようにしている。耳だけで判断できるのだから出身など聞かなくてもよいのだ。

困った。

少女は男達を避けて町の中の教会と思しき場所の前にある木の元で途方に暮れていた。

木の実を食べつくし、空腹で背中とお腹の皮がくっついてしまっそう。判断力は鈍っていくのを感じ、また生命力そのものが消滅していくのがひしひしと感じられた。

エルフの生理作用は人間と大差ないらしく、お腹が空くと頭がぼーっとしてしまう。町で食べ物をくすねようと思ったが、捕まった時のリスクを考えて実行に移せなかった。

盗人には鞭打ち刑と考える。ただの人間なら鞭打ちで済むだろう。だがエルフは違う。殺される可能性が高い。

町を出るべきなのかもしれない。このまま滞在し続けても誰かが助けてくれるわけでもなく、また、助けを求め耳を見られたら一巻の終わりである。

持ち物は布の服とナイフだけ。木の棒は邪魔なので捨ててきた。これを駆使し逃げる方法を探してみるが、どうにも、思いつかなかった。

かくなる上は、夜陰に紛れ町を困う塀を乗り越えて行くしかあるまい。そうと決まれば安全そうな場所に退避せねばならない。教会のような建物から離れよう。

教会に頼るというのも考えたが、その教会がエルフを弾圧する思想を持っていた時のことを考えて出来なかった。単に人が居なかったから座っていたただけだ。

少女は立ちあがると、その場を後にした。

「…………ふう、多少マシになったかな」

夜。

空に蒼い月、曇り一つ無き美しい星空、清浄な大気。

町が寝静まった頃に少女は動いた。男達も眠りについたのか、今は居なかった。

だが、門は閉じられて守衛がおり、かがり火が焚かれ、近寄れそうにない。仕方が無く塀を登ろうとしたが高過ぎて不可能。

やむを得ず民家から空き箱を拝借して重ね足場にしようとしたところ、明らかに捨てたと分かる一枚のボロ布があったので、今着ている服の上からローブのように羽織ってみた。

寒さを完全に遮断できたわけではないが、それでもあるかないかで大違いだった。高度な技術で作られた高性能繊維製の服なんてなくても、布切れで十分というのが驚きだった。

重ねた箱を足場に見立て、走る。

「よつとー！」

壁に取りつくくと足をばたつかせて一気によじ登り、なんとか塀の上。

そして物音を立てないように慎重に慎重に進み、塀の向こう側が見える位置につき、下を覗きこむ。予想以上に高い。飛び降りたら痛そうだ。

「ふっ…………ぐっ」

少女は飛び降りた。地面に着地すると同時に前転を決めようとして引っかかり、ばたんとその場に崩れ落ちて痛さを堪える。

数十秒後、涙を浮かべて復帰した少女は、腰のナイフの感触を確

かめると、町から続く道をひたすらに辿り始めた。

こつこつと歩くことで、元の世界と元の体を取り戻せると深く信じて。

< 5 > 焚火の中の串肉

“少女”は頭を抱えた。

とある町で聞いた話によると、某山脈にエルフの里があり、高度に構築された罫と防衛網により人間の侵入を拒んでいる場所があるらしい……それは、いい。

もう一つは、その場所が現在いる地点から歩いて数週間はかかると思ったため。

道中、整備もなにもあつたものではない道を歩き続けようやく見つけた宿屋の裏で一休みしていたところ、エルフに関する話をしていたので聞き取れたのだ。人間の時と比べて聴覚が優れていたのか、それとも話している人間の声が大きかったのかは定かではないが。

エルフは迫害される社会的弱者であるが、場所によっては人間の全面攻勢を受けても耐えられるほどに力があるらしい。肝心の魔術とやらを見たことがないから何とも言えないが。

「腹減った……」

宿屋の裏、ごみ箱の裏に座り休憩中の少女。

時刻は昼間で、宿屋からはやたらと美味しそうな匂いが漂ってきて、胃袋が大暴れしているのが分かる。

あいも変わらず食べる物といったら木の実。食べられそうな野草を道中でほうばったこともあつた。釣りに挑戦したが、餌も針も無いのに食い付くわけがなかった。

誰かに食べ物やお金をねだったり、美少女であることを利用しようとおもつたが、自分は男であり元の世界の人間であるという一種の固定観念がそれをさせなかった。

何をいらない自己を抱いているのか、とは思つても、長年染み付

いた自己は取れてくれない。

歩き続け、ろくにご飯も食べず、安心して眠れない環境下に置かれた“少女”の肉体と精神はもはや限界だった。

健全な環境ありてまともな考えが浮かぶわけで、環境が最悪だと考えまで最悪になる。

なまじ現代の楽を当たり前のものとして享受してきた“少女”には、数週間もかかるかもしれない道のりは一生かかるのではないかとすら思えてくる。

仮に数週間の道のりが酒の席の誇張で、一週間の道のりだとしても、山の中にある集落を見つけられるとは到底思えない。遭難して死ぬのではなからうか。

少女はゴミ箱の異臭漂うその場所で体育座りのまま、うつらうつら櫓をこぎ始めた。

身にまとった布の隙間から薄ら寒い風が入り込むも、もう気にするような事でもない。

どこかで読んだファンタジー小説ではエルフ族は少なくとも一千年は生きていられるそうだし、もしもこの世界のエルフもその位生きるなら、のんびりとしても怒られない。

言い訳じみた事を考え、少女は意識と睡眠の合間で煩悶した。やもすれば眠ってしまいそうなのに、眠れない。霧の中に居る気分。

脳裏に乱暴で破天荒な映像が支離滅裂に駆け抜けて、疲れと肌寒さからくる頭痛が麻薬のように甘美な眠りを誘う。

それは時に乗用車だったり、幼き時のごっこ遊びだったり、家族と口喧嘩して家を飛び出した時だったりした。中には映画のワンシーンも混在していた。

意識が落ちて行く。

もう、寝てしまおう。

おやすみなさい。

少女は夢か現実か、どこともしれない場所で眩くと、こてんと倒れ眠りについた。

目が覚めた。

「……………」

うめき声と共に目を開けると、体がほんやわ暖かい。

暖かい？ 妙な話だ。屋外でしかも屋根も無い場所で、暖かいなんてありえない。毛布をかけてくれた人が居たとして、それは体が温かいだけではないか？

目の焦点が定まってくれば、今度はパチパチと何かが細かく弾けるような音が聞こえてくる。

これも、変だ。該当する音といったら焚火だが、火種も火打石も魔術で火を生じること出来ないのに、どうして。

早く起きると体に命じると、ただちに腰からナイフを引き抜き、錯乱状態で周囲を見回す。

一面の草原。ぼつぼつと木々が点在しており、目を凝らせば、自分が寝込んでいた宿屋が蟻のように小さく彼方にあつた。

誰かが運んだのか？ その答えはすぐさま提示された。

「起きたか」

煌々と火の粉を撒く焚火の向こう側に、男が居た。歳は四十、無精髭に鍛え抜かれた体躯、頬の下に走る傷跡が厳格で強い印象に加える。

男の腰に長剣がぶら下がり、また体を覆っているのが革の鎧であることを認めた少女は、ナイフを取り落とし、その場で腰が抜けてしまった。

殺される殺される殺される。

あの長剣が抜かれるや、自分の貧弱な体は骸になり果てるのが容易に想像できた。たかがナイフでは革の鎧を貫けず、逆に貫かれ死ぬことが分かった。

だがしかし、その男は黙したまま、焚火で焼かれていた串肉を持ち、少女に渡すと、静かに言葉を紡いだ。

「喰え。腹が減ってはまともを考えられない」

「……………」

少女はそれを受け取ったが、顔を強張らせ動けない。

当然である。心はかつての平和な世界の男性的思考。そして本能的恐怖、疲弊した体と、エルフは迫害されて殺されると言うこの世界の常識がそうさせた。

毒でも入ってるのではないか、と考えていた少女に、男は口の端をにやりと上げた。

「毒を入れるよりも剣で斬った方が早いと思わないか。幸い今のご時世、エルフなら殺しても特に文句など言われないのだから」

「……………なっ……………」

何故エルフと分かったと驚愕する少女に、男は自らの耳を示した。

「体を検分すれば分かることだ。安心しろ、俺はエルフを嫌悪しない。むしろ、好いている」

「……………本当ですか？」

「そうでもなければ食料を分けてやるものか。行き倒れの女の子

を見殺しにするほど腐ってはいないつもりだ」

呆然とする少女を尻目に、男は焚火に焼かれていた串肉を取り、一口。

「美味しいぞ？」

「い、頂きます！」

「喉につかえて死ぬなよ」

ぐう、と腹が鳴り、自分が空腹であることを再認識し、慌てて手の中の肉にかぶりつく。じわり染み出る肉汁が唾内に広がり、頬が縮こまり痛い。酸っぱい木の実やら野草やらと比べ、その肉は余りに美味しかった。

知らず涙が出る。その肉が香辛料や調味料を使っていないことなどこの際関係無い。少女は無我夢中でそれを食べた。

たかが肉、されど肉。少女がそれを食べるのを男は見遣りつつ、こちらも食べる。

暫しの間、二人の間に会話は無かった。

串に張り付いた肉の一片までお腹に収めた少女は、焚火から一歩退き、日本で言うところの土下座をして、男に感謝の意を示した。

「ありがとうございます……エルフなのに、助けてくれるなんて、感謝してもしきれません」

「そんなにお腹が空いていたのか。まあ、兎に角耳を隠すと良い。俺は良くとも、他の連中に見られたら言い訳のしようが無い」

そこでやっと、自分の特徴的過ぎる耳が出ていることに気がつく。いつの間にか布のほっかむりが無く、背中に垂れていることを認識した。

慌てて布をかぶり直すと、改めて土下座体勢。少女にとって男は

救いの神そのものだった。

男は串を一舐めすると、焚火に放り込んだ。暗き空に火の粉が舞い、星間に消えて行く。

「君はエルフ狩りから逃げてきたのか？」

「エルフ狩り……？」

「知らないのか？ 最近エルフを敵視する連中が人間に協力的なエルフを狩りまくっている。酷い話だろう、人間に協力的だから、狩りやすいとな」

「そうですね……里が焼き討ちにあつて」

「やはりか、畜生め」

男は淡々と語るようで、エルフが虐げられている現実には悔しがっているようであった。

「少女」は、『異世界から転生しました』ということ伝えるのではなく、『エルフの里から逃げてきた少女』という役割を選択した。どの道信じてくれるわけがないのだから。

「何故……襲撃を？」

「エルフを危険視した王国の連中が手を組んで排除しようとしてるんだろう……エルフは神話上でも、現実的にもそれだけの力がある……まさか知らないのか？」

男が怪訝な顔をしたので、少女は出来る限り表情に出さぬように、首を振った。

エルフがエルフの伝説を知らないのは余りに不可思議なのだし、またエルフの現在の状況に無知なことを知られては後々拙い。情報を引きださなければならぬ。

土下座のまま、背筋を伸ばし口を開く。

焚火の熱が体を温めていき、手足が熱くなってきた。

「いえ、だから、どうしてって」

「危険視するのもそうだが、……利権、カネ……いつだってそうだ」

「………そうですか」

「ところで、この後はどうする。エルフの里まで行くか？」

少女は男から焚火へと目を移すと、物思いに耽った。

揺らめく火を絶やさないようにと男が焚火に薪を投じ、それが火を活性化させてぱちりと音を鳴らさせた。

面を上げ、選択を。

自分があの世界に帰還する方法は、自分を匿い、なおかつ力あるものに縋る以外に 選択肢は無い。

元の世界で死んでしまった事実があれど、戻れさえすればよいという考えがあった。また、“神”を倒せばいいのでは、という考えもあった。

「行きます」

「そうか………道は教える。俺は行くべき場所がある」

男が手元の何かを探り、焚火に当たらないよう注意して、少女に見える位置にそれを置いた。毛布のようなものだった。

「今日は寝る。出発は明日にした方がいい」

「はい………」

少女は素直に頷くと、その毛布を取り、焚火の熱が程良く当たる位置に転がり、目を瞑って適当にかぶった。お腹が満たされたこともあって、瞬く間に瞼の中で睡魔が渦巻き、意識が飛んだ。

男は喉を鳴らす様に笑うと、少女に毛布をかけ直し、寒くないよ

うに繕ってやった。

そしてその姿をじっと見つめ、溜息を漏らす。

「……………娘が生きてたらこの位だったな」

その夜、“少女”は元の世界の父親の夢を見た。

焚火に反射して、地面に転がったナイフが柔らかく光っていた。

< 6 > 蜘蛛来たりて (前書き)

タランチュラおいしいです

< 6 > 蜘蛛来たりて

自分を救ってくれた男と別れた“少女”は、エルフの集落への簡易地図と干し肉を貰い、ひたすらに草原を突き進んでいた。

ずっと歩き通しても疲れるので、大木の陰で休憩中。

目印の無い草原だったら迷って死ぬ可能性もあったが、地図に小高い丘を越えた先の村を中継し　うんぬん、と描いてあるので、今のところ迷ってはいなかった。

安心して口に出ることが出来る食料を貰った影響なのか、積極的に木の実や食べられる野草を布に包むようになった。体が小さいことが幸いして食料はさほど必要ではなかったが、一向に火を起こすことができない。

魔術に関して男に聞いてみたところ、才能あるものがイメージをしっかりと組み、呪文を口にしつつ身ぶりや行動をすると発動するらしいのだが、一向に発動しない。

人差し指を立てて集中。

太陽は天に座し地上を明るく照らし、肌寒さを感じさせない日光を燦々と。

日本で言う春と冬の境目を思わせる天候と、一面の緑。空気が現代日本と比べモノにならないくらいおいしい。木陰特有の薫りが鼻腔を擽る。

少女は頭の中で蝋燭の火が灯るのを映像化しながら、人差し指の先端にそれを移動させるよう、呟いた。

「？灯れ？……………」

灯らない。

今度は指先を凝視し、全神経を研ぎ澄ましイメージを強め、更には体のどこかにあるであろう魔術を発動させる力が染み出すイメージまでして、更に指を丸描くように振り、呟く。

呪文は男に教わったが、発音が独特で時々しくじる。なんである男が知っていたかは、知らない。

「？灯れ？……？灯れ？！ 灯れよ、灯れよ………？灯れ？ツ………灯らないかあ」

一向に指先に火は現れず、少女は木陰でほうと溜息をつくばかり。火を使えば夜も行動できるし、ものを焼いて調理したり、武器にすることだってできる。

元の世界では100円でライターを購入しあつという間に火を起こせたが、そんな便利なものは無い。

少女はもう一つ教わった呪文の言葉を思い出すと、試してみることにした。

人差し指を立てると、爪よ割れよとばかりに集中し、言葉を紡ぐ。

「？光よ？………これもだめか。エルフつてのに、なんでだめなんだ。MPでもいるのか？」

エルフとは先天的に魔術が使えるはずだが、少女にその兆候は欠片も現れない。もつと練習が必要なのか、方法が間違っているのか、年齢が足りていないのか。

いずれの推理も外的な気がしないでもないが、聞くべき相手も読むべき書物もないのでどうしようもなからう。

いつまでも休んでいるわけにもいかないので木陰から立ちあがると、石や草があり道など無い草原を歩き始める。

目標は遠くに霞む丘。まずはあれを越えて行く。あの先に第一目的地とする人間の村がある。

この世界には必ずしも道があるとは限らない。

そもそも外に出る必要が無いので道がない村はいくらでもあり、これから訪れる村もまた、そのような場所に位置している。

せめて自転車でもあれば早く行けるのにと思うが、馬車が現役バリバリの世界で自転車など乗り回そうものなら不審者扱いされるのは明らかであるし、整備すらできない。

この世界に落とされてようやく気がつく己の弱小さ。

鉛筆一本、時計一個、否、それどころか腰に差さっている一振りのナイフでさえ、自力で作ることが出来ないのだ。

個人が所有する“文明”の儂さと希薄さに涙が出てくる。

人は社会に守られ、また社会の規範に身を置き縛られた自由を選択することで文明を享受出来るのであって、社会から離れまた迫害される身では、極端な話、布一枚だって入手困難なのである。

それはこの世界でも通用する。

事実、“少女”は原始人のように木の実を主食とせざるを得なく、アシは文字通り足のみで、交通手段を利用することすらできない。

それどころか、エルフだから殺しても構わない的な考え方がある時点で社会どころか生存そのものが危険に晒されている。

せめて人に“転生”していれば楽だったのに、と無い物ねだりをしたくなる。

「……………お腹空いたなあ」

男に振る舞われた肉の味が忘れられず、染み出る生唾を飲み込みつつ、酸性味が極めて強い木の実を布からいくつか取りだして食す。灰汁抜きなんてしてないので、苦みと渋みが先に広がり、次に決して美味しいとは言えない酸味と甘みが広がって、思わず顔を歪ませた。かつて食べたさくらんぼとどうしても比較してしまい、余計に美味しくない。

でも食べなければ疲労はとれず。また、水を入れておく容器も無

いので、水分不足になり草原の片隅でひっそり死を迎えるなんてことがありうるので食わねばならぬ。

更に難しいことに、『食べられる木の実と食べられそうにない木の実』の判別も行わなくてはならない。

もしも毒でもあったら中毒症状で泡を吹きながら死ぬか、腹痛を起こし下痢で死ぬか。その結末はおとぎ話より悲惨である。

よって“少女”は木の実を観察して、それを鳥が食べているか、妙なニオイがしないか、等を見極めた上で、一口食べて安全を確かめる。

また野草を食べるときはそれよりも厄介である。

もしも毒があれば言うまでも無く死ぬ可能性がある。小動物が野草を食べているのを見つけるのは難しく、道中お腹が痛くなったこと度々であった。

だが少女は、キノコ類だけは口にしなかった。元の世界での常識で、キノコの判別は達人でも間違うことがあると知っていたし、何より毒のイメージが強過ぎた。

ではそれで足りるかというと、足りない。

木の実だつて都合よくあるわけも無く、所々になつているのを見つける程度。野草はそこらにあるが、判別するまで時間がかかりすぎる。

この際、動物じゃなくてもいいから魚の肉でもいい。口にしたい。だが、無い。

男に貰った干し肉を口にしようと何度も迷つたが、止めた。あくまで非常食だ。

歩き続けて筋肉痛は酷いし、数日は水浴びもしてない。

端正な顔は疲労に染まり、白き肌は薄汚れている。元々着ていた服は汚れが酷い。美しかった髪の毛はあっちこちで飛び跳ねて、木の枝が所々から突き出している。

「甘いもの……チョコレート……」

ぶつぶつ独り言を吐きつつ、足元の石を手に取り適当に放り投げる。

こうして常時お腹を空かしたまま歩き続けていると、日本は飽食の時代だと言っていたのが痛感される。いつでも食べ物があることがいかに幸せだったのか良く分かった。

「あー……お母さん、聞こえてる？ 肉じゃが食いたいわ」

少女は空を仰ぐと、自宅の食卓を思い浮かべつつそう口にして、仕方が無さそうに苦みの強い野草を口に入れ、飲み込んだ。

もちろん、空に話しかけたところで返事なんて無く。

この世界で何度か見かけた飛龍が空を呑気に飛んでいるのを見て、乗せてくれればと祈った。何も起こらなかった。

「予期していたことが起こった。」

この世界がファンタジー世界であるなら、もはやお約束な展開が待っていたのだ。

と言っても勇者に拾われるだとか、突然奇跡の力に目覚めたとか、そんな類ではない。偶然宝箱を見つけたとか、そんなものでもない。

「……逃がしてくれないか、クソツタレ」

小柄なエルフの少女で対峙するは、己の身長と同じほどの大きさがあるうかという、蜘蛛。前面にある黒々とした目がこちらを睨みつけており、いつ襲いかかって来ても不思議ではない。

草原を歩いているときに遭遇し、こつそり逃げようと思ったところ、こつちに向かつてきたのだ。

明らかに敵意を感じるので、木の棒を牽制に構え、ナイフをいつでも引き抜けるよう準備して、両脚に力を滾らせておく。

その蜘蛛からじりじり遠ざかれば、寄って来て前足を威嚇するように振ってくる。

どうやら、逃がしてくれないらしい。

この蜘蛛が人を襲うかは分からなかったが、少なくともこうして対峙している時点でこちらを害するつもりがあつてのことであろう。

“少女”は耳を隠すための布をはぎ取り地面に叩きつけると、棒を剣のように構えた。

瞳は巨大な虫に初めて遭遇した為に恐怖が浮かんでいたが、それでも、覚悟は決まっていた。

かっと思いを開き息を吸うと、叫んだ。

「行くぞ虫野郎。元の世界の学者に見せる標本第一号にしてやる

！」

蜘蛛が足を蠢かし、少女に飛びかかった。

<フ>仕留めたはいいものを

剣道どころか武術の嗜み皆無の“少女”にとって、たかが大きい蜘蛛ですら山のように巨大な外敵であった。

「らあッ!」

いきなり飛びかかってきた蜘蛛をステップを踏むことで回避、木の棒を思い切り振りかぶり、頭らしき場所に叩き下ろした。

が、狙いが外れ胴体に下ろしてしまい、その硬質な殻を叩くにとどまった。たかが木の棒では斬ることも、満足な打撃力を得ることも難しい。

「つく」

蜘蛛が口を開けた。肉食性なのか小さい歯が幾つも並んでおり、どろりと体液が糸を曳いているのが見えてしまった。

生理的嫌悪感から一步跳び下がるや、バットを握るように持ち直し、フルスイング。蜘蛛の目を狙った俊敏な一撃が迫らんと。

が、敵もやられるだけではない。腐っても野生生物。少女が必死なように、蜘蛛もまた必死だった。

体を棒に打たれながら跳びのき、前足を下げてお尻を持ち上げる。硬い外壳は棒からの衝撃をきっちり守ってくれていたので、大した傷にはならなかったようだ。

蜘蛛の臀部が持ち上がるや、一条の白い何かが射出。

「ちよ、糸!？」

少女がとつさに腕で庇うと、ぐちゃりと付着して瞬く間に接着。もし庇ってなかったら顔面にはりつき呼吸が出来ずそのまま餌になっていた。背筋が凍る。

蜘蛛が更に糸を吐く。一本二本と少女に向かって放たれ、避けることも出来ず手足に絡みつき、その粘性によって動きを制限されていく。切ろうにも糸の弾力がそれを許さない。

糸を掴み取り引っ張ろうとしたが、蜘蛛の重量的に意味が無い。

「ぐ……………こ、こんなこともあるのかと……………ナイフを……………取れない！」

切れないのでナイフを抜こうとしたが、これでもかと思われ、糸が腕に絡みつき、足にへばり付き、とうとう棒立ちが精一杯にまで追い詰められる。手の棒すら糸でべっとり。

足のみを動かしてちょこちょこ後退する少女に、蜘蛛はしめたとばかりに距離を詰めて、いつ跳びつこうかと算段を立てている。

少女はふと、『あつ、これは終わったな』と一種の諦めにも似た思いを抱いた。

防具も仲間も居ないのに相手の目の前で動けぬ状態では、逃げることも反撃も不可能である。それが意味するのは即ち敗北である。蜘蛛の目が爛々と輝いた。

「来るなよ！ 食っても美味しくないぞ！ ああつ、だから来るな！」

トドメとばかりに糸を吐きかけて、少女はとうとうぐるぐる巻きに近い様相に。

祈るようというか、必死で蜘蛛を説得したり罵ったりしてこつちに来るなどしてみるが、蜘蛛に人間の言語が通用するわけも無く、いくつも生えた足をカタカタと鳴らしながら寄ってくる。

こつなつたら手段は一つだけ。

「?灯れ?! 頼むから?灯れ?!」

魔術で糸を燃やし脱出する。

指の動きもなくなつただ呪文を唱え、魔術が発動してくれることをひたすら祈る。

神でも悪魔でもいい、糸に巻かれて死ぬなんてことを止めさせてくれ。俺は家に帰りたいんだ。

少女は呪文を気が狂つたように連呼して、出来る限り蜘蛛から離れようとする。

蜘蛛はもう相手が抵抗することが出来ないと判断したらしく、全脚を屈めると、跳んだ。

「?灯れ?!」

少女はこれで最後と感じ、全身全霊、喉も枯れよと声を振り絞り唱えた。

セカイが変動した。

世の理を捻じ曲げる術、即ち魔術が少女の命令に従い発生するや、たちまちのうちに蜘蛛の糸を焼き尽くした。物理的肉体と靈魂の結合力として作用する力がエルフの血により引き出されたのだつた。

灯れとは名前だけの強力な火炎が身を包んだのも一瞬、身軽になつた少女は己に驚愕する間もなく蜘蛛の体当たりをかわすと、ナイフを持つ。

体にかかつた負荷により鼻から鮮血が垂れた。

何をすればいいのかは正直分からないのに、何をすべきなのかが分かる。

突如押し掛かつた疲労により目は眩み、涙が流れ、呼吸は全力疾走時並みに荒く。

呪文はどうしよう。

そつだ、好きな言葉を紡げばいい。

ナイフを下手に握りなおすと、体勢を直しこちらに再度跳びかからんとする蜘蛛を睨みつける。

自分の心臓の音が痛いほど大きい。指の先まで熱い。吐き気と倦怠感が筋肉を占領していく。

イメージは主に自分が体験してきた事柄や、ゲーム、映画、その辺からかき集めなんとかでっち上げる。いいのだ、それで。今はそれでいい。

蜘蛛が跳び、

「？剣よ燃えよ?!」

ナイフを火炎が覆い尽くし、刹那、赤き長剣と化した。

真正面からくる蜘蛛は回避できずにその剣に跳びかかり串刺し。肉が焼ける嫌な臭いが鼻を刺す。火炎の剣により蜘蛛は絶命し、その場に崩れ静かになった。

「鼻血が止ま……………ら」

だがそれまでだった。

強い魔術を行使すれば精神肉体全てに負担が強いられ、それは“少女”の肉体にも適応された。

火炎の灯火消失した後には蜘蛛の死骸と熱きナイフが残される。ナイフが熱過ぎて取り落とし、自らもふらふらと数歩後退して、鼻から垂れる血を手で押さえる。

どうやら魔術の行使に成功したらしいとは分かったが、過労死寸

前なほどに全身は苦痛の声をあげ、視界では点滅する黒と白が入り混じり乱舞する有様。

魔術を使つたびにここまで疲れてたら意味が無いなあ、と少女は思いつつ意識を手放した。

少女が意識を取り戻したのは、日没後の暗闇の中であった。

顔は涙や鼻血で酷いことになっていたが、鏡が無いので適当に拭うのみ。体裁を気にしている暇が無いのだ、彼女には。

ナイフを拾つて腰に戻し、蜘蛛の死骸につかつか歩み寄る。

「どんなもんだよバカヤロウ！ 痛ッ!？」

少女は、頭部に火炎の剣を受けて絶命している蜘蛛を憂さ晴らしに足で蹴飛ばした。殻が硬くて痛かった。足を押さえその場で悶絶する。

辺りは暗く、草原が黒の海のように。朧に見えるは星空。風が冷たくなり始め、身を震わす。

今日はここで野宿するしかないようだ。

少女は蜘蛛の死骸を嫌悪の表情を浮かべて引きずっていくと、木の陰に座った。

そして辺りから木の棒を集めてくると小山を築き上げ、指先を出して集中する。焚火にしようとしたのだ。

「? 灯れ?! ……? ? 灯れ?! ……? 灯れ? ……また

か

いくら呪文を言おうとも指を振ろうとも火は灯ってくれない。

蜘蛛を倒した時に魔力でも使い果たしたのかと推測するが、定かではない。どちらにしても今はこの危険な場所で眠るしかないようであった。

少女は蜘蛛の残骸を軽く足で蹴飛ばすと、その場に寝転がるうとして止め、自分の頭を覆っていた布を取りに行きそれをかぶると、また戻って来てやっとこさ座った。

布を頭にきつちり巻きつけ、木に寄りかかる。

もし、同じような蜘蛛なり狼が出てきたらどうすればいいのか。

「……………その時は死ぬか、魔術使えるようになるか、どっちか……………眠い」

その時は死ぬだけさと楽観的にも悲観的にもとれる言い訳を心の内自分にして、目を瞑る。程無くして眠りが訪れ、すうすう小さい寝息が上がり始めた。

風が地面を駆け抜け、少女の髪の毛を揺らした。

< 8 > 水面の彼女（前書き）

なにながウンディーネだよカンターレしろオラァァッ

って隣の家の人が叫びだしました。
こわい。

期待の全裸回です。

< 8 > 水面の彼女

最近分かった事がある。

指を立てると、しっかりとイメージを組みたてながら目を瞑って、心の中で強く強く願う。自分には今火が必要なのだと。自分は火を欲しているのだと。

「？灯れ？」

ぼっ。

ほんの一瞬だけだが指先に紅い火が生まれ、すぐに消え去った。百回に数回程度の成功を手繰り寄せても、一秒と持たず消えてしまふことに胸が虚しくなった。

“少女”は溜息をつき岩から腰を上げると、丘というより山から木を根こそぎとってしまったようなその場所を登り始めた。

どうやら魔術とは、イメージや願いの強さによつて発現するらしい。現に灯れ以外に燃えるや火炎よ生じよと唱えたり、また元の世界の英語を使つて唱えてみたところ、発動した時があった。

それどころか完全に適当な言葉を言いつつやっても発動する時があった。

少女は、魔術は言葉や行動よりもイメージや願いといった精神的な部分に大きく頼っているらしいと理解した。指を振らず木の枝を使つてみても火がついたことから、それは明らかだった。

干し肉をくれた男は呪文が必要云々言っていたが、嘘だったのだろうか。

問題はその持続時間だ。集中してイメージを組みたて、願いを込めて唱えても今のように一瞬しか保てないのだ。蜘蛛を倒せたのは

文字通り必死だったからなのだろう。

だがこれらは全て推測にすぎない。元の世界なら図書館なりインターネットなりで情報を得られたが、この世界ではそれはおとぎ話のようなものである。

練習が必要だが、魔術が使えるかもしれないということは少女の希望の一つになっていた。実際に魔物（蜘蛛）を倒したこともそれを後押しする。

蜘蛛の糸で使い物にならなくなった木の棒の代わりに、草原で朽ちて骨だけに成っていた動物から程良い骨を拝借して棍棒兼杖代わり。もちろん人が来たら捨てるつもりだ。

服はボロボロ。体は泥だらけ。顔には鼻血の跡。はたから見たら原始人そのものである。

そこに耳を隠すために布を被り、ひよこひよこ歩く少女はエルフどころか別の種族に見えなくもない。

結局、丘を越えるのに恐ろしく時間を消費してしまい、頂上に登った頃にはお昼になっていた。

残り少ない木の実を取りだすと噛み砕いて舌の下に押しやり糖分を摂取させてから飲み込み、食べられる野草を口にしては飲み込む。美味しくないので食べると言う作業に過ぎない。

丘を越えた先に村があるといっていたが、果たしてどこにあるのか。

少女は懐から地図を取りだすと、杖代わりの骨を弄びながら目を通した。眼をこしこし擦って鼻の頭を搔く。

「……距離が分からないな。でも」

目を上げると、丘から見える位置にある湖らしき場所を見遣る。

日光を反射して煌めくそこはまさにオアシス。蒼い水が目には嬉しい。久しく水を飲んでいなかったことを思い出した少女は、酸性な木の実の味が染みついた唾液を飲み込んだ。

そこでやっと、自らの格好が酷く汚れていることに気がつく。

今の今まで食べ物を探したり、道を歩くことだけしか考えていなかったなので、身の回りのことについて頓着する余裕がなかった。正確に言えば清潔について考える余裕がなかった。

髪の毛に触り、首元の汗に触り、蜘蛛の糸の粘着がついた腕に触る。

久しぶりに水浴びをしても罰は当たらない。それにこの時代である、屋外で水浴びなどしょっちゅうあることだろうから、いいだろう。

それに小学生程度の女の子の裸体を見て喜ぶ奴など居やしない。

少女は地図を丁寧に折りたたむと、足元に注意しながら丘を下って行った。

目視可能な距離だとしても、実際歩いてみると恐ろしく時間がかるものだ。

なんだかんだ湖に辿り着く為に道なき道を進み、草むらの海を割り進み、森の中でさんざん迷いながら辿り着く頃には太陽がやや傾いていた。

正確な時間は分からない。時刻を知る手段がほぼ無く、また自然環境のごく限られたものでしか時間を知る手段のない少女には、空が全てであった。

空が明るければ朝昼、暗くなれば夕夜。危険なので暗くなったら安全な場所を探し、決して行動しない。現代ではありえなくとも、昔はみんなこうだった。

火を起こせば行動できるかもしれないが、暗い中光り輝く松明を

持って行動すれば目立つこと間違いなしである。

「綺麗だな……………どれどれ」

湖の畔に辿り着いた少女は、骨の杖を木に立てかけ、湖を覗きこんだ。

まだ幼いが疲れた顔の少女が湖の表面に映っている。この世界に来て初めて自らの現在を直視し、思わずその水面に手を伸ばした。歪んだ。

湖の水質は、地下に広がる蒼穹といった面持ちで透き通り、指を入れて見たところ震えあがるほど冷たかった。両手をつけて一口飲むと清水が体に染み込むよう。ついでに顔を洗って、服で拭う。ぼたりと水滴が落ち、丸い波紋を湖面に刻む。

「本当にこんな姿になってたんだな、俺は……………誰だよコイツ」

怪訝な顔を見ると、水面の中の顔も怪訝な顔をする。

やっと自分が少女になってしまったことを自覚して力が抜けて、湖畔に座り込むと、石を拾い上げて投げて遊び始めた。

手のスナップを利かせ回転を加えながら投げれば、石が水面で飛び跳ねてぼちゃんと没する。

そういえば、テレビやらゲームやらパソコンやら、そういった類の娯楽どころか本すら読んでいないことを思い出す。何にしても娯楽はカネがいるので、自然を使って遊ぶほかないのだが、懐かしくなる。

旅の同行者が便利な使い魔でも居れば楽なのだろうが、いずれにしても少女が手に入れるには障害が多過ぎる。

旅の同行者に至っては裏切られる可能性だって捨てきれないのだ。頼れる相手も喋る相手も居なくて、寂しさは募るばかり。必然的に独り言が増える。それは時に木を擬人化して語りかけるものだった。

たり、漫画やゲームのセリフを引用してきたものだったりする。さて、と少女は呟くと頭の被り物をとらずに服を脱ぎ始めた。万が一人間に見られたら後に面倒になるからである。

“少女”は、服を脱ぎつつ、今自分は男なのか女なのか、そこがはっきりしないことについて考えていた。

思考は男のままのつもりだったが、日々を過ごす内に女なのか男なのか曖昧になってきたのだ。

下着も含めすっかりと服を脱ぎ捨てると、頭の被り物だけはそのままに、足先から水の中に入る。

汚れた体はしかして美しく、エルフ特有の均整の取れた幼き体が外気に晒されて震える。

「冷たッ！ あー、これは冷たい」

湖は徐々に深くなっていくが、手前の浅瀬は膝が浸かる程度の深さ。

全身に染みついた汚れが水に溶けて行き、擦り傷や打撲が冷たい水でちりりと痛みだす。それでも久しぶりの水浴びは心と体を喜ばせた。

服も洗ってしまおうかと思ったが、残念ながら着替えが無いので断念せざるを得ない。屋外で全裸、しかも水にぬれた状態は辛すぎる。

魔術で火を起こせばいいかもしれないが、何度試しても発動しなかったりするのでそれに頼るのは危険と言わざるを得ない。それに服なんて洗っても汚れるし、また単純に面倒だった。

冷水に身を沈めて全身を擦って汚れを落とし、髪を洗い顔を洗い、清水を喉を鳴らして飲む。

己の貧相な体が水越しに透けて見えており、華奢な作りの両脚の付け根には男であるならあるべきものは無い。改めて自分が女の体になったと理解する。

もしも元の世界に戻れなかったら、女として生きるしかないのだろうか。

元が男だけに男の心情や行動形式を心得ている“青年”は、もし女として生きるのなら、どうにも素直な恋愛は出来そうにないと考えた。

というよりエルフの段階で人間と結婚できるとは思えない。するとしたら同族か。

久しぶりに落ちついてはいるがため、様々なことに思考を張り巡らすことが出来た。湖の冷水が頭をほどよく冷やし、体の熱を削ぎ落していくものの、決して不快なんかではない。

「、、、、、」

鼻唄を紡ぎつつ、背泳ぎで湖を進む。

木々の木漏れ日が少女の肌の色を際立たせ、点々と落ちる影が紋様を作る。

耳に水が入ったので湖の底に両脚をかけて立ちあがると、頭の中に入れて耳を引っ張って水を抜く。長い分だけ引っ張りやすかった。

時に元の世界の流行歌を自分で変化させたのを鼻唄にして、湖を駆け回る。どうやら水というのは人間をはしゃがせる作用があるらしかった。

でもあんまり長く入っているわけにもいかないのです、湖から上がるうとして、なんとなく草むらの方に目をやった。

目と目が合った。

「あつ、待て！」

何者かが草むらから飛び出すや、全速力で逃げていく。

その人物が自分と大差ない年齢の『人間』だと分かり、少女はそ

の後ろ姿を全裸で追跡せざるを得なかった。頭を覆う布の隙間から耳を見てしまった可能性があったのだ。

もしも通報でもされたらなぶり殺されるのは必至。羞恥心は無く、むしろ焦燥感が大きかった。

ナイフを引つ掴み、全裸で森の中を駆ける。

傍から見たらただの変態だった。

< 9 > 赤山を目指せ（前書き）

フジサンマウンテンの違和感よ、きたれ。

< 9 > 赤山を目指せ

結論から先に言おう、目撃者の捕縛は案外簡単だった。

自分と大差ない（外見のみ）目撃者に対し追尾中に石を拾い、全力で投擲したところ、偶然にも頭部に命中してその場に転がった。そこを、蔓でぐるぐる巻きにして湖の方に引っ張って行った。

どうやら少女は歩き続けたり体を使い続けていたお陰で、幼い時期特有のぷにぷにと体型から引き締まった体になっていたらしい。

同年代の少年を木の幹に寄りかからせて、いそいそと体の水分を取ると服を着る。念には念を入れて頭に布を被り、ナイフをすぐに取り出せるようにして、少年の頭をぺちぺち叩く。

石をもろに受けてしまつて後頭部にタンコブが出来ていたが、この際仕方ないとする他ないであろう。

「……うーん」

「起きろ」

「うううう……」

「起きないと酷いぞ」

「……」

「起きないと本当に酷いぞ。拷問するんだからな」

「……うう」

「悪かったから起きてくれ。起きろよ」

目を堅く閉じたままうめき声を上げるだけの少年に、罵ってみたり顔を突いてみたり、かと思ったら優しく語りかけたり肩を揺すってみたり。

石を頭部に受けた打撃は相当酷かったのか、少年は眉に皺を寄せたまま意識を取り戻さない。

患部を冷やせばいいのだろうかと考えて余っていた布を取りだし、湖の清水をつけて後頭部に宛がう。冷却用の氷でもあればもっと効果的だが、生憎冷蔵庫は無い。

かと言つて蔓の縄を解くと逃げられる可能性があるのですが、スマキ状態で頭を治療するという奇妙な光景が出来る。

数分に渡り少年を起こそうと試行錯誤をしていた少女だが、ぷつりと何か切れた。

手のひらを振りあげると、哀れかな、少年の頬を強く叩いたのである。

「起きろってんだよ!」

「ぐっ……!?!? ……う、ここは………って、あんたエルフ!?」

頬を張られてようやく目を覚ました少年の視界に映り込んできたのは、苛立った様子の少女の姿。真正面から見ても、やっぱり耳が長く、エルフそのものだった。

少女は少年が大声を上げるや、脅す様に指を突き出した。

「俺は………じゃない私は魔術が使える。で、君は拘束されてる。私が望むのはこの近くにある村への道案内。他言無用、危害を加えない、その条件さえ飲めば私も危害を加えない」

「……………」

「私は行くべき場所に行き、君はいつも通りの暮らしを送れる。

正直エルフ討伐がどうのーなんて興味無いんでしょ? 黙ってれば二人が幸せ。そういうこと」

「……………道案内をして、村に危害を加えないって保障は?」

「エルフをどんな目で見てるのは知らないけど、私自身は正直エルフなんてどうでもいい。目的地につければいい。それに、今私が君の全ての選択肢を握ってることをお忘れなく」

戦々恐々と言った面持ちの少年の目に指を出すと、いかにも魔術でいたぶるぞという素振りを見せつける。ナイフでもいいが、象徴である魔術を使うと脅した方がより効果的と判断した。

攻撃性の火どころか、ライター以下の火力を一瞬作れる程度なのは知っている。だが、相手は知らない。

“青年”の目的はエルフの里へ到達し元の世界に帰還する手掛かりを得た後、帰る一点のみ。

エルフの迫害が許せないだの、宗教がどうの、文明がどうの、それらは目的を達成する為に必要なら干渉する程度の対象ではない。体裁など構うものか。汚くても構わない。なんとしてでも、帰る。“青年”を突き動かすのは怨恨を遙かに通り過ぎた、猛烈なまでの望郷心。

どことも知れない暗闇の向こうに浮かぶ帰還という文字を目がけて、不安定な足場をただ歩く。もしも歩くのを止めたら、そこで折れてしまう。もしも飛ぶのを止めたら、そこで失速してしまう。

現代で培ったゴミのような知識も、エルフは魔術が使えるという優位性も、全て注ぎ込もう。

人は目的なしには生きていけない。

だから“青年”は、目的を作り上げることで歩く為の原動力とした、それだけだ。

“少女”の顔が大真面目で、しかも鬼気迫る様子。更には指を突き付けられ脅迫されている状況。

つまるところ、少年に選択の余地は一欠片も残されていなかった。選択を放棄し逃亡するのにも、全身を拘束されていてはどうにもならぬ。

「……分かった。とにかくこれを解いてくれないと、俺は動けない」

「よし。それでいい。もしも裏切ったら、背中から刺すか焼き焦

がしてやるからな」

もつとも。

少女は少年を戒めていた蔓をナイフで切断しながら自嘲した。使える魔術は着火ライターのような火力しかないのだが、と。

少年に村を案内され、その先に進んだ少女は、大まか予想通りに村の住民の追尾を受けていた。

どうやらエルフは捕まえると金になるらしく、馬を駆り出して村人総出で追いかけてきたのだ。

雑魚の部類に入ると思われる蜘蛛一匹倒すのに気を失うくらいの実力しかない少女には、馬に乗り、剣を持った村人達は悪魔のようにしか映らなかった。

幸い日は暮れかけており、草むらに身を隠せばなんとか凌ぐ事が出来た。

エルフの肌は白く目立つので、地面の砂にツバを混ぜた泥を顔に塗り、更に蔓で頭に木の葉っぱを括りつけ、村人が通り過ぎるまで草むらで伏せたまま息を殺す。

この知識はどっかで読んだ本にあった事柄で、軍人がよくやるフエイスペイントと、迷彩効果を高めるために体に木々を括りつけるのをそのまま真似ただけであったのだが、目の前を通り過ぎても気がつかなかったことから効果はあった。

松明の揺らめく火に反射して剣が光っている。

馬の足がすぐそこに来て止まり、村人の一人がきよるきよると周囲を見ているのがまじかに観察できた。

息をするのも恐怖。眼を開けるのも恐怖。身じろぎするのも恐怖。

迂闊に動けば見つかる恐れがあり、村人の何人かは弓矢を携行していたのでよほど遠くに逃げなくてはならない。森の中に逃げ込むのもいいが、人海戦術であつというまにオダブツであろう。

つまり、諦めてくれるまで隠れ続けなくてはならないのだ。

一本の草の上でもぞもぞ動く毛虫を村人の松明の光で見遣る異常な近さ。

夜になる前に安全なねぐらと、食べられるものの確保をしたいのにそれもできず。

空は見る見るうちに光を失い、星空が視認できるようになってきた。村はずれから始まる草木生い茂る小さい山の端での命がけのかくれんぼ。

カラスのような鳥が群れをなして木から飛び立つと、たちまち空の彼方に消えて行く。

それから数十分ほど時間が経過して、村人達は談笑しながら村に戻って行った。彼らが話していた内容から察するにエルフ懸賞金がかけられていると同時に、手籠めにしてしまおうという欲望も垣間見えた。

野蛮な、とは思わない。この世界ではそれが当然であるなら、仕方が無いと考える。

そもそも生きてきた世界も違うのに、自らの尺度でモノを測ること自体が間違っているのだから。

森に静寂が回帰し、少女は草むらから顔を出すと目元を手で擦り泥を落とすと、今日はどこに寝ようかと思案しながら杖代わりの骨を握り、立ちあがった。

村を越えて行った先に様々な民族種族が集まるという場所がある。そこを目指し、川の上流を目指しエルフの里に至る。目標は遠いが、やるしかない。

食糧である木の実を全て食べてしまった少女は、仕方が無しに食べることに探すことを諦め、安全を求めて森から出て、夜陰に紛れて次の目的地の目印である、赤い土で固められたような山を目指し

て歩いて行った。

行く手を祝福するよつに月が明るかった。

< 10 > 蜘蛛調理及び罨の危険性について (前書き)

その子を殺すな！ その子はエルフだ！（スパーン

< 10 > 蜘蛛調理及び罌の危険性について

木の上から獲物を睨む影一つ。
大きく振り上げて、飛び降りる。

「うおおおおおりゃ あああー!!」

先端に石を括りつけた木の棍棒をそれに叩き下ろす。それは突如強襲されて致命傷を負い、透明やら緑やらの体液を撒き散らしながら沈黙した。

“少女”は棍棒を再度振りあげると、それを滅多打ちにする。一回に留まらず二回三回と振りおろし、トドメとばかりにそれを蹴りあげて転がした。

「よっしやああー!!」

少女は自分の意思で仕留めた初の獲物を前に、両手を叩き合わせぴょんぴょん踊り狂いながら雄たけびを上げた。

打撃を食らい続け内臓を壊されたその獲物、蜘蛛は足を痙攣させたまま腹を上にして動かない。既に息絶えているのだ。

少女が居る場所は森。川を辿った先にある、人の寄りつかない深き古の原生林であり、このどこかにエルフの里があるそうなのだが、入り込んで数日ほど経ったが一向に見つからない。

湖で村を追われてから一週間ほどかけて赤い山に付き、更に数日かけて川を見つけ、それを辿って森に入った。

そこに至るまでに野犬と死闘したり、風邪をひいたり、空腹に耐えかねて物を盗んだら矢を射られたり、ここまで生き残ってこれたことが奇跡というほかない状況を乗り越えてきた。

それも一重にエルフだからではなく、彼が彼だったからというほかない。元の世界に帰りたい。安住の地を求めたい。その気持ち以外は彼もしくは彼女をここまでさせなかったであろう。

特別な能力も才能も機転の良さの無い。あるのは諦めたくないと言う意地。

でもなければ地を這い、泥まみれの木の实を口にして、湿気が多い森や砂埃立つ草原で野宿したりはしまい。

そんなこともあり、人間、開き直ってくるものである。

汚いことは全然平気。泥水も飲めます。雨水はシャワーです。狩りもします。野宿が普通です。

現代人としてのプライドもこの際捨ててしまおうと腹を括り、森の中に適した格好で探索をする。

頭に木の枝を括りつけて服を草の汁で塗りたくり、移動するとき足跡を残さないように靴を大きい葉で覆う。ナイフは木の棒の先に固定して槍とする。弓の代わりに石を投げつける。木の棍棒の威力を増す為に石をくつつける。

やってることは完全に昔の人である。ただ、昔の人ですら共同作業をしていたのを、少女はあくまで単独であるだけ。

獲物である蜘蛛に蔓を撒き付けると地面を擦りながら引つ張っていき、自分の荷物置き兼ねぐらである木の洞の前で止める。

蜘蛛を狩って食べたことは無いが、この近辺に木の实が無い以上狩らざるを得ない。

それに、干し肉を道中食いつくしてしまったので、動物性(?)の食べ物を食べたくて仕方がなかった。

以前苦戦した経験のある蜘蛛も、真上から強襲すれば大して強くなかった。どうやら地面を這い動植物を捕食したり、糸で地面に罠を作って獲物を捕える生態らしく、上からの攻撃に対処できないよなのだ。

この世界では蜘蛛がRPGで言うところのスライムの扱いを受けているようでその辺にごろごろいて、道中何度も遭遇したため、な

んとなくだが生態と行動形式が分かってきた。

魔術で攻撃するよりブン殴った方が強かったぜ！ ……なんて悲しいがこれも事実。

撲殺した蜘蛛をどう調理しようかと検分し、ナイフでは殻を貫けず、それ以前に捌くのが困難そうなので、もっとも原始的な調理法を選ぶ。

蜘蛛を食べるなんて不気味じゃないかと思うかもしれないが、“少女”の立場と、この世界において珍しくもない生き物と考えれば、十分食するに値する。

日本ではゲテモノ扱いだが、海外では蜘蛛を御馳走とする地域だつてあるのだ、決して馬鹿には出来まい。

木の洞の前の草はある程度刈られており、一部には石を均等に並べた場所を作っておいた。そこに蜘蛛をでんと置くと、枯れ枝や葉を集め、調理の準備をする。

少女の特訓の成果が実を結び、十秒程なら火を灯すことが出来るようになっていた。

指を出して枯れ葉の中に突っ込み、集中する。

森のざわめきと遠くに鳴る川の吐息をBGMに、火花が瞬時に収縮し不死鳥が如く火炎となる様に念ずる。

そして、自らが引き金と心で思う言葉を紡ぐ。唱える方がイメージを固定しやすいのだ。

「 ? 灯れ? 」

指先で『ボツ』と音がするや、頼りない赤き炎が灯る。

イメージと念の力が消えてしまわないうちに指をぐいぐい押しつけて火をつけると、息を吹きかけて火を大きくしていく。これが非常に難しい。捻るだけで火が灯るコンロとは違う。

枯れ葉から小枝に。小枝から木に。木から全体に。空気の流れを考慮して、木々を足す。

十分後、火は蜘蛛を覆い尽くすほど大きくなり、その身を焼いていた。

もくもく煙が上がる中、鼻歌交じりに蜘蛛を焼く。枝を差し込み蜘蛛の位置を直して、全体が焼けるように。

「ふふふふつふつふふーん」

地面に座り込んで、焚火の熱気に顔を照らされるのも気にせず調理をする。

火を見つめていると、昏間でも心が落ち着く。

なんでもそれは人という種族の遺伝子に刻まれた記憶というが、エルフの体でも落ちつくのだから、その実、火という武器であり調理道具が手の内にあるという事実に落ちつくのだろう。

蜘蛛が焼けていけば、殻がめくれ上がり、香ばしい匂いがしてくる。食したことは無いが、匂いだけは凄く美味しそうに感じられる。思えば調理らしき調理をしたのはこの世界にきて初めてでは無からうか。

煙にケホケホむせても目を離さず調理する。というのも火の処理を間違うと森が焼け落ちかねないということもあるが、何より食べ物が目の前にあるということが嬉しくて仕方が無いのだ。

じつくり蜘蛛を焼き上げた少女は、蜘蛛を引きずり出し火に砂をかけて消火して、早速殻をはぎ取り始める。

蜘蛛の調理は初めてなのでいつ火から上げていいのか分からないが、殻の表面がこんがり焼けたのを見計らった。

「熱イ！ 熱い！」

蜘蛛の姿焼は当然熱くて、少女は殻を割ろうとして苦戦した。

やむを得ず殻の間にナイフを差し込むと、無理矢理こじ開ける。

片っ端からはがしてはキリが無いので腹部の部分だけを開けて、

中身を見遣る。

「……………魚……………というか、カニカマ……………うーん」

中身は白いというより肌色に近くて、思ったより綺麗だったのだが、なんとなく人間の脳味噌を思わせる感じで食欲が削がれた。

が、匂いだけは美味しそうだし、ここまで調理したのに食べないなんてもったいないので、端を千切って口に入れて咀嚼した。

少女は首を傾げた。

「……………びみょーとかがっかり過ぎる……………」

美味しい訳でもなく、マズイわけでもなく、淡泊な味と、魚の切り身のような触感。

手を突っ込み内臓を取り出し喰らい、その中の良く分からない肉も食べてみる。味はあまりせず、醤油でもかけたらさぞかし美味であろうという風だった。

塩でも調達すればよかったと今さら後悔するが、これはこれで。

「……………でも……………案外これはこれで。あーっ、醤油とバター欲しい」

少女は手づかみで蜘蛛の中身をあつという間に食べていくと、生焼けの部分を残し満腹になるまで食べきった。

もしも毒でもあつたらどうするのという不安要素はあつたが、焼けば食べられると信じて食べた。大型の生き物は毒を持っていないという知識もあつたのだが、正直なところ、調べるのが面倒だった。食べ終わって口を拭くと、すぐさま蜘蛛の足を蹴り折り、小さくしてから草むらに隠蔽する。地面を掘ってもいいが、別にこれでも問題にはならない。

少女は自分の荷物をまとめた後、川の方に向かって歩いて行った。

さほど大きくもない川につくと、顔を洗い、新たに泥を塗り直す。萎れてきたカモフラージュ用の木やら葉っぱやらを交換して、口を濯ぐ。背中の槍を背負いなおし、木の棍棒片手に歩きだす。

なんの根拠もなかったが、川を伝って上流に歩いていけばエルフの里があるような気がしてならなかった。

「待つてるよコンチクショウめ」

“少女”は決意を露わにしたセリフを吐くと、道なき道に行く。そして、まんまと罠にかかった。

川べりに置いてある何やら縄のようなものを何気なく引つ張ると、突如地面の中に埋もれていた縄が持ち上がり、少女の胴体を拘束して地上数mにまで持ち上げたのだった。

一瞬理解が出来ず沈黙するも、すぐさま足をばたつかせ縄を切らんと暴れる。ナイフで切ろうとするが、縄が肌に食い込み手が出せない。

「ああそうかい、エルフの罠ってか！ よっしゃあ早く獲物取りにこいよ！」

見事なまでに罠にかかった少女だが、エルフがこの罠にかかった獲物を回収しにくると思えばこれくらいなんてこともないと考え、大声を出して自分の位置を知らせようとした。

が、そこでふと気が付き声を止めた。
地上数mで木から宙づりなのは案外辛かった。

「……………あれ？ ひよつとしてこれ侵入者用の罠？ アホを引っ掛けましたって？ ………………」

確か現在目指しているエルフの里は人間を嫌って山の中を切り拓

いたそうで、罨にしても動物ではなく人間用のもあつて不思議ではないではなかるうか。

しかし、それにしても罨発動で即死亡でもなく、麻酔効果のあるものでもなく、また魔術による拘束すら起こらないのは何故なのだろう。

まるで、作りかけのよう。

少女は暴れるのを止めると、今度は体をくねらせるようにして脱出を図った。

「おやおや」

「!？」

その時だった。

少女が罨から抜け出そうとしていた時、どこからともなく声が聞こえ、思わず硬直した。

声の主を探し首を振るが、草むらにも、川の中にも、それらしい影は見られない。それどころか、川の方や森のほうから霧が押し寄せ、視界そのものが乳白色に染められていく。

「罨はまだ出来上がってないのに、せっかちな獲物だ。人間よ、悪く思うな」

宙づりのまま耳に意識を集中し、その声が足元から聞こえてくるのをようやく感じた。

冷たく、しかし美しきその声は、あたかも一種の音楽のように鳴り響き、ホワイトアウトした視界を作り上げた主であることを声高に主張しているようであった。

エルフだ。心臓が跳ね上がる。

“少女”は直感し、足元から弓を引き絞るような音がしたのを聞くと、体を大きく振り、声を張り上げた。

「ま、待ってくれ！俺はエルフなんだ！」
「……………何？」

<11> エルフの里

“少女”は同族であるはずのエルフに危うく狩られそうになる前に自らの身分を明かし、自分のいた里が襲撃されてここまで歩いて来たことを告げると、里まで連れて行って貰った。

不思議なことに、そのエルフが歩くと森が自然と道を開けているようで、なんらかの力が働いていると予想したが結局分からなかった。

里はびっくりするほど時間をかけずに到着して、少女はその立派さに目を見張ることとなった。

もちろん、元の世界の建築物と比較したら雲泥の差があったが比べることが間違っている。高き塔が森の中央にあり、その周囲に木で造られた家々が並んでいる様はさながらファンタジーだった。ファンタジーだが。

中には死んだ巨木の中身を家にしたり、木々の間に蔓を巻き付けて橋としたり、地下に穴を掘ってそこを家としたり、なるほど、自然と共生するエルフにはうってつけの里と思った。

耳が長く肌が白く、手足はすらりと長い男の門番に気をとられた少女に、弓を背負った付き添いのエルフが首を傾げた。

ちなみに頭に括りつけていた木やらなんやらのカモフラージュはみつともないから外してきたが、肌の汚れや服の汚れが酷く、なんとなく羞恥を覚えた。

RPGでよくお目にかかるエルフの格好そのままの村人が歩き回っており、はしゃいで遊ぶ子供たちも当然耳の長いエルフ。

ここにきて初めて、“少女”は迫害されることも無く町を歩くことができた。

空を見上げると、大木から伸びた蔓の橋を悠々と歩くエルフがお

り、まるで蔓が電線のようにも感じられた。

空気は森の中故にひんやりと冷たくて清らか。川べりということもあってか喧騒に混じって微かな水音が聞こえてくる。

随分昔に行ったキャンプ場に雰囲気が一番近いと感じたものの、娯楽的なものでなく実用的なものであれば、全く比べ物にならない。

「自己紹介していなかったが、私の名前はアネットという。同族を罨にかけたことを詫びたい」

髪の毛を後ろで結ったエルフの女性はそう口にするると、少女に頭を下げた。

この金髪というより白髪に近い髪をポニーテールにした女性こそ、“少女”を罨にかけて霧中に陥れ、矢を射かけんとした相手である。同族と分かるや頭を下げまくり、責任をとると言ったのだ。

誠実というか、どこか武士や騎士の匂いを感じさせる彼女、アネットは更に深く頭を下げた。

少女は、里に入ろうとするところで頭を下げられては目立つし恥ずかしいので、両手を振った。

「俺は気にしてないです。むしろ、罨に引っ掛けてくれてありがとうって感じなんですよ。あのまま彷徨ってたら里どころか魔物の胃袋でぬくぬく昼寝ですから」

「……………そうか、優しいのだな。……………そうだった、なにはともかく長の許に行かねば。ついて来てくれ。衣服や食べ物に住処といったことは、まず長に了解を得ねばならないのだ、特に外から来た者には」

「分かりました。もう長いことこんな格好だし、お腹もすいてないし、怪我もないし、ちよっと位大丈夫です」

アネットは門番と目配せをすると、里の中に少女を連れて入って

行った。

里、つまりは町の中に入って分かるのだが、家にしてもなんにしても、長年育ててきたであろう木々で天を覆い、また隠しきれない場所に関しては現代風に言うところと緑化している。

火を扱っているのか煙突こそあるが、それも蔓が巻き付いていたり、また緑色に塗装されている。

かと思えば道の雑草は引き抜かれ一か所に纏められており、せつせつせと運んでいるところを見る限り、肥料が何かにするのであろうか。

エルフ＝弓使い という勝手なイメージを抱いていた少女だが、道を歩くエルフが剣を持っていたり、槍を持っていたり、はたまた杖を持っていたり、一概にそうとも得ないと知った。

里の中央に座す石造りの塔の周囲には鳥が飛び交っており、緑に溶け込むような街並みとは打って変わって異質な様相を呈している。元の世界の絵画に似たような構図があったが、どうにも思いだせなかった。

さて、長老とやらはどんなエルフなのだろう。

少女は物珍しさに周囲にきよるきよる視線を配りつつ、アネットの後を追いかけた。

長老は想像していた髭の爺さん（失礼）ではなく、初老のカッコ良いオジサマであった。

塔の一番上……ではなく少し下にある長老の部屋に通された少女は、背後で直立不動をとる守衛の厳つい視線にうすら寒さすら覚えつつ、アネットの横にいた。

部屋は古風で（当たり前だが）、広く、そして窓があった。壁には杖がかけられており、何事かの文字が記された布が優勝旗の如く堂々と掲げられていた。

布のいくつかは物語を記しているようだったが、文字も読めない少女にそれを解読することは不可能であった。

棚には本が並べられており、そのいずれも厚く難しそうだった。

窓際の木製の机に座った長老が、その厳格そうで思慮ある瞳で少女を見遣った。耳の先いついた銀のアクセサリーが不気味に光った気がした。

何か途方もない力に晒されたようで、拳を握る。

忘れかけていたがエルフとは先天的に魔術を扱える種族であり、戦闘能力だけでも計り知れないそうではないか。

もしも排除対象と認定されたら守衛とアネットと長老全員で殺しに来る可能性も皆無ではないのだ。その場合に少女が生き残れる確率は、腕時計をトイレに落としたら勝手に飛び出してくるほどしかない。

外からやってきたエルフが、もしも人間の狗だったら？

もしも少女どころか、人間の使い魔だったら？

エルフと人間が本格的に殺し合う時代なのだ、少女が殺されても不思議ではない。

アネットから報告を受けた長老は、少女に怜悯な視線を落したまま黙っている。ひょっとして魔術の類でも使っているのかもしれないかった。

こうなつては元の世界に帰る方法など尋ねられる訳もない。とりあえず今は己の居場所を作ることに専念するほかに選択肢が無くなつた。

長老はふうと息を吐くと、視線を外し窓を見た。小鳥が数羽空に飛び去った。

「ふむ……確かに我々と同じようだ。疑って申し訳なかった。我々として聖者の集まりではないのだからね」

「いえ、いいです。俺……えっと、私は覚悟は決めてましたから」

柔らかな笑みを浮かべてみせた少女であるが、内心は全然違った。

覚悟なんて出来てやしない。もしも剣の一本でも目の前に出されたら、きつと震えて口も聞けなかったであろう。

こうして虚勢を張り、対話により自らを証明して利を引き出し売り込まない限り生き残れなくて、元の世界に帰るところか生きることにすらままならない身分なのだが、覚悟となるとまた違う次元だ。

死の覚悟をするつもりはこれっぽっちもなく、生きることを放棄することは現段階で考えられなかった。

少女の笑みを見遣った長老は、椅子に座ると本を開いた。麻色のローブが微風を孕み揺れた。

「確か、君の住んでいる場所が襲撃されたそうだが………答えたくなければいい、教えてくれないだろうか」

「えーっと………妙な連中が来て、夜に襲撃、最後に火を放って………」

「ふむ………分かった」

長老は本に何事かを羽ペンで書き込むと、拍子抜けするほどあっさり質問を打ち切った。

これは少女の心情を考慮してのことだったが、当の本人は知る由もない。

少女の方をちらりと見るどころか直立不動で両足まで揃えていたアネットに長老は目をやると、おもむろに口を開いた。

アネットという女性は、少女の想像上のエルフと明らかに異なり、やもすれば軍人にも見えなくもなかったが、少々力が入り過ぎてい

るようにも見えた。

「アネット」

「はっ」

「お前にこの子の世話を任せる。衣食住、全てだ。お前があの迷いの森でこの子を見つけたということは、きっと縁の紐で繋がれているのだから」

「は、お任せ下さい長老」

アネットはこれ以上無い位に足を揃えると背筋を伸ばす。少女もつられて姿勢を正す。すると長老は口元に微笑を浮かべ、また問う。

「そうだ、最後に申し訳ないが、君の名を聞いておきたい」

「……………えっと」

少女は名前を聞かれ、一瞬迷った。はて、一体自分の名前はなんだったかな、と。

もはや怨念染みた帰還願望のみに縋ってここまで来た少女は、自分を証明するものも場面も無く、また名前を呼ばれたことすらこの世界では無かったことを思い出した。

男としての己があるならまだマシだっただろうが、男でも無く人間でも無くの状況で、己を維持し続けるのは困難だった。生きることに執着し、帰りたいと念じ続けても、己が己であると確信できる材料が無い以上、そうなるのは当然だったのだ。

数秒間の沈黙の後、少女は自らの名前を言おうとしたが、そのままだと不審がられること明白だったので少々発音を変えることにした。

胸元に手を置き、言わん。

「セージです。私の名前はセージと言います」

実はセイジという本名であるというのは、“青年”しか知らない。
こうして、エルフの里に一人の“少女”が加わった。

<11>エルフの里(後書き)

前書きにいたると思ったか？ トリックだよ

< 12 > 遺書、もしくはただの手紙

数日後、アネットのツリーハウスにて。

「では、魔術、魔法、魔導、妖術、奇術、その全ての違いを述べてほしい。焦らなくもいいぞ？ まだ最初だから」

「えー……魔術が通常の法則でも再現できる術、魔法はその上位術、魔導が魔の心得も才能もないものでも扱えるようにしたもの、妖術は意図せずして発動するもの、奇術は……手品ですよ？ ただの」

「正解。覚えがいいな。もっともこれらはあくまで分類で、全て魔術で問題ない」

「覚えただけです。俺はまだ火すらまともに起こせないんですから」

「知識を馬鹿にするものは後で知識に泣く。覚えて悪い知識は滅多にない」

人間の適応力は凄まじいと言うが、エルフになってもその能力はそのままだった。

あの後一通り身支度を（着替えや身繕い）をしてもらったセイジ（本当はセイジ）は、ががつとご飯を食べて寝て、医者 of 診断を受けた後、アネットの自宅に泊っていた。

自身でも不思議だったが、アネットが自宅で服を脱ぎ始めてもぴくりとも動揺しなかった……訳では無く多少どきりとしたが、それだけだった。

己と体の性別差が同化し始めたかと思ったが、どうやらそうではなく、男でも女でもない不思議な夕闇に立っているようなのだ。もし“少女”にお前は男かと聞けば首を振り、女かと尋ねても首を振るだろう。

彼女はエルフの民族衣装を纏い、アネットの自宅の机で文章の勉強をし、その後はこの世界について学んでいた。

それこそ教師のように丁寧に教えてくれるので、おおよそ数時間ほどでこの世界の情勢について掴むことが出来た。

てつきりエルフは外界について興味が無く敵意しか抱いていないと思いきや、そうではなかった。むしろ積極的にならざるを得ないとかつているが情勢が許さないため排他的にならざるを得ないとか。

エルフの里は数学や文学に建築学、生物学や神話の編纂など、元の世界のローマが如く文化が発展していた。製鉄や、更には初步的ながら医術まであり、魔法薬で抗生物質そっくりの効果を持ったものまで製造しているのだから驚きだった。

魔に依存するのではなく、驕らず常に高みを目指す。媚は売らず、決して誇りは捨てない。来るもの拒まず行くもの追わず。

少女にはなんとなくだが外よりも技術が進歩している理由がわかった。

魔術に關しても少女は学んだ。

どうやら魔術とは世界を改変する技術であり、その力は物理的肉体と靈的肉体とを結びつける引力を利用しているらしい。つまり使い過ぎれば魂が離れてしまいうらしいのだ。

世界に語りかけられるのは一掴みの人間らしいが、ことエルフは全員が全員少なからず先天的に世界の改変を行えて、それが迫害の理由にもなっているとか。

魔術の発動を助ける触媒やら式やらもあるらしいが、一日でそこまで学べるほど時間は無い。この世界について書かれた本を読んでもらった後、自宅リビングでのんびりとする二人。

セージとしては早急に自分が元の世界に帰還する術を得たいが、果たして信じてもらえるかと言ったら首を捻らずを得ない。

長老に話すのが一番だろうとは思うが、エルフの里があまりに美しかったのでしばらくのんびりしていても良いかなとすら思えてくる。

木の上の家から望む景色は森にぼつりと浮かぶ街並み、そして大いなる自然。

窓に張り付いて景色を凝視しているセージを余所に、アネットはポニーテールを結び直すと机の横から弓矢を取り背中に担ぐと立ちあがった。

「私は鍛錬に行く。セージはどうする、ついてくるか？」

「そうですね……おれはこの町をもう少し見て回って、それから長老の許に行きたいんですが、許可とかはあるんですか？」

「いや、特に必要はない。名前を名乗って要件を伝えれば通して下さるはずだ」

「分かりました」

アネットは弓の調子を確かめるとセージに頷き、プラチナブロードのポニーテールを翻し家から出て行った。

家で一人になって気がついたことがあり、それは風や地面の干渉で家そのものが揺れていると言うことだ。ぎしぎしと軋む音が家に響いていて、コンクリートやレンガの家とは違った良さがあった。

ツリーハウスというより木に同化するように建てられたアネットの家は塔からほど近い場所にあり、反対側の窓から塔の足元が見えている。

あの塔を造るにあたっては相当数の岩が必要なはずだが、周囲を見ても低い山しかない。どこかに採石場でもあるのだろうか。

セージは机の上でぼーっと時間を潰した後、やがて家を出て行った。

アネットの言っていた通り、長老の間には大して時間をかけずに通された。

相変わらず暑苦しい筋肉の守衛が扉の前におり、こっちを見てくるのだから気が気ではなかったが、前とは違って里に迎えられたのだから大丈夫という安心感があった。

部屋に入る前にノックをすべきか迷ったが、そんな習慣があるかも分からないのにやったら不思議がられると思ってそのまま入った。

「失礼します。セージです」

「おお、来たか」

部屋の様子は爪の先程も変化しておらず、長老も何やら本に羽ペンで書き込みをしているだけだった。

緊張を誤魔化す様に唾を飲みつつ長老の机の前に歩み寄り、アネットがしていたように両足をぴたりと揃え背筋を伸ばす。だが、あくまで少女の体なので余り様にはならなかった。

長老は苦笑すると羽ペンをペン置き場に置くと首を回し、それから机の上に両手を置いた。

「そんなに畏まらなくてもいい。アネットのような堅物になってはすぐに疲れてしまうぞ」

「えっと……こついつた場では礼儀を正すべきですから」

「……ふむ、年の割にしっかりした子だ。養子に欲しいくらいだよ」

「養子!?!」

「そっだ、君さえ良ければ……」

「……その……それはですね……ちょっと、ええっと……でもなくって……」

「さてと……冗談はその辺にして、君がここに来た理由を尋ねた

い

「さりとトンデモ無い事を言つてのける長老に直立不動で緊張しかけたが、冗談と聞いて汗が滲んだ。緊張する理由がさっぱり分らなかったが、例えば自分の勤める会社の社長に直接声をかけられたらこうなるのだろうか。」

一方長老は反応を楽しんでいるが如く唇を持ち上げると、柔らかな動きで羽ペンを取った。

セージは数秒逡巡したが、口を開いた。

「実は……俺はこの世界の住民では無いんです」

「……………ふむ。続けてくれ」

長老の目が光った。最初里に来たときのような目つきでセージを見遣り、真意を測ろうとしているようだった。

鋭き眼光に射抜かれた“少女”は、また唾を飲むと思いついて経緯を説明することにした。

内容は、現代の世界（本人の目線からしての現代）で死に、“神様”に転生させられた挙句この体にされ、ふと気が付いたら燃え盛る村に居てここまで必死で逃げてきた、と。

少女の話を黙って聞いていた長老は、小さく唸りながら腕を組むと目を瞑って頭を前に倒し気味にして何やら考え始めた。

ある意味当然の反応だった。

突然「私は別世界から落ちてきたのだ」などのたまえば、「お前は何を言ってるんだ」と嘲笑されてもなんら不思議ではない。

どれほど時間が経過しただろうか、目を開けた長老は突如立ち上がると歩き始めた。

少女の横を通過する途中で壁に手を向けて杖を一本呼び寄せ、扉の前で止まると振り返り手を振る。

「ついてきなさい」
「はい」

何が何だか分からないがついていかなばならぬような気がしてついで行く。呪文も無しに杖を吸い寄せたのはちよつとだけ驚いた。

長老が外に出るや守衛が武器を掲げ一礼し、少女もなんとなくだが頭を下げた。

塔の廊下には途中で松明置き場があり、守衛やロープを着た人達があいた。会話の内容が哲学的な内容だったこともあれば、魔術的な話、外の情勢についての話もあった。彼ら彼女らはここで働いているのだろうか。

長老の部屋から二階ほど下りたところ。そこに石造りを鉄で補強した頑丈そうな倉庫らしき部屋が並んでいた。

その階の廊下を長老は進んでいき、また少女も付き従った。

文字の書かれた扉の三つ目で長老は止まると、杖を一振りして何事かを呟いた。イメージ触媒が必要なのか、それとも鍵的な意味合いなのかは分からなかった。

錠前がかちりと音を鳴らし、止め具がせり出して扉が勝手に開いた。

「入りなさい」

入り口で入っただけののだろうか躊躇していたところ、長老が手招きをしたので思い切って入ってみた。埃臭いその部屋には木箱や本棚が並んでおり、他と比べてひんやりとしていた。

長老は以外にも機敏な動きで本棚の間に滑り込み一冊の本を持つと、縄の戒めを解いて少女の横にあつた小さい机の上に置いた。

少女はそれを腰を屈めて観察したが、ほかの本と大きい違いを見つけることは出来なかった。茶色の表紙は煤けており、皺が多かった。

長老はそれを目を細めて見遣り、表紙を爪でなぞった。

「これは？」

「遺言書……と言うべきか。以前この里に突如“落ちてきた人間”が最期に書き遺したものだ」

「な………お、落ちてきた人間！？」

少女は素っ頓狂な声を上げると、許可も得ずに本のページを開いた。

< 13 > 出発の条件

(以降が小説家になろうつに移行してからの新規)

(前書き

こつからは新規分となります。

一話分書き上げたので投下しておきます。

セイジの漢字は想像でお願いします。

どのみちこの世界じゃ漢字なんて象形文字かなにかに見えないでし
ようじ。

< 13 > 出発の条件 (以降が小説家になるうに移行してからの新規)

『この手紙を読めるものが居たとしたら、きっと君は日本人なのだろう。』

私はこの世界に突如として落とされた。

何故かは分からない。ふと気が付いたらこのエルフの里に私は居た。

周囲に尋ねてみると空から落ちてきたそうだが、さっぱり記憶にない。

エルフの人達は私の看病をしてくれた。

私はエルフに偏見があった。が、そんなことはない。彼ら彼女らは我々と何一つ変わり無い。

私は彼ら彼女らと過ごすうち、ここに骨を埋めることに決めた。』

少女は一枚目の紙から二枚目を捲ると、穴が空くほど見つめる。

決して達筆とはいえず、また保存状況も良好とは言いがたかったが、それは確かに日本語だった。

『元々私は人生に絶望しており、命を捨ててもいいとすら考えていた。』

だが、ここに来て考えが変わった。私はここの為に生きることを決めた。

薄情者なのは十分に承知している。元の世界を簡単に捨ててしまふのはどうかと。

しかし調べれば調べる程に元の世界への帰還は困難であることが分かった。

私はエルフの女性を愛し、子を授かった。

私は確かに最期まで幸せだった。』

ページを捲る。呼吸すら忘れ、久しぶりの日本語に喜びを覚える暇も無く。

「長老はその様子をじっと観察するだけで。

『これを読んでいる君に幾つか教えるべきことがある。

元の世界への帰還はいくつか方法があるが、どれも難しい。

一つ目は世界のどこかにあると言う秘宝で元の世界への帰還路を切り拓くこと。

だがその秘宝を扱えるのはごく一部の存在であり、これを読んでいる君がそれに該当していると考えるのは都合が良過ぎる。

二つ目はどこかの国が所有する高度な魔法技術だ。これは異世界に行くための箱舟を作り出すというらしいが詳細は分からない』

ぺらり。埃臭さが鼻をつく。眉間が熱くなるのを感じた。冷静さを見失ったときの焦燥に似ていた。

『最後になるが君は帰るかこの世界に住まうかの二択を選択するだろう。

既に死んだ私には君がどちらを選ぶかはわからない。

だが、もしこの世界に生きるといふのなら、頼みを聞いてほしい。

エルフを、私が愛した彼らを守ってあげてくれないだろうか。

剣を取れ、人を殺せと強要はしない。

逃げるだけでもいいし隠れるのもいい。とにかく彼ら彼女らの平穏を守ってあげてほしい。

見ず知らずの変な耳をした違う世界の住民を温かく受け入れてくれたエルフ族にできる最後の恩返しとして君に頼みたい。

もちろん拒否するのでもいい。それが君の人生なのだから。

私は筆を置こうと思う。

人間というのはたかが100年で死に至るのが残念だ。

あの世という世界に旅立とうと思つ。
ファンタジーがあるならあの世もきっとあるだろう。
さようなら』

本はそれつきり白紙のみが連なっていた。

少女は本の表紙を凝視したまま固まった。

帰る手段が見つかったが、片方は望み薄。もう片方に至っては“どこかの国”“詳細は分からない”という頼りがいのある言葉が付け加えられている始末である。

長老に内容を伝え、どこかの国とはどこと尋ねてみた。

長老は落ちてきた人間は少女と同郷の者である可能性が極めて高い事実には驚いた様子であった。

「言い難いことになるが……該当する国が一つあった」

「……あるんですか!？」

興奮に走る少女を長老がなだめ、もう一度同じことを口にした。

「該当する国が一つ“あった”」

「……ま、まさか」

「その通り。今から20年程前に宗教の名の元に侵略を受けて滅亡してしまった。彼らは勇敢に戦ったが……」

「でも! まだ術を使える人間は生き残ってるかもしれませんが!」

「ありえない。少数民族程の人口しかなかった彼らはことごとく拉致され貴重な技術はかの国が吸収してしまった。風の便りによれば魔法陣は寸断され線の残骸と成り果て、神殿は石材として扱われたそうだ」

「そんな」

少女の表情が罅割れる。

絶望的ではないか。唯一の帰還の手立てが絶たれ、ひび割れが広がり、決壊しそうになる。帰れる場所が無くなったことへの悲しさが涙腺を緩める。

しかし、少女の頭に隕石が襲来したが如く、ひらめきが生まれた。らしくなく長老の手を引っ掴むときゅっ握る。

「技術を吸収と長老は仰いました。事の起こりが数十年も前なら解析が進んでいる可能性が高い……………」

「止めておくのが賢明というものだ。かの国は強く、大きく、そして傲慢だ」

「俺にそれ以外に道はありません。村長、国の場所を教えてください。潜入します」

「…………許可できない」

「お願いします！」

渋面を作る長老に対し、少女は頭を下げて懇願した。

文化上、頭を下げる行為が頼み込む行為とイコールで結ばれないエルフと言えど、必死にすがりつくように頭を下げて涙声になれば、意図することは分かる。

情けないと少女は自覚していた。みつともないと。だが、唯一の光を失うわけにはいかないのだ。第二の人生に引き擦り込んだあの神に復讐するにはこの手段しかない。

長老からしたら、少女の行動は度し難いものであったかもしれない。

まだ成長の途上の体では、道中行き倒れになる可能性が高い。

セージの心中は複雑である。帰りたい。でも帰ろうとすれば死ぬかもしれない。帰らなければ一生を虚しさやり場のない憤りを抱えて生きていくことになる。

「どうせなら、セージ君。君が大きくなるまで待ってみてはどう

かね。その頃になればかの国の技術解析も進むことだろうし、なにより君の経験と体格が旅路に適したものになっているだろう」

「駄目なんです！ ずっと、こんないい人ばかりの場所に住んでいたら、離れたくなくなるから！ 今すぐにでも発たないと、進めなくなってしまうから！」

そういうことなのである。

エルフの里はみんな優しいし、和やかだし、穏やかな空気が流れる幻想的な場所であるからに、住めばずっと居ついてしまうことが目に見えたからである。

悪い意味ではない。いい意味である。いい意味で、離れられなくなるのだ。

長老は洪面を崩さない。

「私個人としては、君はここに居た方がいいと思っている。君は傷ついた。外の世界に行けば傷は増える一方だ。下手すれば殺されるか奴隷の扱いだ」

「どうしても許可がいただけないのなら、無理にでも脱出します」
「森の防御機能はなにも外部からの侵入者だけに働くものではない。特に君のように堂々と公言してしまった相手にはな……………い
いだろう、許そう」

いよいよやけくそな口調になり始めたセージを、長老はため息をつくと、肩を叩いて諫め、そして頷いた。

長老は手をぼんぼん打って見せた。

「条件が一つある。アネットに試合で勝つことだ。彼女に勝利できるのなら、最低限の自衛ができるとみなし、里の外への道を開こう。勝てないのなら、少し待ちなさい。大きくなるまで」

セージは、かの国というのが初めて殺害した兵士の母国であると後に知った。

< 13 > 出発の条件 (以降が小説家になろうつに移行してからの新規) (後書)

次話は比較的早く仕上がるかと。

<14>勝てなくて

受け止められるまでもなく、斬り込みはことごとく躲された。

拳は受け流され、蹴りはくぐられた。タックルすれば足を引っかけられて転んだ。

焦燥感が募り、大振りな攻撃を実行した。

「やあああつー!!」

「甘い!」

剣の形に削られた木剣を振りかぶるや、踏み込みを加えた前進に突きを乗せて攻撃する。

足運びは荒削り以前の幼稚なもので、突きながら叫ぶのではなく、突く前に叫ぶ有様となれば、木剣で受け流されてしまう。

剣の切っ先が地面にめり込み、余剰分の力が握りしめた手を伝導して骨が軋む。

アツと息を呑む間もなく、アネットの足が己の踵に回り、むんずと顔を掴まれ地に投げられた。鍛えられない部位とされる脳が揺れ、意識が円環を描いた。

遅れてアネットの美しく光を反射する髪の毛が後頭部について、肩からこぼれた。

試合という名前の格闘が始まってから主観時間にして2時間。セージは、武器ありで挑もうが素手で挑もうが赤子の手を捻るように易々と阻止され続けていた。

ただでさえ子供の体。武術の心得なし。喧嘩の経験薄し。という悪条件が重なった上の戦いである。歴戦の戦士たるアネットにすれば相手にもならないのは目に見えていた。

長老は、勝てっこない状況を作ること、セージを外に出さんと

したのだ。

子供に旅路を許可して死なれるようなことは、いかなる理由があるれど彼にとつて許容できることではなかったのだ。

地面に倒れ朦朧とした様子のセージを、アネットは手も貸さず一定の距離を取るべくじりじりと後退する。

足運びは、音を立てず、氷の上を滑るかのようであった。

「どうした？ 私に一撃を入れなければ里の外には出れんぞ」

「……………」

「ムキになるのが構わないが……今日は休め。明日からだ。長老は試合に関して私に全てを任すと言われた。今日の試合はやめ、明日の試合にかけよう」

「……明日倒します」

「出血は無いな？ あつたらすぐに治療する」

「ないです」

「自分で帰れるか？ 私が背負ってもいい」

「少しその辺で訓練してきます」

「そうかわかった。私が教えてもよかったが、手の内を知られるというのは賢くないか」

アネットが優しい声で接してくれたのが、嬉しくも悲しくも心に作用した。彼女はくるりと優雅に踵を返すと歩き去った。

修行場というのだろうか、訓練場とでも称すべき広間の真ん中で、セージが大の字で倒れて天井を仰いでいる。

長老に与えられた条件を満たさすべくさっそく試合をやってみれば、このザマである。

セージがアネットと遭遇した時のことを思い出してほしい。

アネットは罨を作つて侵入者を排除しようとしていたわけである。一定の戦闘能力が無ければ勤まらないのは言うまでも無く、ズブの素人が戦いを挑んで勝てるはずもなかった。

セージの知らぬことであるがアネットはそれなりの実力者だったのだ。

肉体戦で及ばないのなら、勝率があるとすれば、魔術を使う他に無い。

致命的な問題点として魔術を使用すると（攻撃力を持つ程度の）鼻血を噴いて卒倒することが挙げられる。

遠距離から弓でも射掛けてみるかと考えるが、アネットに対し通ずるイメージが湧いてこない。そもそも、弓に触った経験すら無いというのに。

「あんときの魔術さえ発動すれば……つつてもアネットさんに当たるわけが無いんだよなあ……アネットさんってたぶん幻術とかの類を使うんだろううしリアル残像だしか想像できねー」

大の字から、上半身を起こす。

別の場所では弓矢の発射音が聞こえてきて、また別の場所からは魔術と思われる氷の割れる音が聞こえてくる。

向こうは魔術専用の訓練場なのだろうか。

とりあえず、木剣を拾い上げ、腰帯に差して立ち上がり、歩き出す。

他の施設と違い頑丈な岩のブロックで組まれた訓練場に足を踏み入れると、空間から無数の氷の刃を出現させて鉄の柱目掛けて射出する女の子が居た。

「うおっ」

雷電が如く空間を走り抜けたそれは、鉄の柱に衝突するや轟音を立てて碎け散り、四散した。そしてきらめく粉となり瞬いた。

「違うわね……もっと激しくない……」

その女の子はしかめっ面を作れば、親指と中指を合わせ、何事かを呟いた。

パチンツ、指を鳴らした。

世界が意思の力で変動。次の瞬間、女の子の背後にずらり大量の氷のナイフが出現し、雨あられと鉄の柱目掛けて殺到した。

鉄の柱が氷の柱と化した。

否、氷粉塵の濃度が高すぎてそう誤認したのだ。

女の子はしかし納得しない表情を崩さず、氷の剣を取り出してみたり、槍にしてみたり、驚くほど自由自在に魔術を行使してみせた。火を一瞬つけるのが精一杯のセージにはそれはまるでおとぎ話だ。ふと、女の子がセージの方を見遣った。きのこでも生えそうな悪い目つきで。

「何見てんのよ」

「いえ、すごくなって思いました」

「これしか取り柄が無いから仕方ないじゃない。でも火力だけじゃ家は建てられないし、森は癒せないのよ。不便よ、ホント」

女の子は魔術の使用により疲労しているのか、重いため息を吐くと、セージの顔をじっと見つめた。

「見ない顔ね」

「外から来ました」

「外？ 森を抜けてきたの？」

「ええ」

セージは事情を一通り説明し（神様に転生させられましたのくだりは信じて貰えなそうなので適当にごまかした）、自分が今アネットに勝利しなくてはいけないことを告げた。

すると女の子は当然のごとく首を振ったのだった。

「私は魔術の射ち合いなら勝てる自信があるわ。でもね、何でもありの取っ組み合いとなるとアネットさんには勝てない。実戦となれば圧倒されるわね」

「あろう」

「なによ」

「魔術を使おうとすると鼻血出てぶっ倒れちゃうんですけど」

「私だって最初はそんなもんだったわ。くらっときて湖に飛び込んでんじやつたの」

「じ、実は……」

「できれば今日中に勝ちたくて……」

女の子はポカーンと口を開いた。

何言っただコイツとでも言わんばかりに口をへの字に曲げ、腕を組む。

「ムリよ。無理無理絶対にムリ。ひのきの棒で鉄の剣に立ち向かうようなもんよ、不可能だわ。そんなに早く勝ちたいなら一点特化の攻撃魔術でも使えるようになって、不意打ちでもすることね」

「魔術を教えてくださいる場所がありますか？」

「学校があるわ。私が話をつけてあげるからついてきて」

と、女の子はテキパキとした早足で訓練場を出ていこうとする。案外親切的な性格なのかもしれないと、セージは後に付き従った。

中央道を過ぎ、エルフの里で最も高い塔の根本にそれはあった。

現代日本なら戦前あたりまでごく普通に見られた木造りの二階建ての建物。美しく整えられた庭にはいくつか石造がポーズを決めて立ちつくし、エルフの民族衣装に加え耳覆いのついた帽子をかぶっ

た子供たちが遊んでいる。

セージは直観的にここが目的地なのだと悟った。

庭を通り、道中子供たちに遊ぼう遊ぼうとせがまれながらも、正門から中に入る。

造りはしつかりとしており、内装も現代日本のものと比較しても見劣りしないと感じた。校内は、木と草の甘い香りが強く漂っていた。

廊下を歩いていけば、とある部屋に辿り着く。

「待ってて」

女の子がドアを開いて中に入っていった。

セージは、日本の場合だと横引き式なのにと感慨に耽っていた。

数分後、女の子よりも先にドアを開いて姿を見せたのは、思慮深そうな黒髪の男性だった。外見年齢は30歳前後。鋭い目つきと狼のような細見が印象に残った。

「君がそうですか。話は長老から仰せつかっています。望むまま教えましょう、何をお望みで？」

「アネットさんってご存知ですか？ 彼女に勝ちます」

かくして、魔術の修行が開始されたのだった。

<14>勝てなくて(後書き)

魔術の設定は適当です。ふにゃふにゃな意味の適当です。
イメージが世界を変化させるとでも覚えておけば問題ないです。

<15>成功したはいいものを

空き教室にて。

まずセージが教わったのは使える魔術の強化だった。

セージが使える魔術といえば火を灯すことと、剣に火炎を纏わせること（気絶することくらいである）。

女の子が紹介してくれた先生曰く、セージにとっての魔術のイメージの中でもっとも安定していて具象化しやすいのが『火』であるという。

魔術について詳しい話を聞いたときのことが思い出される。

あの中年男性に魔術についての話を聞いた時に、傍らで誇らしげに燃える焚火が強く刷り込まれたのかもしれない。

「いいですか、魔力とは肉体と魂の結合力を流用したものです。簡単に申しますと、死ぬような気持ちで魔術は行使するものです。死ぬかもしれない、魂が碎けるかもしれないと、意識の片隅に置いてください」

「……………？灯れ？」

椅子に背筋を伸ばし座った少女の人差し指に灯る、真っ直ぐな火意識する。肉体と魂の結合を担う細い銀の糸の幾本かを摘み取り、己の意思で紡ぐ。銀糸を成形して、漏斗に流し込み火炎に変える。指先に視点を固定。火を維持する。

平素なら一瞬で消えてしまう着火石が、数時間の練習だけでガスライターに昇華した。

イメージしたのが文字通りにガスライターだったためか、火は青く、先端にちらちらと赤い火のかけらが見られた。

女の子は机に肘をつき、眠たげに火を見ていた。

「竜の鼻息みたいね」

「……………あつ」

集中が切れ、火がボツと断末魔の煙を残して消え去った。

「消え方もそっくり。んっ……………嫌な顔しないでよね、皮肉のつもりなんかじゃないんだからね」

女の子は目つきの悪さに似合わずそう付け加えた。

一分の点灯に成功したとはいえ、すぐに消えてしまう。指先の火を攻撃魔術に転用するのは困難で、ゼロ距離で押しつけて相手を燃やす以外の戦術が取れない。アネットがそれを許すかと言えば答えは否である。

セージは二人の見ている前でもう一度火を灯し、二分頑張った。

蠟燭か、ガスライターか、バーナー並みの火力を出そうとしても、心の焦りが火力を不安定にして、ガスライター止まりだった。

これでは蜘蛛に食われそうになった時のような攻撃力のある火を灯すには遠過ぎる。いつそのこと魔術を諦めて爆弾でも製造した方が早かるう。だが、爆弾を製造できるだけの技術も知識も経験も人脈も、少女には無いのである。

購入しようにも無一文であり、売るものすらない。

先生は手をぼむと合わせた。

「では、次は訓練場に行きましょうか。下準備はこれくらいで十分です」

「今のですか？」

「ええ、その通りです。詳しい事情は知りませんができる限りの短時間でアネットさんに勝つためには基礎を固めていては時間がかかりすぎます。こけおどしだとしても実戦で耐える……………いえ、実戦で威嚇にはなるくらい魔術を構築せねば」

「ところでアネットさんが使うのは幻術ですか？ 予想ですけど」
「正解です。彼女は幻術で惑わせ 罠に誘導して捕らえたり、
弓の一撃を食らわす戦術を得意にしているのです」

「じゃあ……」

「得意なだけで肉弾戦が不得意なわけじゃあないですから早とちりは危険です」

「……………」

先生は黒い髪を指で弄りつつぴしゃりと言った。

ちなみに先生の名前はアルフといい、女の子の名前はヴィヴィという。

アルフを先頭に、セージとヴィヴィは訓練場に足を運んだ。太陽が沈みかけた頃のことだ。

アルフ 先生の指導の元、セージが魔術をヴィヴィに浴びせかけるという危険な方法がとられることになった。

「大丈夫ですよ、どんな魔術が飛び出しても。ヴィヴィの実力であれば対処は可能ですし、私もついていきます」

さすがの私も訓練場が倒壊するような魔術は不可能ですが、とアルフは口にしてから、二人の中間地点、やや外側に立った。

ヴィヴィが両手をだらりと下げ、両足に力を行き渡らせ、臨戦態勢に入った。

一方セージは、集中できる立ち方は無いかと逡巡した挙句、ヴィヴィの真似をするのだった。

「始め！」

アルフが手を打ち鳴らし、特訓が開始した。

まず火を飛ばしてみようと思った。イメージしたのは映画などで

よくある火炎放射の場面。手を広げ、腕を水平に伸ばし、ヴィヴィを狙う。

ヴィヴィがただでさえ悪い目を細め、歯の間から吐息を吐いた。エルフ特有の尖った耳が脈打ち、上を向く。

セージは目を固く閉じ、火炎が手に絡み付くさまを念じ、瞳を開くと同時に唱えた。

「？火炎よ？」

次の瞬間、右手が燃えた。

思考が追い付かない。

「！？ えつまっやつ嘘だろ！？ うそっそっそあちちちちち

！！」

「？ ？」

右腕に侵略を開始した火炎を、体を丸め包み込むことで消火せんと行動するより数瞬早く、アルフの呪文が作動し、重力の理に真っ向から逆らう水流が発生した。

右腕の火は魔術で生み出された水に飲み込まれ息絶えた。

水は、右腕を基点に包帯でも巻くかのようにぐるぐる回転し、火傷を癒していく。北限の海水を汲んできたような水は、熱を奪い、冷をもたらしした。

やがて水が空気中に溶けた。セージは腕を、手をつぶさに確認し、一切の傷も残されていないのに驚愕した。赤くすらっていないのである。

腕が燃えた証拠として、あたりに焦げ臭さが残留していた。

「今、君の魔術は制御を外れて暴走しました。焦るのは結構。ですが焦りすぎてことを急げば今のようになり、己を灰にします」

「んもつ……何をそんなに急いでるのか知らないけど焼死体にだけはならないでほしいわ」

「ごめんなさい。次は、やります」

セージは頭を下げようとして、頭を下げてても意味が通じないと思いき、言葉で伝えた。

次こそはやるぞと頬を張ったら、同じ右手を突き出す。

体から魂を引きはがすことを意識して、脳髓の半ばから液を抽出するかのようになり、唱える。

呪文の言葉に具体性を混ぜて。

「?ファイアーブレス?」

瞬間、手の平に光球が誕生した。一秒後、瀕死の馬の吐息よりひどく緩い火炎の風が、三十cm弱流れたのだった。

「もう一度! もう一度やります!」

「私はいつでもいいわよ」

いつ攻撃が来るかわからないヴィヴィは、集中の糸を張ったまま、一歩も動かない。

手を突き出し、今度は何か棒のようなものを握るように、指を曲げて、腰を落とす。

「?フレイムソード?」

火炎が指という指を覆いつくし、爆発の気配を見せたが、意思の力で抑え、イメージという指向性を与えて、こねくり回し、一つの結晶となす。

ヴィヴィが嬉しそうな顔をして、同じくそれを魔術で作り上げた。

「できるじゃない！」

剣である。

火炎の剣と氷の剣が、それぞれの手に握られた。

氷の剣が堅実なサーベルの形をとったのに対し、火炎の剣は靄を赤く染めて剣の体裁を繕った見た目にも脆いもの。

セージは剣が壊れる前に、剣を下段に構えヴィヴィに突っ込んでいった。

馬鹿正直に剣を上段に振り上げ、振り下ろさん。

「熱いのと冷たいのじゃ相性が悪いけど！」

「受け止めた!？」

ヴィヴィの冷気を纏った氷サーベルが、火炎の剣と体の間に割り込む。拮抗する力と力。氷は熱に弱いはずだが、溶けることなく、美しい造形を保っていた。

ヴィヴィは口元をニヤリと歪めれば、剣を引き寄せ、一気に向こう側に弾いた。セージがよろめき数歩後退したが、すかさず地を蹴り剣を振った。鏢迫り合い。精神が削られるのを感じた。

しかもセージが全力で押しているのにも関わらず、ヴィヴィは余裕を崩さず同等の力で押し返してくる。

「けどね、私の氷は頑丈なの！」

「くっ……」

ヴィヴィがウィンクをするや、空間で氷の結晶が生じ、砕けた。それは粉雪となり視界を覆い、怯んだすきに剣を押し返され、転んでしまった。

セージが起き上がった時、剣をだらりとさげたヴィヴィが目に映

った。

「剣を振るうには距離がありすぎた。」

「？雪神様の戯れ?!?!」

その背後には無数の雪玉が浮遊していた。

「言っておくけど痛いわよ!」

剣が燃え尽きた。

身を守る方法はただ一つ、腕で顔を守ること。

次の瞬間、セージは雪なのに雨あられと機関砲が如く襲い来る雪玉に蛸殴りにされた。

痛かった。

<15>成功したはいいものを(後書き)

ヴィヴィとくればアんだそうです。

< 16 > ひらめき (前書き)

日付ギリギリです。今日中に投下と言ったからには約束を守ります。

「やりすぎですよこれは」

「ごめんなさい」

「反省してますか？」

「反省してまーす」

「まったく……」

全身に雪玉を食らったセージは、魔術行使の負荷も相成って気を失い救護室に担ぎこまれた。

本人が語ったように鼻からは大量の血が流れていた。

地に倒れたのち、駆け寄ったアルフとヴィヴィが覗き込んでみると血塗れだったので、さすがに顔色を失ったが、出血源が鼻と判明すれば、安堵した。

なぜアルフは途中で割り込まなかったかと言えば、たとえば氷の刃物が射出されるなどという本格的な殺傷魔術なら横から止めようと考えていたからである。雪玉は殺傷能力を持たないのは当然のことであり、止めるのを躊躇したのだ。

アルフとヴィヴィに見守られる格好ですやすや寝息を立てるセージ。白いベッドの上で寝転んでいると、とても元が男性だとは思えぬ人形のような可愛さを醸し出す。そんなこと、本人にとって路傍の石よりどうでもいい事象であろうが。

どれだけ時間が経っただろうか。夕日は地平線の彼方に顔を隠して、空が群青と漆黒の化粧をし始める時間帯になった。

セージの身じろぎが多くなり、シーツの皺が増える。

「……………」

無から有が浮かび上がる。スイッチが切り替わるよう、暗闇に一筋の光が差し込む。瞼が薄らに眼球を露出させたがすぐに閉じてしまう。それを繰り返すこと数度、ウーツと息を吐き、覚醒した。

目を開くと知らない天井があった。

目だけを動かしてみれば、真顔で腕を組み椅子に座っているアルフト、うつらうつら涎を流しながら椅子で寝ているヴィヴィ、そしてつい今しがた入室したらしきアネットの姿があった。

そういえば、と“彼”は思い出した。

車にはねられ足の骨を折った時も、今のように家族がベッドを取り囲んでいたな、と。

「目を覚ましましたか」

「私にはわからないよ、セージ。焦らなくてもいいだろうに」

アネットがアルフトとヴィヴィに一礼し、椅子に座った。

セージは、アネットの顔をまともに見ることができず、布団で顔を隠した。

そして、ワガママを言ってみる。

「……今夜はここに泊まります。泊まりたいです」

「わかったが、ちゃんと帰ってくるんだぞ……ご飯の時間までには。アルフト氏、あとはよろしくお願いします」

「私というより学校医ですね。わざわざ学校に忍び込む輩もいませんでしょうし、すぐに話は通せましょう」

話しぶりや態度からアネットとアルフトが顔見知りであるらしいと推測した。

アネットとアルフトは、ヴィヴィを起こしにかかる。残して行くことはできない。彼女の両親が心配するだろうから。

ところがヴィヴィは涎の量を増やすばかりなのである。アネットはため息を吐くと、ヴィヴィの背中に手を回し、両足を持ち上げたのだった。俗に言うお姫様抱っこ。姫は姫でも眠り姫。すらっと細いアネットの容姿と相成って、姫と騎士であった。

「さほど遠くはないですから私が連れて帰ります」

「助かります。セージ君、本当にここに泊まると?」

アルフが念を押してきたので、布団から顔を出して頷く。

アネットはまるで赤ん坊をあやす様にヴィヴィをゆっくり揺らした。彼女は口を半開きにして気持ちよさそうに寝ている。熟睡しているらしく目を覚ます兆候すらあらわさない。

「はい」

「そうだな……いちいちご飯を食べに帰るのも面倒だろう。私が届けるよ」

「……あ、ありがとうございます」

「本来なら同じ机を囲むべきなのだが……頑張れ。私とて無敵の戦士ではない。隙を見せるつもりはないが、見出すことはできる。君は賢いからできると信じている」

倒すべきアネットに助言を貰ってしまい、宿敵に握手を求められたような不思議な気分に見舞われた。

やがて三人もいなくなって、救護室は静かになった。

少しして、救護室の主たる学校医が訪れて話の確認を求めてきたので、礼儀正しく応じるとにっこり笑ってくれた。心中は気後れに溢れていた。

医者もいなくなれば、完全に無人となる。

学校から生徒も消えて、教師も居なくなった。

この世界においても夕方になれば鴉が鳴き始め、群青色は徐々に

色褪せて暗黒の空が姿を現す。化学物質に汚染されていない清浄な大気の彼方には満点の星空。

セージはストレッチをする、救護室を後にして訓練場に向かった。

昼間には見えなかったのだが、訓練場の天井は光り輝く塗料が石が使われているらしく、月明かりが無くともはつきりともものを見ることができた。

セージは唯一まともに使えた火炎の剣を安定して行使するのに一時間をつぎ込み、対アネット用の剣術を生み出そうと四苦八苦の末『時間が無い』と諦めた。

付け焼刃の剣術が通用するような相手ではないと、何度も何度も投げられて理解したのだから。

あぐらを掻き、額の汗を手の甲で拭う。

実力が無いのならこけおどしてもハツタリでもカマでもホトケでも親でも使うしかない。

腕を組み、背中を丸め、訓練場の地面を見つめ、脳に命令を下す。何かいい案は無いかと。

熟考の末、頭に落雷があった。

「それだ！」

その案はこの異世界にはおそらく発明されていないであろう代物だった。

準備すべき品がいくつかある。さっそく明日から取り掛からなくてはと腕をぶんぶん振り回して気合を入れる。光が見えてきた。そう、光が見えてきたのだ。

セージは案を支える魔術行使の訓練を続行しようと勢いよく起立し、髪の毛を掻きむしった。金糸が香った。せっかくの髪がぐしゃぐしゃである。

「腹へったあ……」

そこでセージは、やっと胃袋の嘶きを認めた。

学校に戻り、救護室の扉を開けてみれば、食欲を攪る香りがした。心臓が高鳴った。ばたばた慌ただしく先ほどまで寝ていたベッドに行ってみる。包みが一つ鎮座していた。

さすがにベッドの上で食事はまずかろうと、床にあぐらをかいて座り、包みをほどいて中身を確認した。パン。干し肉。香草。果物。涎が舌を濡らす。手を合わせ、いただきます。エルフの前では決してやらない習慣が出た。

パンは冷えていたが外の皮が固く中は柔らかい。香ばしさが鼻を通る。美味しい。

干し肉、香草をおかずにパンをもぐもぐ咀嚼する。

干し肉は唾液で濡らしてから何度も何度も噛むことで柔らかくして、パンと香草に絡めて飲み込む。

最後に残った果物を歯で潰し、甘い汁を楽しんだら、包み布をポケットに突っ込んで訓練再開である。

でもその前に。

「ごちそうさまでした」

明日からは忙しくなる。

とつと水浴びをしようと、駆け足で学校中を探索して、教師用のおしき水浴び場を拝借する。タオルは無いので、包み布を使う。拭いては絞り拭いては絞りを繰り返し、体の水気を取る。髪の毛は水を拭くだけ拭いて放置する。

そしてセージは、眠りに身を委ねる前にベッドを部屋の隅に押しやり、布団をかぶり、寝た。

< 16 > ひらめき (後書き)

ひらめいた
通報した

<17>秘策(前書き)

日付過ぎちゃった件

<17> 秘策

翌日。

学校で目を覚ましてみれば、生徒達が悪戯をせんと扉や窓から侵入を試みるのを学校医が食い止めるといふ混沌とした状況下にあるのに気が付いた。

ちゃんとベッドを部屋の隅に配置することで気が付きにくくしておいたというのに、子供にはお見通しだったのである。ヴィヴィが子供たちを追い払ってくれなかったら面倒なことになっていただろう。

聞いたところ、今日は現代社会で言うところの休日に当たるらしく、授業は無いそうである。

私も手伝ってあげると、ヴィヴィが大真面目に言って離れないので、セージは用意すべきものと事柄を告げた。

二人は、最初に塗料を手に入れるべく相談し、結局自作することにした。作り方はいたって簡単、燃料用の炭を磨り潰すのである。

ヴィヴィは、炭を岩で磨り潰す作業をしながら、怪訝な表情を隠さない。

セージはその炭を、汲んで来た水に湿らせ指に付けると、ヴィヴィに見せた。

「これって何に使うわけ？ 畑に撒くのかしら？」

「いいや、塗る」

ヴィヴィが首の角度を深めた。

「精霊に勝利を約束する戦化粧にするのなら白とか赤を使いなさいよ」

「違う違う。瞼に塗る」

「瞼だけに？」

「その通り」

「お日様が眩しいとき目の下に塗ることはあるけど、瞼に塗っても……」

「いいからいいから」

ヴィヴィは質問をしようと口をパクパクしたものの、せっせせつせと瞼に塗りつけ出したセージを前に何も言えなくなってしまった。セージは瞼に塗りつけた塗料を糊代わりに炭の粉を付けていく。やがて、瞼と眉は真っ黒になってしまったのだった。太陽を見上げて、効果を確認すれば、満足げに頷いた。

何をしているのだろうと覗き込んだヴィヴィが吹き出す。

「なによそれっ！ 面白い！ 私もやるから！」

「遊びじゃないです」

「遊んで何が悪いのかしら！」

「悪かないですけど……」

ヴィヴィが水の入ったバケツを横からさらって、炭化粧を作った。頬、額、鼻と塗りたくり、器用にも瞼にもう一つの目を描いた。目を閉じていても開いているように見えるアレである。

「どうよー！」

「いったいどういうことですか！」

「第三第四の目！ 我ながらよく描けたと思うわ」

「見えてないでしょうに」

「そうね。欠点は出来上がりを自分で見るができない点ね」

そんなわけで、二人は汲んで来た水で顔を洗うと、次に準備すべ

き物を探した。

一つはコルクのような材質の木と、蠟燭の蝋か油である。後者は比較的簡単に入手できたのだが、前者は思うように見つからない。コルクでなくても程よい柔らかみがあれば木に拘らないとしても、見つからない。

元の世界では容易く入手できたゴムなどの品も、この世界では手に入らない以前に発明されていない。

仕方がなく普通の木で代用することにした。

セージはその木をせっせっせとナイフで削っていき、凸の字に近い形状に成形した。一つ目は力加減を誤りおしゃかにしたが、二つ目はうまくいった。それを油で柔らかくして布きれをきつく巻いた。完成である。

それを見ていたヴィヴィは、ますます首を捻るのだった。

「なんなのそれ？ ごみ？」

「ゴミじゃなくて勝利をもぎ取るための防具です」

「どこを守れるというの？」

「それは……明日の秘密です」

セージは不敵な笑みを見せつけてやった。

その日はヴィヴィと別れ、訓練場で一日を潰した。体術、剣術の練習よりも、魔術の練習が八割であったことは言うまでもない。

後日、セージはアネットを呼び出した。

アネットが来るまでの間に、準備を整えてしまう。

炭を水で溶いた塗料を脛に塗りたくり、ついでに目の下にも塗す。前髪を目に垂らす。木の細工物に油を足して、耳に詰める。上から蠟燭の蝋で蓋をする。外の音が遮断された。

精神を研ぎ澄ますために、訓練場の方を向き、あぐらをかいて精神統一をする。

傍らに木の剣は無い。

数十分ほど経過した頃だろうか、精神の淀みの一切が沈殿した頃、アネットがポニーテールを揺らしながら颯爽と登場した。

アネットは手を振りつつ近寄ってくれば、目のまわりを真っ黒にしたセージの異様さを目にし、ぎょっとした。人差し指を己の目にやった。

「私を倒せるようになって……セージ……聞かない方がいいと思うが目をどうした」

「……………」

音が聞こえないため、唇の動きで読むしかないが、わからない。しかし指で目を指したので、目のことについて質問しているのだろうと予想をつけた。

セージは手を突き出し会話を制すれば、お尻を叩きながら立ち上がり、ゆっくり喋った。自分の声が骨伝導して、くぐもって聞こえた。

「気合を入れるために化粧してみました。早く始めましょう、アネットさん」

「構わんよ、いつでも」

二人は距離をとったところに立ち、相対した。

セージは呟いた。

「？フレイムソード？」

瞬時、火炎が旋風となりて手から生える。

火炎は瞬く間に硬質な形に縮小し、凝縮されれば、細く鋭い剣へと姿を変えた。片刃、尖った切っ先、緩やかな反り返り、角ばった鰐……日本刀のそれである。

刀剣類の中で最もイメージしやすかったのは、青少年なら誰もがあこがれを感じる日本刀だった。それだけの話である。

ぼんやりとした剣しか形作れなかった少し前と比較すれば驚くべき進歩である。

アネットは、ほうと感嘆の声を漏らせば、右足を半歩引いた構えを取った。

「……………」
「……………」

どこかで鳥が鳴いた。

「でああッ！」

先手を取ったのはセージだった。

剣を構え、制御化にある全速力で距離をゼロに近づけていく。心臓が早鐘を打ち、火炎の剣もとい日本刀が火の粉に成り果ててしまふ未来図が頭をよぎった。

次の瞬間、アネットの唇が震え、言葉を紡いだかと思えば、刹那に誕生した蜃気楼が光線となりて襲い掛かった。

「ぐっ!?!」

火炎の日本刀は、蜃気楼の揺らめきに晒され訓練場の天井まではじけ飛び、突き刺さった。砕けて消えた。アネットが指を突出し、セージの方に向けている。指から何かを飛ばしたことは理解した。日本刀を呼び出せる心理的余裕を失えば、突っ込むだけである。拳を固め、顔面に突く。

「まだまだ甘い!」

躲され、足を引っかけられて転倒する。受け身に成功。起き上がるうとして、殺気を感じた。敵意とも、攻撃の意思ともとれる感覚に、総毛立つ。尖った耳がびくと痺攣す。

咄嗟に転がった瞬間、一条の光線が今しがた居た地面に突き刺さり、半透明の網に変化して踊り狂った。捕縛用の魔術か。命中すれば身動きはとれまい。

アネットの指が、セージを狙う。
距離、3 m。

セージは突進を慣行し 手の平をアネットに向け目を瞑った。
コンマ数秒後、アネットの視界と聴覚に暴風が吹いた。

「
」

経験と本能に従い、腕を払う。柔らかいものがぶつかる。絡まってくる。力で引き離そうとして、しくじる。転ぶ。白亜の視界と、キーンという高音の中でもがく、アネット。

回復魔術を行って目耳を癒そうとした次の瞬間、馬乗りになられたのを肌で感じた。

あ、と声を上げる前に、頬を張られていた。
スタングレネード。

元の世界では特殊部隊などで使用されるシーンがニュースで放映されるなど、広く知られた武器であった。

セージが練習していた魔術とはこれのことだった。純粋な体術や魔術で勝てないのなら、相手の不意をついて視覚と聴覚を奪い、攻撃するという目つぶし作戦。砂を投げることも考えたが、アネットに通用するとは思えず、こちらにした。

光と音が自らにも害を及ぼすことが想定されたので、瞼に黒い塗料を塗り、木の耳栓を用意した。

練習の結果、光と音の作用方向をある程度絞ることができるとわ

かったが、保険は必要だったと痛感する。さらに練習を重ねれば効果範囲を相手の身に限定できるかもしれない。

動きを止めたアネットに駆け寄り、押し倒し、頬を張る。グーパーは、セージにはできなかった。

アネットの体は予想より遙かに柔らかかった。

「……ふふふ……ふふ……目つぶし……音……うかつだった……私の負けか」

「アネットさん、卑怯な戦法でごめんなさい」

「謝ることはない。君の姿を見て、考えなしに突っ込むことしかできないと油断した私が弱かったんだ。実戦なら……」

アネットは虚ろな目を彷徨わせたまま、笑う。首に親指を当てて横に動かしてみせる。刃なら死んでいたと。

強力な閃光と音を食らったというのに、既に回復し始めているあたりはさすがであるが、堪えたらしい。ポニーテールが押し潰れて曲がっていた。

「長老に報告しておく。私は負け、君は勝った。できればここに居てほしかったが……君を止められる人物は誰もいない」

「私……俺にはやることがあるんです。この里はいいところですが、すぐに発ちます」

「わかった。少ししたら行く」

「先に長老のところに行ってます」

セージは訓練場を離れると、一目散に塔に向かった。

< 18 > ミスリルの剣（前書き）

ミスリルの剣を手に入れる話。

< 18 > ミスリルの剣

アネットに勝利した、もとい勝利してしまったのを知らされた長老は暫し沈黙し、自分の目論見が頓挫したことを自覚した。

里の外の情勢は厳しく、かつてのようにエルフが優秀な技術者としてもはやされることはなく、犬畜生か何かのように扱われるのだから、なんとしても外に出したくなかったのだ。

だからこそ信頼のおける上に腕の立つアネットと試合をやらせて阻止せんとしたが、まさかの敗北という結果に終わった。

約束は約束である。

彼女を里の外に出さなくてはならぬ。

長老は机の上で目尻を揉み解しながら、打つべき手を模索していた。

王国の技術を盗みに侵入を試みるなど狂気の沙汰であり、熟睡中の竜の鼻先を蹴っ飛ばして起きるか起きないかを試すような自殺行為である。であるにも関わらず、行くというのだ。

何が少女を突き動かすのかは定かではないが、止めなくてはならなかった。

強引に縛り付けることも不可能ではなく、むしろやった方がいいのだろうが、言葉による解決が一番望ましいと長老は考えていた。

言葉で解決を望まず剣と剣を合わせることにしか考えない連中もいるのだが。

長老は頭を上げると、音も無く入室した陰気な表情の男を視認した。手招きをして近くに呼び寄せる。男は長老の耳に口を寄せて何事かを呟くと、また音もなく退室した。

「森を破ろうとするつもりか……術をまた強めなくては……」

報告だった。

何者かが集団でエルフの森を破らんとしているという。近頃頻繁に聞かれる報告であるため、動揺はしなかった。

国土拡大を続ける“王国”は、人種問題や軍備拡張に伴う財政負担のツケからくる民衆の不満をエルフという少数派を迫害すること隠蔽せんと企んでいる。

かつての時代にはエルフは神に近き者として崇められていた。規模も大きかったので一つの国として認められるほどにあったのだ。ところが、時代の移り変わりと共にエルフは排するべきものにされてしまった。

幾度の戦争はエルフの国を崩壊させ、里の幾つかを焼き滅ぼした。長老の座に収まる彼も、里を守る戦いに出かけた戦士の一人であった。多くの人を殺した。また仲間も殺された。戦いは壊すことしか生まなかつた。

エルフは強く、長い寿命を持つ生き物であるが、致命的にかけている点がある。エルフに無くて、人にあるもの。それは物量である。エルフが長い寿命を持った代わりに、人間は数を増やすことで種の保存を狙った。エルフがどんなに優れていても数で押しつぶされるのは目に見えていた。

王国が領土を拡大するたびに、エルフの害悪について宣伝し、民衆は納得する。

そんな世の中に、どうしてか弱き少女を送り出せるというのか。いや、無い。

ふと、長老は一つの案を思いついた。優れたとは言い難い案だ。言うならば、間に合わせ的に同じ種類の木を大量植林するような。だが、山を丸ごと禿げさせるよりマシだった。

「失礼します」

「はいりたまえ」

扉の向こうに気配がした。

通す様に声をかければ、顔を上気させたセージが入室した。勝てたことが嬉しいのか、勝って里を出ていけるのが嬉しいのか、いずれの判断はつかないが、悲しくなった。

たかが子供が外の世界で生きていけるとでも思っているのだろうか。

「長老！ アネットさんに勝ちました！」

「そうか……………いつここを経つつもりかね」

「今日準備で、明日には発ちます」

「わかった。旅に必要な品は用意させよう。森の守りが君を通す様にしておこう。ところで一つ、頼まれごとをしてくれないだろうか」

「ハイ、なんでも」

長老がさりげなく付け加えた一言に、セージはうんうんと大きく頷いた。

「エルフの里に物と言付けを届けてくれ」

「はい……………それはどのくらいかかりますか」

「一つの里に行くまでに三十日前後か。もう一つの里に行くまでにも同じだけかかる」

「そんな！」

不満を口にするセージに、長老は人差し指を立てて見せた。厳しい眼光。目頭に皺が深く刻まれた。

「でははつきり言おうか。死ぬぞ。外の世界ではエルフを狩るためだけに雇われたゴロツキ共がうろついている。庶民の間でもエルフは捕縛対象だ。君も何度も殺されかけたのではないかな？」

「……」
「運よく生き残れたとしても、君がこれより行くところとする場所は宗教を理由に国土拡大を行う大国だ。戦争をやっているのだ、国の中枢に潜れば兵士たちが出迎えてくれるだろう」

「……」
「アネットから勝利をもぎとった力は認めるが……私は君に死なれたくないのだよ。可能ならここにいて貰いたい。が約束を破ることはできない……」

「……」
「エルフは……性的な奴隷として売買されているという話もある。君のような少女のなりをした子は買い手に欠かないだろう……」

「……」
「……せめて里と里をたどる道をとることで、君の実力と経験を養いたい。里をたどれば王国は近づく。順路の中に組み込む形だ」

長老の言葉が紡がれるたびに、セージの顔から喜びが引いていく。潮のように。

目標の無人島があるとして、準備も無しに丸太船で漕ぎ出したらどうなるだろうか。遭難か、転覆か、水と食料不足で飢え死ぬか、想像は難しくない。

これより向かう王国は、言うならば荒れ狂う大海原である。丸太船で渡航できるほど甘っちょろい場所ではないのである。

なまじりまでうまい具合に辿り着けてしまったことが、セージを盲目にした。

長老は優しく諭した。

「君が行く二つ目の里に我が古き友がいる……巨老人と呼ばれる男だ。研鑽を積み。千里の道を一步で踏破しよう」と試みる馬鹿はやめなさい。千里の道は一步ずつ歩まなければ」

「わかり………ました」

「そうだ、届けて欲しいものについてだ」

しゅんと顔を伏せたセージの前で、手を上げた。壁にかかっていた留め具が見えない力で抜け、鞘に入った剣を解放した。それは緩やかに向きを変えると、長老の手に収まった。

無詠唱であった。

長老が剣を手の中で確かめている間に、留め具がゆっくり元の位置に収まった。さながらポルターガイスト。

だが、セージが俯いていたこともあり、顔を上げたときには長老の魔術行使は終わっていた。

剣をざっと目で確認し、机の上に置く。なめし革の鞘。簡素な作りの鍔。ロングソードというには短すぎる、それ。

長老はそれを抜くように目で合図をした。

セージは、言われたまま剣を持つと、抜こうとした。抜けなかった。力が足りないのかと、体を丸めるようにして抜こうとしたが、一ミリも動かない。

ふと、剣の鞘に小さなふくらみがあるのを指で触って気が付いた。直観的にふくらみを押し、柄を引っ張った。引っかかりが外れ、剣身が露出した。

それは見事な芸術品だった。

一点の曇りも無い銀色の表面。剛の剣というより、懐に飛び込み一撃をお見舞いするのに使用されるような、華奢なつくり。雪山から湧く冷水を剣の形に押し込めたような、冷酷な美しさがあった。

ほう、とため息が出た。

剣がセージに反応したのか、淡き光の波を表面に生んだ。

「ミスリル合金製だ。折れず曲がらずよく斬れる。巨老人はこれを望んでいる。二か月前に発注を受け、つい先日出来上がった品だ。違う者に届けさせる予定だったが、君にやってもらいたい」

「あの、向こうの里でこの剣は作れないんでしょうか。なぜこ
で作ったんですか？」

こちらの里で作る必要があるのかを問いかけると、長老は苦々し
い顔をした。机上の地図を示し、三角形の印を人差し指で二回叩
く。

「ミスリルを産出する鉱山を占拠されたらしくてね……こちらの
鉱山は無事だ。とにかく、この剣を届けて欲しい。道中使っても構
わない」

むしろ、道中の危険を退ける意味合いで持たせたかったのである
が、内容に嘘偽りはない。

セージは剣を鞘に戻すと、捧げ持つように両手で握った。体積に
対し軽い。

「わかりました……その、えー……」

思わず言葉に詰まり、口の中で言葉をもごもごさせる。言われて
気が付いたのだ、いかに外が危険なのかを。そもそも危険な目に遭
ってきたのに危険と思えなかった方がおかしいのだ。

悲惨な未来予想図が頭をよぎった。

己の腐乱死体。腹には斬りつけられた痕。髪の毛はバサバサ。鴉
たちが食べられる部位にくちばしを突っ込み容赦なくちぎっていく。
瞬きを一つした。

手の中のミスリル剣が頼もしくも危なげに存在していた。

<18>ミスリルの剣（後書き）

ミスリルかなんかは現代のタングステンらしいと聞いたことがあります。

だからどうしたって話なんです。

< 19 > 里を目標せ(前書き)

里を出発する話です。

エルフと人間を明白に分ける要素とはなにか？

肌 ではない。白い肌を持つ人間などいくらでもいる。

目の色 ではない。基本的にエルフも人間と同じ色の瞳である。

先天的魔術適性 ではない。先天的に適性がある人間もいる。

答えは単純明快である。耳、である。エルフの耳は尖っており、人間の耳よりもよく動くという特徴がある。エルフか人間かを選別するのに、耳を確かめるのが最も早い手段である。

逆に考えれば、耳さえ人間のそれに整形できたのなら、エルフか人間かを区別することは困難になるのだ。

セージは長老に『耳をどうにかできないか』と尋ねてみたが、断られた。自分で斬り落とすことも考えたが、止めた。エルフが耳を削ぐなど種族への侮辱もいいところであろうと。里にたどり着いたはいいものの耳が無くては怪しまれる。

その日はアネットの家に帰ることにした。準備をするのと、心の支度をするために。

家に帰ってもアネットはいなかった。一抹の寂しさを抱いてベッドで寝た。頭がごちゃごちゃしてまともに考えられなかったからだ。意識が飛ぶ。夢は見なかった。

少しして、アネットが帰宅した。光と音による無効化魔術をモロに食らったというのに、自力で立ち上がって、しかもきっちり里の仕事を片付けてきたのである。

長老のところで旅の装備一式を貰い受け、帰宅してみればセージがすやすやと寝ている。

暢気なものだなと寝顔を覗き込む。

時間も無いので、旅具のサイズが合うかを上から宛がって確かめてみる。もっとも小さい装備を選んでおいたが、大きすぎるかもし

れないと。

サイズは合っていた。

ふと、セージは甘い花の香りに目を開けた。美しい造形の顔が目
に映った。

「……………あ、アネットさん」

「起きたか。寝ておけ、明日出発なのだろう……………その前にご飯か。
できたら起こすからな」

「すいません」

アネットの好意に甘えて、ふたたび眠りにつく。優しい声が嬉し
くも悲しげに聞こえた。

セージはアネットに起こされてご飯を食べると、また眠りについ
た。熟睡した。

翌日。

「似合わないわね……………」

「見た目はどうでもいいんですから」

里の入口にセージとヴィヴィとアネットが居た。

長老は仕事で忙しく来られないとのことである。他の出迎えも特
にない。騒ぎを大きくすべきではないという判断があったのだ。情
報は可能な限り隠すべきだと。

セージの格好は、ヴィヴィの感性からして似合っていない。アネッ
トの目にもそう映っただろう。

関節部を覆う皮板。右肩から左腰を防御する薄皮は、弓を射る際
に胸が引つかからないようにとの配慮が見て取れる。腰のベルトは
杖や剣をぶら下げられるようになっており、ミスリル剣と小型ナイ
フがあった。背中には布製バックパック。

服は、隠者が着込むようなフードが顔に暗調を落とし、エルフの

耳を視線から遠ざけているのもそうであるが、黒と茶と緑を多用した目立ちにくいものである。
まるで戦闘服ではないか。

「でも、この服なら子供っぽく見えないし被ってれば耳も見えないわ」

「そうだな……重くは無いか？」

「思ったより軽いです」

「弓はいいのか？ 弓は狩りでも使えるぞ。器械弓でもいい」

剣だけでは不安だろうと、アネットが腰を指さした。村長が用意してくれた服は弓を使う人間のことを考え胸当てがついており、持っていないのかと聞かれるのが当然だった。

しかし、弓を一度も訓練したことがない人間にとって、お荷物にしかない。

セージは里の入口を守る屈強なエルフをちらりと見遣り、二人の顔に交互に視線を配った。

「荷物は軽いほうがいいですし、俺には扱いきれるものじゃないですから」

「もつと練習していけばよかったわね！ ……私は皮肉で言うてるんだから」

「しつこいようだが、本当に行ってしまうのか……？」

アネットとヴィヴィはそう言い、セージの顔を見つめてくる。

気まずかった。だが、引くこともできなかった。若気の至りとも言おうか、

「行きます。でも安心してください。里を辿っていくので、危険は少ないと思いますから」

セージは、二人に握手を求めた。
アネットと握手をする。皮の硬いところのある、大人の手。ゆっくり上下に振る。

「死ぬなよ」

「死にません」

次に、ヴィヴィと握手をする。

柔らかく小さい手。子供の感触がした。肌を通して伝わる体温が心地よい。ゆっくり振るのかと思いきや、ヴィヴィはぎゅっと握ってブンブン振った。痛かった。

ヴィヴィが目尻に力を入れて睨んで来たので、睨み返しておく。

「死んだら許さない……呪うわよ」

「私……俺は死にません」

「一ついいかしら」

「なんででしょう」

「……なんでもないわ。気を付けなさい」

「何を聞こうとしたんですか？」

「ああんもうっなんでも無いったら！」

聞き返すと、ヴィヴィは赤面して腕を組んでそっぽを向いてしまった。

続きは帰ってきた時に聞こう。半年先か、一年先かになるかも分からなかったが。

セージは入口を守る守衛に一礼すると、里の外に向かって歩き出した。少しして振り返ってみると、魔術を教えてくれたアルフがアネットとヴィヴィの横に立っているのが見えた。

手を振ると、三人一緒に振り返ってきた。

里の周囲を守る森を抜けるのは意外にも簡単だった。元来た道に戻るように、川を下っていけばいいのだから。

森に巧妙に隠された落とし穴と仕込み矢に引っかかりそうになった点を除いて。前者の罠は穴の底に杭が仕込まれた殺意溢れる罠で、後者は矢じりに黒い謎の液が塗られたものだった。

あらかじめ罠の情報を耳にしていなければ、死んでいた。

森を向けた後は、山沿いに里を目指す。向かう最初の里は峡谷の隙間にひっそりあるという。頼りになるのは長老から預かった地図だけである。

地図と言っても現代のそれとは程遠い。大雑把に都市や山岳や川などが記されているだけである。長老が書いたと思われる、小目標となるたとえば『尖った岩』『朽ちた墓場』があるとはいえ、不安は残る。

現代社会のように便利な交通手段も無ければ、案内標識も無いし、ナビゲーション・システムなどもってのほかである。

馬が使えば時間を短縮できたかもしれないが、馬の扱いを知らなかった。

無い無い尽くして里を出てきてしまったということである。

森を抜ける際に採取した木の実を口に放り込む。小鳥がついばんでいたところを横から掻つ攫ったのだ。鳥が口にできるのなら、人間が口にしても問題ないだろうと考えたのだ。

木の実はアクが強く果肉が消しゴムの滓のように残るものだったが美味しく頂けた。

干し肉等の保存食はあるが、可能な限り節約するか外から食べ物をとってこなくてはならない。

いずれ、動物を殺さなくてはいけないだろう。皮を剥ぎ、内臓を取り出して、肉を採るのだ。木の実や雑草に頼っては効率が悪いからである。

森でいくつかキノコを見つけてバツクバツクに放り込んでおいた

が、口にすることはできなかつた。万が一毒を持っていたら死の危険がある。魚か鳥に食わせて確かめなくてはいけない。

セージは森を抜けると、最初の溪谷の里に向かって歩み始めた。

<外伝>森淵の攻防(前書き)

感想でご希望のあった他の人視点の作品です。
長老のになってしまいました。

<外伝>森淵の攻防

鋼鉄製の盾を構えた屈強な兵士たちが、森と平地の淵で戦っていた。

矢と矢の応酬。魔術飛び交う戦場。人が死に、エルフも死ぬ。刺しては刺され、悲鳴は血の香りに揉み消されていった。

「盾を構えろ！」

戦場の指揮を執るのは、やつれた顔をした一人の男である。のちにエルフの里で長老と呼ばれるようになる男の若き姿であった。

男は手に持ったミスリル剣を強く握り、天から雨あられと降り注ぐ矢を盾で受け止めた。複数人がの盾がまるで一個の塊が如く、矢の雨を受け流す。盾越しに伝わる感触は死の気配。

人間側とエルフ側の物量の差は圧倒的であり、人間が5に対しエルフは1という有様であった。人数にして1000人弱対200人だが、人間側の兵力は一向に森を進めず、平地に押しとどめられていた。

なぜか。

答えは単純明快　エルフという種族の単体戦闘力がずば抜けて高いからである。経験を積んだエルフは個人で軍を薙ぎ払い、地形まで変えると言われることから想像がつくであろう。

そして指揮をとる男もまた、幾度の戦場を越えてきた歴戦の戦士であった。

第二波の矢が降り注ぐより早く、エルフ側の弓兵が応射する。外の世界では実用化のめどが立っていない器械式の弩による狙撃が、人間側の兵力を的確に削り取る。

森という自然の防壁が矢を防いでいるため、人間側の射撃は当たらない。

弓兵達は緑色の服を着込み、体中に木の枝を付け、緑と茶色の戦化粧をしており、まるで自然そのもののように戦っていた。森に生きる住民の知恵は伊達ではない。

隊の先頭で、男が剣を天に振り上げた。ミスリルが魔力に感応して淡い色彩を醸し出した刹那、男の口から紡がれる言葉で変貌する世界に同調した。

人間側の矢の一斉射が、あろうことか空中で静止する。時が止まったように。

どよめく人間側の兵士たちに対し、矢は向きを一回転すると、順々に流星群となり襲い掛かった。弓兵の半分がこれで死んだ。

エルフに槍を突き出した兵士は、突如発生した火炎に全身を焼かれ死んだ。

エルフに剣を振った兵士は、剣と接触するや感電死した。

魔術を放った兵士は、それ以上の威力を有する魔術によって殺された。

隊を指揮する男は仲間にも号令を出すと、次々散っていき、前衛の兵士たちを切り刻んでいく。

思い出したように、人間の弓兵達が距離を離し、弓を射かけてくる。統制がとれず各自で射掛けてくるだけで、効果は薄い。

装備もバラバラで、訓練を受けてもいないことが容易に理解できた。お雇いのを差し向けてきたのだろう。

ミスリルの剣で矢を叩き落とし、身を捻るように次の矢を躲せば、槍で突っ込んでくる兵士の一撃を跳躍でいなし、頭を蹴り折って槍を奪い取る。

「おおおおおっ！！」

槍を片手で投擲して一人を仕留め、すかさず地に降り立てば魔術の放射で生じた『圧』で三人ほどを吹き飛ばす。

「こんにやるおおお死ねえええ!!!」

「気合は十分だが!」

奇声を上げて突っ込んできた人間の槍を、剣で体の右側に逸らせば槍を引つ張り、顔面に拳をお見舞いする。顔面を剣で串刺しに。脳漿が飛沫になった。

次の人間が、剣で斬りかかってきた。馬鹿正直な上段から下段に抜ける振り下ろしを受け流し、肩で体当たり。よるめいたところを、横を疾風が如く通り抜けざまに顔面をスライス。

戦いに精一杯で背後に気が付いていない人間の背中を突き刺し、肩を掴んで方向転換させた。次の瞬間、まだ若い人間の槍の一撃が、『盾』の腹に突き刺さった。

驚愕の表情を浮かべる人間に手を向け、呟く。

見えない力が人間の全身の骨を粉碎した。崩れ落ちる人間。生きてはいない。

男の横から、槍が投げ込まれた。それは男の肩を貫き首に刺さる運命であった。

だが、火炎の薙ぎ払いが槍を蒸発させたことで運命は狂った。

「隊長、突出しすぎです」

「私が前に出なければ皆が死ぬ!」

長髪のエルフが飛び込むや、魔術を詠唱し、火炎放射で数人を炭にした。鉄製の鎧も、こんがりと焼かれては意味をなさない。

エルフ側の弓兵に混じった魔術専門の兵達が、声を合わせて火炎弾を発射した。森の影から飛来したそれは、空中で分裂し、ヒューッという口笛のような音を伴って戦場を焼いた。

火力の隙間を埋めるように、弩から次々狙撃が開始される。

戦闘の主役を担う槍兵よりも、馬に乗った指揮官が狙われた。正確無比な射撃が指揮官の頭部や胸を穿ち、たちまち前線の指揮は崩

壊する。

さらに、魔術の再詠唱を終了した各魔術兵達が、光の光線を発射して、人間の兵だけを狙い打っていく。

ただ狙い撃つだけではなく、撃つては動き撃つては動きを繰り返すことで場所を悟られないようにするのであるからたまらない。

人間側は森に火を放とうとするが、目的が適うことは無い。魔の森が焼け落ちることなどありえないし、もし火がついてもエルフが消火作業に移るのだから。

矢を盾で防ぐ。

散漫な矢の射撃が戦場に降り注ぐが、あろうことが同じ人間をも貫くのだ。指揮官らしき中年の男が指示を出しているが従うそぶりもみせず、逃亡する者もいた。

士気は完全に失われ、前衛の近接装備の人間達の中にも逃げ始める連中がいた。

男はここぞとばかりに雄叫びを上げると、大きく振りかぶって腰の小剣を投げつけ、一人を始末した。威圧的に地面を踏みしめ剣を回収すれば、腰に戻す。

エルフ特有の端正な顔立ちはしかし血に塗れた鬼そのものであった。

兜の位置を手で直せば、声を張り上げた。

「盾を構えろ！ 前進するぞ！」

盾を腰だめに構え、集合を号令した途端、仲間らが一斉に集まって一つの装甲と化した。

散漫な矢のは装甲に一目散に飛んでいくが、弾かれるだけ。人間側が魔術の砲撃を放つても装甲は一枚たりとも剥がれない。それどころか放たれる魔術で殺される。

盾そのものにも魔術的な強化が成されていることもあり、生半可な攻撃ではびくともしない鉄壁そのものであった。

約10人が真正面から突っ込んできた。槍を突き出す。盾で受け止める。

「やれ！」

盾が隙間を空けた刹那、火炎と電流と氷の槍が10人諸共粉碎した。人肉の破片が盾を汚す。盾の塊がじわじわと前進し、点々と飛来する矢を受け止めた。

さつと盾の塊が崩れ、男を先頭に鏃となった。

「進めーッ！」

「全軍前へ！」

男と長髪の号令で、全ての部隊が喊声を上げて突撃を開始した。それを見た人間側の兵士たちは慄き撤退を開始した。

戦が終わった。

戦場に転がっているのは死体とそして死体である。

首を切られた死体。胸から剣の生えた死体。矢が刺さった死体。焼死体。凍りついた死体の破片。血の海に沈んだ人間とエルフの死体。刺し違えたのか、エルフと人間が抱き合っただけで切れた死体もあった。

辺り一帯には生臭さと焦げ臭さが入り混じった不快な煙が散漫していた。

まず前衛を突出させることであえて弓兵に弓を射掛けさせ足を止めさせる。魔術で近接兵を含む広範囲を薙ぐ。森の遠距離攻撃部隊の支援をもとに前衛が戦線を押し上げる。

やったことはそれだけだ。魔術を行使できる人間を複数集めて運用すること。精鋭による戦場掻き回しを実行すること。

男は顔の血を拭くと、腹に矢を受けて倒れている仲間の元に駆け寄り、ただちに回復魔術を行使した。不可視の力場が矢を粉々に粉砕して宙に放りだす。傷口が締まる。血液の流出が食い止められた。イメージを内部へと張り巡らす。幸い、矢は内臓に致命的な損傷を与えていないことがわかった。止血、止血、止血、傷口という傷口を結合する。

男に癒しの力の適性は無かったが、毛細血管の一本に至るまでを動かす力はあった。

まだ若いエルフの女性兵士は苦痛の表情を浮かべた。

「ぐ、あ……………隊長……………痛いです……………」

「馬鹿もの……………痛くない傷があるものか……………終わった。ぞでできるなら自分で歩けるか」

「厳しいです」

「だろうな、今のは冗談だ。私が運ぼうお嬢様」

「らしくないことを……………」

男は女性兵士を抱えて立ち、森に向かって歩き出した。

長髪のエルフが、肩に包帯を巻いたエルフの歩行補助をしつつ、横に並んだ。

「3人食われました」

「3人」

長髪の彼は前を見たまま答える。打てば鳴るように。

男は顔をゆがめた。3人も戦士が召されてしまった。エルフの里の総人口から考えれば重大な損失だった。

「怪我人は」

「18人」

「多いな」

「確かに。実戦を経験させようと新兵を前に出したのが悪かったのではないかと」

「大規模戦闘に放り込むよりマシだ」

「連中、お雇いのをさんざん殺され頭にきて復讐挑んでは来ませんでしょうか？」

もつともな疑問。

男は薬草汁でも飲み干した直後の顔になる。

「植民地化した国から雇った連中だと思うが」

「ああ、むしろやられた方が好都合と」

「こちらには都合が悪いことの上ない。戦うよりも内側に引きこもった方が被害は減らせるはずだが、どう思う」

「いい案ですね。ただし森が破られた時にその案は灰燼に帰すでしょう」

「巨老人の里のように要塞化すべきではないかと思っている」

それだけの労働力をどこから捻出するかというのが問題だがと男は続けると、森から出てきた魔術兵に女性兵士を引き渡し、次の怪我人の看病に向かった。

次の怪我人は比較的軽傷であったので簡単に治療をすると森に送った。

エルフの兵士たちはこぞって敵兵の装備を剥がし、肩に担いでいる。だが皆嬉しそうな顔もせず暗調をかぶっているようだ。

男も地面に刺さった剣を抜く。

これも貴重な資源なのだ。いくら鉱山を森の奥地に有するとは言っても限度がある。使えるものはなんでも使う必要があった。

男が神妙な顔つきで剣の造形を確認していると、長髪が寄ってきた。彼は副隊長であり男の戦友であり親友である。

「死者の剣を持ち帰るなど許されざることだな」

「今更それを言いますか？ 精霊も許しましょう」

長髪のエルフも槍を数本肩に担ぐ。腰には剣が何本もぶら下がっている。

「帰るぞ。日が暮れてしまう」

「そうですね」

男は隊を率いて里に帰還した。

日が黄昏を帯びた中の帰還だった。

＜外伝＞森淵の攻防（後書き）

イメージ…』300

< 20 > 乾いた旅路

夜。

太陽はとうの昔に地平線の布団に潜り、月が堂々と星空の中央に居座っている。

障害物の無い草原の真つただ中を、黙々と歩き続ける人影一つ。セージである。

彼もしくは彼女がなぜ夜中に草原を歩き続けているのかと言えば、人目を避ける為である。

地図には記されていなかったが、この草原は遊牧民が頻繁に行きかう地帯だったのだ。他にも軽鎧を身に纏った連中まで目撃しており、接触する可能性があった。

遠目にはエルフと気が付かれまいが、リスクは避けたい。万が一顔を合わせてしまった時は目も当てられない。

これからの旅路はあえて森を抜けたりして人目を避け続ける必要があるだろう。

もつとも夜歩くのは見つかる恐れがある場所に限るのだが。

渓谷の里まで一か月かかると長老が言った通り、地図に記された小目標の一つ一つですらなかなかたどり着けない。そもそも、自分が歩く方向が間違っていないとも言いきれないのだ。

コンパスがあれば話は変わっただろうがと愚痴を吐いても仕方がない。

さつそく倦怠感に包まれ始めた足に鞭を打ちつつ、月明かりを頼りに草原を歩く。

夜の楽しみは何と言っても星空である。というよりテレビもゲームも無いので娯楽らしき娯楽はこれくらいである。現代日本のように排気スモッグで汚れていない健やかな空は、雲や靄といった気象条件を別にすれば透き通った素顔を拝ませてくれる。

北斗七星も、オリオンも、十字星も、星の配置すら違う空は、キ

ヤンパスだった。

星と星をつないで新しい星座を作る。元の世界の星座をこちらの空で再現する。羊飼いたちがやった遊びは果てが無い。

「オリオンが太ってやがる」

オリオンを再現してみたが、ベルトが一つ多い。食べ過ぎたのか弛んだのかはさておき。

星明りと月明かりでは手元が見えず、魔術を行使して光を指先に灯せば、地図を広げて進行方向の正誤を確認する。草原の向こう側に一本の巨大な木があると記されている。

つい、と視線を地平線の向こうにやっても、木らしき物体は無くもしかすると違う方向に進んでいるのかもしれないし、堂々巡りをしているかもしれない。

木を見つけるまでは草原を永延とろろつく羽目になるかもしれない。最悪、出会った人間に道を聞くことも考慮しなくてはいけない。喉の渴きを覚え、水筒を取り出そうとしてやめた。水は節約すべきなのだ。いざとなれば草を飲み水分を補給する覚悟があったが、可能ならば水は保持しておきたい。草原のど真ん中に水源があると考えるのは都合がよすぎる。

明かりをつけっぱなしにすれば精神力が奪われるし、なにより目立ってしまう。人目を避ける為に夜を選んだのに逆に目立っては意味が無かった。

星座を描くのを止めて歩くことに専念する。歩き続けていると脚の筋肉が熱を持ち出し、体まで熱くなってくる。

呼吸のリズムを一定に保つ。吸って吐いてを繰り返す。歩調を乱さず、慌てず、歩く。力を込めてはいけない。緩めてもいけない。

「馬、盗んでみるか」

口に出して首を振る。どの道、馬の扱い方も知らないどころか乗ったことすらないのに、どうして馬を操れるというのだろうか。精々リアカー替わりである。

リアカー。

馬車があるくらいなのだからリアカーも作れるのではないか。

作れないことは無いだろう、誰が作ってくれるのかという問題に目を瞑れば。金が必要になるのは言うまでも無く、エルフということとを隠し通すことが必要である。エルフの里で作ってもらうのが最も安全性が高い。

自転車でもいい。徒歩で移動していると分かる車輪という発明の偉大さ。

手ごろな岩を見つけた。ジャガイモとカボチャに息子がいるならそれだ。小休憩するべく腰かけて、ミスリル剣の柄を弄る。やっと手に入れたまともな武器。

長老から頼まれたことは『巨老人』の里に剣と言付けを届けることである。剣はいいとしても言付けは内容が曖昧過ぎて理解できないものだったが、己に関係ないことである。

峡谷の里までが30日。峡谷の里から巨老人の里まで30日。徒歩で往復したとして4か月かかる。長い道のりだと改めて思う。

4か月の道のりは、巨老人の里からヴィヴィ達が居た里に戻ることを前提とした計画である。そのまま王国に侵入したとすれば2か月と少しとなる。

「……よし」

セージは頭をボリボリ搔くと膝をパンと叩いて立ち上がり、歩き始めた。鼻をぐしぐし手の甲で擦る。鼻水は無かった。

日が昇り始めたところで布に包まって地面をベッド代わりに寝た。用心の為、耳を地面にくっつけて寝たが、鼠一匹たりとも寄って

こなかった。焚火は起こさない。ここにいますよと宣伝するつもりは毛頭ない。

翌日、目を覚ますと太陽が天頂でふんぞり返っていた。採集しておいた木の实を口に放り込み、唇を湿らす程度に水を飲むと、ストレッチをして出発した。

地図に記された日付が過ぎても木は発見できなかった。とうとう木の実も底をつき、非常食として取っておいた干し肉を食べることになってしまった。焦燥感の中、昼間だろうが夜だろうが手がかりを求めて彷徨った。

木に辿り着くはずの日が過ぎて三日目。いよいよ干し肉の残量も怪しくなり、水の残量に至っては水筒に四分の一入っているだけという危機に陥った。

四日目。自力で探すことを諦め、遊牧民に道を尋ねることにした。探し出すのに半日を要したが、遊牧民は快く道を教えてくれた上に水と食料を分けてくれた。フードを取ったら大騒ぎになるので手で押さえておいた。

自力で行けないのなら誰かに頼ればいいという発想が出てこなかった辺り、意地になっているのかもしれない。

水と食料を入手したセージは、木に向かって他の物に目もくれず歩き続け、やっとの思いで見つけることに成功した。

「木……これか」

地平線にぼつんと浮かんだそれを正面に捉えて呟く。日も暮れようという時間帯になって、目標らしきものを発見することができたのだ。

遊牧民を除けば人らしき人に遭遇しておらず、怪我もせずにとどり着けたのは幸運であった。

水筒を傾け、蓋を閉じて背中へのバックパック（形状が似ている）に仕舞い込む。

草原を吹き抜ける風が埃つぼくて目に染みる。太陽も目に染みる。何日も水浴びをしていないせい肌は塩気を帯びていた。長老から借り受けた服も汚れていた。

草原を歩き続けて気が付いたことがある。水っ気が無くなってきたのである。湿気もなく、地面の湿り気も無い。

セージは顔を擦ると、足を進めた。

木に近づいてみると、枯れていた。葉っぱは既に無く、表皮も年老いた老人のように掠れて、生気のない茶色を湛えていた。

水が無ければ生きられない。草も、木も、エルフも例外なく死ぬ。立ち枯れた木の表皮に手を触れる。

例えようのない虚無感が立ち尽くしていた。

地図を取り出して、さらさらと羽ペンを走らせる。周囲の目標物。地形。木の絵の下に枯れていると備考を加えた。さらに、己がやってきた道に線を書き加え、次の目標に点線を引き、四角形が丸く並んで描かれた地点でペンを止めた。

次の目標は岩が円形に並べられた古代の墓地である。所要時間は三日間。ストーンヘンジという代物だろうか。道中は草原の緑色から茶色と黄銅色一色で表現された土地が広がっていることから乾いた場所なのだと想像をつけた。

セージは木に別れを告げた。名残惜しそうに表皮を撫でて叩く。乾いた音がした。

「じゃあな」

水筒の水をかけたい欲求に駆られたセージであったがどうにも止めた。

あれは死んでいるのだ。

<21>お水をください(前書き)

ここまでの神なんて死んでしまえは。

『王国』に元の世界の帰還の手段があると情報を得たセージは、侵入しようとして計画したが、里の長老に己の無謀さを諫められた。長老はせめて経験を積む為にいくつかの里に旅をしてから王国に侵入しろと言った。

『溪谷の里』を経由して『巨人』の里まで行くのだ。
さしあたっての目標は水を得ることだった。

<21>お水をください

独り旅 何を言っても 独り言。

「くそ……なんか悪いもんでも食ったかな？ 草はお腹にいい食物繊維入りなのに。うん。おいしい。草の中でもおいしい方」

お腹の調子が悪かった。それも、荒地のド真ん中で。

食料調達のめどが立たないのに乾いた砂と岩くらいしか無い地帯に突入してしまい、慌てて引き返すと雑草を引き抜いて一応の食料とした。草原に暮らす鼠も剣で串刺しにして干し肉にしておいた。水を調達したかったが、見つからなかった。

おかしなものである。口にはしているのは草が大部分で食物繊維たっぷりの自然食品であるはずなのに、腹部がストライキを起こしているのではと現実逃避したくなる程に緩い。

さんざん雑草を口にしてきた経験上から、獣が好んで食べる草をもりもりと食べる。

食べながら、歩く。

雑草もとい食糧を口に放りながら歩く少女。草は食べられるもの、薬草（と信じているが効果は不明）、擦ると虫よけになる強い香りの草など、分類されている。

草の他は欠片しか無い干し肉と、鼠と、木の実と、まだ動物で実験していない謎のキノコ。

草だけは大量にあるので当分は困らないであろう。

問題は味である。草は、本来食べるものではない。特に雑草に分類されるものは。

アクが強く、渋く、苦く、硬く、鉄臭い。野菜っぽい味がするのを選択して採取したとはいえ、草である。まごうことなき草である。少女の口を覗き込む機会が経った今巡ってきたと仮定して、中を

見れば感想は次のようなものになる。

緑一色と。

ひよっとするとこれがいけなかったのかとバツクバツクから取り出したるは、木の実。赤く、酸っぱく、消しゴムのような滓が口に残る食べ物。鳥が食べられても人間には食べられなかったのかもしれないが、どう証明すればいいのだろう。

お腹が緩いのが続けば水分も栄養も流れるばかりである。

整腸剤でも転がってないだろうか。

鼠の肉を口にする。血の味だった。咀嚼して飲み込む。咽喉が波打った。

「喉乾いた……暑かったら死んでたわ」

ブロンドの髪の毛をぐしゃぐしゃに掻きつつ蒼穹を仰ぎ、睨み付ける。

“素晴らしい”御日柄。雨は望めそうにない。飲み水は得られないし、水浴びもできない。

地図によると墓場の付近まで行くと古井戸があると記されているが、枯れた木の例もあり信用ならないのだった。別の手段で水を手することも考えなくてはならなかった。

布と砂利を使つたる過装置でも試作してみようかしらんと考えつつ、乾いたくちびるをきゅっと引締め、歩く。

突如、頭に落雷があつた。

地面を蹴つ飛ばし大喜び。涙まで浮かべて手を叩いてくるくる回る。気が違つたわけではない。

「そうだろ！ バツカじゃねーの俺！ 魔術使つて水を出せばいいじゃんか！」

その発想はビッグバン。

魔術はイメージである。己の魂と肉体が結合しあう力を流用した力で世界に働きかける神秘である。イメージできるのなら大抵のことではできてしまう。

ならば、水をイメージして作ればいいのではないだろうかと考え付いたのである。

さつそく地面に座り込むと水筒を腿の内側に挟み、両手を広げて集中する。生命の源。透明の流体。重なれば青くなる。山に注げば川となる。乾けば空気に溶けて雨を作る。

雨よ、水筒に出ろ。

「？水よ満ちろ？」

瞬間、水筒が微かな振動を孕んだ。水筒の底が冷たさを生むや、振動は激しくなり、蓋がはじけ飛んだ。辛うじて蓋を掴み取った。

「うおっ!？」

水筒から溢れる水が顔面を直撃して鼻と口から侵入した。

驚きより喜びが勝り、イメージは噴水のような勢いへと昇華されていく。水筒が反動で腿を圧迫したが構わずに水を口に流し込む。ごくんごくんと喉を鳴らして飲む。

顔の埃と汚れが水流によってはじけ飛ぶ。

飲んで飲んで飲みまくる。

「……………んぐんぐんぐぐぐ? んぐんくっ……………ぶはっ」

思う存分飲んで、魔術の行使を切る。蓋を閉めるべく手を伸ばす。水は蓋を押しよけのけんばかりの圧力を作ったが、強引に押し込むと、あっさり無圧状態に移行した。

そこで気が付いた。

水なのに味気ないと。

「おいこれ……あーくそ」

セージの全身をびしょぬれにした水が数秒とかわからず蒸発していく。外だけではない。中でもある。啞内を、喉を湿らせたはずの水が、見えざる手に奪いとられていく。

喉がくっつく。啞内がかさかさになった。鼻の中が乾く。顔も体も服の一切が乾燥に向かった。

ものの一分と経たずに水は消え去った。

茫然とするセージは一抹の期待を込めて水筒の中身を覗き込んだ。量に変化なし。溢れんばかりの水は白昼夢のように消えて無くなっていた。

魔術とはイメージである。イメージは本人に依存する。イメージが続かなくなれば魔術は世界の修正力に飲まれて消える。理屈は単純だ。

恒常的な効果を発揮させるには物質に頼るか、世界を塗り潰すような高位の術を使う他ないと知らなくても、水が無くなったという事実を目の当たりにすれば気が付くだろう。

興奮しすぎて水を出し過ぎた反動か、軽い頭痛がした。魔術を行使しすぎて体と魂が感動のフィナーレを迎えるのは避けなければならぬ。

セージは立ち上がる気力が失せ、その場で座り込んで休憩に入ってしまった。

少なくとも体を洗ったり、熱さをとったりなどはできるという収穫があったのだから決して無駄ではなかったと、ポジティブに変換する。

そこで第二発目のビッグバンが脳天に轟いた。
顔がぱっと明るく輝く。

「そうだ！ なら間接的にやってやれば！」

水筒の布を剥がして金属を露出すると、寝転がって上に掲げ持つ。子供を「高い高い」しているような恰好である。

イメージするのは冷たさ。目を瞑り青い空を遮断する。北極。南極。冷蔵庫。冬。雪。思い出す。組み立てる。映像と映像を組み立てて強く念じる。

思考の端に混じる灼熱の火炎がイメージを乱す。燃える家。焚火。太陽。イメージが消えてしまう。精神力を振り絞り、命の危機を回避したいと強く己に暗示した。

息を吸う。吐く。吸う。吐く。目尻に力を込め、開く。

「？冷やせ？」

呟いた言霊はしかし目に見える形の変化をもたらしていないかのようである。

ところがセージはニヤリと口元をゆがめると、水筒の金属部分を口に近づけ、寝転んだまま舌を伸ばし、ゆらゆらとしなやかに揺らせば、水筒を舐めた。

確かに水があった。水筒には水が付着していた。

夏場、コップに冷たい水を注ぐと『汗』をかく。これは空気が冷やされて飽和量から弾かれた水分が結露という形で水になる現象である。セージはこれを利用したのである。

魔術で水を直接作ることができないのなら、間接的に水を空気中から取り出す。

水筒の底をセージは舐めた。舐めて舐めて舐めた。舌で寄り集めた水滴を唇で吸い取った。重力に従い伝うのを顔で受けた。大真面目に水筒を舐めまくる姿はシニールを体現していた。

だが、徐々に腕が疲労を訴え始め、舌も重くなってくる。

「へふっ……うっ、うん……えっ……っんっん……げほっ、畜生、疲れるぞこいつ」

魔術行使を切り上げて顔の水滴を指で救って舐める。ため息を吐くと、水筒をお腹の上に乗せた。

問題が判明したのだ。

量が少なすぎるのと自分で舐めなくてはいけない点である。しかも一度舐めると唾液が付着し、その部位に水滴がつかなくなるので拭き取らなくてはいけないのである。

舐める労力と水を得る効果が釣り合わない。

有効な方法を考える必要があった。

金属の板と垂れた水滴を回収する容器を手に入れることができたのならば最高なのだが。

「買う金が無いんだよな」

生憎、売れるような品は無いのだと苦笑する。ミスリル剣は売ることができないし、他の装備も借りただけなので売ることにはできない。

働こうにもエルフを雇ってくれる職場があるわけもなく、子供の体力では肉体労働も長く続かない。下手すれば奴隷という新しい職業を笑顔で斡旋してくれるであろう。

商品価値を有するのは一つだけしか持っていない。

「体でも売るか!」

それは体である。美しき容姿を持つと一応の自覚があるからこそ出た台詞であった。

誰も聞いてくれない冗談を飛ばし、立ち上がる。お尻の埃を払った。水筒をしまう。胸当てを引き締める。ベルトを引き締める。屈

伸。腰をまわす。前髪をかきあげた。

出発だ。

地図を広げ、歩き出す。

古代の円形岩墓場まではもう少しだ。

しばらくして、墓場に辿り着くことができた。

<21>お水をください(後書き)

ドラマ風の前書きにしてみただけ。

<22> 岩の墓場（前書き）

セージ、岩の墓場に訪れるの巻。

<22>岩の墓場

岩の墓場が前方に見えてきた。

地面に草が生い茂っており、木々があたりを囲うように生えている。まばらな絨毯だと感想を抱く。乾いた土地の真ん中に草木が生えているということは水源があるに違いない。砂漠にオアシスがあるようにここにも水があるに違いと考える。

墓場と言っても岩が起立して並んでいるだけだが、規模が予想の斜め上だった。見渡すばかりに岩、岩、岩、石碑、岩、岩。岩がまるで行進する兵隊が如き威圧感を放っていた。

円形に並んではいるがやや不揃い。巨大な円の枠を配置して、はみ出さないように、しかし適当に並べたらこのようになるだろうか。岩の列に足を踏み入れて、観察する。

岩には何らかの文字が刻まれていた。記憶の中で最も近似するのが楔形文字だった。ノミをハンマーでたたいて刻んだ文字。死者への弔いの言葉が記されているのだろう。

“少女”はフードの淵を指で弄りつつ、あたりを見回した。

「井戸ってどこ？」

墓場観光はどうでもいい。水の確保が先決である。

魔術で作るのは効率が悪すぎる。

念には念を入れて岩の影に隠れて誰も居ないことを確かめつつ歩いていく。隠れては顔の半分だけで覗く。さっと移動して岩に取り付き、また顔の半分だけ出して確かめる。

人っ子一人居なかった。

気恥ずかしくなった。わざとらしく鼻を鳴らせば、とんとんと岩陰から進み出た。

「……誰もいないか」

岩の群れを抜けて、円形の中央に向かう。何か目ぼしいものがあるとすればそこしかないと考えたのだ。彼もしくは彼女の予想は的中し、何らかの構造物があった。

岩を塔の形に仕立てたとしても表現すべきそれは、先端に向かうにつれて中央に収束する丸みを帯びた岩だった。大木程の太さがあった。セージの腕では周囲を包むのに複数人は必要となるであろう。裏にまわってみると構造物の半ばからぱっくりと空間が口を広げていた。木の洞のように。

構造物の洞から中に入ると中央に穴があった。近づいてみるとそれは井戸であった。天井から吊るされる形で水汲み装置が設けられていた。鎖を手取る。埃と錆でかさつく。

天井に目を凝らすと、滑車を使うのではなく、穴に通しただけの単純な作りであると分かった。まるで長時間放置してもいいように滑車を使うまいとしたようだ。

鎖を手になじませ、容器に水を汲むように動かす。勢いつけて引っ張る。天井の穴で擦れてガララと音が鳴る。振動で手がしびれる。

「よいしょっ、よっと……ふんっ……うっ、よし、せえの！」

鎖は重く、一息にはすべてを引き上げることが叶わない。何度かに分けて引っ張る。

何やら綱引きを思い出し、懐かしくなった。悲しいことに相手は井戸であるが。

井戸の底からバケツか桶が昇ってくる気配を感じ、最後の引きとばかりに鎖を腕に引っかけ、構造物の外に駆けた。

「うっしー！」

手ごたえあり。あとはゆっくり手繰り寄せながら近づくだけだ。振り返ったセージはとんでもない物を見てしまった。息を呑み、目を見開き、両手をわたわた振りながら全力で駆け寄らん。

「わー！？ 馬鹿野郎！ 待て待て待てー！！」

セージが目撃したのは、薄い石で作られた汲み容器が目一杯まで持ち上がっている光景。それと、容器の根本の部品が脆くなっていたらしく、振動に耐えられずへし折れ、水諸共自由落下に身を委ねた瞬間であった。

ぱつと寄って、井戸の淵にしがみ付き奈落の底を見遣る。

直後、容器が落着した音がした。

水音だった。

水があることは喜ばしい。久しぶりに水を補給できるし水浴びも叶うだろう。休憩することもできる。一時的な拠点として構えることも案の一つに加えることができる。

だが。

「どうすんだよこれ……」

セージは井戸の底を覗き込むと途方に暮れたため息を漏らした。

魔術を行使して光を灯せば、底を照らして見る。目測で何メートルかは正確に分からなかったが、落ちたら死ねる高度があった。

光を反射する水面が恨めしかった。

そう、問題はいかにして水を汲み上げるかという一点である。

鎖の先端に布を巻き付け下ろし、水を染みこませて汲むことを思いついた。容器を探してくるより苦労は少ないように思える。

……鎖を引き上げる手間を除いて。

手持ちの布の中で最大のものでも手拭きタオルしかない。手間は計り知れない。水筒一杯になるまでと、己の飲む分を確保するには

何往復すればいいのかも見当がつかなかった。

ここまで思考の糸を張り巡らせていたセージは、普通に水筒を括り付ける案を採用した。

だが、危惧していたことが的中した。水筒の浮力で水が中に入らないのである。考えた末、手ごろな石を括り付けてようやく水を汲むことができた。

やれ、成功だ。

ほくほく顔で水筒から水を飲み、また汲んでは飲む。腕が疲れを訴えたが無視した。目一杯飲んだので顔も洗って鼻と口も洗う。水筒に水をたっぷり注いで蓋を閉める。

そこで、鼓膜を打つものがあつた。

「もし……」

静かな声。霧と靄と雲を集めて楽器に仕立てたようだ。小人が口笛を吹いているのを枕元で聞かされる感覚に陥つた。

心臓が早鐘を打つ。

「もし……旅のかた……」

「………ハ、ハイなんでしょうか」

セージは水筒を握りしめて硬直した。フードを被っていたのが幸いであつたが、振り返りたくなかつた。フードを覗き込まれるとエルフであることがバレるかもしれない。

今しがた水で潤つたはずの喉が急速に砂漠に似通っていく。腰のミスリル剣を指で突く。魔術の発動を頭の中で準備する。

妙なことに、背後の人物からは息遣いを感じられなかつた。気配すら。暗殺者や腕の立つ傭兵などは相手に存在を悟らせないというが、まさか。

「旅の方は……いかなる用事でここに参られたのでしょうか……」
「水を汲みに」

セージは水筒を肩越しに見せつけ、揺らした。落ちる水滴。

「そうですか、この水は死者の為の水なのですが……」

「ごめんなさい！ 長旅で水が入用だったもので」

「フフ……いえ、私の所有地ではありませんし……あなたのような子供の喉を潤せるのなら井戸も本望でしょう」

「ところであなたはなぜここに？」

振り返らずに尋ねてみる。岩の構造物から墓場の外までの最短距離を計算する。最悪、突如背後から斬りかかってくることも考えておく。

背後の人物 声という要素だけで判断するのなら女性 は、
ゆっくり噛み締めるように答えた。

そよ風が背後の方から吹いた。爽やかな花の香りが鼻腔を刺激した。香水だろうか。

「……ひとを待っているのです」

「それは誰ですか」

「愛する人です」

「えー、どのくらい待っているんですか？」

「さあ……わたくしには解りませんわ。もうそこにあの人がいるのかもしれない」

「……」

「……」

会話が継続せず押し黙った。

一分経った。二分経った。三分経った。背後に居るのか居ないの

かもわからない。思い切って振り返ろうと、拳を握る。

さつと振り返ってみれば、誰も居なかった。アツ、と声を漏らす。岩の井戸がある構造物の周囲をぐるっと一周してみたが、やはり居ない。狐につままれた気分。首を傾げる。

「疲れすぎて夢でも見てたとか……うーん……。わからない。いや、なんでも」

考えれば考えるほど泥沼に嵌りそうなので、セージは考えるのを止めた。

身支度を整えて地図を開くと道程に文字を記入していく。里と里の間を歩き帰りするには情報が必要だからだ。

地図を仕舞い、お決まりのストレッチで体を解すと、次の目標に向けて歩き出す。岩と岩の間をすり抜けて、ゆったりと足を進める。

その途中で、はたと足を止めた。違和感ともいえるし、異変とも、自然現象とも言えるものを見つけたのだ。

一つの岩のすぐ横の地面に赤い色がある。生き生きとした赤く小さく可憐な花が横たわっていた。手折られたのち、この場所に誰かが置いたのか。しゃがむ。手にとって鼻に押し付ける。爽やかな香りがした。

お供え物だろうか。花を丁寧な手つきで元の位置にそつと戻す。

セージは、さっきの人物が見ているかもしれないからさつさと行こうと伸びをして歩きを再開した。

【簡易設定】（前書き）

順次追加。簡単なメモ。

【簡易設定】

「少女”（セージ）」

リアル系の世界から神様に転生というか憑依でファンタジー世界に飛ばされた。

男性だったのが少女になってしまった。

本名のセージを伸ばしてセージと名乗る。

「長老」

セージが最初にたどり着いたエルフの里の長。ナイスなダンディー。里を守るために戦ってきた戦士である。

戦闘向きな不可視の魔術を行使する。

「アネット」

綺麗なブロンド髪をポニーテールにしたエルフ。

幻術系や光系（レーザーとかビーム的な）を得意とする。

「ヴィヴィ」

ちよつとませたエルフの女の子。ややツン。内面は優しく世話好きでいたずらも好きな女の子。

英文を日本訳したようなしゃべり方で書いてます。

「アルフ」

黒髪痩躯な鋭い目つきのエルフの先生。

ちよつと皮肉な言い方を好むらしいが基本的にいいエルフ。

「ルエ」

肩まで銀髪を伸ばした美青年。美少年。

溪谷の里在住。

「ルーク」

腰まで銀髪を伸ばした中性的な美しい青年。
ルエの兄であり、溪谷の里の“長老”。若いのに長老なのはわけがあるらしい。

「クララ」

淀みの一粒子も見られない絹のような肌。柔和な瞳は蒼海色。金糸は艶やかに鏡面が如き滑らかさをもって肩より垂れ、毛先が内側に向いている。鎖骨の下にある双丘、腰、足、いずれもため息ものの造形美を備えていた。疾しい気持ちは湧かない。彫刻や絵画を鑑賞した時の心境だった。
ユニコーンが化身に変化したとするならば、彼女がそうだった。

要するにすげえべっぴんさん。

やけに詳しいのはお察しください。

「ロウ」

髪を短く切り揃えた超絶不健康な男。クララの兄。本人曰く穀潰し。

「巨老人」

常人を遙かにしのぐ身長。筋骨隆々。髭老人。
最強の戦士と名高い。

「湖の怪物」

イルカっぽい体とタコっぽい頭らしき部位を持つ巨大な生物。
人間の言葉を理解するらしい。
無数の触手を持ち、粘液に催淫作用がある。

「“神”」

糞野郎。

『第一の里』

正式名称ではない。セージが最初に訪れた里である。森の奥に存在し、樹木に紛れるように家々が立っている。高い石造りの塔がある。

『溪谷の里』

溪谷の隠し岩の奥に存在する地底の里。ドワーフの掘った跡をそのまま利用しており、地底湖がある。広い。

『巨老人の里』

巨老人と呼ばれた戦士の治める里。後ろを山岳、前を湖に囲まれた場所にある。里自体が岩づくりの要塞でもある。

大陸中に響く有力な里である。

独自の鉱山も有する。

湖に名状し難き何かが棲んでいる。巨老人のペット。

『王国』

領土拡大を狙う強国。小国を次々ねじ伏せては植民地化し、民衆の不満を逸らすためにエルフを害のあるものとしてでっちあげた。具体的な国名は出てきていない。

他の世界に渡る魔術を接収した(らしい)唯一の国。

【魔術】

自ら、もしくは誰かの意思や思いなどによって通常ありえない現象を顕現させたり、現実を改変する術を言う。魔術を発動させるには魂と肉体の結合力の流用である魔力が必要であり、使いすぎれば結

合の解除を招いて死に至る。上位のものを魔法と言うが、全て魔術扱いで問題ない。よくわかってはいないが誰でも使えるわけではない。エルフ族に限っては例外的に全員が先天的に才能を有する。

魔術は主にイメージなどを基礎にしており、その補助を務めるのが呪文である。武道のように様々なやり方が存在するが、やりやすいのであれば呪文は絶対に必要とは言い切れない。イメージさえできるなら異国の言葉でもよい。

恒常的な効果を発揮させるにはイメージし続ける必要がある。それは不可能なので、物体に補助をさせることで実現している。より力を持つ物体が好ましく、霊樹から切り出して作った杖や宝石や短剣などがある。これらは媒体という。

< 23 > 蜘蛛再び

里を発ってから三週間という時間が流れた。

目標地点から目標地点を線で結びつつ、じりじりと里に近づいていく。

人間の町や行路を通過しないよう細心の注意を払って、必要とあらば夜を歩いた。モンスターの襲撃を受ける可能性があれば木の上に宿泊した。盗賊に殺されたかけたこともあった。

動物も狩った。鹿のような生き物を殺して肉を剥いだ。内臓を取り出した辺りで吐き気がしたが、肉だけを剥いで並べたところで平常心を取り戻した。肉はその場で焼いて食べ、余った分は熱で水分を飛ばした後、干し肉にした。

狩りの成功率は五回に一回と言ったところである。魔術を発動せんとするとなぜか逃げられてしまうのだ。野生の動植物は魔術を感じする能力があるのかもしれない。

深刻な食糧不足に陥った時は進むのを止めて一日中狩りをすることもあった。

峡谷の里が近くなってきた今日この頃。荒地を越えた先にあったのは森林で、緩やかに山になりつつあることがわかった。

山を越えた先に峡谷がある。

ミスリル剣で葉っぱや蔓を薙ぐ。長老の説明通りにミスリル剣はよく切れた。動物を解体するのにも使えだし、地面を掘るのにも使うことができた。刃毀れ一つせず、研ぎ石の出番が一度も無かったことから強固な性質がうかがえる。

セージは、ミスリル剣を袈裟懸けに振るうと、顔にかかった蜘蛛の巣をむんずと退けた。家を壊された蜘蛛が慌てふためいて逃げ出すのを、素手で捕獲する。毒々しい原色。フムと鼻を鳴らすと、背後に放り投げる。無害なら食べるつもりだったらしい。

蛙でも居ないのかと地面を見遣った。いない。残念無念。蛙は焼

いて食べると鶏肉のような味がして美味であるというのに。

地図を広げてみる。山から青い線が引かれている。渓谷は川の傍にある。他に、魔術で隠蔽されているので近くまで寄る必要があるとも書かれている。

まず川を見つける必要があった。

前進を止めて、地図を背中中のバックパックに収める。手近な木を見上げる。太く、長く、枝の広がりがない木だ。手をつくると、猿のようにするすると登っていく。

枝の分岐に手を引っかけ、上半身を持ち上げる。次の枝に足と手をかけて交互に登っていけば、他の木より一つ上に視線がある高度に達する。

右手と右足左足を枝に引っかけてまま左手でフードの位置を直すと、額に当てて日光を遮る素振り。

どこまでも広がり続ける樹木の海。緑と茶色の色合いが織り成す雲海。空から舞い降りた鳥が緑の下に消えていく。

視線を緑の雲の遥か彼方へと向けてみれば、雲が奥に向かって坂になっている。

とりあえず山の方に向かい、峡谷を見つけ出そう。

セージは木から降りていくと、最後は飛び降り、両足で着地するや足を曲げて衝撃を吸収した。

立ち上がる。ふと、物音を聞いた。幹に身を隠す。エナメル質が擦れ合うとでも表現すればいいのか、生理的嫌悪感を催す音色を聞いたのだ。

それはすぐ近くにいた。巨大な虫。蜘蛛である。全高は子供並み虫というよりクリーチャーという単語を当てはめた方がしっくりくる巨大な敵。

セージくらいの子供であれば恐怖を感じて慄くだろうが、“彼は違った。

「新鮮な肉がいるぞ。あいつをやれば三日は食いつなげる。甲羅

とかで道具もつくれそうだ」

目をぎらつかせ幼い顔に笑みまで浮かべる。腹が減っては戦はできぬというのは嘘である。空腹感を癒すために戦う方が力が出るではないか。

旅をしてきて慣れたというのもあるだろう。それ以上に、敵が一匹だけで、なおかつこちらに気が付いていないという優位な状況にあるのも気分を高揚させる。

高鳴る心臓をなだめつつ攻撃にもっとも適した位置を取ろうと思案する。

可能ならば背後上方。真正面から挑むなど愚の骨頂。一撃で脳がある頭部に致命傷を負わせて短期決戦を挑むべし。

音を立てぬように忍び足になると、蜘蛛の背後を突く為に大きく迂回する。

蜘蛛は気がついていないのかしきりに地面を足で穿り返してはミズを口に運んでいた。

「よし、いい子だ」

事が上手く進み舌舐めずりするハッカーのような台詞を呟きつつ抜剣。草むらに入って音を立てぬように身を運び、木の陰に陣取る。木に登ると逃げられる可能性もあるので、単純に馬乗りになることを目標とした。

魔術を使うとやはり何らかの手段で気が付かれてしまうので、ミスリル剣の鋭さに頼る。

セージは一匹の蜘蛛に気を取られ、逆に己をつけ狙う蜘蛛に気が付かなかった。

少女の背後に蜘蛛がこっそり忍び寄っていたのだ。

「1、2……………3!」

掛け声を合図に影から飛び出すとミスリル剣を逆手に持ち、蜘蛛の上にのしかかる。有無を言わせず剣を頭に突き立てる。ミスリルの切っ先が外殻を豆腐のように貫く。引き抜けば、また突き刺す。何度も何度も執拗に刺しまくる。体液が顔にかかる。

阿修羅も全力で首を振る形相の少女が、剣を刺して刺す。

「死ね！ 死ね！ 死ね！！ 早く死ね！！ いいから死ね！！」

凶暴な言葉を吐く。刺す。刺す。刺す。刺す。

蜘蛛は断末魔の悲鳴を上げると、動かなくなった。

次の瞬間、草むらの一塊がなぎ倒され、猛然と蜘蛛が突っ込んできた。しかも一匹だけではない。三匹も。足で地面を耕しながら突き進む様は怪物そのもの。

「ッ！？ ?ファイヤーボール?!」

反射的に手をかざし火炎球を発射。三匹は散開して避ける。イメージの練りが不足していたため、球体が崩れ虚空で砕け散った。

一匹目が体当たりを仕掛けてきた。跳躍。巨体が宙に浮かぶ。なんて理不尽な脚力。蜘蛛の死骸から転げることで危なげに回避し、起き上がった。

二匹目と三匹目が目をぎよるつかせながら、前足を振るう。先端に爪。一撃をミスリル剣で受けるが、横からの二撃が右腕を傷つけた。苦痛。

「あ、ッぐっ……」

ミスリル剣を取り落としそうになるも、奥歯を噛み締めて耐える。剣を失えば、最後の近接武器はナイフだけ。射程の短さと強度の無

さで敗北を喫するのは目に見えていた。

蜘蛛の死骸の上に飛び乗り、身構えた。

三匹の蜘蛛は、一気に飛びかかるのを止め、蜘蛛の死骸を中心に包囲網を作った。

セージはゆっくりと周回し始めた蜘蛛三匹に対し、ミスリル剣を向けては次の相手に向けて威嚇する。

右腕から零れる血液が服を汚し、蜘蛛の死骸の上に点を描く。指を動かす。健は健在。筋肉も右腕の運用に支障なし。皮膚が一直線に切れ、肉が傷ついただけだ。

震えだす右腕を左手で抑え込む。

「こいつら手馴れてないか？ ……つくそ、いてえ」

蜘蛛の動作は、まるで人間と戦ったことがあるかのようだった。

ひよつとすると、蜘蛛を狩る人間が居るように人間を狩る蜘蛛も居るのかもしれない。

蜘蛛三匹に対してミスリル剣の近接格闘戦は不利であることは百も承知している。一匹を殺しても残りの二匹が体を刺すだろうから魔術しか手が無い。虫など歯牙にもかけない火力を叩きつけるのだ。咄嗟に火炎弾を発射した、してしまつたことに嫌な汗が増える。

己が進む土地は火に弱い。森とは燃えるものである。エルフの里を囲む魔の森なら兎に角、ただの森で火を起こせば大惨事が待ち受けている。焼きエルフが転がることは避けたい。

イメージの中で二番目に強いのは氷である。ヴィヴィの見事な魔術行使が頭に焼きついたのだろう。

三匹を氷漬けにしてしまえば脅威は取り除かれようが、今のセージが行使できる技ではない。

蜘蛛達は複雑な構造をした口を蠢かせ、セージの周囲を回り続けている。狼のようだと無意味な感想を抱く。

隙が見つからない。一匹でも足を止めたのなら魔術を叩き込める

のだが、蜘蛛達は足を止めようとしなない。それどころか、背後に回った蜘蛛が足を擦り合わせて威嚇してくるのだ。

一匹を魔術で潰せても、二匹目三匹目が首筋を掻き切るであろう。逃げ場を探す。無い。水平方向のすべては蜘蛛の順回路である。横切ることを許すほど蜘蛛は優しくない。

下方。蜘蛛の死骸で塞がっている。地面をのんびりと掘って逃げようとしたなら、その穴が墓穴となるであろう。

上方。飛べば逃走は容易。だがここは重力の底。無重力ならいざ知らず、自分ひとり分の体重を空に浮かばせるだけの力を、セージは持っていなかった。

強行突破か、命を懸けて立ち向かうか、逃げるか。

選択肢はそう多くない。

セージは右腕の血を指に取ると、両頬に付け、口に突っ込んだ。

鉄の味と塩気がした。

<24>野生は甘くない(前書き)

死闘。

<24> 野生は甘くない

セージが選択したのは、敵に命を懸けて立ち向かうことであった。強行突破も逃亡も難しいのならば、選択肢を選ぶ以前の問題で、決められたようなものである。

使えるものを確認する。装備、ミスリル剣、ナイフ。魔術。攻撃の手段を模索する。ナイフは最終手段とすれば剣か魔術。スラングレネード（魔術名である）は己が術の跳ね返りを受けるので却下。火炎も却下。水系。選択の余地あり。

蜘蛛達は今にも跳びかかってきそうだが、一向にこない。魔術を行使できることは予想外だったのかもしれない。好都合であった。

不慣れな氷の魔術でいかにすれば蜘蛛を攻略できるかを考える。

一度も成功したことが無い魔術に頼ることは正しいのか？

不確定要素という、猫が生存しているか死んでいるかも曖昧な事象に頼ることは正しいのか？

否。

セージは否定する。慣れた手段こそ最上である。この場を切り抜ける最高の手は、三匹に同時攻撃を行うこと。範囲を限定した、それだけで威力の高い一撃を見舞うこと。一体だけに集中して二匹にやられてしまうのならば、そうするほかにない。

使えるものがもう一つあるじゃないかと、それを見遣る。炸裂したらさぞ愉快そうな、それ。

行使する魔術は火炎。イメージするは“爆発”。対象は 蜘蛛の死骸。

ミスリル剣の切っ先を下にしたまま、逆手に持ち替えた。ミスリル剣が魔力に揺らめき波紋を伴う。

「？爆殺剣?!」

セージは気合いの掛け声を兼ねた呪文を吐きだすや、剣を両手で保持、天の神にささげるが如く、振り上げた。

そして、背筋の反りを含めた全力を持って蜘蛛の死骸に突き刺した。

魂と体をつなぐ力を掬い取り、意識の力を持って純粹無垢な力に仕立て上げる。剣を中心に死骸の内部で下と横に指向性を持った大爆発が起こるように念じた。小規模な爆発が世界に生まれる。

内圧が高まり、肉が弾け、結果的に死骸は爆弾と化した。

「ぐつ　！」

甲羅の破片が狙い通りに爆散する。前髪の一部が持っていていかれる。足場が肉の塊となり、投げ出されるセージ。内臓を靴で踏みつけた。ばらばらと森に降り注ぐ肉の雨。

破片は四方八方に飛び、例外なく蜘蛛三匹にも襲い掛かった。一匹は目を潰され、二匹は己の甲羅に加わった衝撃と光で恐慌状態に陥った。機会到来。剣を持ち替える。

爆発で鼓膜がおかしくなったのか、キーンという耳鳴りと、酷い吐き気に苛まれるも、戦闘意欲を削ぐ理由にならず。

無音の世界で、目を潰されて暴れる一匹に切っ先を向ければ、足の一本を切り落とし、目元に斬撃を追加、正確に脳天を貫き、殺す。

「おおおおおお！！！」

二匹目。一步、二歩、跳躍。馬乗り。脳天を穿ち、力任せに角度を変えて決り、手首で回転して穴を広げた。脚力と腰の力を併用して剣を引き抜き地面に転がる。体液が顔にかかった。

三匹目。恐慌状態から回復したらしく、爪を振り上げてくる。ミスリル剣を横にして受ける。重い一撃でよろめき、たたらを踏む。蜘蛛の体当たり。腹に食らった。

セージは無様に地面に転がった。

人より大きな蜘蛛の体当たりは軽自動車に衝突したのではと錯覚するほど重く、前後不覚になりかけた。苦痛が腹を覆い潰して意識を閉ざそうと騒ぐ。口から垂れる涎も拭う暇無く、血の流れる右腕で剣を構えた。

蜘蛛が尻を持ち上げ、糸を射出。粘着質がミスリル剣に絡まった。腕力で引きちぎろうとしたが、粘りが強すぎて意味を成さぬ。角度を変え、手前に引いて糸をピンと張れば、強引に断ち切った。ミスリル万歳。

足と上半身の振りを利用して立ち上がらん。

「あ……、つう……」

腕と腹の痛みが燃え、顔を歪める。鳩尾が痛む。内臓が鈍痛に包まれて冷や汗が増えた。

蜘蛛が糸を顔面に射出。大きくステップを踏み、右に回避と同時に地を駆ける。剣を右手に握り、低い姿勢から蜘蛛の顔面目掛けて跳んだ。足の根本に刃が埋まった。

キキキキキキッ！？

耳もつんざく絶叫を蜘蛛が発し、セージの肩に爪を突き立てた。思考が乱れる。魔術を構築できない。

悲鳴を上げることすら困難になった。痛くて痛くて涙が出るだけなのだから。

右肩の刺し傷と切り傷から血が溢れ、服を染め、地面に鉄を供給する。奥歯よ割れよと食いしぼり、剣を抜けば、距離を取る。刹那、蜘蛛が飛び掛かる。横っ飛びに回避。

右手から左手に持ち替えれば、背中を丸く、前傾姿勢で次の攻撃に備える。

細かい戦術を考える余裕はない。殺されるかもしれないという一種の興奮がアドレナリンを過剰分泌させて、頭を犯していたから。

「…………ふ…………ああ、あ！…………この…………あ、くあ…………殺されろ、屑う！」

セージは唾を吐き、声を張り上げた。

酔っ払いが瓶を振り回すような緩慢な横薙ぎを、蜘蛛の目に繰り出す。跳び下がる相手。糸を飛ばしてくる。髪にかかる。頭から引き倒されるより前に、行動を起こす。

「こんなモンくれてやる！」

髪の毛を根元から掴むと、ミスリル剣でねじ切る。頭の右側の髪がごっそり地に落ちた。

髪の毛を糸に絡ませて粘着力を制限すれば、手に巻き、蜘蛛の動きを制限するために腰を落とす。蜘蛛が糸を切り離すや、すかさず糸を鞭のように使って足に絡ませた。

蜘蛛が突進。

危なげな横っ飛びで回避。糸をさらに足に絡ませたが機動性を奪うには足りないように見えた。蜘蛛の外殻は糸がくつつかない材質なのだった。

舌打ち。糸を捨てた。

蜘蛛が馬鹿正直に正面から突っ込んでくるのがスローモーションに見えた。足を曲げ、腰を落とし、跳び箱の要領で真上を飛び越えた。地面で前転。

すかさず踵を返せば、蜘蛛の後方から上に乗る。

「暴れんなッ！！」

暴れ牛かくや全身を使って振り落とさんとする蜘蛛の頭をミスリル剣で貫く。悲鳴が上がる。剣を斜めにしてやり、外殻を剥がす。

中身を素手でかき混ぜてやろうかと考えた。

だが、ロデオのように揺らされてしまったては力が入らない。

「くっ!？」

とどめとばかりに剣を押し込もうとしたが、振り落とされてしまった。

セージは転んだ勢いを利用して一回転すれば、豹のように地に這いつくばる形で身構えた。

蜘蛛が大暴れしている。頭に剣が墓標のように突き刺さっており、体液がグロテスクさを増大させている。複数ある目にも粘液が掛かっていて、赤いのも混じっていた。

剣を取り返そうにも近づけそうにない。

地に手を付く。震えていた。怪我をした右腕も左腕も。

「なら、押しこめばいいんだろ！」

イメージするのは巨大なハンマー。持つところは棒で、叩くところは岩石のような、少女の体に似合わない不相応な代物。重量で相手をプレスする打撃武器。

半分足を引く。魔力を捻出しなくては。傷ついた体と、疲弊した精神が、ますます痛みつけられるのを感じ、目の前に白い光が点滅し始めた。まるで貧血のようだった。平衡感覚をつかさどる器官が酒を呑んでいるようでもある。

セージの手に冷気が収束していく。初めは緩く、途中は急速に、最後はゆっくりと集まれば、イメージによって形という概念に押し込められるのだ。

両手を天に掲げた。

「?アイスハンマー?!」

冷気が具現化した。柄は凸凹激しく直線からはかけ離れている上に、頭部は北限の土地に転がっている氷塊を拾ってきたかのような不恰好。おまけに術の暴走で腕が凍結し始めている。

血の欠片がパラパラ落ちた。

セージは、真上のハンマーを重力という手助けの元、力いっぱい蜘蛛に振り下ろした。強度は無かったが、剣を叩くことに成功した。ハンマーが碎け味気ないシャーベットになった。

剣が柄まで押し込まれ、脳を完全に破壊した。蜘蛛の足が脱力して折れ曲がり、腹を地に付けてこと切れた。敵は全て死んだ。

「ハーツ……ハーツ……、つぐ……いた、い」

セージがその場に倒れ込んだ。

世界がぐるぐる回転している。地面に付けた足が踊りそうになる。呼吸が不協和音を刻んでいる。バックパックを下ろすと震える手を突っ込み包帯類を取り出す。

傷口を診る。腕の切り傷は大したこと無いようであった。

肩の傷は深く、手持ちの装備では治療しきれないと結論付けたが、治療魔術を使えない現在はどうしようもなかった。後でやるしかない。

凍傷は無かった。せいぜいが皮膚が冷たい程度だった。

服が邪魔だった。胸当てなどを乱暴に取り去り上半身裸になると、傷口に水筒の水をかけ、薬草を手でこね、荒いペースト状にしてからしっかりと擦りこむ。酷く痛んだ。無意識に足の指が内側に曲がるほどには。

頭を振って耐える。涙が汚れた頬を濡らした。

「消毒液、もこれくらい、……あー、いたいいたい！ 痛い！ 糞、蜘蛛のクセに」

包帯を噛み、傷口を縛り上げていく。

すっかり結んでしまえば、悪魔的な欲望が訪れてくる。眠気がやってきた。疲労が少女を睡眠へと誘っているのだ。

蜘蛛の死体が転がっているところで寝てしまったら何が寄ってくるかもわからない。

蜘蛛の頭から体液と肉に塗れた剣を引き抜くと腰に戻し、上半身の服を纏って、その場で最も高い木に登る。そして、蔓で己を雁字搦めに縛り付けた。絶対安全ではないが、ほかに場所がない。

もはや限界だった。

セージの意識は暗闇に落ちていった。

逃げるといふ選択肢を無理にでもとれば良かったなというのが最後の思考だった。

<25>病(前書き)

蜘蛛を命懸けで返り討ちにしたセージだったが、傷を負ってしまった。しかも怪我が原因と思われる病を発症してしまったのだった。

< 25 > 病

ラジオのノイズを優しく加工したような断続的な音が耳を叩いている。

風音にしては等間隔で、川の音にしてはリズムミカルで、砂がさらさらと零れる音にしては冷たくて。

瞼に落ちた滴が頬に伝い、顎の線を濡らして落ちた。また一滴落ちる。鼻先に落ちた水が形のいい唇に流れ、唞内の唾液と混じった。ハッ、と肺が痙攣したかのような吐息が漏れる。

鎖骨に垂れた雨水が覚醒を促した。

「……………」

薄らと目が開いた。虹彩がきゅっと締まり光を調節。黒目が震えたかと思えば、ようやく止まる。瞼が徐々に持ち上がっていった。瞼が完全に開き切った刹那、雨水が睫毛で跳ねて眼球を濡らした。びっくりして瞬きをし、もう一度開く。二回目の瞬き。視界は完全に回復した。

「……………」

己を縛り上げている蔓に緩みが無いかを自由な両手で確認し、首を木の下に向ければ、雨に打たれるがままの蜘蛛の死骸が三つと残骸が一つあった。

自分がどのくらい寝てしまったのか、確かめる術はない。太陽で時間を計るうにも生憎の雨天では。雨天。天を仰げば、葉の隙間からどんよりとした空間が見えた。

なんということだろうか。幸いなことに葉が傘替わりになってくれているのでびしょ濡れではないが、焚火も消えやすくなるし、な

により濡れることで体力が損なわれるため、旅の速度は遅くせざるをえない。

蔓を手で取り除くと、木の枝に腰かける。

そつと、服の前を開けると、手を差し込む。右腕と右肩に包帯。腕の血は止まったが、肩の血が止まっていない。木の上で包帯を巻きなす。右腕を動かすたびに痛みが走った。

なんとかして血を止めなくては、命にかかわるし、森の獣が臭いにつられて襲い掛かってこないとも限らない。

治療魔術を試す必要がある。

怪我の特効薬も、傷口を縫うこともできぬのだから。

手を右肩に当てて目を瞑った。

「？治せ？」

何も起こらない。

寝起きの頭では膨らむイメージもあつたものではない。暫し木の上でボーッと時を過ごす。

それよりも、と思い直す。蜘蛛を解体して食べられる部位を選別しなくてはならない。冷蔵庫も保冷剤も無いのだから放置してれば腐っていく。

右腕を使わないように木を降りて行き、蜘蛛の解体に移る。

まず蜘蛛を木の陰に押しやり、手ごろな木の枝と石を使い、蜘蛛をてこの原理でひっくり返してから腹の部分を割いて肉を取り出す。内臓は腐りやすく使い道がないので地面に埋めた。外殻は加工材料として役に立つので、平らな部分や尖った部分を採る。

作業に要した時間は三匹分なので長くかかってしまった。

RPGなら倒した瞬間にお金とアイテムが落ちるが現実的にはそうはいかない。

セージは剣を雨で洗いながら死闘の跡を去った。

手を見つめ、肩を見遣る。

「まずい。感染症って薬草で防げるもんなのか？」

歩きながら、包帯を解いて水洗いして薬草を擦りこみ、また包帯を強く結ぶ。傷口にカサブタが張り始めたとはいえ、範囲が広すぎた。腕の傷にしる肩の傷にしる、動かすと血が出るのだ。

薬も無い現状では不安が残る。強い酒を入手できれば消毒ができるのだが。

少女の体になって以来、いわゆる細菌などと戦い続けてきた。質の悪い食べものを口にして、泥水だつて飲んで、怪我はしょっちゅうであった。抵抗力は現代人以上にあるはずなのである。

だが、抵抗力の有無に関係なく死に至らしめる病原菌など星の数ほどあるのだ。早急に傷を癒すか、里に辿り着き治療を受けるか、なくてはならない。

何より痛い。腕に開いた傷口は熱い金属棒を押し当てられたように感じられ、肩の刺し傷は神経を殴打されるが如くである。

右腕を動かさないように剣を使うのは不可能なので、慣れない左腕を使わざるを得ない。

利き腕をやられたことは今後の行動にも支障が出るであろうことは予想するに難しくない。狩りにしる作業にしる、効率は低下する。もし戦闘があつたらと考えるとセージの背筋は寒くなるのだ。

次こそは死ぬだろうと。

セージは雨降りの森の上空を見遣り、呟いた。

「長老 やっぱりあなたの言ってたことは正解でした。俺のよくなガキが生きていける場所じゃなかったです」

後悔先に立たずである。

森を抜けるのに約二週間という時間が必要だった。一か月で辿り

着ける予定は楽々一週間超過だった。

何しろコンパスも無いので一日中うろつくなんてことはザラだった。印をつけたはいいが大型の獣がつけたマーキングと見間違えて死にかけてのは秘密である。

蔓を用いて己が直進しているかを確認することもあった。

蛇に噛まれたこともあった。幸いなことに毒のない蛇だったので（もしあつたら死んでいたかもしれない）、ナイフで縦におろして干物にした。食べてみると魚のような味がした。羅生門の一説を思い出した。

怪我から細菌が侵入したのか、微熱が始まった。いつ高熱になるかと肝を冷やす。右腕の傷は自己流の魔術で塞がったものの、不自然な熱を持っているのが気がかりだった。ワクチンを打った直後のようだった。

山を越えて、いよいよ森を抜ける。川を辿って行くのだ。

道中で捕獲した蛇の、潰れた頭を持ってグルングルン振り回しながら、岩を登っていく。

右腕の代わりの左腕で岩をよじ登れば、砂利道を駆け上がる。

そして岩の山を越えると、途方もない光景が広がっていた。山、山、山。山と川が渓谷を造っている。ただし規模が予想外だった。そびえ立つ山が左右にあり、奥に広がって展開している。その中央を流れる川が渓谷を造っているのだ。自然の要塞のようだった。

記憶にある地理の知識は役に立たないのかもしれない。ここはフアンタジー世界。どんな地形があつても不思議ではないのだ。

地図を開く。隠蔽されているので近くに行かなくては分からないとのこと。

近くとはどのくらいから定かではないが、渓谷を降りて行けば人工物の一つでもあるに違いないと思った。

バックパックから水筒を取りだし、唇を濡らすと、渓谷の中に足を踏み入れた。

渓谷を探索して一日目。

危惧していたことが起こってしまった。微熱が高熱に変わったのだ。熱、頭痛、吐き気、倦怠感、ふらつき、五連星がセージを攻め立てた。口にしたものを片っ端から吐いてしまうので、その日は睡眠に費やした。

二日目になっても体調は回復せず。

渓谷だけあって水が豊富なのが幸이었다。体を綺麗に保ち、水分を多くとることを意識した。

セージは、増水を考慮して高い位置でバックパックを枕に寝ていた。襲撃を警戒して蔓の網に草を編み込んだネットを被っている為、遠目に存在を確認することは不可能である。

川で冷やした布きれを裏返し、額に乗せ直す。傍らの水筒に口を付ける。食べ物は木の実が精一杯。狩りなどできる体調ではない以上、栄養分のあるものは入手できなかった。蜘蛛の肉はとうの昔に食い尽くした。

酸っぱいだけで甘さを感じない木の実を口に放り込む。おいしくない。

唐突に襲い来る眠気が木の実を取り落とさせた。

顔は汗にまみれ、眉に皺が寄っている。目は開いては閉じるを繰り返す。吐息の間隔は早く、熱い。地に投げ出した肢体は倦怠感に支配されている有様。頭痛も酷く、吐き気がした。

目を閉じる。そして開く。

太陽の位置がずれていた。すわ何事か。熱の詰め込まれた頭を使い、理解しようとする。己は寝てしまったのだと結論を導き出すのに最低でも三回は無駄なことを考えた。

赤らんだ顔にかかった前髪を払い、目を擦る。

鉛のような倦怠感が離れてくれない。汗が体を濡らしている。不快だ。顔をしかめる。ひきつる頬。

「……………」

言葉を発する余裕などなくて、虚ろな目で周囲を見遣る。焦点が安定しない。視界がぼやける。目に力を込めて無理矢理正常な映像に戻す。森、川、岩、以上。

網の穴から小鳥が木の枝にとまっているのが見えた。手の平サイズ。焼けば美味しそうだ。

だが、捕まえられる気がしなかった。せめて体調が万全ならと唇を噛む。傍らの水筒の蓋を開け、粘つく啞内に爽やかな清水を投入する。おいしい。乾いた体が喜ぶ。

カモフラージュ用の覆いを退け、上半身を起こそうとした。

眩暈がした。立ちくらみか、熱によるものか、両方ともか。ゆっくりゆっくり、身を起こす。首をまわしてみる。小気味良い音。息を大きく吸い込む。

「救急車呼ぶか」

セージは場違いなジョークで自分を励ました。笑いの代わりに咳が出た。

そして重い体に鞭打ち、食糧と水の確保に立ち上がった。

< 26 > 溪谷の里へ

「情けないな、転ぶなんてさ」

セージは案の定こけた。

先ほどまで寝ていた場所からそう離れていない場所。川の中を覗き込める岩場に行こうとして、躓き転倒したのだ。幸い、受け身に成功したので頭部を強打といった致命的なことにならずに済んだ。肉を食べようと思いい立ち、魚を取ろうとしたらこんなことになったのだ。

気を取り直して木の棒の先にミスリル剣を括り付け、銚を作成すると、改めて水面を覗き込んだ。

セージはため息を吐くと、すっかり短くなってしまった右側の髪の毛を手で梳いた。毛が数本抜けた。

「……選り取り見取りってワケないか」

水流でぐしゃぐしゃの川には予想していたよりも魚が居なかった。いても小魚としか言いようがないちんけなものばかり。銚を使うよりも網を使った方がいいように思えた。カモフラージュ用のネットの使用を考慮したが、網目が大きすぎて役に立たないと瞬時に理解した。

蜘蛛の外殻で細い銚を作っても仕留めるのは至難の業。

釣りをしようにも虫がない。餌もない。探す気力も体力も無い。無い無い尽くしの現状では、木の実や雑草などを採取する他に生きる術がない。誰かが助けてくれるなんて思わない。誰もいないのだから。

そもそも釣り具をするに相応しい針も作ってないし、細い糸も無い。糸は髪の毛で代用すればなんとかかなりそうであるが。

セージは一度抜いた剣を鞘に納め、おぼつかない足取りで岩場を歩き出した。

「お、ラッキー」

岩場にヘビイチゴのような木の実を見つけた。食べられるかどうかの確認もせず口に入れる。プチプチとした触感が美味しかったが、渋みしかない。外れだったがとにかく箸って食べる。

今は味など気にしてられない。

次に食べられる草を拾ってくるのと水でさつと洗って、魔術で熾した火で炙って食べる。ネギのような味がした。食感は髪の毛を噛んでいるようで最悪だった。

魔術の火は、彼の精神を反映したかのように弱弱しく、蠟燭より小さかった。

鍋が欲しいなとセージは思い、それを頭にかぶっている姿を想像した。防具としても良い線いってるのではと考えてしまうあたり、疲れている。フードの中に手を突っ込んで耳を掻いてみれば、そこも熱い。

何より。

セージは右腕をまくると、腫物になりつつある患部の包帯の位置を直した。

傷口は治療魔術の甲斐もあり、ピンクのケロイド状の皮膚で覆われている。腕の傷、肩の傷、その両方を覆う包帯に血が滲むことはもう無い。

白い絹肌が醜く歪んでいるというのに本人が意に介さないのは、根っこの部分が男性だからだろうか。髪の毛を躊躇なく引きちぎったのも、男性だったからであろうか。

否、彼自身が慣れてしまったというのと、女性を必要とする場面が極端に少なかったことが大部分であろう。

魂は体に引きずられるという話がある。

しかし、女性は女性でも成長しきる前段階の幼い体。それが彼が彼であることを保つたのかもしれない。このまま成長していった場合はどうなるか、天もご存じ無いが。

セージは袖を元の位置にやると、大きくせき込み、地面に蹲った。最悪の体調だった。咳をすれば喉が弾けそうになるし、頭が痛くて涙が滲む。体の熱さは尋常ではなく、平衡感覚が狂っているのか大地が常に揺れているようだった。

おまけに眼球の奥が刺されたように痛む。六時間くらいテレビ鑑賞した時並みにピントが合わせ難い。

もはやただの風邪ではないと馬鹿でも感づく。

これは病気だ。原因はきつと怪我に違いなかった。傷口から病原菌が侵入して体の中で戦争をおっぱじめたのだ。抵抗力が『お客さんが来たぜ』と迎え撃っている最中なのだ。

病気を治すには、とにかく栄養を摂り、睡眠をして、体を温めるのが一番である。可能ならば薬を飲むことだ。

しかし、栄養分のあるものを入手できない上に、薬まで手に入らないとなると、辛さは拷問並み。治療魔術も使えない。体力も精神力も限界領域に片足を踏み込んでいるのに、使いなれぬ魔術をどうして使えようか。

「ゴホッ、ガッ……ゴホッ！ つー、ぐぐ……ペッ！」

咳が出た。口の粘り気を舌で掻き出し吐き捨てる。顔を擦り、よるめきながら立ち上がる。眩暈。たたらを踏む。

なんでもいいから口にしなければ死ぬ。

セージが、一步目を踏み出そうとしたその時だ。視界の端にぬつと影が現れたのだ。亀のような鈍さで目を向けると、死の雰囲気を感じた黒毛の獣がそこにいた。

全長2m超。体重は、どう少なく見積もってもセージの質量の5倍は以上あるうかという巨体。ふさふさと生えた黒毛はしかし、胸

元だけ白い。顔はがっしりとした作り。腕と足には強靱な爪があった。

どこからどう見ても熊だった。

「ハハハハ……」

シリアスな笑いが零れ出た。

涙も出てきた。脚が震えだした。ミスリルの剣を抜こうとした。右腕の痛さがそれを許さなかった。左手で抜こうとしたが、焦つてうまくいかない。

熊が咆哮して二本足で立ち上がった。“少女”と比較して苗木と大樹程度には存在感が違った。口から唾液が飛んできて頬にかかった。

腰の制御が恐怖に掌握されかけた。

「ヒッ……」

死ぬ。

未来が視えた。剣、魔術、いずれも熊に通用するわけがない。諦めに似た安堵が体を包んでいく。拒絶。神に祈ることだけはしない。絶望もしない。諦めない。

セージがとるべき手段は一つだけだった。可能性がもつとも高いものを選ぶほかに無い。

熊を睨みつけながらじりじりと後退していくと、岩の上に立つ。敵は一定間隔を保ったまま進んでくる。目をそらすことは絶対にならない。もし背中を見せれば食い殺される。

岩の縁を足で確かめる。丁度良かった。

熊は、セージを逃げ場のない場所に追い込もうとして、岩に足をかけた。

「鮭でも食ってる！」

捨て台詞。

セージは熊に中指を立て、全力で背後に跳躍し、川に飛び込んだ。清涼感が体を癒したのも一瞬だけ。

「あぐっ!？」

川の底に右足が接触、衝撃で関節が軋んだ。反動で川の潮流へと流れる。もみくちやにされながら下流に運ばれていく。

天地もわからなくなる。口、鼻から水が容赦なく侵入を果たすと、気道を占拠した。溺れ死ぬ。手足をばたつかせて安定化を狙う。服が水を吸い込み纏わりつく。呼吸が苦しい。

途中、岩に擦って体が擦れた。

熊はどうなった？

俺はどうなっているのだ？

川幅が狭いところに侵入した小さき体は、ごみのように弄ばれ、何回転もしながら浮き沈みさせられ、下流に流されていく。顔が水面に浮いたのも一瞬。数秒後には沈む。また浮くと、背中が出る。

肺に水が入ったかもしれない。

意識が黒で塗り潰されていく。永遠に目覚めない悪質な眠りが手招きしている。川を越えた向こうに乾いた平地。水中だというのに大地が見えるなどおかしいと思うだけの余裕すらない。

体を支配していた高熱が冷水で沈められたことだけは理解した。

遙か遠くで音が聞こえた。ダーンツと爆音が響き、甲高い悲鳴が聞こえた。獣が鼻つ面を叩かれたような。空気を切り裂く音。理解不能。怒号。

次に鼓膜を叩いたのは、誰かが飛び込む音だった。引き寄せられ、地面に上げられた。頬を叩かれる。目を開こうとしてしくじる。瞼が言うことをきかない。水を吐く。唇に柔らかいものが触れた。

心臓の脈拍だけが頭に響いている。
意識が遠のく。

目を薄く開いた。何者かの顔。

誰かの腕に抱かれているようだった。男性か、女性か、それすらわからないが、安心感があつた。

セージが完全に意識を手放す前に目撃したのは、巨大な岩が横にずれて、奥に隠した空洞を外気に晒したところだった。

<27>地底(前書き)

目覚めたセージは、溪谷の里に到着したことを知ったのだった。

無と有のスイッチが切り替わった。

顔の前に物体があるようだ。目を使わずとも、環境音の微かな変動から察知できた。体の倦怠感や痛みは感じられなかった。不思議である。病気で死ぬか、川で水死体になるの寸前だったはずだ。

動きが鈍い脳細胞に現状の把握をせよと命じる。

両目を開けると、手の平があつた。迎撃しようとした。怪我をしているはずの右手で掴み、擦じろうとせん。

「おつとつと」

やたらとかつこいい声がどこからか響いてくるや、手がもう一本伸びてきて、動きを封じられた。顔を動かす。若い男が傍らの椅子に腰かけてそこにいた。耳を見遣る。尖った特徴あるものがちゃんとおついていた。

その人物の意図は不明であるがセージの顔に手を置こうとしていたらしい。

エルフはエルフでも怪しいやつだと視線を強くした。

第一印象、優男。

目鼻通った造形の顔。目は空色。白い肌。髪は銀色で、肩まで優美に垂れている。かつこいいというより、美しいと感じた。ゆつたりとした民族衣装は、彼によく似合っていた。

彼は手をぱつと放して顔の前で振ってみせた。

「僕は敵じゃないですよ」

「……すまなかつた。俺の顔に手を置こうとしてなかつた？」

「まさか、そんなことするわけないじゃないですか」

「なら、今俺が掴んだのは幽霊か何かなんだ」

「さあ……知りませんね。悪い夢でも見てたんでしょ」

なぜはぐらかすのかはわからないが、話がこじれそうなので、とりあえず自分の格好を検めた。

彼が着ているのと同じような民族衣装。上から下まで里を出発した時の名残は見受けられない。何気なく手を突っ込むと、中の服も変えられていた。下着にも例外はないのだろう。

髪の毛に手をやってみれば、サラサラとした手触りが返ってきた。梳いてみても一本たりとも引っかからない。

セージが困惑した顔をしたのを見た彼が、手鏡を渡してくれた。己の姿を映してみる。

戦闘時に斬り落としてしまった右側と、放置するがままに伸ばし続けた左側の髪の毛は、それぞれの長さを活かして整髪されていた。顔も見てみる。傷が無い。汚れが無い。

「……？　まてよ」

服の上をはだけさせて右肩を露出させ、穴が開くほど見つめた。刺し傷も、切り傷も、魔術で修復した際にできたケロイド状の皮膚も、それどころか痕跡すら消滅していた。

手鏡を布団の上に放り、顎に指を置いて暫し逡巡した後、あたりを見回してみた。

岩の壁。松明があるべき場所にはランタンよろしく光る岩があった。ベッド、机、椅子、そして棚の下に己の服と思しき塊があった。ミスリルの剣も同じく発見した。

思考の海に飛び込む準備を始めたセージに対し、彼が言葉を投げかけた。

ただし手で顔を隠し、目をきっちり覆った状態で。

「川で熊に襲われていたところを僕が助けました。あのままほっといたら、熊の養分になりかねないですからね」

「そうなのか……ありがとう。さすがに死ぬかと思ったよ。どのくらい寝てた？」

「丸一日は。本当に死にかけていたので僕たちで治療をしました。あ、体に関する事は僕じゃなくて女性が担当しましたからね」

彼は、チラツチラツと手の隙間からセージを窺うばかりで、目を合わせようともしない。若干顔も赤い。

「ところで何で顔隠してるんだ？」

「服を……服を着て欲しいなあと」

「服……？ あー、そういうことか」

セージは、彼の視線の先を追いかけてみた。服がはだけて肩と胸元が露わになっている。

本人からすれば見られて恥ずかしい要素が何一つ無い。例え胸だろつが、お尻だろつがである。生き延びるためには裸に羞恥を感じるような神経質ではいらなかった。なにより、社会の中で女性の振る舞いの経験をほとんど積んでこなかったのだ。理解できないのも無理はない。

だが、顔を合わせてくれないのでは進む話も進むまい。服をちやんと着た。明後日の方角に興味深い物を見つけたらしい彼の肩を叩く。

振り返った彼の目つきは、何とも形容しがたい感情を孕んでいた。

「ロリコンさん、服着たぜ」

「ろりこん？ 誰ですか、それ」

「なんでもないよ命の恩人さん。命の恩人さんじゃ長いから名前

を教えてくれると助かる。ところで、丁寧な喋り方にした方がいいかな……今更だけど恩人に対する態度じゃないし」

気分を害したなら謝ると言つと、彼は首を振った。

「僕の名前はルエと申します。お堅いのは嫌いなので構いませんよ」

「俺の名前はセージ。よろしく」

「ルエって女の名前じゃないのかと思いませんでした？」

「……いや、俺はこっちのせか……こっちの里の名前は詳しくないから」

「とにかく、よろしく」

二人は握手した。

その後、セージはルエに里の案内を頼んだ。

里の構造を大雑把に説明すると穴であり、元々ドワーフの住処だったということである。彼らは人を避けて更なる奥地に向かっていた。その後からやってきたエルフが名残を利用したらしい。

里は川が氾濫してもいいように完全に密閉できるように作られ、地底では食糧や医薬品などになる植物の栽培が行われており、例えば埋められようが、食料供給が途絶えようが生きていけるようになっているという。

セージは、里と言うよりシエルターのようだと感慨を抱いた。

案内の最中で、光キノコと苔があちこちにあるのに気が付き、これは持ち運びできるかと聞いてみたが、日光に弱いと言われた。なら岩はどうかと聞くと大丈夫らしいとわかった。

しばらくしてルエが足を止めた。セージは、彼のすぐ後ろで立ち止まった。肩越しに前方を見れば、正面に巨大な空間を認めた。

「そしてここが主縦坑です。一番下で長老がお待ちです」

「うわあ！……深い」

ル工が腕で示した先には巨大な円柱状の空洞があった。

セージらが居る場所が空洞の頂上の位置だったのだ。手すりにつきかり掴まって下を覗き込んでみると、木と岩の歩道が螺旋を描いて地下に向かっているのが臨めた。気が遠くなりそうな高さ。高所恐怖症の者には地獄への入口であろう。

セージは、巨大な空間を掘り抜いたドワーフの技術と労力に感嘆した。

円柱状の地下空間の壁には穴があり、扉が存在した。他の場所への通路らしい。荷物を担いだエルフやら、子供のエルフやらが出たり入ったりしている。

さらに目を凝らすと、光る苔とキノコが壁に生えている。松明を使わないのは空気を汚さないためなのだろうか。

壁面や通路には金属の管が複数伸びていた。また、螺旋通路の所々に大型の滑車が設けられていた。

ル工がよく通る美声で解説してくれた。

「あの管は音を運ぶものです。我々の里は入り組んでいますし、穴の上の者と下の者が意思疎通するのに不便ですから、これを使います」

「滑車は？」

「物を運ぶものです。我々を大勢運ぶ装置も取り付けられる予定です」

「エレベーターか……」

「誰ですかそれ？ エレベウスという先人ならいらっしやいましたか」

セージは、居るんだそんな名前の人と思った。

ともあれ、この里に見学しに来たわけではないわけである。さっ

そく目的を切り出した。手すりを背後にするのは怖かったので、横にして立つ。

「いいや、こつちの話。俺はこの里の長老に届けるものがあってね、死にかけてたのはそれが理由」

「……届けるものがあるのに一人だけで、しかも馬も竜も乗らず徒歩で……ですか？」

流石に説明が簡単すぎた。神様に殺されて異世界に来ましたと言う説明は口が裂けても言えまい。したところで頭のおかしいエルフと思われるかもしれない。誰もが長老のように理解ある人柄ではないのだ。適当な誤魔化し文句を考える。

ルエが不審そうに眼を細めた。

いくらなんでも子供が外の里から徒歩でやってくるのは不自然過ぎるからだ。

己の目的と今までのことを掻い摘んで要約した内容を語らんと。

「本当は修行の為かな。目的を果たすためには修行が必要と長老に言われてる。届け物をする修行というかなんというか」

「そうでしたか。ところでご両親は？」

「いや、両親は居ない」

セージは、この世界にはな、と心の中で付け足した。

ルエがばつの悪い顔をした。両親が亡くなったという意味で捉えたのだろうか。

「迂闊な質問をしてしまいました」

「いいんだよ、俺は気にしない。長老のところに行くにはどうすればいい？」

「僕が案内します。もとより、長老に連れてくるように仰せつか

っていました。それに長老の建物に入るには僕の顔が必要ですからね」

その前に。

「部屋に渡すものを忘れてきた。戻りの道を案内してくれ」

< 28 > 試練を受けよ

「フムン……事情は把握した。巨老人の里にか……」

その若き指導者は手紙を折りたたむと、防水加工された封筒に戻し、引出しに仕舞い、腕を組んだ。

ここは里の最深部、長老の間。里全体の意思を統括、指示を出す中枢部。

最初に訪れた里の長老と比べれば若造とも言える若き相貌。腰まで伸ばした銀髪。優美な仕草。銀細工を首から下げ、風変わりな眼鏡が彼の印象に知的を一筋加えている。

名をルークと言った。

セージが隣で畏まったルエの顔と、長老の顔を見比べた。顔のつくりがよく似ている。血がつながっているとしか思えないのだ。

すると長老は中性的な顔に妖しい笑みを浮かべて見せた。女性のように。男性であるはずなのに、異性に見えた。

「よく似てるだろう。何しろ私たちは兄弟だからね。なあ、弟」

「なんですか、兄上。このような公共の場においてはいけません」

「私だからいいのさ……と言うと老人達にクドクド怒られるわけだが……。まあいい。手紙によると君はとある目的の為に王国に侵入したいが、いかんせん実力不足なので、里をいくつかまわることを経験を積む……と。間違いないね」

「はい」

「目的が何かは知らないが、尋ねないことにするよ。天から授かった使命かもしれないからね」

殺されかけたり熱で死にかけたり食われかけたりと経験した今と

なつては、王国に入ることが躊躇われ、修業を積み重ねたいところだったが、とにかく頷いておいた。

予想通り、ルークは顔を渋くした。

「王国に侵入ともなれば死の危険が伴うぞ。いや、侵入しなくても、巨老人の里に向かうだけで死ぬ可能性もある」

「それだけ厳しい道のりという……」

「わけではないな。確かに厳しいが、道のりだけではない」

ルークが口をへの字に曲げ、ぴしゃりと言いつつと、机の上から丸まった地図を取り出すと広げた。一点を指し示し、次に赤く色が塗られた広い領域を叩く。

手招きされた。ルークと共に歩み寄る。

ルークは地図の赤い部分に人差し指を置くと、するする滑らせていき、示した。

「ここが巨老人の里だ。風の噂……ウム、風の噂によると、かの里に大規模侵攻があったそうだ」

「なんですって！」

「安心したまえ。彼らの戦力は一万の兵も退ける。いざとなったら……君に伝えられないが、敵を全滅させる準備がある。だが君はそうはいかんだろう。人間の軍勢が攻勢を仕掛けている最中を進むわけにはいくまい」

「本当に大丈夫なんですか？ 油断していて全滅とか……」

「我々は油断を恐れる種族だ。心配症だからね。第二の策、第三の策と安全策を講じている。他の里からの応援もかけつける。そう、君が救援に駆けつける必要はない」

ルークは、セージが尋ねることを予想した上で先んじて答えた。十割的中とはいかないが、大まか正解だった。

元より救援に駆けつけるつもりはなかった。しかし、巨老人の里に向かう術が断たれてしまうのではないかということが不安を煽った。長老に言われたことを未完で終わらせるわけにはいかない。

「長老、戦いはいつ終結するものだと思われませんか」

「一か月以内には終わるだろう。所詮、はした金で雇われた寄せ集め………ウム、戦いが終わったら行っても良かった。それまではここで働いてもらう」

ルークは机を手の甲でノックし、人差し指をゆらりと振ったのだ。つた。

「手紙にも試練を与えよとあるのでな、まずは農作業だ」

さすがのセージも、最初の試練が農作業とは思いつかなかった。ルークに案内されて足を運んだ先は、里全体の食料を作る畑のような場所だった。日光が無くても育つ植物やキノコを栽培しているところである。

キノコの運搬、ゴミの片付け、苗床の設置、ゼンマイ状の植物の採取など、場を取り仕切るエルフの指示の元せつせつせと働いた。食事は彼らと共にした。

太陽と言う時間計測装置が無い為に、夜になっても働き続けようとして、お嬢ちゃんは働き者だなと感心された。お嬢ちゃんではないと反論すると、ませた子だと笑われた。

頑張り過ぎて眠気が限界に来たところで、丁度良くルークが迎えに来た。

ゆつたりとした民族衣装ではなく、魔法使いが着るようなあずき色のローブを着込んだ彼は、妙に嬉しそうに手招きをした。

駆け寄る元気が無くて、のろのろと近寄る。歩き出す彼の横に並ぶ。

「セージさんの部屋を用意しましたから、今日はゆっくり休んでください」

「明日は何をすればいい？」

「そうですね …… 僕と一緒に外の隠蔽魔術の強化に行きましよう」

「そんな複雑な魔術使えないぞ。火炎の剣作ったりとか、手っ取り早くブチかますだけしかできない。ン…… 治療魔術も使えるけどさ、いちおうっただけだ」

「僕がやりますよ。セージさんは、僕の付添いをしてくれるだけでいいです」

彼の隣についていくと、里について最初に目を覚ました部屋からほど近い場所に案内された。

中を覗いてみると、こじんまりとしていながらちゃんと家具が並んでいて、装備品一式が机の上に置かれていた。とりあえず入るとベッドの上に横になる。

泥のような眠気が頭を覆い尽くして、考えられなくなる。疲れも同調した。魂が睡眠の方角に牽引されていくようだった。

目を擦る。

「悪いけど眠くて……起きられなかったら起こしてくれ」

「はい、おやすみなさい」

ルエと目が合うこと十秒間。

彼は、ベッドに横になったセージを見つめていたが、すっと身を引くとドアを音も無く閉めて立ち去った。

セージは靴をだらしなくベッドの下に転がすと、前髪をぐしゃぐしゃにして布団に潜りこみ、あっという間に眠ってしまった。

翌日。

誰かが体を触った感覚が走った。起きない。揺さぶられている。起きない。声がかけられた。セージ、と。意識が浮かび上がった。目を覚ましてみると、己を見下ろす様に立っているルエが居た。ゆったりとした民族衣装ではなく、セージが旅道中で着ていた服と様式の似た服装で、背中に弓矢を背負っていた。

彼の手が肩に置かれているところから、起こされたのだと分かった。

室内で寝たのは久しぶりだったので、安心しきって眠りすぎたのだろうか。

目を乱暴に擦れば、布団を跳ね除けベッドに腰掛ける体勢に移る。彼が手を引いた。大きな欠伸をしつつ髪の毛を手櫛で整える。

セージがあいさつをすれば、彼も返してきた。

「おはよう」

「おはようございます。朝食を持ってきました」

「あんがと。ちょっと支度もしたいから、待ってほしい」

「構いませんよ。今日はこれくらいしか用事が無いので」

キノコを焼いたのと野菜の盛り合わせ。魚。果物のジュース。どれも美味。舌なめずり。あっという間に平らげる。

次は服を変えなくてはいけなかった。

セージは恥ずかしがることも無く衣服を剥ぎ取ると、最初に訪れた里の長老に借り受けた旅服を着けていく。

「わあ!？」

あまりに手際が良く、隠そうともしないセージに、ルエは顔を朱にして恥ずかしがり、180度体を後ろにした。

面白いやつだなと思った。

もちろん意図的に隠さなかったのだが。

「こんなもん見ても面白くもなんともないだろうに。ねえ？」

「僕に聞かないでください！」

「弄られ系か」

「なんですかそれ！」

セージは、背中だけ見える彼を少し弄ってみた。頑として背後に目をやるうとしない辺りは紳士的と言うべきなのか、それとも純情だというべきなのか。

セージは彼をロリコン呼ばわりしたが、本当にそうだろうか？

例えば日本でも現代の感覚で言えば子供のような女性がお産を経験する時代があったわけである。大人と子供の年齢差ではなく、子供と子供ほどにしか歳が離れていなければ恋愛の対象になっても不思議ではない。

セージという人物は決して『鈍く』ない。行動の端から窺える感情がなにかも察した。しかし、今のところ根本的には男性を保っているが為に、まるで男友達が女性に恋しているのを傍観するような心持だった。

理解はしているのに感覚的に馴染まない矛盾したことになっているのだ。

最後にミスリルの剣を腰に差したセージは、彼の肩を叩き、横をすり抜けて部屋の外に出た。

ゆらりと振り返ると、彼が部屋から出てきたところだった。

「案内してくれよ。でも守りの戦力として計算に入れない方がいいぜ？ 正規の訓練を積んだわけじゃないんだから。無手勝流もいところなんだし」

「それでも生き残ってきたんですから、実力はあると考えます。行きましようか」

「そうだな」

セージはルエに案内されて外に出ると、里の守りを固める作業についていった。

< 29 > 地底生活と事情を持つ彼ら

それからのセージの暮らしは、おおまか楽しいものだった。

農作業はもちろんのこと、掃除、本の整理、螺旋通路の維持作業、里の光る岩の回収と配置、守りの強化、料理の手伝い、戦闘訓練など、ありとあらゆることをした。

試練と言ふより雑用に近いことばかりであったが、衣食住が保証された“少女”の苦になるはずもない。

友達もできた。エルフだろうが人間だろうが、世界が違おうが、子供の遊びに大差はないと分かると、面白い気分になった。かけっこ、かくれんぼ、ごっこ遊びなど、童心に帰って遊んだ。

何せ体は子供である。振る舞いも子供にして、心も子供に戻せば楽しいことこの上ない。

セージの一日は、仕事をして、遊んで、日の最後に迎えに来るルエに部屋に連れて行って貰い眠るといふ規則正しい生活であった。

最初に訪れた里で暮らした時と同じくして楽しかった。

そしてわかってしまうのだ、暮らせば暮らすほどにこの世界に対する執着心が芽生え始めている。もし神の背中に刃を突き立てる機会が巡ってきたとして、その時には元の世界に戻りたくないと思っっているかもしれない。

いつそ、第二の人生を与えられたのだと割り切って、新たな命を全うすることもいいだろう。

だが、心に誓った一文が元の世界への帰還を促してくるのだ。諦められなかった。何のために地に這いつくばってここまでやってきたのか分からなくなるではないか。

諦められない原因の一つが元の世界に帰還する手段が残されているということであろう。もしもそれすら不可能であったなら、どう

なるかは誰にもわからない。

セージは地底湖の美しさに見惚れていた。ドワーフが作ったという空洞の最下層部に位置する場所に、現実のものとは思えない幻想的な光景が広がっていた。

その空間は広く、深く、そして神秘を孕んでいた。空気は冷たく、塵の一かけらも感じない。

天然ものの光キノコや苔が淡い光を供給し、広大な水面を青く色づかせていた。水は透き通り、あたかも存在しないかのように振る舞うほど、純粹であった。

何千年、何万年、何十万年という永き時をかけて溶けだした岩が、まるでつららのように天蓋からぶら下がっている。

水面と陸地の境界線には『危険』『足元注意』『泳げぬ者は近寄るべからず』という物々しい看板が立っており、かなり大きい光る岩の照明具が辺りを照らしていた。

地底湖の奥に向かう栈橋があり、小舟が係留されていた。

“少女”は、その栈橋の端っこに仰向けで寝転がっているのだ。腕枕にてリラックスしきっている。そつと呟く。

「すげえなあ……」

セージの視線の先に広がっている光景は、暗黒と光の織り成す造形美だった。

黄色い光のキノコや苔とは違った、涼しい青い光を放つ小石がちこちに埋没している。それらは乱交し、暗闇と混じり合うことで星のように煌めくのだ。光の淡い部位はまるで銀河の星々だった。

栈橋の下を覗き込めば、趣の異なる美しさがあった。

天蓋の光が侵入した結果、水が青き色合いを醸し出している。眼下には、切り立った岩山を丸ごと持ってきたような空間があった。

とても、水があるとは思えぬまでに透き通り、底の底までを見せてくれる。底は、深すぎて霞みがかっていた。

身を乗り出し、セイレーンに魅入られた船乗りのように見つめ続ける。

垂れ下がった石の先端から水が落ちた。水面に付くや、重力と表面張力に従って一度凹みを作り、再び水の粒を大気中に投げ、やがて落ちる。波紋が円形となり伝播すれば、地底湖に動きが生まれた。水面と言う境界が揺れ動き、光の幕がため息をついた。

そつと手を伸ばす。触れる。冷たく、心地よい。体のくだらない熱が吸い込まれていく。かき回す。乱れる水面と、乱れる光。一口飲む。おいしい。

この地底湖を知ったのはつい先日のことだ。

エルフの一人に生活用水は川の水を取り込んでいるかと尋ねてみると、湖のを使っていると言われた。場所を尋ねると教えてくれたのでやってきたという寸法である。

ふと、セージは足音を聞いた。

上半身を起こすと、栈橋に座った。

「ここにいましたか。そろそろ寝る時間ですよ」

「ルエ。精霊が居ないんだけど」

ルエがあずき色のローブを着込んで登場した。

彼は栈橋の真ん中をすると歩んできた。セージと同じく湖に目をやり、そして隣に座った。

「精霊は居るらしいというだけです。期待しては、出るものもありませんよ」

「どんな感じなの？ 羽とか生えてたりすんのか」

「光の球という話も、蝶という話もあります。一概にこれと断言できる形をしていないそうです」

「フーン……」

ルエはそこまで語ると、視線をゆっくりとずらしてセージに向けた。幼いながらも厳しい体験を積んできた横顔は、彼の主観では風景よりも美しかった。

まただった。

ルエの目つきが完全に恋する男のそれになっているのである。気が付かない振りをするしかない。男であるためには、男と付き合うことなどできやしないのだ。

第一である。“少女”の現代的な考え方からすれば、彼はロリコンである。無論、この世界の考え方や文化を理解しているので、ロリコンではないと分かっている。しかし、ロリコンでないのかと思ってしまう。コミカルな意味で思ったのではない。まじめな意味で思ったのだ。

客観的な視点で考察する。

彼は、ボロボロの美少女を助けた。今にも死にそうなところを、間一髪で救った。記憶が正しければ人工呼吸もされた。これは吊り橋効果の亜種ではないのか。

考えれば考えるほど迷宮を堂々巡りしてしまうので、考えるのを止めた。

セージは立ち上がると、伸びをした。薄い胸がぐっと反る。

「よし、寝よう！」

「そうですね、早く寝なくては明日に差支えます」

二人は連れ立って部屋に戻った。

その最中に、セージは頼みごとをした。

翌日から二人は一緒に狩りに出かけることになった。

一方その頃。

頭を悩ませる男がいた。

「フム……」

長老の間で、ルークは熟考していた。顎に手を置き、腰まで伸びた髪の毛を口元で弄りつつ、本棚の前をうろつく。

考え事の内容は多数あったが、中でも大きい割合を占めていたのが弟のことだった。

弟　ルエはとにかく奥手で、女性を前にすると尻込みして交際を申し込むことができない。

ところが、外からやってきた子だけは別だった。まるで友人のように　否、友人以上に親しく接しているのだ。

もちろんルークとて、セージが婚姻には早すぎることは理解している。

だが、やがて時間が経てば成長するわけである。大人になれば結婚もできる。子供も産める。

かつてのように里同士が自由に交流できた時代ならまだしも、現在のようにエルフ狩りが奨励される殺伐とした世の中では、里の中に引きこもる他に無い。

里同士でエルフの行き交いが無いわけではない。ある程度はある。しかし、最盛期と比較すれば少なすぎる。人間の攻勢が強まれば里は完全閉鎖されるだろう。

ルークが危惧していたのは、血が近いもの同士が子供を授かることであった。閉鎖的にならざるを得ない現実では、血統の問題は解決しがたいことである。

エルフの古き知恵で、血の近い者同士の間には病弱な子しか生まれないとある。

十年二十年ならまだしも、数百年と迫害が続けばどうなるかは分からないではないか。

セージの来訪は気弱な弟に妻をとという問題と、血の問題を解決（

完全にはないが)する有効な手段だったのだ。

セージは『王国』に向かいたいと言っていた。巨老人の里の戦が終われば直ちに出發してしまう。強制的に繋ぎ止めるのは、ルークの信条に触れる。

情報を何年もの間に渡って制御することでセージを外に出させない案も考えたが、却下した。情報は漏れるもの。いずれ知られるのが目に見えていた。

要するに、ルークの間ではセージを里に永住させることはできないのだ。

「何がああ若者を駆り立てるのやら……」

ルークは前髪を指で払うと、ため息をついた。

一斉射出した火の球は、ことごとく風の翼によって叩き落とされた。

背中から生えた力が、卵を抱く母鳥の翼のように外敵を寄せ付けない。

セージは、その魔術の硬さに舌を巻いた。

翼の持ち主は、信じられないまでの集中力を持って翼を操作すれば、重力を無視した空中浮遊をやったのけた。実戦であれば高空から魔術爆撃を仕掛けられるであろう。

「僕は攻撃的なことは得意じゃないんです。代わりに守ることは誰にも負けません」

「かつこつけちゃって！　？火炎放射？！」

天井付近まで上昇したルエに対し、セージは問答無用とばかりに火炎の奔流を投げつけた。

「？守れ？」

ルエが詠唱した。

可視化した風の翼がはためき、横薙ぎの暴風が彼の体を覆い隠した。火炎は勢いを削がれ宙で消えていく運命だったが、吸い込まれた。そしてあるうことが竜巻に形態を変えた風を着色しだした。己の放った火炎が、ルエの体を中心に発生した竜巻を火炎竜巻に昇華させてしまったのだ。

力の制御を探ってみれば、ルエのものだった。

流石に火炎旋風で防御をすればのっぴきならぬ被害が出る。火炎は萎んでいき、普通の風に変化した。

ルエは、ふつとため息を吐いた。
セージが、むつとした面持ちになった。

「力押しでは勝てません」

「なら、押し通る！」

問答の内容は噛み合わない。噛み合わせるつもりがない。

セージが距離を詰めんと地を駆けた。遠距離攻撃を何度試して防
がれるなら、接近戦に移行するしか手が無い。

手を翳し、呪文を紡ぐ。

「？火炎剣?!」

瞬時、火炎の渦が手から出現するや、長大な一本の剣となりて握
られた。それは剣というには巨大かつ無骨で、巨人が振るう棍棒の
ようだった。イメージが追い付かないのが原因で密度が低い。

対空攻撃、かつ近接となれば、剣を巨大にして斬りかかるしかな
い。

天井スレスレに伸長したそれを目一杯振りかぶり、跳躍を込めて
叩き込まん。

「なんと!」

ルエが驚愕の声を上げて一撃を受け止めた。焦りの色が浮かんだ
ものの、翼の守りは健在。それどころか、剣の表面を削り取ってい
るのだ。

剣の構成が解けつつあるのを感じ、一度身を引けば、突く。線の
攻撃が通用しないのならば、点の攻撃で貫けばいいと発想を変えた。

だが、それすらも風の防護を破壊するに足りなかった。

切っ先は風の翼に阻まれ、一寸も前進せず。いくら押ししても通ら

ない。まるで鉄板にフォークを突き刺そうとしているようだ。錯覚するほどに、硬い。

火炎の剣が大根おろしにされているのだ。

触れる先から風の威力に粉碎されて、勢いを失っていくのだ。

次の攻撃を考えるより早く、ルエの言葉が迸った。世界が変動。翼が羽ばたいた。途端に訓練場を総なめにする突風が吹き荒れた。

台風を濃縮した風があるとすれば、これだ。

「わ、わ、わあああああ!？」

「セージの悲鳴が上がる。

目も開けていられない。魔術の維持も無理だった。消える火炎剣。抵抗する間も与えられず、足が地面から離れ、空中で独楽にされた。世界が廻る。三半規管がもう許してと泣き叫んでいる。悲鳴の音源がぐるぐるん移動して円を描いた。メリーゴーランドはあつけない終わりを迎える。すなわち、停止という形をもって。

風が止んだ。重力という理に抗えなくなった小さき体は地面に転がった。

ぴくりとも動かない。

ルエ、やり過ぎたかと顔色を変えた。歩み寄ってみた。セージが震えている。拳で地を叩き始めた。何事かと、恐る恐る尋ねん。

「大丈夫ですか……?」

「なんてことを……うええええ吐く……」

「ご、ごめんなさい! つい……」

セージが地面でうつ伏せのまま、ゼーゼーと呻いていた。過度に回されたことで胃の内容物が逆流するところだったのだ。

セージは、暫しの間、ルエに背中を擦られていた。

彼と彼女がやっていたのは模擬戦闘であり、本気で殺し合ってい

たわけではない。だが、少々やり過ぎた。

やっと立てるようになったころには、戦闘の熱も冷めきっていた。体の機能を確かめるように立ち上がる。

「ふうー……………俺ってルエに勝ったことねーな……………」

「年齢差を考慮すれば当たり前ですよ」

「修羅場は潜り抜けてきたただけだな……………奇襲とか不意打ち待ち伏せならともかく、真正面からじゃこんなもんなのか」

セージは、今まで経験してきた戦いを思い出して呟いた。

蜘蛛の時は、真正面から戦って死にかけた。ヴィヴィと正面から戦った時、ボコボコにされた。アネットと正面から戦った時、投げられまくった。

勝利した戦いはいずれも奇襲や目つぶしなど、背中に蹴りを入れるような手段をとったことが勝因だった。

身も蓋も無い言い方をすれば、セージは正面から戦うと負けてしまっただ。

たかが女の子の力などその程度なものだ。

呟きに対し、ルエが首を振ってくれた。

「まだ若いですから、成長の余地はありますよ」

「ルエ、年寄りみたいなこと言っちゃって」

ルエは、この里で時間を重ねましょうと言う歯の浮くような台詞を囁下した。

その日、二人は訓練を重ねた。

翌日は良いお日柄だった。

「……………コーピー……………」

セージは水車の回転をぼんやりと見つめながら、ぽつりと言葉を漏らした。

ここは渓谷の里の畑。小麦やそのほか太陽を必要とする植物は、地上で育てているのだ。物理と魔術を組み合わせ隠蔽されているため、簡単に発見できないようになっている。

水車の回転は一定で、見つめていると眠気を催してしまうようだったが、考え事するにうつってつけないオブジェクトでもあった。

コーヒー。小難しいことを抜きにすれば、コーヒー豆の煎り汁である。豆さえ手に入れば作るのは簡単である。手に入れば。

ある日、突然コーヒーが飲みたくなつたので里中を駆け回った。

異世界においてコーヒーなるものが発明されたことはないらしく、里の住民らに説明しても首を傾げるばかりだった。豆と言う豆を片っ端から加工しても渋いだけの汁が出るだけだった。

試行錯誤の末、いくつかの豆を組み合わせることでコーヒーもどきを作ることに成功したが、似ているのは色合いだけという代物だった。

諦めよう諦めようとしても、一度飲みたいと思うと、諦められなくなるのだ。

セージは深く息を吸いこみ、仰向けになった。蒼天。小鳥。羽虫。水車が臼を打つ音。かぱこかぱこ。傍らの草を千切って草笛を作る。ピュー。捨てる。

「ん？」

セージは次の草をむしろうと手を伸ばした。失敗したので、顔を傾けた。黄色い花。タンポポに似た可憐な花が健気に咲いていた。

タンポポのようなだけで、別の花かもしれないが、関係ない。

「……………それだ!!!」

ぱつと顔に花が咲いた。

セージは夢中になって、タンポポを集めた。花卉ではない。根を集めるのだ。

一応、里の人に『これは毒があるか』を聞いてまわって安全性を確認すれば、根を乾燥させる作業が始まった。里の外で天日干しにした。干した根を前にしてニヤニヤしてしまったのは秘密である。

乾燥したら、部屋に持ち帰って加工し、布を使って汁をとる。みるみる内に黒い液体が出来上がった。

「妙なにおいですね」

「んー？」

セージの部屋の机の上にて、二人が作業をしている。

今日はやることがあるから訓練は無しとルエに伝えたところ、興味があると言われたので、一緒に作ったのだ。

セージは黒々とした液がなみなみ注がれたカップをとり、一口飲んだ。芳醇な香りが鼻を通り抜けた。ほつと息を吐いた。現代文明の味がした。砂糖とミルクがあればパーフェクトだった。

全部飲んでしまってもよかったが、物欲しそうな顔をしたルエに半分あげることにした。カップを渡す。

彼は一口飲み、二口目で眉に皺を寄せ、三口目で唇を離した。カップの中身はほとんど減っていない。ずいとカップを返された。

「……これは、なんのお薬なんですか」

「薬じゃないよ。えー……俺の生まれたところの……嗜好品？
ってやつ」

「……嗜好品……ですって……」

「うん。砂糖と牛のお乳を入れて飲むと味が優しくなるんだ」
「……」

ルエが絶句しているのを着にコーヒーを啜る。

明日は蜂蜜と牛のお乳を探さなきゃと考えたのだった。

そして、セージが溪谷の里にやって来てから数えて約一か月後。

巨老人の里の戦いが終結したと報告があった。

< 31 >さらば溪谷の里

巨老人の里の戦いが終わった！

その知らせはたちまちのうちに口から口へのネットワークを伝播して里中に伝わった。

エルフの里では、人間の街にスパイを放っており、それにより情報を得ることができている。数で劣るのであれば相手の行動をいち早く察知しなくては生き残れない。長老の言う風の噂と言うのはあくまでぼかした表現である。

情報は、セージの耳にも届いた。

セージはすぐさま長老の元に急いだ。

長老の間に入ろうとしたが、入れて貰えなかった。ルエを連れてこなくてはいけないとわかり、里中を駆けずりまわった。気持ちが悪く逸つて転んだ。慌てて立ち上がると目的の人物が手を差し伸べてきていた。行幸。

彼は不思議そうな顔をしていた。

「いかがなさいましたか」

ルエの手を握って立ち上がり、そのままぐいぐいと長老の間に引っ張っていく。

「ルエ！ ルエ！ 巨老人の里の戦いが終わったってさ！」

「引っ張らないでくださいよ！」

「長老のところから里を出る許可を貰いに行くんだ！」

ルエの顔は、セージの顔に反して暗かった。

長老の間。

ルークは仕事でクタクタだった。戦争の情勢はもちろん、かの里の被害、経過、周囲の反応、自分の里はどうするか、通達、それにかかる労力の算出、防衛、一般業務を一晩で処理するのだ。

基本的に、里の運用で重要でないことは部下が処理してくれるが、事が戦争絡みとなると彼がやらねばならない。

以上の情報を纏め、里の知識人らの集う会議で議論を重ねるのだ。ルークは有能であるが、専門家ではない。食糧、医療、技術など、各分野の識者に判断してもらわなければ決定できないこともある。

やっと仕事が終わって、水で喉を潤しつつ古文書に目を通していったところ、来訪者があった。予想はできていた。係りの者に通す様に言う。

「長老！」

扉が係りのものに関けられて、イの一番に現れたのは、予想に反せずセージだった。すぐ後ろには不満そうなルエも一緒だった。二人に話すべき事柄があったので、同時に伝えることができそうだった。

ルークは古文書にしおりを挟むと、横に退けた。長い指を組み合わせ、口元を隠す。

「フム……やはり君か。来ると思っていたよ。巨老人の里の戦が終わった」

「では！」

「君の使命を遮るものはなにもないということだ。私の与えた仕事もちゃんとこなしてくれたしね」

「はい！ 俺は巨老人の里に行きます」

「本当に行くのか？」

ルークは、嬉しそうな様子のセージに対し、重苦しい声で確認を取らんとした。最終確認ではない。考え直してくれないか期待したのだ。

だが、セージの答えは決まっていた。

「行きます。より王国に近い里なら手がかりを得られるかもしれないですし」

「……………無茶はするなよ」

「安心してください。王国にいきなり侵入するようなまねは、しません」

セージが真面目な顔を作り、神妙に頷いた。現実の辛さを辛さではなく運の良さと都合のいい解釈をしていたところと違って、下手すれば死ぬとちゃんと認識しているのだから。

それでも旅に出るのは、王国の技術を盗むにはより近い位置に行った方がいいし、実力を養えるからである。

本当のところは、この世界への執着と、元の世界への執着がせめぎ合うことで生まれる焦燥感がそうさせているのだろうが。

いずれにせよ、最初の里の長老の依頼を完遂しなくてはならない以上、いつまでも溪谷の里に滞在するわけにはいかない。ミスリルの剣と手紙を己の足で運ばなくてはいけないのだ。

ルークの目がここではないどこかを見た。二つ名の由来になった巨体を持つ戦士の姿を思い出しているのだろうか。

「巨老人は戦いに優れた男だ。私の知る限り、もっとも強い。彼に鍛えて貰うといい」

「わかりました。感謝します」

セージが頭を下げた。

セージは知る由もなかったが、ルークは一つの思惑を抱いていた。

巨老人という者の性質と思想についてだ。それが今もあるのであれば、セージは王国に行こうに行けなくなるだろうと。“徹底的に”鍛えて貰えるだろうと。

誰かがどこかで無謀を止めなければ、絶望に変わり果てるのが目に見えていたから。

壁によじ登って転落死する前に、誰かが後ろから止めてあげなくてはならない。最初セージが訪れた里の長老にはできなかった。ルークにもできなかった。だが、巨老人ならばできる。

ルークには確信があった。そして、それが起こるべき場所は、より戦場に近い場所であるべきだと考えていた。

彼女が最初訪れた里の長老が巨老人の里を指定したのも、それが理由ではないか。

「兄上！」

その時だった。

ルエがガラになく大声を張り上げると、一步前に進み出たのだ。決意に満ち溢れた様が見て取れた。きゅっとむすばった唇が、今にも破裂しそうだった。

「なんだ、弟。公の場では長老と呼ぶようにと言ったのはお前さんじゃないか」

「僕もセージについていきます！」

ルエは驚きを隠せないセージを一瞥すると、己の決断をぶちまけた。

危険なところに旅立つのを笑って許せるほど冷血でもなければ、阿呆でもないのだ。特に好意を抱いていればなおさらだった。

だが、ルークはまるで相手にならんと首を振った。

「駄目だ」

「どうして！」

「まあ……落ち着け、血のつながった同胞よ。お前の立場を弁える。私は彼女の出發を認めたが、お前の出發を認めた覚えはない」

「ですか！」

なおも食い下がるルエを、ルークは長老として断じなくてはならなかった。

若さゆえの勢いで飛び出されては困るのだ。幸いなことにセージと違って他の里の長老の手紙による指示も無いことだし、止めることができる。

手をひらりとさせ、首を横に大きく振った。

「お前の言わんとしていることはわかる。タテマエも、ホンネも、私は理解しているつもりだ。ここは引け。お前には彼女の旅立ちを見送ることを命じる」

「……………わかり、ました」

ルエは苦悩に顔を歪めながらも、頷いた。

セージは長老の間を出る前に握手をした。ルークが意味深なことを言ったが、その時は意味がわからなかった。その時は。

ただ、男ながら女性に言う台詞じゃないと思った。

「さらばだ幼き者。再び会う時は美人になれよ」

準備はそう時間のかかるものではなかった。元からの装備を身に着けて、保存食や便利な道具などをしまった。食事をして、水浴びをして、里の入り口である岩の前まで行く。

ルエの呪文により、岩は自動ドアのように横に滑った。

外の世界が一気に広がった。青い空。川の音。木々の海。守衛の

人があいさつをしてきたので、あいさつで返した。

セージは振り返った。ルエが立っていた。今にも涙が零れそうな目つきがあった。彼は憂い、悲しみ、不安、それらの感情を処理できず、爆発寸前だった。

できるのならば共についていきたかった。

しかし、長老たる兄の言葉は絶対的な力を有しており、逆らうことは許されなかった。

たった一人のわがままで里の規律を破ることは、できない。

「気を付けて……」

だからルエは体の震えを止められずに、抑揚のない言葉を投げかけることで精一杯だった。

セージは、彼の両手を握った。

温かく、自分の手より大きくて骨っぽい。

「俺は死なない。死ぬもんか。それにちょっとお使い行ってくるだけだし、大丈夫さ」

「……死んだら許しませんよ」

「必ず戻ってくる」

「いつまでも……待ってます」

似たようなことを去り際に言われたな。セージは思った。

未練が残る前に手をぎゅっと握れば、身を翻して里の外に出た。

新鮮な空気。太陽の光が目にも痛い。装備を確かめる。全て良し。いざ行かん。

「じゃーな！」

セージは振り返らず、歩き出した。

背後で岩が閉まる振動を感じても振り返らなかつた。

地図を広げる。巨老人の里までは約一か月の道のり。里に到着したら、王国の情勢を探らなくてはいけない。唯一見つけた手がかりに近寄るためには、進まなくてはいけない。

“少女”は、やがて森に紛れて消えた。

< 32 > 襲撃（前書き）

溪谷の里を後にした“少女”は、人の目を避けて迂回路をとったのだった。

結局、予定は狂った。一週間の行程は迷ったことにより二週間に伸びた。急いでいないとはいえ、安全な里に辿り着くまでの無駄な時間は少なくしたい。

森を抜けた後は地平線の彼方まで続く草原を歩く。天から落ちたかのような地面に直立した岩があちこちにあり、方向を見定めるのに利用できた。

食料は野鳥や兔を狩ることで賄えた。野生の犬を殺して食べたこともあった。“少女”は動物を殺すのに何の抵抗も感じなくなっていたのだ。

雑草の調理には里で貰った携帯調理道具　鉄鍋　が役にたった。熱を通すだけでも草は柔らかく食べやすくなるものなのだ。自己防衛上の観点から頭に被ることも検討したが、フードと干渉するのでやめておいた。

朝、昼と歩いて、夕方になれば寝処を探し、夜は寝る。

里近くまでは比較的平和で、何事も無く旅が進行した。人間に見つかることもなく、怪我也無かった。

問題は里に近づくにつれて人間の数がうなぎ昇りになり始めたという事だった。

「……………」

人影を見つけたセージは、無生物になりきることを選んだ。草むらで息を殺し、発見される可能性を軽減するべく匍匐体勢にて前方をじつと観察していた。鼻先に蠅がとまって暢気に足を擦り合わせようが動じない。

眼帯をした男、腕を包帯で巻いた男、疲れ切った顔で頭を抱える男の三人が草原のど真ん中で焚火をしていた。

いずれも武装しており、一般人以上に鍛えられた体であった。兵士だろうか。それにしてはたった三人で行動するのは不自然ではなからうか。

一つ、当て嵌まる事柄があった。

彼らは巨老人の里の戦いに投入されたお雇いの兵士ではないだろうか？

彼らは戦いが終わったので戦線から離れたのではと推測した。負傷しているのも、疲労しているのも、戦いと旅からもたらされたことだと考えればしっくりとくる。

お雇い兵士の給料事情は分からないが、条件が『勝利』だったとすると、一文も貰えなかったであろう。巨老人の里は人間側の攻勢を跳ね返したのだから。

だがセージは、『ざまあみやがれ』という愉快な気持ちにはなれなかった。人間は人間でも彼らお雇い兵士は半ば強制的に戦いの場に放り込まれたと聞いたからである。植民地とした国から兵力を格安で吸い上げ、敵にぶつけて双方を消耗させる。植民地は反乱する余力を失い、敵は戦力を摩耗していく。だから戦いは勝つ必要などないのである。戦えば戦うほど得をするのは王国なのだから。

元の世界の列強がやったように、『戦いに参加すれば独立を認めさせてやってもいい』と唆せば、剣をとり、王国の犬になるものもいるであろう。植民地が王国の兵力と換算されるだけというのに。

セージは、眼帯の男が泣きはじめたのを目にし、なんて嫌な時代に転生してくれたものだ。満月が居座る空を睨みつけた。包帯を巻いた男が瓶を無言で差し出した。眼帯は、一気に飲み干すと、顔を覆った。

彼らは悲しみと疲労で身動きもろくに出来ないように思われ、注意も散漫なようだった。死角と暗闇を利用すれば通り抜けることができそうであった。

彼らが居るということは他の兵士も居る可能性があった。モタモタしているわけにはいかない。早く離れなくてはならなかったのだ。

止むを得ない。大回りして避けるしかない。幸い、辺りは起伏ある草原であり、身を低くして行けばよかった。

セージは月が雲で隠れるのを待ち、闇が濃くなったのを見計らってその場を後にした。

里に近づけば近づくほど、人間を発見することが多くなってきた。こちらから見えるということは、向こう側からも見えるということである。フードで耳が隠されているが、強盗の類は人間だろうがエルフだろうが関係ないであろう。リスクを避けるには人目に付かないのが一番なのだ。

大きく迂回するルートを選択し、湿原地帯を通ることにした。それが失敗だったとは、この段階で予測できなかったのだが。

最初の違和感はおいだ。

泥や草の香りに混じるはずの無い異臭が立ち込めている。生臭い。鼻をすすんさせて情報を拾う。脳が俄かに熱くなった。答えに繋がる糸を掴んだのだ。

「……血？」

それは血のおいだった。

湿原地帯の真ただ中で血のおいが漂っているのだ。動物がいるのかも知れない。新鮮ならばおこぼれに預かれる。肉食動物の存在も危惧すべきであろうが、ひとまず情報を集めなくては話にならない。

葦を掻き分け、湿原の最中にぽつりとあつた乾いた足場に辿り着けば、木に登ってみた。

上から探す。コストパフォーマンスに優れた手段。

木の枝を右手で保持し、体重を外側にやれば全周を眺めた。群れ成す葦やら草やらの大地に血のおいの根源を見つけることはでき

なかった。視線を遮る物があり過ぎたのだ。

燃やしてしまえ。

セージの頭に悪魔の囁きが舞い降りるも、回し蹴りで撃退せん。木から降りようと、左手で枝を掴む。枝が鳴き声を上げた。折れる。体勢が揺らいだ。咄嗟に足を幹に絡ませた。

刹那、葦の草原に殺意が生まれた。

パツ、と葦が散った。鉄製のそれが空間を一直線に飛び、セージの頭部から数cmのところの幹に突き刺さった。

脊髄反射的に木から飛び降りた。

コンマ数秒後、新たな矢が体を掠めた。服に切れ目が走った。地に叩きつけられ、受け身もとれず、痛さを味わった。唾内が切れた。血を唾液に混じって吐けば、木の後ろに身を滑り込ません。

「襲撃……！」

セージの顔が引き攣る。

矢による狙撃。もし枝が折れそうにならなかつたら、木に磔にされていた。ミスリルの剣を抜き放ち木の陰から出し、艶やかな表面に風景を映し、様子を窺った。葉っぱしか視認できず。

木の陰から身を出せば死ぬ。

相手にはこちらが見えているのに、こちらから相手は見えていない。

矢を迎撃する手段を、セージははまだ有していない。剣で打ち払う技量も、魔術で守る技術も、無いのだ。

かくなる上は逃走である。

勝てぬのなら、逃げる。意地を張るつもりも、殺し合うつもりも無い。恥も捨てよう。命には代えられぬ。

幸いなことに、湿原には嫌になるほどの草が生い茂っている。木の周囲も同じくして草だらけ。狙撃を一射でも躲せたのならば、相手の視界から消え去ることができた。

時間の猶予はない。

のんびりしていたら、相手が狙撃位置を変えてしまう。

躊躇は一瞬だった。セージは、相手がいたと思われる位置を基準に、木を間に挟む形で射線を遮るように駆け、素早く草の中に転がった。

草を握りしめる。緑の汁が付着した。

「どうした？ 好都合だけど、不気味だ……」

なぜか狙撃が無かった。首を傾げる。

セージは考えることを後回しにした。三十六計逃げるにしかず。後ろを振り返ったのも一瞬、草の根を踏まぬよう痕跡を残さないよう気を配りながら、走った。己の立てる音が、襲撃者の追跡に聞こえて首筋が寒くなった。

立ち止まる。音は無い。勘違いのようだった。

再び駆けだそうとして、あろうことか足をとられて転んでしまった。なんてありきたりな。自分に腹が立つ。フードの上から髪の毛を掻きむしりながら、姿勢を起こし、それを確かめた。

「なんだ……これ……」

セージは絶句した。ミスリルの剣を握る手が白くなった。

それは真新しい人の死体だった。

三人の兵士らしき男が血を流して事切れている。異常なのは、あべき剣や装備品が根こそぎ消えているということ。確信した。敵は物取りだと。

死体を詳しく検分する暇はない。

だが、他に気が付いた点があった。兵士の鎧に見覚えがあったのだ。皮を鉄で補強したそれは、焚火を囲んでいた兵士らの鎧と様式がよく似ていた。顔は似ても似つかぬ別人だったが。

「!？」

草がざわめいた。何者かが接近してきている。疾風のように速い。音源は既に背後にあった。総毛立った。ミスリルの剣を、体のひねりに合わせて振り回さん。

葦の数本が半ばから断ち切れ舞った。ミスリル剣の動作に一拍遅れて、草の中から小柄な影が飛び出した。それは甲高い声を上げながら剣を突き出してきたのだった。

体の回避が間に合わず、頭だけで躲す羽目になった。心臓が縮こまる。

「死ねええ！」

「くうっ！」

切っ先が頬を掠めた。血粒が背後に飛ぶ。勢い余った相手と抱き合うような格好になった。

剣は己の背後。躊躇したら、首を貫かれる。鼻先触れ合う至近距離。頭突きをかます。よろめく相手の腹に前蹴り。ヤクザキックをお見舞いしてやった。堅い感触。服の内にプレートか。

セージと敵対者の距離が離れた。

一斉に剣と剣が振り被られ、半ばで衝突、火花を散らす。歯ぎしり。半歩後退。

二人はほぼ同時に叫んだ。

「エルフ!？」

「子供!？」

相手の姿をまじかで確かめた。ボーイッシュな顔立ちの女の子だった。容姿こそ幼かったが、装備品は弓に剣に血濡れのナイフと、

物騒極まりなかった。

いつの間にかフードがずれ落ちていた。耳が表になり、エルフであることを相手に知られてしまった。隠すことは無意味だった。ミスリル剣を両手で握り、切っ先を相手の顔面に向けた。

この子は生かしておけない。

< 3 3 > 殺し合い (前書き)

人目を避けて迂回路をとったセージに襲い掛かってきたのは、まだ
幼い女の子だった。

< 33 > 殺し合い

“少女”の日常は現代社会から比べれば波乱に満ちたことばかりであった。草を口にし、獣の肉を食らい、熱病に浮かされ、夜中に平原を駆けずり回る。だが、いずれもサイバルという意味での波乱であり、バトルという意味の波乱はさほど無かったと言える。

そう、無かったのだ。

人と命のやり取りをするような波乱は、ほとんど。

己に暴行を加えんとした男を殺害したことを除けば、己の意思で殺そうと思ったことは一度だってなかった。避け、退け、ひたすらに逃げてきた。

だが、今は違った。

己の意思で殺そうと思った。目的を達成する障害物として殺そうと思った。

相手が殺しに来たから殺し返すのではなく、邪魔だから殺そうと思ったのだ。エルフが里を離れてほつき歩いているという情報を漏らされては、今後に支障が出る。隠蔽するに相応しい方法として選んだのが殺害だっただけのことだ。

というのもタテマエなのかもしれない。

本当に冷酷な判断にて殺害を選択したのであれば、手足の震えと汗の量が増えたりしないのだから。

言つまでもないが覚悟などできているはずもない。

「このー」

単純な突きを繰り出す。顔面狙いの素直な一撃を、相手は後退すること躲した。

剣を引かれる前に、女の子はこれまた顔面狙いの横薙ぎを実行した。

上半身を反らす。首筋を掠める。脳裏に過る血しぶきに漏らしそうになる。踏みとどまり、すかさずミスリル剣をがむしゃらに振らん。

剣による迎撃がミスリルの体を抱き留め、鏢迫り合いが発生した。力と力が鬨ぎ合う。ミスリルの強度も、こうなっては意味を成さない。しかも腕力が拮抗しているとあれば、状況はどん詰まる。

噛み付ける距離に顔と顔があった。

どちらも相手を殺そうと鬼のような形相をしているので、見るに見耐えないが。

「エルフ……！ お前を捕えて売れば、私はこんなことしないで済むんだ！」

女の子は眼前のエルフを捕まえる宣言をしておきながら、隙あらば殺害せんと剣を押し。本来なら殺すつもりはなかったが、戦闘に突入してしまい殺す以外の選択肢を失ったのだろうか。

エルフは一般に殺すべきとされているが、一方で“価値”が高い。先天的魔術特性もそうであるが、寿命が長く、それ自体が魔術の素材として利用できる他、肉体の若さが長きに渡って続くこともある。特に女エルフは性的な用途にはうってつけなのである。

それを捕まえ奴隷化して金持ちに叩き売れば一財産築くことは容易い。

エルフと人間が戦争を始めて以降、希少価値はより高まったのだからなおさらだ。

だが、はいそうですか、と阿呆のように捕まるわけにはいかない。殺されたくないし、売られたくも無い。ならばやることをやるだけだった。

剣を押し返す。腰を踏ん張り、叫ぶ。

「なんでそんなこと！」

「金だよ！ 治療費を稼ぐにはお前みたいなのぼせた馬鹿をと捕まえのが一番だろ！ 大人しく捕まれば、強盗も止めてやる！」

「だが断る！」

「ならば死ね！」

両者は同時に離れ、同時に剣を引き、同時に対抗する角度から斬撃を浴びせかけた。

金属音が空高く響かん。剣と剣が衝突した反動で腕が軋む。剣と剣が跳ね返った。見れば、女の子の剣に鋭い凹みが刻まれていた。ミスリルの強度が齎したものだった。

第二撃。女の子が豹のように素早くバックステップを踏むと、腰の血濡れたナイフを投擲した。

不意をついた攻撃は、ミスリル剣の防壁で防ぐことができたが、怯んでしまう。落ちるナイフ。

その隙をついて女の子が左腕を掲げた。武器は何も持っていない。魔術を行使するそぶりもない。不自然極まりない仕草。

一種のひらめきが脳内を韋駄天が如き速度で駆け抜けた。

横っ飛びに地面を転がった。

次の瞬間、左袖から何かが飛びだし草むらに消えた。仕込み武器。射程、威力の不足を補うために毒を塗られていた可能性が高い。もし命中していたら行動不能に陥ったかもしれない。

女の子は舌打ちをし、駆け寄る。と見せかけて右袖の仕込み矢を腕を振り回すように射掛けた。

「う、おっ」

セージは斬りかかろうとして踏み込んだ足に間抜けな舞踏をさせなくてはならなかった。足元に矢が突き刺さる。つんのめりそうになるのを、足位置の調整で防止した。

だが、この動きは決定的な隙を生んでしまった。疾風が如き踏み

込みで至近距離に到達した女の子の下方からの薙ぎがミスリル剣に激しくぶつかって、いずこに吹っ飛ばした。有力な武器は草むらに消えてしまった。ナイフを抜く時間すらない。

第二撃、顔面狙いの袈裟斬り。後ろに倒れることで危なげに回避。第三撃、のしかかって馬乗りの体勢から顔面に向けての突き刺し。

「？盾よ？」

「ちい！」

呪文詠唱。あまりに弱いイメージはしかし、命の危機に反応して一枚の薄っぺらい防御を構築して世界に放った。それは丁度、顔面を守るために広げた腕に付随する形で展開した。剣がそれに垂直にかち当たった。停止。

切っ先が、塵気楼を固めたような力場に押しとどめられ一寸たりとも前進しない。

女の子が全体重をかけても力場を破ることができない。まるで接着されたように引くことすらできない。鋼鉄に突き刺さってしまったように。

セージは、眼前の剣が己の脳味噌を串刺しにせんと押し込まれるのを、他人事のように見ていた。生きているのが夢のようだった。死ねば夢が覚めるのだろうか。目を閉じてみる。暗闇が視界を塗り潰した。

イメージをずらす。盾が徐々に斜めに傾けられるように。剣を誘導するために。直線的な力は横からの力に弱い。

力場が波打ち、変形する。丁度セージの頭の右を下に、斜めになるように。必然的に剣の切っ先は滑り出す。狙いは極めて単純明快。次の瞬間、セージは深く閉ざされた瞼を開いた。

「な　　ッ」

剣が対象を殺すことなく横に滑走するや、地面に深く突き刺さった。引き抜こうにも体と体が密着している為に力が入らない。なにより、まじかで睨み付けてくるエルフの瞳があったから。

セージは術が途切れるより数瞬早く女の子の首を両手で捕まえた。術が風を伴い消えたと同時に、首を腕力の及ぶ限りに締め上げ、体勢を入れ替えて馬乗りになった。女の子の首は柔らかく、楽にへし折れそうだった。爪も立てた。血が垂れる。

「ぎ、ぐ……え……ッ……ふの……せに……」

「し、ね」

女の子もセージの首に手をかけて締め上げた。

首と首の締め合い合戦。お互いがお互いに優位をとろうと葦の中でもみ合い泥まみれになっていく。

魔術の使用　　火炎　　却下。草しかないような場所で使えば己も危うい。

「この……」

「……っ」

セージの意識は遠くなりつつあった。

闘争本能に任せて首を絞め、隙があれば頭突きをお見舞いし、生きる為に息を吸おうと横隔膜に鞭を打った。

まず耳が駄目になった。自分の声が骨伝導で聞こえるのと、呼吸、心拍意外に外部の情報を受け付けなくなった。次に思考が駄目になった。シャットダウン寸前まで処理が落ち込む。

セージは状況の打破を計るべく、一瞬だけ締め付けを緩めた。

「はっ……あー……」

「食らえッ！」

女の子の顔が弛緩し、息を吸ったのもつかの間。空いた右手を拳にして顔面を殴打してやった。鼻血が飛んだ。構わず二発目を叩き込む。三発目を入れる前に、腕を掴まれた。左手を自由にして殴りかかったが、受け止められた。

双方の顔は赤くなっているが、羞恥でそうだったのでない。酸欠と殺意である。

腕と腕が拘束し合い、二進も三進も行かぬ拮抗状態が再び生まれた。

セージは馬乗りと言うアドバンテージを活かすべく重力を加算した力比べに挑んだ。隙あらば首を絞めるかへし折るか。目を潰してやろうとも画策していた。

「てめ……っ」

「しぶとい！」

お互いが徐々に疲労で鈍くなりつつあると言っても、上をとったセージの方が有利ではあった。

女の子の顔が歪む。腕の痙攣が始まっている。筋肉が悲鳴をあげていた。いずれもたなくなるのが目に見えていた。

女の子は一瞬腕の力を緩めると、セージの顔の真ん中に額を叩きつけた。鈍い衝撃。鼻の骨を折るつもりでの攻撃はしかし血を流させるにとどまった。反撃も同じく頭突き。額で受け止める。頭蓋が鳴った。

セージが再び頭を持ち上げたのを合図に、上半身を起こし、跳ね除ける。

セージは立ち上がるうとして、相手の足が攻勢に移行したのを見た。

「この野郎！」

「あっ!？」

慌てて立ち上がったセージの顔面目掛けて右からの蹴り込みが炸裂した。辛うじて腕で受け止めた。打ちつけられた肉が酷く痛んだ。次、正面突きが放たれん。

セージはそれを腕の横捌きでいなし、カウンターの拳を横つ面に叩きつけた。女の子がよろめいた。ボクシングのように右左の連続攻撃を仕掛ける。

「軽いんだよガキんちよ！」

だがその攻撃は女の子にあっさり見抜かれ躲され、逆に腹に腰の捻りを加えた正面蹴りを貰うことになった。吐き気。胃の中身が逆流しそうになる。

体をくの字に折ったところを、女の子が両手を重ねて作った金槌で打ち据えた。

セージはどつと地面に倒れ込んだ。

まるでナメクジのように地面を這いつくばるセージを、ボーイツシユな女の子は鼻血を手の甲で拭いつつ、背中を蹴りつけた。そして踏みつける。

とつた。

セージは体重が背中にかかるのを合図に体を回転した。女の子は足をとられよろめく。すかさず身を半分起こし、腰のナイフで斬りかからん。その頃には距離を離されていた。

「うらあっ！」

「つつ、……ッ!？」

腕に一文字の切り傷を刻む。

続いて、腰だめに構えて突進した。

「……ふん」

女の子はいとも簡単に突進を受け止め、手首を拘束して見せた。だが、それが狙いだっただとはついに気が付かなかった。

ナイフの切っ先が腹に向いていることが重要なのだ。

セージは魔力を絞り上げてイメージを練り上げて呪文を紡いだ。使ってはならぬ場所を使った。

「？火炎剣?!」

ナイフが火炎の塊と化すや、瞬間的に伸長して女の子のプレートを焼き焦がし腹を貫通せしめた。長さなど剣どころか脇差にも劣るものだし、威力は恐ろしく低い。だが、それは貫いたのだ。

火炎に内臓を焦がされてしまったのは、命は尽きるしかない。

「おかあさん」

女の子は悲痛な表情を浮かべ、掠れた声で最期の言葉を述べた。力が抜けていく。後ろにばったりと倒れ込む。

セージはナイフを腰に戻すと、その場に尻もちをついた。

女の子が声を上げずに泣きつつ、己の腹をなんとか治療しようとしている。だが無情にも腹から発生した火炎が身を包み、瞬く間に全身を覆った。絶叫。人の燃える臭いが漂う。

一体の火人形と化したそれは地面を転がり火を消そうとするが、あるうことか周囲の草に引火させてしまった。湿地と言えど燃えるのだ。

「ヤバイヤバイヤバイ……!! ミスリル! ……ミスリル!」

セージの顔色が青信号になる。いい意味ではない。悪い意味である。

水にインクを落としたが如く侵略を開始した火を止める術は既に無く、痛む体を引き摺ってミスリル剣を探すほかに無かった。

ミスリルの強度を考えれば、湿地が燃えた後でゆっくり探しても問題は無かったろうが、本人にそのような余裕は無かった。

奇跡的に剣を見つけたセージは、口の中の血を飲み込み、振り返ることなく全力で駆けてその場を去ったのだった。

< 34 > 巨老人の里、臙に（前書き）

女の子の腹を刺して燃やすという業をやったのけた“少女”は、命からがら逃げだしたのだった。

< 34 > 巨老人の異、臙に

女の子を殺めても吐き気は生まれなかった。

ただし後悔があった。女の子の言葉を思い返すと、母親の為に匪賊にまで身を墮として戦ってきたのだらうと想像がついたから。甘い考えかもしれないというのは本人すら理解していた。

もしも もしも という、甘ったれた考えが頭を過った。

もしも …… 説得できたら。もしも …… 逃亡していた

ら。もしも ……。

だが、全ては過去である。“少女”は女の子の腹を貫通せしめ、燃やした。天地がひっくり返っても死亡は確実である。殺したのだ。命を奪ったのだ。

一人の命だけ奪ったわけではない。女の子の母親をも殺したかもしれないのだ。たった一本のナイフが二人も殺したのだ。

同時に、何も感じない自分も存在していた。

障害を排除しただけ、悪いことはなかったと。積み重ねてきた現実実は倫理観すら摩耗させた。

人殺しの余韻は、血の味がした。

鼻血と口内出血のダブルコンボ。舌は鉄っぽい風味と酸味まみれ。体があちこち痛んだ。腹は鉛の重しを乗せられているようだったし、背中は一ひりひりしていた。鼻も痛い。気道も胃液で焦げ付くようだった。幸いなことに骨が折れたといった怪我は無いようであった。

だが、斬って斬り込み殴り殴られ首を絞めて絞められ蹴りを入れあう死闘を演じたすぐ後に、火炎から逃げるべく疾走してきたツケがまわってきた。焼死を避けるにはこうする他になかった。火の手は人や獣を呼ぶのだ。安全確保のためにはできるだけ遠くに身を移動するのが賢い手段である。

まず足の力が抜け、次に眩暈がした。

良くない兆候である。休息を入れなければまともに旅ができない。湿地を抜けた先の林で、いい場所を探す。

セージは、お世辞にも綺麗とは言えない池を見つけると、そのほとりに腰かけた。水源らしきものが見当たらないことから、雨水が溜まったのだと推測した。水草と濁りのせいで水深を目視できない。飲み水には適さないし、体の汚れをとるには濁りすぎている。無理すればできないこともないが、水筒が十分に水を蓄えている今は必要ない。

ただ座っているのも癪なので、耳を地に付ける体勢で横にならん。こうすることで外敵の接近を察知しやすくなるのである。

体を横にすると眠気が背中を叩いてきた。

戦いの痛みと旅疲れが泥のように頭に覆いかぶさった。甘い誘惑。小鳥の鳴き声がゆりかご。瞳が震える。くすんと鼻を鳴らし、本格的な眠りに入ろうとした。

その時、耳に感あり。太鼓を指で叩くような、軽快な歩調。ハッハッと息遣いを聞いた。

慌てて腰のミスリル剣を引きぬくと、姿勢を低くしたまま木の陰に入る。

「……………犬？」

草むらからやってきたのは、薄汚れた野良犬だった。茶色の毛並、垂れた耳、痩せた足は骨のように思えた。

その犬は周囲を見回すと、しっぽを振りつつ頭を下げて水たまりに寄っていくと、ちやぶちやぶと水を飲み始めた。さすがは野生動物。人間が腹を下すような水でもお構いなしである。

ふと、その野良犬が鼻先をセージの居る木の元に向けた。例え目で見えなくとも、セージの放つ臭いで感じいたのであろう。

セージは警戒を緩めることなく、反撃に移れる姿勢を崩さぬまま木から歩み出た。

野良犬はセージを見ると、ぺたりと座った。へっへっ舌を出した呼吸をし、ゆっくりと尻尾を左右した。そしてごろりと倒れるとお腹を見せて敵対心が無いことを表した。殺そうかと逡巡した。

だが、肉の貯蔵は十分だし、お腹もすいていないし、何より敵対してこないのだから殺す理由も無かった。

歩み寄ると、ミスリル剣を腰に差して、犬のお腹を撫でた。毛並が酷くて指に引っかかったが、獣の体温が心地よかった。ちらりと犬の下腹部を見遣る。雌だった。

セージは犬の頭を撫でた。

「お前はどこから来たんだ？」

犬は答えなかった。

ただ、口角を持ち上げて呼吸するだけだった。浅黒い色の唇に触ってみる。ぶよぶよして新感覚。頬をびろーん。抱きしめてみると、獣が強く香った。

人間慣れしているようだ。どこかの飼い犬だったのかもしれない。犬にとって人間もエルフも同じようなものに映っているのだろうかと思った。

「なあ、俺と寝ようぜ」

犬は大人しく従った。

一人と一匹は夕方になるまで草むらで睡眠をとったのだった。

それから暫くセージは犬と行動を共にした。共に狩りをして、共に水を飲み、共に道なき道を歩いた。犬は良く懐いた。芸を仕込むこともできた。賢いやつだなと褒めると誇らしげに舌を出すのだった。

いつまでも一緒にいけそうな気がしていたある日、犬は別の道に

行こうとした。

どうしても別れなくてはいけないと悟った。犬にだって行きたい場所位あるのだ。もしかすると飼い主を捜しているのかもしれない。犬はとてもきれいな瞳で遠くを見ていた。

「死ぬなよな」

そう言っつてセージは犬に干し肉をやると、頭を撫でて別れた。

一生の内に再会することは無いだろう。例えエルフが長い寿命を持つていても。まさに一期一会。交通機関も通信も発展していない世界では、犬など探しても見つかるものではない。

せつかく旅の相棒を得たのにと、セージは心の隙間を擦った。寂しかった。

巨老人の里までの道のりは大したことなかったのだが、人の数が多すぎた。昼でも夜でも鎧を着た輩やら、目つきの怪しい男やら、明らかに麻薬と思しき葉っぱを売る輩やら、それだけではなく頻繁にいざこざが発生するので進めなかった。

人に会っつては望ましくない結末を迎えかねないとはいえ、進行を夜に限定してしまうと里に辿り着くまでにどれだけ掛かるか分からない。

セージは仕方がなくなつて、身なりを偽装して乞食に成りすました。足を引き摺る演技もした。この際四の五の言っつてられまい。

鎧を着たご一行が去つた後で、ようやく里の近くとも言える場所へと足を踏み入れることに成功したのだった。

当初の予定から約一か月以上の超過であつた。到着まで、さらに遅延した。

「これは……」

セージは成程と大きく首を振つて唸つた。

巨老人の里のすぐ正面。広大な湖の畔にある草むらに身を潜めたセージは、彼方に揺れる明かりをじっと見つめていた。

巨老人の里が要塞化されているという話は正確であり、ただし想像していた構造からはかけ離れていたのだった。

里に向きがあるとすれば、後ろの守りを剣のように尖った岩山が守り、正面を湖が守るというものであった。ただ山があるわけではなく、見張り台があった。ただ湖があるだけではなく、乳白色の霧が帳をかけていた。

地図にはこう書かれている。

この霧は守る者には無いもので、攻める者にはあるものである。

要するにこちら側からは視界が遮られるが、向こう側からは健やかな視界が約束されているということだろうか。

すると人間がどんぶらことどんぶらこと実質目隠し状態で小舟を漕いで行くのだろうか。なんと哀れな。ろくに反撃もできぬまま死ぬであろう。

ならば大型の艦船を作ろうとしても、内陸の土地では材料の運搬で馬鹿にならぬコストがかかる訳である。よしんば造船できたとしても、水深が浅かったら前に進めないという間抜けな事態が発生する。

セージが地図を熟読していると、上空で嘶きが響いた。

すわ何事かと頭上を見遣ると、翼竜が周回していた。目を凝らす。何者かが跨っている。追尾すれば、大きく羽ばたいて霧の向こうに突っ込んで消えた。エルフの里の防衛戦力だろうか。

地図によるとミスリルの剣を掲げて進めとあった。

「……………誤射されないだろうな」

セージはミスリルの剣を一瞥し、ため息をついた。遠目にはエルフと人間の区別がつかないのは当然であり、ミスリルの剣が合図と

して働かなかった場合、殺されてしまいかもしれない。
だがその前に。

「船、どこにあるんだ？」

< 34 > 巨老人の里、臙に（後書き）

修正しました。

<35>湖をこえて

船と一口に言ってもイカダでは渡航には耐えないのではとセージは考えた。

何しろエルフの里を守る湖である。どんな生物が棲んでいるかも分からないし、いかなる罨が仕掛けられているのかも不明なのだ。頑丈な船が入用であった。

船の残骸らしきものは湖に浮いているので回収は比較的容易であったのだが、かなりの数が『二枚おろし』だった。他にも『粉末状』の木が漂っており、手が出せなかった。

なにをどうしたらこのような有様になるのだろうか？

ふと浮かんだ疑問を嚙下し、船を手繰り寄せる手段を模索する。

ようやく発見した船は岸から離れた位置に漂っていた。

縄か何かを入手するか、湖に入水して引っ張ってくるかくらいしか手段がない。いかにして接合するかという点も解決できない。釘も無い以前に工作道具が無いのだ。魔術で凍結させることも検討したが、半ばで溶け出す泥舟では困るので却下した。

いつそのこと湖を迂回して山から登ろうかと考えたが、どうにも止めた。

地図に『通るべからず』と赤い文字で警告があったから。

“少女”は悩んだ末、湖の周囲を搜索してみることにした。無事な船が陸に上げられているかもしれないからだ。

意外にも小船は簡単に見つけることができた。ただしオールが見当たらなかったのも、やむを得ず自作した。木の枝に板切れを括り付けた簡易の品であるが渡航するには十分であろうものが完成した。

そして数日間ほど湖で待機して、人の少なくなつたところを見計らい、岸を離れた。

「なんかいるよな……ネツシーだといんだけど」

軽口を飛ばしつつ、湖に潜む何者かが寄ってこないようにミスリルの剣を上に掲げるセージ。それは水面下を驚くべき速度で周回している。全長は30m以上。視覚だけで得た情報が正しければ、数多くの触手を持っている。

ミスリルの剣を掲げると生き物は怯み近寄ろうとしなくなる。

だが、近寄らなくても、その生き物が水中を移動するだけで不規則な水流が発生するのである。小船は安定性を欠いていつ転覆してもおかしくないほどに動揺した。

まるで遊ばれているようではないか。オールを必死の形相で握りしめて船の安定を取り戻す。剣とオールの二刀流は著しく腕力を消耗させた。先の見えぬ霧の向こうが焦りを生む。

白亜の風景と、一点の変化も見られない水面の中を進むことは、冬山で遭難する前段階に等しい。

人間にしるエルフにしる、視覚を用いて進行するには基準点が必要とする。例えば地面。例えば障害物。例えば方位磁針。霧に包まれた中、目印も存在しないのに一直線に漕いでいくことなど、訓練を積みぬ限り実現しないのである。

逆に、目印さえあれば良い。

セージの接近に反応したか、白い霧の彼方に光が灯った。

それは亡霊のようであった。さしずめジャックオーランタン。地獄にも天国にも行けなくなった口が達者な男が徘徊しているように思えて仕方がなかった。光の元には、途轍もない神秘があるようにも思えた。

光に近づいて行くと、生き物は居なくなってしまった。食べられないと理解したのだろうか。それとも機会をうかがっているのだろうか。

せっせせっせオールを漕いで、光を目指す。

距離感を掴む材料の欠如からか、光が近づけば近づくほどに、厩

気楼が如く遠くに行ってしまうように感じられた。

霧は向こう側からは無いものということ念頭に、フードを取っておく。こうすることで耳を見せつけ、エルフであることを分からせるのである。

一時間？ 二時間？ 霧で顔が濡れるころ、光に変化があった。光の数が2に増えた。そして3に増えるや、10に増えたのだ。オールを握り締め、身構える。ミスリルの剣を掲げることも忘れて、正眼に突き出す。緊張に顔が強張った。人間と勘違いされ攻撃を受けるかもしれないと、足が震える。

やることをやらねば。死ぬのはまっぴらごめんだ。セージは両手を大きく振った。付け根から飛んで行ってしまいそうになる強さで。

「俺はエルフだー！！」

セージの声が聞こえてか聞こえずか、光は一段と数を増していく。10あったのは既に15に達していた。それらは震えながら距離を詰めてきている。

そして、霧が突如として晴れた。幕を引くように。船だった。光の数だけ船が湖に浮いており、いずれも特徴的な長くとがった耳を持った種族が乗っていた。光はランタンだった。彼ら彼女らの船が、まるで氷の上を滑っているように、静謐を伴ってセージの船に寄ってきた。

彼らは一様にロープを着込んでおり、弓矢や杖などで武装していた。男女問わず年齢問わず、多彩な顔ぶれ。

セージは顔の引きつりを止められないまま、ミスリルの剣を差し出した。雰囲気と威圧感に押されていたのだ。

彼らの中の一人がオールも漕がずセージの正面に船を移動させるや、剣を検分し始めた。金色の髪の女性だった。切れ長の瞳、淡い顎の輪郭、あたかも体から燐光が湧き出しているよう。指先の一本

に至るまで白く、白磁の陶器で作られているようだった。

ユニコーン。

脳裏に浮かんだのは、女神様でもなく、誇り高き聖馬の姿。

女性はにこりと微笑みを見せると、剣をセージに返し、優雅な動作で手を差し出した。不覚にも頬に朱が差す。男として照れたのか、女として照れたのかは定かではない。

「……お待ちしておりました。長旅でお疲れでしょう……ようこそ我らが里へ」

セージは彼ら彼女らに連れられて里の中に足を踏み入れることになった。

どうやら事前に通達がなされていたようで、さっそく医者に取り囲まれ、土の香りのする薬　栄養剤を飲まされた。彼らは傷と言う傷を魔術で治してくれた。そして部屋に通されて一晩ぐっすり寝た。

翌日、巨老人に会わなくてはいけないと伝えたと、忙しいので少し待てと言われてしまった。鉱山を奪還するための戦闘準備で山積みらしい。

暇を持て余したセージは、何か手伝えることは無いかと訊ねてみた。タダメシを食らってふんぞり返るほど腐ってはいない。

すると散らばった装備品の回収作業を手伝えと言われたので、さっそく湖と里を隔てる付近へと足を運んだ。

湖と里の境界線はつまるどころ壁であり、多数の防衛設備が仰々しく並んでいる。大型のバリスタもあれば、射手が身を隠す障害物もあつた。用途不明の宝石が備え付けられた見張り台もあつた。要塞という表現が相応しい。

振り返ってみれば、霧が無かつた。澄んだ大気の遙か向こうに己がやってきた陸地が見えた。

聞けば、不定期に訪れる小規模の威力偵察を排除した直後らしい。

戦闘後だというのに死体は無く、血液のみがあった。それは船の破片やねじまがった鎧などを濡らし、湖に注いでいるのであった。酷いにおいであったが、死体が無いので嫌悪感は無かった。

剣、鎧、矢、その他革製品などを手押し車に入れては運ぶ。重労働だった。満載すると転倒の危険性があったので、半分まで積むことにした。

共に作業に当たる男性に死体はどこかと聞くとおもむろに湖を指してくれた。

次の瞬間、湖に巨大な気泡が浮かぶと、鎧が『吐き出され』地面に落下した。湖を渡る際にちよっかいをかけてきた何者かの仕業であろう。

鎧を検分してみれば、強引にこじ開けられ中身を粉々にして吸い込まれたようになっていた。まるで貝殻をこじ開けて身を食べるように。丁寧にも武器などは千切られていた。

あれは何かと尋ねると、さもありません『巨老人のペット』と答えてくれた。

巨老人とは途方もない男だということとは理解できた。

巨老人に面会できたのはそれから三日後のことであった。

< 36 > 巨老人

巨老人の間は厳重な守りが固められていた。里の最深部に位置するだけではなく、物理的魔術的防御を塗りたくった場所にあり、警備の者だけで数えるのがアホらしくなるほどであった。

地形の守りは後ろ山岳前湖。ハードの守りは岩造りの砦。ソフトの守りは歴戦のエルフ。まさに鉄壁である。小船でえっちらおっちら攻めたところで攻略できまい。

久々に歩く岩造りの床はコンクリートのようだった。

気が付いたことがある。扉が異様に大きく、目測にして3mはあろうかというものだったのだ。ドアノブも大きかった。それどころか巨老人の間に来る際に通過した階段の幅も広かった。

言うならば、人間のサイズの一つ上を基準に設計してあるような案内役の女性に頭を下げると、ドアノブを捻る。その手は汗で濡れていた。緊張している。

“少女”は恐る恐る言葉を発した。気難しい人かもしれないと考えてのことだった。

「失礼します……」

汗を服に擦り付けて、再び握り、開かん。そして滑り込むと扉をきつちり閉める。

相手は訪問者を待ち望んでいたようで、部屋の半ばに佇んでいた。否、塔のように聳えていた。

その男は巨大であった。足や腕や胸の筋肉の盛り上がりは岩を並べたよう。豊かに蓄えられた髭は書道に使う筆のようで立派だった。“少女”と比べて数倍はあろうかという身長から発せられる威圧感、熊に殺されかけた時の殺気をも凌駕していた。

だから硬直せざるをえなかった。物理的に占有する空間が広域に

及ぶがゆえに生じるプレッシャーがセージの全身を縫い付けたのだ。元の世界でも病気で身長が高くなりすぎる人はいたが、巨老人はいずれの記憶にも当てはまらなかった。それが当然のようにあったのだ。病気でも、伸び過ぎでもなく、自然に巨大であると。

巨老人はにこりと口角を持ち上げると、のっしのっしと大幅で歩いてきて、手の平を頭に乗せてきた。木の板を加工したような立派な手はセージの頭を包むに最適な面積であった。

頭ががくがくと揺れた。どうやら巨老人は撫でているようだった。腕力の強さ故か、手の広さ故か、頭をぐりぐりやられているようであった。

巨老人の深い低音が鳴った。

「緊張するな。儂がデカイのでびくついたのでだろう？ 素直でよろしい！ 初めて孫を腕に抱いた時も大泣きされたわ」

「いえ、そんなことは」

「又ハハハハ！ よいよい。儂は怖い方が得をするのだ」

「あつ、あの、手紙を長老より預かっています。お確かめ下さい」
頭を上げたくなくなったセージであるが、頭を撫で続けられているのでできなかつた。俯き加減に会話を進める。

「ふむ、わかっておるわ。ミスリルの剣もな。だが急ぐでないわ。ゆるりとな」

セージの緊張を解そうとしたのか巨老人の口調はあくまで柔らかかった。

セージは、手がどいたので面を上げた。巨老人はセージの鼻先を指で突くと、巨軀に似合わぬ機敏さで部屋の中央にある机へと誘った。ついていく。歩調はゆっくりなのだが、一歩が大きすぎて早足にならなければ同じ速度をだせなかつた。

机も巨老人の体軀に合わせて巨大であり、面積だけであればベッドのようだった。椅子などはシャムネコどころかタイガーが座れそうであった。背もたれはまるで板を括り付けたかのような長さであった。

部屋を見回してみれば、巨老人のものと思しき三日月の形状をした剣やら、鉄の塊と称すべき金槌もあり、かと思えば竜の頭蓋骨をまるごと持ってきたとしか思えぬ物体まで飾られている。

あれはなにか。あれはなにに使うのか。訊ねたいことは山ほどあったが、まずは手紙を渡さなくてはならなかった。

手紙を渡さなくては話が進まない。

「ここに手紙が」

「拝見しよう」

セージは荷物の中から草臥れた手紙を取り出し、両手で差し出した。巨老人が受け取った。

巨老人は女性の髪のように長い白髭を指で弄りながら内容に目を通し、そしてセージの方を見た。柔和な笑みと同居するは、最強と名のしれた戦士の瞳。鋭い眼光。

「……剣を」

「ここにあります。お受け取りください」

セージは巨老人の言葉に腰の剣を外すと両手で捧げ持つようにして渡す。

巨老人はその剣をとった。彼の手に持たれた剣は、相対的にナイフのように小さく見えた。抜剣。女神の柔肌が如き剣が露わにならん。魔力に反応したのか表面が揺らいだ。

巨老人は剣の作りをとくと調べ、満足げに唸った。胸がぐっと膨れ上がる。

「やりおるわ……あやつ腕は大陸一番だわい……頂戴しよう。しかし、これでは……セージ……ちゃんの武器が無くなってしまっ
が」

「ちゃんはくすぐったいので呼び捨てで構いません。武器は……
何でも、余っているの」

内心ムツとしたセージであるが、さすがに目上相手に突っかかる
ほど精神的に幼くはない。巨老人はやはり他の人と同じように、ま
せた子だと笑った。

笑顔から一変、難しい色を浮かべた巨老人は、手紙を器用に広げ
直して指の腹で突いた。

セージはごくりと唾をのみ込んだ。

「新しい武器は追って準備しよう……さて、セージ……お前さん
に試練を与えようと思うのだが。手紙によるとくだらんことをやり
たいそうなのでな。許可を出すには受けて貰う。いいな」

「はい。やり遂げます」

「その言葉に嘘偽りはないな？」

「はい！」

「僕は確かにお前の言葉を聞いたぞ。二言は無かるうな」

「……ありません」

「そうか」

巨老人が念を押すので、竜を狩れたとかの無理難題を押し付けら
れるのでは思った。

セージは知らぬ間に増長した己への一種の過信を自覚できないで
いた。今まで来れたのだから何でもできると。それに加え度重なる
戦いは死や恐怖への認識を麻痺させ、己の力すら見失い、無謀なる
猪になっていたのだ。

それを巨老人は見抜いていた。新兵が初戦で戦果を挙げると過信していずれ自滅するのだと。現実を体に叩き込む必要があるのだと。手紙には遠回しな表現で『彼女を止めてくれ』とあった。

セージは強く頷き、承諾した。

巨老人はよく通る言葉を発した。

「何年かこの里で過ごせ」

「え、それは、それは……」

「はいと言えないか？ 遅い。僕の指示に従ってもらおう」
「……………」

それは明白な宣告であった。

セージは主観時間にして二時間は説教を食らった。人間の恐ろしさ。戦の辛さ。現実。甘えの精神。己の力の無さ。一人の行動が他人を苦しめることになることについて。

エルフの放ったスパイの報告書も読ませられたし、聞くに堪えないむごい話の載った本も読ませられた。

里の情勢。死人の数。人間側の戦力。エルフの女の末路。

まるで父親が娘を正しい道に引き戻すように、ひたすら説教をされた。

だが、嫌な気分はしなかった。真摯に自分のことを考えてくれたのだなと思えたからだ。

実感が湧かなかったのも事実である。乾燥した経験が恐怖を麻痺させてしまったのだ。度重なる感情の発露は鈍感を作るのである。まして体感してもいない文面上言葉上のことはリアルの代用品になりえない。

巨老人もそこは承知しており、一つのことを持ちかけた。

それは鉦山を奪い返す戦いに同行させることであった。戦いという死を見せることでセージの現実を取り戻そうと目論んだのである。鉦山は山岳を伝っていった先にあり、道が不便なことから多量の

戦力を送り込めない。それは人間側も同じであるが、引き籠り戦術に持ち込まざるをえないエルフ側と違って、より柔軟に兵力を展開できるのだ。

鉱山を封じればエルフ側の資源を制限することができる。

エルフ側としては鉱山はまさに生命線であり、なんとしても攻略しなくてはいけなかった。

だが偵察によると鉱山入口は既に多数の兵士によって封鎖されており攻略するには犠牲が必須らしい。

巨人にどうするのかと訊ねると、答えてくれた。

地下からだ。

< 37 > 重荷（前書き）

鉦山奪還作戦に参加したセージだったが……。

エルフと人間では捕虜の取り方が偏っているという話を耳にした。エルフ側が人間の捕虜をとる状況と言うのはつまり、屑値で引き抜かれた植民地の人間を捕虜にするということが大半で、王国に対して取引の材料になりえない。捕虜と引き換えに交渉する相手はほぼ植民地となる。

植民地は奴隷同然の搾取を強いられる国であるからに、取引を交わす体力すらない。そもそも重量人物ならとにかく、たかが一般の男など金銭や条件と引き換えにする価値もなかるう。

逆に相手側、すなわち人間側は積極的にエルフを捕虜にしたがる。多方面に利用できるだけでなく、エルフの総人口が少ないすなわち『価値』が高く取り返したがる人が多いからである。

エルフ側は捕虜をとりたくない。捕虜をとって、万が一スパイでも紛れ込んでいたらということもあるし、ただ飯を食わせる余裕もないのだ。

肉体労働 奴隷にしてしまうのは、エルフの倫理観に反することである。悪しき文化を肯定しては、エルフの精神は穢れてしまう。だから戦闘におけるエルフ側の行為は単純なものとなる。

撤退させるか、名誉の戦死を与えるかである。あえて逃がすことすらあるのだという。

セージは己が参加する作戦の概要を説明された時、あまりの残酷さに耳を疑った。なぜやるのかと問うと、偽りの情報を流す為と言われた。

歴戦の勇士揃いの攻撃隊の中で一人だけ子供が居る。片側だけ短い髪型に幼いながらに立派に鎧を着こなした セージである。得物は鉄剣と不釣り合いな大きさの盾。

彼らは里の地下から続く坑道の中を進んでいた。

そう、かねてから掘り進められていた地下道が完成したのである。

これにより危険を冒してまで地上を 行軍することはない。空も使わないでよい。

作戦は、まず地下から鉱山内部へと侵入することが必要だった。

「……本当にやるんですか？」

「お嬢ちゃん、叩けるときに叩くのが戦争だぜ」

「でも」

「デモもカカシもありやしないんだ。そうさね？ ひよいとばかり顔覗かせといて、向こうで蓋閉じておしめえよ。むせえ男と鎬削るのとくらべりゃあ面白くもねーがねえ……ヤらずに落とすのが最良ってことよお」

セージは、中年の戦士 心の中のあだ名は髭オヤジ の後ろにぴったりくつつきながら、答えのわかっている質問をする。

髭オヤジは松明を落とさぬようにしつつ、足元の岩をよっこらしよと乗り越えた。セージが躓きかけると、後ろのエルフが大丈夫かと助けてくれた。

作戦に同行すると言っても本格的な訓練を積んでいないセージでは危険なので、付添い役がつけられた。それが前の髭オヤジと後ろの女性である。

坑道は整備が行き届いているとはいいがたく、天井からは作業に使われた棒切れが飛びだし、地面には腰かけるのには丁度良い大きさの岩が無造作に転がっている有様であった。

鎧、剣、体がすっぽり隠れる盾という大仰な装備を身に纏ったままでは、歩きにくいにもほどがある。関節の可動範囲も制限される。おまけに照明が松明だけとくれば、揺らめく影が目測を誤らせることになる。

土を押しつけて穿たれた坑道は、あたかも竜の腸のようで、己が消化されているのではという疑念が湧いてくる。ありえないと頭で理解していても、一行の発する鎧だとか声だとかのみが幾重にも反

響する最中では、ベッドの下の幽霊と同じ種類の存在を疑ってしま
う。

暫く、坑道のくねりを行ったところで、前から順々に伝言がまわ
ってきた。

髭オヤジは前から聞いたことをセージと付添いの女性に伝えた。

「止まれつてよ。先頭の奴がけしかけるから遅れるんじゃないぞ
？」

「わかりました」

セージは頭を振った。戦闘に備えて盾と剣を意識した。重装備と
付添いそして列の最後尾というところから、戦闘に参加せず見学せ
よということであろうが、心構えが必要だった。

これより戦が始まる。緊張が高まった。

セージは髭オヤジが駆けだすのについていった。

戦はあっけなく幕を閉じた。

それも、セージが戦うまでもなく、途中で引き返す指示を受けた
くらいにはあっけなく。

理由は作戦にある。まず先方隊が坑道の奥から侵入して入口を占
拠している人間らを誘う。次にワイバーン部隊が上空から降り立ち、
入口を落盤に見せかけて完全に封鎖する。最後に先方隊が後退して
坑道を塞ぐ。作戦は終了。あとは中の人間が果てるのを待つ。これ
だけだ。列の最後に位置していたセージは要らないも同然だった。
閉じ込めた戦力を滅ぼし、同時に鉱山が埋まったと錯覚させるの
だ。

手を出さずにして殲滅する …… 出入り口を封じられた人間
の末路など子供にも分かるであろう。

もともと鉱山は石を採取する場であり、食物を生産することなど
できない。都合の良い貯蓄など配置されているわけもない。

セージが仰せつかった任務は戦闘についていくだけではなかった。それは、坑道の封鎖扉の監視である。

「……………やめてくれ……………」

頭と膝を抱えて、耳を服で塞ぐ。鼓膜を突き破れるならそうしよう。耳栓があるなら使おう。場を離れていいのならばそうしよう。だが、指示を受けた相手はほかならぬ巨老人で、扉の前で待つ以外の選択肢がなかった。

金属の扉一つ隔てた鉱山の中から、地獄に落とされた罪人かくやうめき声や罵り合う声が聞こえてくる。それは男たちのもので、すすり泣きも混じっていた。

初日は男たちが扉に殺到して破らんとしてきた。セージは破壊を恐れて報告したのだが、なんとミスリル合金製であり、人力では傷一つ歪みひとつ作れぬと言われた。係のものが去り際にワザとらしく見張りは必要だと付け加えてきた。

四日目からがより地獄に近かった。中の人間、外のエルフにとって。男たちは扉が破れないことを理解すると、懇願し、脅迫し、戦い、絶望して暴れ出した。

中にはセージの見張る扉のすぐ手前までやってきて、やれ開けてくれだの、俺はエルフが好きなんだなの、妻と娘がいるだの、救助を求めてくる者がいた。

言葉を交わしてしまつては情が移る。耳を塞ぎ、一言もしゃべらぬようにした。だが、完全に遮断できるはずもない。彼らの懇願が精神を痛みつけた。

一週間経つ頃、中で兵士達の感情が爆発した。剣と剣がぶつかり合う音。怒号。血しぶきの音。扉が叩かれた。セージは歯を食いしばって体を縮めた。

脳裏に映像が浮かぶ。

鬼の形相をした男たちが食料を奪い合い、剣を交え、殴り、蹴り、

反吐を垂らして……。

そんな兵士たちも、二週間経つ頃になると静かになった。

三週間、四週間、五週間、六週間……。

セージは毎日ねぐらと坑道扉を行き来した。誰かと会話する気力も無く、声をかけられても虚ろな応答しか返せなかった。時の流れは卑怯なまでに遅かった。

六週間目、セージは鉱山内部の『清掃』作業に同行した。

扉を開けると肉の削げ落ちた死体が出迎えてくれた。セージはそれを運んだ。他にも無残な死体が鉱山中に散らばっていた。腐敗の始まっているものも多く、強烈な臭気に嘔吐しかけた。

わずかな食糧を奪いあつたらしく、武器を持ったまま息絶えている死体がかかりの数に及んだ。

中には人間の大腿部を片手に持った死体まであつた。意図的に切り落としたとしか状況からは読み取れなかった。嫌な想像が頭を過った。作業の手は止めなかった。他の作業員が表情一つ変えずに仕事をこなしていたから。

すべての死体を運び出す頃には一日が終わっていた。酷く精神を痛めたセージは食事も口にせず床についた。

夢を見た。

己が扉を開けてしまい、餓死寸前の人間達に犯された上に食い殺される悲惨な夢を。

己の股を割く一物は腐り、胸に伸びる手はいずれも骸骨。首筋を斬られた。血を啜られた。腕を、足を、臓物を、彼らが食い荒らす。目玉を穿って口に運ぶ、男。眼光まさにケダモノ。

冷静になってみれば、夢は夢であるが、見抜けなかった。何しろ感覚は全てリアルそのものであり、臭いも触感も現物と大差なかったのだから。

ベッドから飛び起きる。汗が酷い。頭痛もした。最悪の目覚め。途端に走る恐怖に身を縮めて布団をかぶって、暗闇に逃げた。

その日は一日を恐怖に肩を抱かれて過ごした。食事と排泄以外は

室内で時を潰した。

翌日はようやく外出する気分となり、扉を開けた。すると巨老人の指示を受けたという者が立っており、仕事をやれと言われた。セージは安堵した。ただの本の整理だったからだ。

普通の仕事しかしていないのに、その日の夢も最悪だった。

最初に殺した男と、二番目に殺した女の子が、火炎に満ちた草原でいつまでも追いかけてくる。逃げようにも足が言うことを聞かず歩くことしかできない。捕まっても危害を加えてこないが、ぶつぶつとセージの顔を覗いて何事かを念仏のように呟き続けるのだ。

セージは目を覚ますと声を立てず泣いた。

セージは、ここに至って殺害への罪悪感が蘇り、精神的な重荷に押しつぶされそうになっていたのだ。

いつしかセージは人との接触を嫌い、仕事や勉強（するように言われた）が終わるとさっさと己の部屋に戻って本を読むことに没頭するようになった。睡眠前には、医者から夢を見なくてもよい睡眠薬を貰ってきて常用した。

そんなある日、巨老人からの呼び出しがあった。

< 37 > 重荷（後書き）

巨老人の鬼畜な試練で精神的にヤバイ状況のセージでした。

「さて、儂について言いたいことがあるのではないかと思つのだが、どうだ」

「……………それはつ……………」

「例の作戦についてか、それとも王国に忍び込みたいという希望か？」

「どつちもです」

「なるほど。で、どうする。若さに任せて殴るも良いぞ。儂も昔はやったものだ」

「……………」

巨老人の間。身の丈に整えられたローブを着込んだ巨老人の前に、疲労した面持ちのセージが立ち竦んでいる。

いよいよもって目標と活力を喪失した今のセージには、不満を口にする事ができても反論に展開させることができなかつた。まして殴打などもつてのほか。力不足なのは事実であるし、敵を餓死させる作戦は効果的だったわけで、残る余地は感情論しかないのだが、怒りも憎しみも憤りも矛先を失っていた。

いつそ王国が倒れてくれればいいのにとすら思つてしまう。ある日突然王国内部で反乱が起こって政情不安定になれば望みが叶いそうである。起こりそうにないのが致命的な点である。

セージは押し黙り、そして沈黙し、口を閉ざした。この場において一言たりとも言葉を発せなくなつた。何を言おうと無駄ではないのかと思つたのだ。

氷漬け状態となつたセージに対し、巨老人は髭を弄りだした。

「セージ、お前の目的が王国の魔術を盗むことというのは分かっているし、それ自体が下らんと言ったのではない。お前が無謀な自殺行為をやるうとしたから下らんと言った」

「では、実力を付ければよいのですか？」

「そうだな。一人前の戦士になればよかるう。儂とて何か使命を有する者を束縛するほど頭の固い老人じゃなかるうて」

もしくは

巨老人はローブをはためかせつつ背中を見せれば、腕を組み、言わん。

「王国を倒す……さすればお前の道は拓かれるのではないか？」

それは明白な反抗宣言であった。

セージは思いもよらなかつたであろうが、巨老人の言う通りに王国を倒してしまえばエルフへの弾効は止まるであろうし、魔術の回収も容易となる。

絶句したセージの顔を巨老人はにやりと見遣り、退室を命じた。

その日、セージは武器の運搬作業に駆り出されクタクタになって自室に戻ってきた。

いつものように死人のような表情は無く、部屋で本を読んで過ごすつもりも無くなっていた。

光が見えてきたのだ。より現実的で、エルフに恩も返せる一石二鳥の道が。

王国を打倒すればよいのである。巨老人程の男が口にしたのだから、虚でもなければ言い訳でもあるまい。

強大な力を持つ王国とて無敵の最強集団ではない。領土拡大を狙う王国にいい気持ちのしない諸国が立ち向かっており、それをいまだにねじ伏せられないところからもわかることであろう。

ふとセージは、焦って王国に突っ込もうとしたことを馬鹿だったと省みる自分を発見した。

ベッドの上であぐらをかき腕を組んで目を瞑る。今までのこと、これからすべきこと、総合して思考する。冷静かつ論理的に考えという繊維を糸にしていく。

結論が出た。

簡単なことだ。よく食べ、よく飲み、よく学び、よく鍛え、よく働き、よく遊ぶ。成長が必要なのである。早く帰らなくてはという強迫観念に囚われて物事が見えなくなっていたのだ。目的達成のためには段取りを踏むことが肝要である。何年かかるか不明だったが、確実に歩むほかに無い。

……妄執にも似た？神？への復讐心と、心の傷は消えなかったが。

翌日、セージの部屋にとある人物が訪問してきた。

扉を開けて腰を抜かしそうになった。里にやってきて一番最初に言葉を交わした美しい女性がにっこり微笑みながら立っていたのだから。

最初の感情は驚愕。

「!?!?」

脳細胞がスパークした。

脊髄反射的に扉を閉めて、失礼ではないかと思いつき、再度開く。赤面。じっとり汗が浮く。何を喋っていいか分からず口をパクパクさせる。

女性は口を手で隠し、おかしなものを見たようにニコニコ笑っていた。瞳がきゅっと持ち上がって弓を作っている。

「あらあら」

「あ、あの時の方ですよねっ!？」

「ええ。私はクララと言います。初めましてではないけれど、握手しましょう?」

セージが食いついた。差し出された手を握る。顔が赤く、息も早く、第三者視点では恋する乙女のように見えたに違いあるまい。

相手は笑みを絶やさず、手を握り返してくれた。

セージは度々舌を噛みそうになりながらも、唇を動かした。

「クララさん? わた……俺はセージです! 汚い部屋ですが入ってください」

「お邪魔します」

セージの後に続いてクララが入室する。

セージはクララの座る場所を工面せんとああでもないこうでもないと部屋中を駆けずり回った。散らかった本もさりげなく仕舞う。全てクララに丸見えだったのはご愛嬌。

ようやく準備が整い、椅子を引いてクララをご案内。

クララは楽しげに腰かけた。

「いいのよ、気を使わなくても」

「俺が気にします」

「あらあら。とにかく座りましょう」

「ええ……………」

セージはクララに促されて座った。これではどちらが部屋の主なのか分からない。

セージとしては色々和讯ねたいこともあったが、その前に観察してみた。淀みの一粒子も見られない絹のような肌。柔和な瞳は蒼海色。金糸は艶やかに鏡面が如き滑らかさをもって肩より垂れ、毛先

が内側に向いている。鎖骨の下にある双丘、腰、足、いずれもため息ものの造形美を備えていた。疾しい気持ちは湧かない。彫刻や絵画を鑑賞した時の心境だった。

ユニコーンが化身に変化したとするならば、彼女がそうだった。穴が開くほど見つめてしまふ。美しく、可愛く、安堵できる。異世界に落とされて以来の不思議な感情だった。クララは視線を真っ向から受けた。しかも羞恥するどころか顔を寄せた。

生粋の日本人なら顔が近いと口に出す距離と距離。西洋文化だからであるうか。

「本日はお話があつて来ました」

「なんでしよう」

クララは一拍置くと、

「本日より貴方は私の受け持つ組の一員です。外からやってきたと言つけれど、組制度は分かります？」

「はい。学校みたいな制度ですよ？」

「正解です。手続きで時間がかかつてしまつて……ごめんなさい」
「構いませんよ。楽しみにしてます」

セージは心の中で納得していた。クララの醸し出す雰囲気や会話の運び方は教師のそれだったからだ。中学校の頃の世話焼き女性教師を思い出した。

ただし、教師と言えば教師なのであるが、いかんせんしっくりこない。クララを前にして感受する情報は教師という枠でくれそうにないのである。腐れ縁の親友と幼馴染を『友人』の枠でくれなように。

「それにしても、船であつた時と印象違いますね」

「あのときは私が緊張してました。どんな人が来るんだろうって。まさかセージちゃんみたいなかわいい子が来るなんて思ってたんですけどね」

クララが恥ずかしそうに頬を手で覆う。外見は立派な大人の女性である。が、仕草は年頃の娘だった。

一転してクララは真面目になった。

「さて、セージちゃん。話を戻しますね。組についてのお話なんですが」

「はい」

その後、組に関する事について一通り説明を受けた。学校と大差ない仕組みであったが、元の世界とは違って魔術やら戦闘訓練やら狩りやらを教える時間が設けられていた。

他にも、組の指導者 すなわち教師役の人の指示で里の仕事をこなすのであるという。

この世界において子供は労働力である。日本でも一昔前では子供も大人と働くのが当たり前であった。

話を聞いていて、セージは一抹の不安を抱いた。エルフの社会に溶け込んでいくのはいいが、王国の魔術で元の世界に帰還するという目的を果たせなくなりそうに思えたのだ。

里で暮らすというのは、一つの使命を胸に里から里を放浪していた少女という、ステイタスの喪失に繋がらないだろうか。里で日々を過ごすうちに、王国に近づく機会を掌から取りこぼすことになるのではなからうか。

王国が倒れた時の事を想定してみよう。

すっかり里に慣れた、なんの変哲もない“少女”が王国の技術で元の世界に帰りたいたいと意味不明な事をのたまっても、周囲は相手にしてくれはしまい。何年も経過したら、元の世界に帰るとい主張

も色褪せてしまう。

ふと、一つの閃きがあった。

里で実力を付けていけば、王国に近づけるかもしれない。例えば攻撃隊に参加するなど。

話が終わった。クララは、すっかり考え込んでしまったセージの手を握った。

「セージちゃん。あまり思いつめては駄目よ」

「俺は大丈夫です」

「本当に？ …… 鉾山のこと、聞いたわ」

「大丈夫です」

「お医者様にお薬貰ってることも、聞いているの」

セージは口元を無理矢理引き上げた。疲れた笑みだった。外見にそぐわぬその表情は、姨捨山に放置されて絶望に暮れる老婆のようでもあった。

「…… お見通しですか？」

「ええ…… 個人的な問題に首を突っ込むのは良くないことだけれども……」

クララが言葉を切り、セージの手を両手で包み込んだ。

記憶が染み出す。遠い昔とは言えない、少し昔のことだ。帰宅してすぐにご飯を食べようとしたら、手を洗うように言われた事。なかなか寝付けないと訴えると、手を握ってくれたこと。

「これから私たちは“家族”になるの。辛いことはなんでも話して欲しいの」

やっとセージは悟った。

この人からは、母親を感じるのだと。

クララと目を合わせる。海を覗き込んでいるような澄んだ色の青が、セージの瞳をとらえて離さない。手も、離さない。

手を握るだけではなくて胸に抱いてほしい欲求が生まれた。頭も撫でて欲しくなった。理性でぐつと堪える。母性を感じても、まだ会って日数の浅い人なのだから。

甘えたい。その衝動が胸を締め付ける。

セージとてまだまだ子供。元の体の時が大人になり切れない年齢で、現在の体は母親に甘えていても不自然ではない幼い体。精神が体に引きずられたとしたなおさらである。

戸惑い、堪え、それらを総合して苦悩の顔をするセージの手を、クララが握り、そして撫でる。

セージは緊張で足が貧乏ゆすりし始めたのをぐつと筋肉で制動し、唇を舌で濡らすと、そつと視線を己とクララの手のつながりに落とした。

……さあ、懺悔の時間だ。

セージは何から何まで全てを打ち明けた。

包み隠さず、この世界に落とされたときから、巨老人の里に至るまでの一切を。

荒唐無稽奇妙天烈な話が続いてもクララの反応は極めて真面目だった。笑うことも、指摘も、一切せずに話に耳を傾けてくれた。人を殺した話の時に限ってクララに動揺が走った。それでも頷くだけで、話をきちんと聞いてくれたのだった。

口を動かしていると、心の淀みが栓を抜いたように消えるようだった。

一通りの事情を嘘偽りなく話したセージは、疲労の溜まった肺の空気を入れ替え、視線を上げた。青い瞳と瞳が正面から向き合った。

「……という訳です。だから私じゃなくて俺です。信じてくれとは言いません。ですが、俺は正気です。頭がおかしくなって嘘の話をでっち上げたと言われたら、証明する手段なんてありはしませんが」

セージは自嘲を込めた笑みを口元で燦らせ、続く言葉を飲み込む以前に考えなかった。

クララはセージの手を擦ったまま、黙り込んでしまった。視線もピントが遠くに合っていて、セージを見ていない。正気と疑っているのか、それとも考えのつかないことをしようとしているのか、“少女”には判断がつかない。

居心地の悪い沈黙が一分を支配した。

やがて、クララが顔を上げた。そして口を開いた。

「信じるわ」

「えっ……」

セージはクララの手を握り返し、掠れた吐息をあげた。

ありえないことを聞いた。耳を疑う。正常。次に頭を疑う。残念ながら自己診断はあてにならない。

だから質問を投げかけるのだ。隠しきれない期待を込めて。

「どうして……？」

「セージ君は嘘をついているように見えないわ。もし嘘をついていたとしても、私は信じる」

クララが言葉を切った。掌を離し、慈しむように手の甲を撫でる

と、人差し指を曲げてセージの目元に伸ばした。理由はごく単純明快。クララは目の前で泣く者を放置しておける心の持ち主ではなかったのだ。

セージは呼吸の間隔すら乱さず涙を流していた。目を真っ赤にしているのにも関わらず表情が平坦というアンバランスさ。本人すら気が付いていない。

クララはその水気を指で拭き取ってあげた。

セージの肩が震えた。目元を指で触られるのは想定外なのと、己が涙を流していると自覚したから。

「理由は……そう……私は信じたいひとを信じるから……じゃ不足？」

クララはそう言うと、ハンカチを取り出してセージの顔を拭いた。

「泣いちゃだめ。男の子でしょう？」

「……むぐ」

セージは顔を大人しく拭かれることにした。

ハンカチが退いても目の赤さは残ったが、涙でぐしゃぐしゃな顔は消え去っていた。後から後から溢れる分を除いて。

セージは無言でハンカチを求めた。クララが寄越してくれる。顔を隠す。涙を拭いているだけだ。泣き顔を見られたくない訳ではない。言い訳が心の中でだけ響く。

クララがセージの肩に手を置いた。

「人を……殺めてしまったことは、言い方は悪くなるけど今後の為になるわ。証拠も、目撃者も居ない。ほぼ自己防衛。忘れてはいけないけれど……この乱世、あなたのやったことを責める人はいないわ」

クララの言うことは現実的であった。乱世を生きる女性の倫理観では、以上のような結論が導き出されるのだ。戦って武勲を上げることが推奨される世の中で育てはそうもなる。快樂の為に人の命を奪う殺人鬼に成り果てたら、擁護のしようがないが。

黙ってハンカチで目を擦る、セージ。涙は止まっていた。

「帰る算段はあるの？」

「……はい。王国が吸収した魔術が世界を渡る術だったそうです。それを使って帰ります。俺は、その為に王国を倒したいと思っ
ます」

「……強いよね」

「弱いです。死んでもおかしくなかった」

目に宿るは強固な意思。妄執の位に昇華したそれは、いかなる者に諭されようが曲がらない鉄板になっていた。

巨老人の説教も、最終目的を諦めさせるに至らなかった。

経緯 心が現在に至るまでの を知らぬクララには、セージが強い意志で行動する強き者に映った。彼女は頬に手を当て、ほう、と息を吐いた。視線がぶれる。考え事をし始めた合図。

「そう……時間がかかってしまっわね……」

「いくらかかって構いません。やると決めたらやります」

セージはハンカチで涙を根こそぎ拭き取り、小さくたたんで胸元に抱いた。洗わずして返却するつもりはなかった。そのことを伝えると律儀ねと言われた。

その後のセージはクララとひたすら話した。辛かったこと、楽しかったこと、世間話、など。

他人との接触到に飢えていたのだろう、“少女”は貪欲だった。些細なことでも楽しげに反応した。相手が好きなこともあつてか表情も生き生きとしていた。

話すべきこと、話したいことの全てを吐きだしたころ、クララと別れることになった。

最後にセージは頼みごとをしてみることにした。口に出すのが躊躇われ、羞恥に顔を染める。何度も舌を噛みながら、手を広げて、目を瞑り、言わん。

「クララさん、……っ、ぎゅ、ぎゅっとしてください！」

「あらあら。いいわよ」

クララはドアノブから手を離すと優美に振り返った。小首を傾げて、セージに温かい視線を送らん。緩やかに歩み寄り、セージの肩に手を置くと、そっと引き寄せる。そして腕の中に包み込んだ。

セージは腕を背中であらし、抱きついた。温かい。柔らかい。花の香りがした。

頭を撫でられる。不意に、胸の中で眠りたい衝動に襲われる。なんとか堪え、別れの挨拶代わりに顔を押し付ける。女性の体の柔らかさに驚いた。いずれ自分もこうなるのかと考える。

それから、ゆるりと二人の体は離れた。

セージが手を振れば、クララも手を振り返す。

「いつでも相談してね」

「はい！」

「元気ね。それじゃあ、また明日」

そうして、クララは去った。

手や胸に残る余韻が温かくて暫し佇む以外の事をしなかったセージは、突如として頭を掻き篦り、ベッドにドロップキックで飛び込

むや枕を蛸殴りにし始めた。腰と腕のひねりを込めた強力な拳が突き刺さる。

「くそつくそつ！ 馬鹿！ 馬鹿！ 恥ずかしい！ 恥ずかしい！
ぎゅつとしてくださいじゃねーよ！ 何がぎゅつとだよ！ あ
ー！！！！ あー！！！！」

悶える。枕を顔に当ててベッドを転げまわる。今になって羞恥心が噴火したのだ。何をやったか。ぎゅつとして。抱擁を催促したのだ。あるうことがクララに。

「きいいいい！」

絶叫しつつ布団相手にプロレスを仕掛ける。関節があると想定して絞めに入らん。次に拳を叩きつけて転がる。勢い余って床に転落してしまった。しかも頭から。
ゴツ。鈍い音。

「おおおおお……………」

頭を抱えて悶絶する。

半分程蹲っていただろうか。やっと引き潮を迎えた痛み尻を蹴飛ばし、立ち上がると、おもむろに布団と枕を整える。体を動かしたせいなのか額に汗が浮いていた。

そしてセージはベッドに腰掛けると腕を組んだ。眉に皺が寄る。指が落ち着きなく往復して皮膚を叩く。

どうにもしばらくの間は剣を使った訓練ができそうに無い。夢を見ないで睡眠できる薬は常用するしかないであろう。さもなければ悪夢が待っている。となれば、やることは限られてくる。

「まず、勉強しないと」

セージは前向きな発想ができるまでに気力が回復していた。それほどまでに、クララの影響は大きかったのだろう。

もし、クララと出会わなかったら、一日中部屋に籠りっきりの生活を続けていただろう。

体を動かかせないのなら頭を使えばいい。図書館から借りてきた本の中の一冊を手取る。題名は『魔術の心得』だった。

< 40 > 兄と妹が似た者同士とは限らない (前書き)

クララと勉学に励んでいる時のこと。

雑談の中で、クララに兄がいるとわかった。

<40>兄と妹が似た者同士とは限らない

勉強は組の皆と共にやった。基礎教養はもちろん、魔術、数学、天文学、文法、論証など必要とされるものを毎日きっちり学んだ。数学や天文学に関しては驚くべきことに現代と大差ない水準であった。記号や計算法こそ違えど内容は現代の数学そのものだったし、天文学では地動説がすっかり認識され、星の大きさの計測まで行われていた。

水準が高すぎるせいなのか勉学は難しかった。段を登る形式で学んでいくとはいえ、元の世界とは違った内容ばかりで苦戦する。本当に年齢にそぐう難しさかと疑った。

セージは頭がさほど良くなかったので、クララと居残り授業を何度もすることになった。

里は技術水準でも外の人間世界とは違い、原始的な爆弾の研究まで行われていた。案外、一番最初に銃を製造するのはエルフかもしれない。

セージは己の知識を役に立てないか考えたのだが、思想や発想以外はゴミ同然だと気が付いた。

現代人は科学や技術に優れているという印象があるであろう。本当だろうか？

例えば我々が目の前に機械式腕時計をポンと出され、テンプを直せと言われたらできるだろうか。例えば乗用車のエンジンが故障したので直せと言われたら、修理できるだろうか。

答えはノンである。腕時計、乗用車共、いずれのどちらにしても、修理するにはきちんと知識と経験を身に付けなくては、複雑怪奇な機構に白旗を振ることになる。

よって、セージの知識が役に立つことと言えば、技術やノウハウや物的面の必要のない、思想や発想ということになる。

問題となるのはたかが子供の意見に誰が耳を傾けるのかと云うことである。こればかりは解決することはできないであろう。

と云うことで、その知識の披露の場になったのは、クララとの勉強会であった。

元の世界のことについて 特に人口の話をする、驚かれた。当然である。島国に一億人が犇めいて日々を過ごすなど、この異世界においてはありえないことだからである。

だが、いくら話せど虚しさが振り払えない。

元の世界の事を話せば話すほど離れている気がしてならないのである。肉体的、精神的、そのいずれもが。儂は昔戦場にいたのじやと語るおじいさんの同類になってしまいそんな予感すらする。

「ふっー!」

嬉しい。手を叩く。羽ペンを走らせる。蛇ののたくったような文字がインクの造形として現れる。

問題の解答をじっくり見て、ロジックの破綻が無いかを確認すれば、誇らしげに羊皮紙を一回転させて目の前に座っているクララに差し出す。

クララは羊皮紙を受け取ると、白い指を各所に行ったり来たりさせ、合否の判断を下す。すなわち柔らかな笑みと頷きと言う形で。

「正解。よく頑張ったわね」

「っしやあ!」

思わずガッツポーズを決めるセージを、クララは不思議そうな目で見遣る。

「何かのおまじない?」

「これは、元の世界で喜びを表現するジェスチャーですね」

「不思議なポーズをするのね。格闘技みたい」

「その発想は無かったです」

「そう?」

「ええ」

このように、元の世界では当たり前のように通じたことが通じないことが多々あり、その度に教えてあげるのである。咄嗟に口が出る固有名詞などもクララを含めて理解できない人が多いのが普通である。

説明も面倒なので元の世界の単語は口に出すまいとしているのだが、無意識に出てしまうときや、ガッツポーズなどの仕草はどうしようもない。

「そうそう、忘れるところだったわ。セージ君に会いたって言うてる人がいてね」

「へえ……俺にですか?」

雑談の中に出てきた話題に、セージは興味を示した。会いたい人は数多くあれど、逆に会いたいと求めてきた人はほぼ居なかったからである。

クララはウーンと喉を鳴らして前髪を梳いた。彼女の顔に躊躇が浮かぶ。それやがて苦笑いに変わった。

「しつこくしつこく聞いてくるものだから……兄さん……」

「クララさんってお兄さんがいたんですね」

「そうなのよ。兄さんったら外から来たって単語に弱くって、連れてこないと絶食してやるぞって聞かないのよ」

「絶食ですか?」

「ええ、半日絶食するって」

半日食べないのを絶食とは言わないですよ。おかしいですよクララさん。喉まで出かかった突っ込み文句を咀嚼して胃袋に流し込む。美味しくない。

「……半日ですか」

「半日よ」

「半日ですか」

「半日……よ」

なぜか顔を見合わせる二人。

クララですら苦笑いを浮かべる兄とはどんな人物なのだろうと不安になってくる。

詳細を訊ねるのはばかれるので、止めておいた。が、好奇心が早くしるとうるさいので居場所を聞き出した。怪しげなもの、危険なものほど、男の子の心を攪るものである。体は女であるが。

翌日、セージは里の中にひっそりとある牢獄のような場所に足を運んだ。

牢獄のような、であり牢獄ではない。理解はしているのだが、他の部屋が木製の扉であるのに対し、この部屋に限り鉄製であったのだ。

おまけに扉の左右には悪趣味を極めた造形の鎧が仁王立ちしており、あたかも地獄の門番のようにこちらを睨みつけてくるのである。扉の上には水晶の球が据え付けられており、意図の不透明さが不気味を助長した。

とりあえず、エルフが居ることに間違いはない。なぜならクララの兄だからである。間違ってもエルフのような何か別の生命体を兄として認識していることはあるまい。ないと祈りたい。

何はともあれ外に人が居ると知らせなくては中に入ることはできない。

戸に備え付けられたノツカーを使おうとして触る。金属的な粘り。背筋が逆立つ。嫌悪を堪え、数回叩く。

「……………留守？」

反応なし。再挑戦。強めにノツク、コンコンコン。

「あのーすいませーん！ ……セージっていう者ですけどー！ ……あのー！」

セージは手でメガホンを作ると、室内に届くように声を張り上げた。

“少女”は気が付かなかったであろう、鎧と水晶に微かな変化があったことを。部屋の主はとうの昔にセージの姿を認めていたことを。

出会えないのなら時間の無駄である。直そうと扉に背中を向けた。次の瞬間、鎧の兜がぐるりとまわってセージの背中を捉えた。そして水晶が鈍く発光し、円形の何ものかを投影した。

「……………？ ……つうえええええ！？」

物音に気が付いた。無感動な顔で振り返ってみれば、鎧の顔がこちらを見つめているのと、水晶に人の目玉と思しきものがくつきり映っているところが視界に入った。

それだけならよからう。悪いことに、鎧が二体揃ってセージに手招きしたのだ。

流石のセージも、鎧が動く、水晶に目が映る、といった事象を予想できず腰を抜かした。叫ぶ。地を這いずる。立ち上がるうとしてしじめる。

『おや、あまり驚くなよ。お楽しみはここからだ。ようこそ俺の部屋へ』

水晶から悪戯っぽい掠れ声が漏れ、眼球が数回瞬いたかと思えば、鎧らが手招きを止め、扉へ誘うかのように背筋を伸ばして直立し、微動だにしなくなった。

腰を上げる。お尻の埃を払い、水晶の向こう側でこちらを窺っているであろう男を睨む。すると目玉が瞬いて消えた。水晶から光が抜けた。

一歩前に進み出ると、あるうことか扉が下にするすると滑り降りた。啞然とした。扉自体が押して開く形式の格好であったのに、下降したのだから。防衛上の為であろうか。

これは世に言う自動ドアではないか。

ともあれ、セージは中に入った。

入室に合わせて扉が閉まった。いかなるカラクリが内臓されているのか見当もつかない。一拍置いて、暗闇の向こう側から光る石をランタンにつめた照明器具が左右に揺れながら接近してきたのだ。た。

目が暗闇に慣れていないせいで、ランタンしか見えない。瞬き。ぼんやりと輪郭が浮かび上がった。

「やあ、君が愉快的な経歴を持つという女の子かい。初めまして」

その男は一目に不健康と分かる容姿をしていた。ブロンドの髪を短く切り揃え、優しい目つきと顔立ちはなかなかのいい男であるが、青白い肌と頬のこけが台無しにしていた。体軀も骸骨を思わせる細さであり、服の上からでも骨が透けて見えてしまいそうである。

暗闇の中に浮かび上がった姿は、三途の川の岸辺で船を待つ死人を思わせた。

男は視線の先に気が付いたらしく、袖を捲って腕の細さを見せつ

けた。平均的な女性よりも細い。

「生まれ付きなのだよ。病弱な星の元に生まれた運命さ。自己紹介が遅れたな、俺の名前はロウという。しがない穀潰しだ」

男は言葉を紡ぐと、覚束無い歩調でくるりと踵を返し、カンテラを揺らしながら幽鬼のように部屋の向こう側に進んでいった。すると部屋の各所に配置された光の岩がぼつ、ぼつ、と明かりを吐き出し始めた。

部屋には興味深いものが並んでいたが、興味を発散する前にあいさつをしなくてはいけなかった。

「俺はセージと言います」

「セージ……いい名だな。本名ではないにしろ」

「そこまで聞いていたのですか？」

「無論。妹に全て吐くように言ったのさ。さてと、どこにやったかな」

どうやら、クララはセージがこの世界にやってくるまでの経緯について話してしまったようである。口ぶりからして強引に聞き出したか。もしこの場で『お前頭おかしいんじゃないか』と馬鹿にされたら、クララとの関係が微妙になったかもしれないが、相手に理解がありそうなのでそうはならなかった。

ロウは、セージと会話はするものの顔を合わせず、部屋の隅に鎮座する大きな机を占拠する羊皮紙の束をひっくり返す作業に没頭した。

山の中から文字の欠片ものっていない羊皮紙を取り出す。繊維のくしゃげた羽ペンを同じく取り出し、インク瓶の蓋を開けてペン先を乱暴に突っ込み、足だけを使って椅子を引き寄せ座れば、下敷き代わりの薄い鉄板を床から拾って膝に乗せた。

その目つきたるや青白い肌とは対照的で、どこにあったのかというほど血が集中し、血管の走行が浮き彫りになって狂気すら発散していた。知識に飢えた獣がここにいた。

「座りたまえ、是非お聞かせ願おう、異世界の風景を……！」

「は、はい」

「早くッ！ 椅子はそこにある！」

「わかりましたあ！」

セージは完全に気圧されてしまった。

部屋にあった奇天烈な加工の施された椅子に腰かけると、故郷の母親も泣いているぞと諭される容疑者のような面持ちで知識を吐き出していくのだった。

< 4 1 > 後ろは見えませんが (前書き)

ロウの頼みで湖に向いたセージであったが……。

< 41 > 後ろは見えません

羊皮紙は一枚だけでは不足であった。

ロウは、目にも止まらぬ早業で机の上から羊皮紙の切れ端を引つ張り出してはペンで殴り書いた。

今まで里の外にすら出たことのなかったロウにとって、異世界からやって来て里の外を放浪してきたという人物の話は、黄金やミスリルに等しい価値を有していた。

ロウにとって話の真贋はもはや屑鉄のように価値の無いことであった。嘘でもよかったのである。セージがこの世界生まれこの世界育ち魂含むでもよかったのだ。

セージはありとあらゆる話を出尽くし、うんざりした顔を隠さずでいた。

少なくとも数時間は話し続けたのだから止むをえまい。

一方でロウはぶつぶつ怪しげな言葉を口で籠らせながら、ペン先を狂喜乱舞させては羊皮紙に文章やら記号やらを書き殴っている。

促されるまま、知識と言う知識を吐き出す。科学、社会構造、歴史……そこからロウが指示するままに話を展開させていく。さらには漢字や英語などの文字も書かされ、こちらの世界の言葉に対応もさせた。

ロウが、集中力と眠気が限界にやってきて檣を漕ぎ始めたセージの肩を小突く。

相手が子供だろうと容赦しないたちらしい。

「起きるんだ……まだ夜は長いぞ」

「うう……勘弁してください、もうホントに……」

セージは帰宅を希望した。

しかしこの男、ノリノリになり過ぎて状況が見えなくなっている

らしい。顔も割れよと笑えば、肩をばんばん叩いてくる。ものすつごく痛い。

「安心するんだ。今日は俺の部屋に泊まるといい」

「そんなあ」

ロウは新たな羊皮紙を取り上げると、セージに地球の大陸図を描かせるのであった。

結局セージが解放されたのは、心配になって様子を見に来たクララによってであった。

クララに頭を引っぱたかれるロウというとんでもない光景を目にしたのはここでは割愛する。

翌日。

謝罪をするので一度来てほしいと伝えられたので、今度は強行突破で帰宅も辞さない構えでロウの部屋に行ってみると、仰々しい鎧は恭しく頭を垂れて立膝体勢となっており、既に扉は開かれていた。中に入るまでも無かった。部屋の前でロウが待ち受けていたのだから。

ロウは相変わらず不健康そうだった。

「昨日は申し訳無かった……知りたがり病を発症してしまったのだ。お礼にとは言ってはなんだが、とあるツテで入手した蜂蜜をやる」

そういつてロウは申し訳ないと軽く頭を下げ、ポケットから小瓶を取り出すと、セージ手渡した。砂糖が本格的に製造されていないこの世界では蜂蜜は砂糖と同意義である。採取が難しいことから貴重品である。

セージは頬を膨らませつつも、小瓶をさっと手に取って大事そう

にポケットに仕舞い込むと、腕を組んだ。貰えるものを貰えるだけ貰ってやるつもりであった。

「まだ足りません」

「ム、そうか。すまないが品切れだ。そうだな……俺の作ったアーティファクトの中で好きなものを持って行ってくれ」

「アーティファクト？」

「アーティファクトだ。俺の作ったガラクタどものことだよ。好きなものを選んでくれ」

そう言うとロウは部屋の中に入っていった。セージが追いかける。自動で扉が閉まる。

部屋の中には確かにあらゆる代物が複数乱雑に転がっていた。さぞさん悩んだ挙句、魔よけの効果があるという指輪を貰った。他の物は爆発しそうな気配がしたのである。

ロウは、さっそく指輪をはめるセージを見て、頼みごとをした。

「これも何かの縁だ。一つ、頼みごとを引き受けて欲しい。謝礼はする」

「なんででしょうか」

セージは何気なく指輪に触れ、視線をロウにやった。

ロウはそれこそ夕飯の献立を伝えるが如く自然さで頼みごとを言う。

「湖の化け物の体液を採取してほしいのだ」

「……………はい？」

これがRPGで言うクエストか。

セージはあっけにとられ、素っ頓狂な裏声を上げた。耳が狂った

のだろうか。怪訝なを通り越して嫌悪を浮かべる。眉に皺を寄せ、記憶を手繰り寄せる。

水面下より忍び寄る何者か。鎧を何かでこじ開けて中身だけ食するアレ。多数の触手を持つ巨老人のペット。

無意識に指輪を握っては離しをしつつ、質問をする。

「食べられちゃいませんか、あれ凶暴そうですね」

「皆そう思い込んでるだけだ。あれは賢い生物だぞ。言葉も理解するし、格上と認めた相手の言葉に従う知能がある。そうじゃなきゃ巨老人が飼うなんてことはせんで退治している」

「で、食べられちゃわないんですか？」

「安心するといい。俺も何度か接触したが食われてないぞ。両腕も両足もある。そうだここに来るときに船に乗っただろう。突かれなかったか」

「それはもう、船がひっくり返るか」と

「遊んでいるんだよ、あれでも。体躯がデカすぎて遊びの規模が大きすぎるだけさ」

話を総合すると、怪物に接触しても食われることはない。安心して体液を採取してこい。だそうである。

だが、肝心なことを聞いていなかった。重ねて質問せんと。

「体液ってどこのですか？」

「触手の中でも口の中の中でも構わんよ。たまに体の寄生虫取りの為に岸辺で寝てる時もあるから、その時を狙うのも良い。呼べば出てくることもあるぞ」

そしてセージは、もう一つだけ質問してみることにした。

「その体液って何に使うんですかね」

すると口ウの顔色が変わった。あからさまに動揺しているのが見える。頬は引き攣り、視線は彷徨い、細き指先を組む。

「実験さ……そういうことにおいてほしい」

「やることはやりますから、どんな実験か教えてくださいよ」

「……大人には大人の都合と言うものがある……なあわかってくれよ」

「……ふーん。俺に隠し事しなくちゃいけない実験なんですか。いいですけどね、別に」

頑として内容を語ろうとしないので、諦めた。時間はもつと有効に使うべきだ。どうしても言いたくないなら、どんな手を使っても言わないであろうから。

できれば内密に頼むぞと念を押され、金属製の容器を手渡されたセージは、さっそく湖に降りた。監視員は日が暮れる前に帰ってくるようにと言ってきた。

湖は穏やかで、風で水面が波打つ以外の動体が存在しなかった。セージはただ作業するのも癪だったので、手ごろな平たい石を水面に投げて遊ぶことにした。手首のスナップを効かせて投げる。岩が回転しつつ兔のように跳ねる。そしてしぶきをあげて沈む。

しばらく石を投げることに没頭していたが、飽きてしまった。

怪物の痕跡を辿ろうと岸边を歩いていく。回収しきれなかったのだろうか、鉄の破片や槍のような棒が地面に突き刺さっていた。

怪物の名称が分からず、暫定的な名前にて呼んでみる。

「出てこーいかいぶつー！」

行ったり来たりを繰り返す、怪物の姿を目視せんと試行錯誤すること一時間。結局、影も形も認めることは叶わず、歩きつかれたセ

ージは岸边にあった大きい岩に腰かけて休息をとった。

「おいでてこーい！ ……うーん、言葉が分かるって言ったって、聞こえてなくちゃ意味ないんじゃないかなあ ……」

手のメガホンを用いて呼びかけてみるも、反応はない。

セージは腿を土台にした両頬杖をつくとき、眠たそうな視線を湖の遙か彼方へと向けた。爽やかな風が顔面を洗う。鼻腔を通る新鮮な空気が睡魔を呼び込む。瞼が垂れていく。杖が壊れ、前かがみになって睡眠へと落ちていく。

その時である。

水面に二本の突起が出現すると、音も無く、波紋すら立てず、岸辺に向かつて滑り出したのである。

風の音に紛れて微かな水音はかき消される。

突起二本はグロテスクな光沢を放っており、人間の舌を棒状に成形すれば出来上がるであろう質感であった。先端には四つの切れ目の走った花弁状の構造があった。

それは、獲物を狙う蛇のように“少女”の足元に忍び寄り、探りを入れる。

先端がパツクリ割れたかと思えば、粘液を引きながら四つに別れた。ではなく、内部に収まっていた球体を外気に晒した。

白と黒のそれは、人間でいうところの眼球と同じ構造を持っていた。

二つの眼球が、セージの顔の直前まで迫り、ぎよるぎよると観察する。顔を覗き込み、背中にまわって至近距離から見つめて、足と足の間に入って真下から視線を送る。

「ん、んー？」

セージの喉が鳴る。瞼が震えるやきゅっと窄まった刹那、瞳が開

いた。当然、怪物の眼球は見つかってしまはずであった。

「うあー寝てたのか……いいか、明日でも。期限決めてないしな」

ところがセージは金属の容器を手中で弄ぶ以外に反応を示さなかったのである。

なぜか。それは、怪物の眼球が引っ込み、触手が地面にべったり張り付き、しかも表面の色を変えることで完全に同化していたからである。

セージがくりりと背中を見せるや、眼球と触手は背中に触れるか触れないかの距離に近づき、歩みに合わせてするするとつつがなく伸びる。

眼球付き触手と同じような形態の触手が数本水面から姿を表すや、セージの背中を追う。

動作の一つ一つに人間のような例えば足音などと言った要素を含まない為、気が付くことができない。気配を読むような高等技術を習得していないのも、発見の遅れに繋がった。

セージが背後に忍び寄る存在に気が付いたのは、触手が腹部に巻き付いた時だった。

< 4 2 > 触手！（前書き）

“少女”は怪物に捕まってしまった。
怪物は情報通り大人しかつたのだが……。

< 4 2 > 触手！

腹と腰そして太ももにぬるつく何か絡み付いた刹那、世界が下方に流れた。

否、己の体が上空に持ち上げられた結果、相対的に地面が下に落ちていったように見えたのである。

それが何かと熟考する暇も与えられず、水面から触手が湧き出してきて、次々と体に絡まっていき、アツと言う間に湖中へと連れて行かれたのであった。

「うわあああああごめんなさいごめんなさいいいいい！？」

セージの悲鳴がドップラー効果を伴って岸边から遠ざかる。

人生初の触手に拉致されるという体験の前には喉も枯れよと絶叫せざるを得ない。叫び過ぎてせき込んだが、再び叫ぶ。

だが悲しいかな、湖の中程まで連れて行かれては、悲鳴は兩岸のいずれにも届くことがない。

「ひいいい食うなああ！ あ、離せっ、くそ、くそ、こ、これは死ぬ死ぬ死ぬ！」

じたばた暴れて触手を振りほどかんとしたが、触手の数が増えれば増えるほど、力と言う力を吸収され、逆に押さえ込まれていく。

食われはしないとロウが言っていたが、実際に触手で拘束されてしまつては冷静さは電離圏辺りまで吹っ飛ぶ。食われるどころか別の想像まで湧き上がる。触手に絡まれた少女から連想することである。

「くそ、やるならやれよ！」

開き直ったセージは腕を組もうとして組めないことに気が付き、口をへの字にして暴れるのを止めた。触手を食いちぎろうとしてどうにも止めた。ヌルつく粘液が異臭を放っていたから。

水面から10mはあるうかという地点に縫い付けられ、まさに絶体絶命かと思われた。

ところが、怪物はセージが暴れるのを止めると、触手を緩め、眼球のついた触手で見ることに専念するのであった。巨人に虫眼鏡で観察される気分を味わう。

セージは、眼球に向かって語りかけることにした。

「お前のヌルヌルを貰うぞ。お前、人間の言葉分かるんだろ？」

言葉に反応したか定かではないが、眼球の中央がセージの口元に向いた。その隙に触手を纏めて引っ掴み、手にへばり付いた透明な液を金属容器に納めていく。怪物は抵抗しなかった。

容器の蓋を閉じて金具で固定すれば腰に装着する。怪物の粘液を手に入れた。

怪物はじつと見つめて、時折セージの体を触手で弄るだけで、陸地に戻してくれない。

触手による締め付けこそ緩くなったものの、何本も絡まったまま時間が経過していけば、服は粘液塗れになっていく。感触はボディソーブのとりみを強くしたような。片栗粉の水溶液のようでもある。

体液を持ち帰るためには、自分が帰らなくてはならない。ところが怪物が離してくれない。

幸いなことに食ってやろうだとか、危害を加えてやろうだとか、そういったことを企んでいるとは思えず、言葉を理解するという口ウの言葉を信じて、必死に語りかける。

「陸地に連れてつてくれよ、怪物君。そんなに俺が面白いのか？
中身は違っけど真正銘のエルフだぜ」

エルフ特有の耳を引っ張って見せつけると、怪物の眼球が耳を追った。動きの一つ一つに知性を感じるものの、意思の疎通には程遠い。

触手を解いて泳いで帰ろうかと画策していたところ、怪物に変化があった。

突如として水面の一部が不自然にチラついた。次の瞬間、湖と思っていた部位が黒と茶に変わった。驚くよりも早く、それは本来の姿を見せつけたのであった。

それは、小規模なビルと同程度の空間を占有している、もしくは船と同規模の体躯を誇る生命体であった。

イルカと同じく水の抵抗の少ないであろう細長い体とヒレを持ちながら、無数の触手があちこちから冒流的に乱立していた。最も触手の密度の高い頭部と思しき部位は、もはや触手がより集まって構成されたと表現できるほどで、繁殖期の蛇の群れのように。

あるべき口などの器官は一切目視できない。全てが触手で覆い尽くされているため、頭部の構造把握は不可能であった。触手が各器官の役割を担っているのだろうか。

怪物は体の色を水と同化させては元の色を示し、己のカモフラージュ能力を誇示する。

擬態をあえて解いたということは、どうということなのだろうか。固まるセージをよそに、怪物は触手の中でも細いものを一斉に頭に向けて伸ばしてきた。そして肩やら腰やらを執拗なまでに突いてくる。一本が咽頭に巻きつく。呼吸の障害はそれなかった。

何事か。あんなことやこんなことされるのか。

触手達はあるうことか腕や腹や腿をずると擦り始める。眼球がひっきりなしに活動してまじかで観察を続ける。人間に対して強い興味があるのかもしれないが、やられる側のセージはくすぐった

いやら粘液でぐしゃぐしゃやらでたまったものではない。

セージは触手を腕力の許す限りの力で叩いた。

「触んなボケ！」

『グルウ！？』

水面下からうめき声が響いた。体を締め付けていた触手が緩む。

本来なら慎重になるべきであるが、粘液の効果か否か風邪っぽい症状を自覚したので、とっとと帰るべくやってみたのである。下手すれば食われたかもしれない。

ところが怪物はセージに怯んでしまったらしく、大人しく陸に帰してくれた。

セージが説教をかまそうと意気込んでいると、とうの怪物はセージを陸に戻すや全速力で泳いで消えてしまった。臆病な奴めとセージは鼻を鳴らした。

ともあれ、目的は達成したのであるが、体中が粘液だらけになってしまった。

服もテカテカ、液が下着にまで浸透しており、早急に着替える必要があった。袖を摘まんでみる。ねちよりと糸引いて肌との間に橋を架ける。靴も見事にずぶ濡れ。歩きたびにじわりと液が染み出す。悪いことに奇妙な臭いがするものだから、セージの鼻は限界寸前であった。

セージは首筋の粘液を手で削ぎつつ、一步を踏み出した。里を守る壁を睨む。高く、大きく、頑丈そうだった。

「ロウめ……熱が出るなんて聞いてないぞ……なんだこれ」

セージは二歩目を踏み出し、手の平を額にやってみた。熱い。風邪で寝込んだ時のように。ところが平衡感覚は普通であるし、咳も出ず、倦怠感も無い。体だけが熱くなっているのである。

粘液が原因であると断定し、湖に服を着たまま入水する。全身粘液塗れなのだから、今更ただの水に濡れようが構わなかった。

しかし、落とせるところの粘液を落としても体の熱さは止まるどころか強くなっていく。異常な事態だった。

一大事と熱い体を引き摺ってロウのところに戻ると、金属容器を返した。

そして詰問した。ロウの襟首掴んでがっくんがっくん容赦躊躇戸惑いの微塵も無く。

「体が不調なんです、どういことです！」

「いや、まあ、その……なんだ、あれの体液の効果だよ。ふむ、そういうことで、今日は忙しいからだな、離れてくれると助かるよ、うむ」

ロウはしどろもどろ。目線を合わせようとせず、額に浮かべた汗をぬぐおうともせず、理由をつけてはセージを追い払いたがった。報酬はまた後日渡すと言った。

そつは問屋が卸さない。卸させない。最低でも解毒してもらわなくては。

「だーかーらー！ 効果って、なに！」

ロウの首をがっしり掴んで揺する。ロウの方が身長が高いが、頭にきた少女の腕力は病弱な男を凌駕していた。

年上だろつが関係ない。誤魔化するのならば言いたくなるまで続けるのみである。

ロウはセージのしつこさに折れた。肩を落とし、セージの手を払いのけつつ、じりじりと部屋の隅に後退する。

「……だよ」

「はい!？」

もごもごと何事かを呟くロウを、セージは部屋の隅に追い詰めて、飛び掛かるうと両手を前に、腰を落とす。

逃げ場はない。もしあるとすれば壁や床をすり抜けられるとか、時間を自在に制御できるだとかである。

ロウは俯き、大声を張り上げた。

「催淫効果だよ!」

「はあ……さいいん……催淫? は……はあ!？」

放たれた言葉に一瞬沈黙したセージは、意味するところを正確に捉え、戦慄した。

< 4 2 > 触手！ (後書き)

やっとTSしたが故のあれこれが書けますね (^p^)

< 43 > 悶々(前書き)

怪物の粘液の効力がセージを苛む。
その間にも日常は流れる。

「そんな……解毒薬くらいあるんでしょー!」

セージは震えあがった。

怪物の粘液には催淫効果があると伝えられたからである。言うまでもないが頭からつま先までびしょ濡れになるまで浴びてしまった。既に症状は出始めており、風邪をひいたかのような熱に苛まれている。

一線を越えるのは避けたい。男とあるためには、女性の要素を排さなくてはならない。

だから催淫効果に乗せられて自らを慰めるなど、地球が割れてもあつてはならないのだ。

ならないのだ。

ところが現実是非情である。お使いを依頼したロウは何のその、首を振るのみ。

「いや……何しろ無害だから作ってない。性的興奮が高まる効果しかないのな」

「まさか……実験って! くっ……薬を作るために俺を利用したんですね」

「薬を作るのに必要だったからな」

「ひどい……」

悔しがるセージを、ロウは心外だとも言わんばかりの顔で対抗する。

そう、ロウは怪物の粘液を材料にした催淫剤を作って取引してい

たのである。だからこそセージに実験の内容を喋ることをためらったのだ。

「どこの世界に声高々と『性的な用途で使うお薬作ります』と発言できる者がいるのだろうか。狭いエルフの里ならばなおさら世間体を気にして公言できない。」

ロウは右手をセージの方に突き出すや、己の胸元にやった。ジェスチャー。

「酷い？ 俺は報酬を約束し、君はそれを了承した。正当な契約だ。医者のところに行けば治してもらえるかもしれんし、体がどうとなるわけでもあるまい」

「普通の女の子ならね！ でも俺は男なんで！」

「なるほど、体と魂の性差に苦しんでいるのか。医者相手なら気恥ずかしがることもないと思うが」

「お・れ・が恥ずかしいんだよ！」

などと問答をしている間にも症状は悪化しつつあった。

顔は紅潮し、体の感覚は敏感になっていき、呼吸も荒くなっている。医者に駆け込むのは己が許せない。誰かに助けを請うのも。ロウが何とかしてくれると思っただけの間違いであった。

もはや一刻の猶予も無い。

聞くことを聞いて、すべきことをしなくてはならない。

がっつ掴みかかるようなことはせず、いつでも部屋を退室できるように戸の方に後退した。

「魔術で治療は可能？」

「治療を行った例を聞いたことがない。無理じゃないか」

「そうですか。効果はどれくらい……持続しますか、かね」

「一日だ。丸一日続く。不都合だから薬は薄めるのだが」

ロウが悪魔を背後に連れた笑みを浮かべた。

「俺が慰めてやろうか？」

「断固お断りします！」

「そりゃよかった。冗談だ。かくいう俺は童貞なもんでね」

「童貞さん、あばよ！」

お話の花を咲かせている時間はない。手も振らずに部屋を飛び出せば、全力で己の部屋に帰る。脇目も振らず、道行く人に何かあったのかと訊ねられても答えず、両手両足総動員して風になる。

己の部屋に飛び込むと、扉を閉めて、服を脱ぎ捨てる。湖で行水しただけでは落としきれなかった粘液が、脇や足の付け根にべっとりくっ付いている。

成長途上の肢体は、催淫効果により薄ら朱を帯びていた。顔は言うまでも無く、作りの細い鎖骨の下に広がる平原も艶めかしい体温を発している。凸の少ない腰回りは小刻みに震え、年の割には筋肉の乗った足は内側に寄っていた。

手際よく布きれを準備。水で濡らして拭き取ろうとせん。眉に皺が寄る。

「ふ、っ……あっ」

セージは、己から漏れた声の艶めかしさに腰を抜かしそうになった。

皮膚に布地が触れただけで、ビリビリと電流に似た感覚が脳髄を走り抜ける。水を付けても清涼感訪れず、かえって熱さが増した脇を拭く。手が他人のように感じられた。あたかも擦られたかのように、腕が跳ねる。

股を拭く。布を手巻き付け、爆弾解除に挑むつもりで粘液を取る。腰、足の付け根、そして体の中央と表現されることもある場所。

接触即前のめり体勢で地面に伏せる。腰の力が抜けて、顔面から地面に突撃しかけたのを、両肘で食い止めたのだ。

セージは地面におでこをくっつけ、四つん這い体勢にてその場所を丁寧に拭き取った。布を片付け、服を洗濯籠に放り込み、清潔な服を着ていく。体調が十全なら簡単な作業も、催淫効果が暴れ狂う現状では、重労働であった。

やっと服を纏った頃には、ベッドに入るのにさえ一苦労になるまで怪物の粘液の効果が高まっていた。

セージはベッドに転がると布団を被って団子になった。暗闇の中で、熱い呼吸をする。

「っ……っく、う……ぐぐ………しないんだ………しないんだぞ、俺……耐える………」

うわ言が口をついて出る。

人差し指中指を口の中に突っ込み舌で舐る。口から離す。粘度の高い透明な液がとろりと布団に垂れた。

犬のように舌を出して、呼吸する。布団の中の酸素は次々消費されて二酸化炭素が充満し始める。苦しい。布団から顔を出す。第三者からは風邪をひいて寝込んでいるように見えただろう。

布団の中では紛争が勃発していた。

全身を撫でまわしたい欲望と、やらせはせんとする理性がせめぎ合う。悪魔と天使のように、耳元で囁いてくる。目を瞑って振り払う。ところが一層纏わりついてくる。

セージは布団を口に含んで噛み締め、背中を丸め、股の間に腕を挟んで足で締め上げた。そうでもしなくては腕を擦りつけてしまうから。

「ハア……ハア………誰か俺を縛ってくれえ………どうにかなっちまうって……ッ」

天井を仰ぎ囁く。

体の自由を物理的に封じてさえくれれば、理性が壊れても問題ない。腕も足も使えなくなれば自己を慰めるようなことはできないのだから。だが、『俺を縛れ』と頼んで、了承してくれる優しい人は居ない。変態扱いされたくない。醜態をさらしたくない。プライドを守るためには自分で対処しなくてはいけなかった。

ロウの言葉を信じれば効力持続時間は丸一日。現在は昼過ぎ。夕飯は抜きに決めた。クララが部屋に入ってこないように戸に風邪だから寝ると板をかけておいた。

性的欲求に苦しみながらも、夕方までなんとか耐えた。

汗の他の理由で服が濡れてしまい、対処に困った。どことは描写するまい。布で拭くしかなかった。

セージはうつ伏せになつて枕に顔を押し付けていた。涎で染みができていた。足の指がひっきりなしに伸縮を繰り返す、布団の布地に皺を作っていた。

こんな状態にも関わらず、他の欲求は通常営業をしている。三大欲求の一つ、食欲。後生大事に抱えた蜂蜜の瓶を取り、蓋を開ける。甘い香りがすきつ腹に染み込んだ。

ブロンドの髪を掻き揚げ、潤んだ瞳をパチクリ。

「いただき、ます……」

息絶え絶えに日本式の食前の挨拶。匙を取るのももどかしく、指を突っ込んで舌で舐める。足りない。逆さにして掌に落とせば犬のように食らう。

「あむ、んぐ、おいしい」

舐めずにいられない。指を舐めなくては、枕を舐めてしまう。

ぴちゃぴちゃと掌を舐め、指を舐め、新たに蜂蜜を指に付けては舐める。舐めるのでは不足と感じ、瓶を傾けて中身を一気に口に運ぶ。とろみのある液が口内の唾液と乱交する。

セージは瓶を舐めた。口を淵にぴったり密着して舌を伸ばして、全てを食らおうとした。やがて全てを胃に収めると、手に付着した粘着を舌で絡み取り、唇の上下を清める。

血のように赤い舌は、手から手首に唾液を付ける作業に移った。

淫魔が乗り移ったかのように目のピントがずれる。理性という堤防が緩やかな崩壊を開始した。

舌は、手首、腕、そして。

「ッー!!」

我に返ったセージは全力でベッドに頭を叩きつける。痛みはない。それでも何度も何度も餅つきのように往復すれば脳が揺れて吐き気がしてくる。眩暈がした。

ところが平坦な胸に両手を置くと言う行動をやってしまった。

腹筋が伸縮。肋骨が浮く。咽頭が微動した。

「んっ」

胸を揉み解したい。撫でたい。抓りたい。女体の柔らかさを自分で味わいたい。

頭の中はピンク色。

そしてセージは、とうとう服を脱いで……片手を腿の内側に這わせ。

「いかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんか
かんまですいまずいあぶないあぶないあぶないあぶないおれはどうなるおれは
ふあつくふあつくゆー!!」

念仏が如く抑揚の無い文章群を肺の空気の限界まで連呼。己の手を叱りつけ、布団にくるまると、転がって簀巻きになる。足だけが突き出している。エビフライのようである。

時の流れは無情にも同じ間隔を刻む。

眠気がやってくる気配も無く、それどころか催淫効果の影響らしく、目が覚めきっているのだ。

眠ってしまいさえすれば勝ちとしても、眠れなければ意味がないふとセージは閃いた。眠れないのなら、眠くなればいいのだ。

ベッドからのたのたと這い出すと内股気味の足を使って歩いていき、戸棚を搜索する。ほどなくして目的のものは手に入った。睡眠薬。悪夢に対する処方箋。夢を見ないで眠りにつける優れもの。

セージは薬を適量飲み、ベッドに戻った。

暫くすると睡魔が舞い降りてきた。救世主だった。瞼が落ちていった。何も見えず、何も聞こえず、体が浮遊感に包まれた。瞼越しの光も無くなった。

翌日。

怪物の粘液の効果は相変わらず粘り強く持続していた。熱っぽさと体の敏感さは変わらず体を包んでいたのであった。

こっそり朝食を食べに行こうとしたところ、クララが来訪した。朝食を運んできてくれたのだ。

「風邪大丈夫？」

「え、ええ、ダイジョウブスヨ」

布団に潜り込んで顔の下半分を隠したセージは、今にバレるのではないかと肝を冷やしていた。

クララはあれこれと話をしてくれて、世話も焼いてくれた。怪物の粘液のせいなんですとは口が裂けても言えなかつた。

困ったのが、体を拭いてあげると言い出したことである。

自分で拭くだけで過敏な反応をってしまったのに、他人に拭かれでもしたら、正気でいられる自信が無かつた。

クララが帰り際にさりげなく額に手を置いてきた。喉が鳴ってしまふ。笛のように。

「ひっ」

「熱いわね。でも、一日寝れば治るわ」

セージは涙目になった。クララの手と接触した途端、額であるにも関わらず脇腹を愛撫されるに等しい衝撃が走り抜けたのである。

クララはセージの瞳に涙が浮かんだのを見遣り、頬を撫でてくれた。

「ちゃんと寝てないと駄目よ？ 組のみんなには私が説明してお

くから、ゆつくり休んでね」

「はい」

そしてクララは泣く子も笑う素敵な笑みをくれると、去って行った。

額と頬に順番に手をやった。温もりが残っている。セージはこみ上げる快感を堪えるため、ベッドで一人簀巻きになるのであった。

効力が切れたのは粘液を浴びてから丸一日が経過した頃だった。

< 43 > 悶々（後書き）

直接的な表現はしてない！

ノーカウントだ！ ノーカウント！

少年誌でいう乳首描写のラインは守った！！

これはイカン！ けしからん！

という方は感想辺りにコジマ粒子放出して教えてください。
なおします。いろいろと。

< 4 4 > 報酬と（前書き）

セージはロウの部屋に駆け込んで報酬を要求した。同じころ、怪しい影が里に迫っていた。

< 44 > 報酬と

セージは激怒した。

必ず、かの邪智暴虐の男から相応の報酬を受け取らなければと決意した。

数日後、セージは木の棒を携えてロウの部屋に突撃した。さすがのロウとて訪問者が殺意を滲ませているとなれば怖気付かざるをえない。

血走った目で木の棒を剣のように突き出すセージに、ロウは両手で『まあまあ落ち着いて』のジェスチャーをしつつ、机の引き出しを探し、それを取り出した。

「報酬！」

“少女”の剣幕は鬼も凌駕する圧力に満ちていた。

「まで、落ち着け。話せば分かる！」

「問答無用！」

セージは、ロウの頭部に一撃くれてやらんと棒を振りかぶった。

目は爛々と、暴力の光に満ちていた。

ロウがさつとその羊皮紙の巻物を取り出し、盾を構えるが如く突き出した。セージの手が静止した。

ロウはセージの瞳に冷静さが戻ったのを見遣ると、にやりと口角を上げ、不健康な白い指で羊皮紙の巻物の腹を叩いた。内心、生きた心地がしなかった。

「これはなんだと思う？ 王国の地図だよ」

その情報はセージにとってなくてはならない重要なものだった。王国の情報は一部の者にしか閲覧できない。現代と違い、この世界では情報は大金を投じなくては入手できない代物である。特に地形や都市の配置などは軍事利用可能な情報であり、そんなところの者が楽に知ることは不可能である。

ところが、ロウは王国の地図を持っている。真贋を確かめる術はないが、偽物を掴ませるような男ではあるまい。

セージは棒を床に放りだすと、無言で羊皮紙を受け取って、その場で中身に目を通した。

王国　北は雪国、南は南国まで支配権を伸ばす超大国。王国以外の国が点線で記されているが、王国の領域が上から塗り潰す格好になっていた。

地図は王国や他の国に接する部分、街の場所、地形などについては詳しく書かれているのであるが、エルフの里や情勢については触れられていなかった。

食い入るように地図を見つめるセージの後ろにまわったロウが、指で示しながら解説をし始める。

「これが王国の元の領土、そしてこの線が今の領土だ。首都はここ。里の位置は機密中の機密でな、通常の書類に記すことはなんでもあれ許されないのだが、この里に限っては正確な場所を知られているので意味がない。ちなみにこの点だ」

「よく手に入りましたね」

怪物の粘液の効果を知らされずに採取作業に当たったことに対する怒りはどこへやら、セージは地図を宝物のように抱え、質問していた。

地図とは機密である。ロウは顔を曇らせると、言葉を濁した。

「独自の経路……かな。とにかく、この地図は君のような子供が

持っていてよいものではない。クララにも見せてはいけない。目的遂行のためには隠すんだ」

「わかってますよ。ところで、まだ報酬には足りないと思うんですよね」

セージはいつつ地図をくるくると丸め、付属の紐で筒状に固定した。

自分の部屋には帰らない。報酬は不足であるとして、ロウと目を合わせて交渉を続ける。

「粘液一杯分と地図は同等どころか釣り合わないくらいだと思わないか」

「いいえ？ 粘液に催淫効果があると説明があれば別でしたけど」

セージは交渉の材料として、ロウの説明の不手際をついた。やろうと思えばセージが聞いてこなかったからと巻き返される恐れがあったが、押し切ろうとする。

ロウは苦々しい顔をして部屋のガラクタの元に足を向けた。

「君は外見に似合わず“素敵”な性格をしているな。欲がある」

「どうも、童貞さん」

「童貞はいいぞ、体力を頭脳に使える」

「童貞はいつでもいいんでなんかください」

「少しは遠慮しろよ。いいだろう。目的のものは手に入ったことだし。あげて痛いものもあるまいし、好きなものをもってけ」

ロウは鼻を鳴らし、ガラクタを顎で指した。実用的な品はほとんどないに等しい。思いつきと勢いで作って、飽きたので放置して部屋の肥やしと化している品もある。いっそ持って行ってくれた方が整理の手間が省けると考えていた。

セージはガラクタを隅から隅まで見て回った。杖にナイフを仕込んだ品。ひん曲がったビーカー。盾に剣と槍と斧と弓を組み合わせた謎の武器。靴の底に車輪を付けたもの。など。

確かに報酬として持ち帰るには価値の無い物品が多かった。

唯一、利用価値がありそうなものがあつた。片手で握れる大きさの二連式クロスボウ。まともに訓練していないが、近距離で取り扱うには十分であろう。拳銃感覚で射ればよい。

セージは付属の矢も一緒に抱え、ロウに訊ねた。

「これください」

「いいぞ。どうせ俺は使わんし誰も欲しがらん」

するとあっさりとロウは頷いた。

セージはクロスボウを携え、何気なく部屋を見回した。

羊皮紙だらけの机の横の作業台に興味深い物体が鎮座していた。それは、肩に担がなくては運べないであろう、辛うじてクロスボウの形をした巨大な物体であつた。

弩に取り付けられた箱の構造には見覚えがあつた。射出物を詰めておく箱、弾倉ではなかるうか。地図とクロスボウを手の中で弄びつつ、近くで観察する。

ロウもセージの後ろについて歩いてきた。息子にトランプットを買ってやる父親のような雰囲気纏って。

「連射式の弩？」

「冴えているな。セージ、こいつは連射できる画期的な弩だよ」

ロウが弩の肩当てを叩いた。

連射式と言っても引き金を落とせば次々発射されるのではなく、自動で矢込めがされ、自力で引くのである。それでも全工程を自力ですると比べれば劇的に早く射撃ができる。

もし、その弩が小さく、軽く、扱いが容易ならば、実戦に投入する機会もあつたであろう。

「大きいですね、とつても」

それは弩というにはあまりに巨大過ぎた。大きく、重く、長く、多くの空間を占有していた。まるで巨人の大腿骨だった。ロウが腕を組んで解説してくれた。

「威力不足を補うために張りを強く、矢を長くしてみた。熊も殺す威力がある。が……」

「重くなつたと」

「そんなところだ。器械式の装填器具を使わんととても矢を込められん。いつそ二人くらいで運用することを想定して巨大化してみたらこの有様だ」

弩にはてこの原理を利用した装置がついている。弦を強く張った代償は、人の腕力では矢を込められなくなってしまう点であった。だが器械を使えば威力は上がるが、連射は効かなくなってしまう。

連弩であるはずなのに、連射が効かないのである。

つまり、机の上で静かに横たわっているその兵器は、欠陥品なのであつた。

「ゴミですね」

「身も蓋も無いことを言ってくれる。一週間かけた粗大ゴミとは認めたくないというのに」

セージが弩の評価を下し、ロウが頂垂れたその時だった。

カンツカンツカンツ！！

里中に鐘の音が鳴り響いた。

二人は顔を見合わせ、同時に叫んだ。

「敵襲！」

「敵襲！」

人間による攻撃が開始されたのであった。

「見えるか？」

「いいえ。連中、煙幕で我々の視界を遮る戦法に出たようです。焚き始めは隠せなかつたわけですが」

「情報源からの報告はまだか」

「来てません。我々の網に掛からず……つまり奇襲です」

「やってくれる」

歳、50前後の男と、30前後の男が羊皮紙を広げて話をしていた。

里と湖の境界を守る砦の内部、司令室とも言つべき部屋のことである。

そそり立つ砦のあちこちには複数の見張り穴が穿たれ、外から攻撃が入り込まないように格子と網と硝子の三重の防護がされている。その内部には部屋があり、外の様子を窺いながらの指揮を可能としていた。

砦の各所には湖からやってくる敵を排除するためのバリスタには、既に各員が配置にしていた。

30前後の男　副指令官に命じられている　が見張り穴から外を覗いた。

湖を越えた先に、不自然な霧がかかっている。魔術の仕業ではない。人間が煙を焚いて視界を遮つたのだ。

お陰で皆からは人間側の戦力を探ることができない。人間とて馬鹿ではない。何度挑んでも攻略できないのであれば、戦術を変えてくるのだ。

秘密裏に準備が進められていたのか、対策がされたのか、里の外に放ったスパイでさえ攻撃を察知できなかった。

50前後の男 司令官は、ワイバーンによる空中偵察を命じた。偵察の結果、多数の船が湖を渡っていることが判明した。例え煙幕があるうと、上空から見下ろせば見やすいものである。魔術も併用すれば障害は無いも同然となる。

ワイバーン隊による投石攻撃が開始された。

湖の白い靄の向こう側から、ワイバーンの雄叫びと、人間達の悲鳴や関が響いてくる。

矢と魔術の迎撃を受ける中、煙幕の中に向かって岩を投じるのだから、命中は期待できない。士気を削ぐのが狙いである。空から攻撃があると知れば、いつ死ぬか分からないというプレッシャーをかけることができる。

ワイバーン隊は岩を投げ終えてしまい、一斉に帰投した。

お次に、湖の怪物が音も無く触手を伸ばしては、人間の乗る小舟を次々と転覆させていく。

人間側のストレスは計り知れない。霧と煙幕の帳に視界を遮られるなかで攻撃を受けるのが、いかに恐怖をもたらすか。

戦闘の経過報告を受けた司令官は、コップの水をぐびりと飲み干し、苛立ったように羊皮紙を撫でた。

「……煙幕が自らを滅ぼすか。しかし何かがおかしい。我らが里を攻め落とすには兵力が少なすぎる。削りや威圧が目的にしてもだ」「ワイバーン隊の報告を多めに見積もっても、前回の攻撃の半分にも満たないですね」

副指令が同調する。

そう、里の防御が堅いことは王国側、植民地側のいずれも知っているはずである。にも拘らずこの度の戦闘に投入された戦力は少ない。

定期的にやってくる戦力でさえ、この度の戦闘で確認された数を上回る。

司令官はワイバーン隊に周囲の警戒任務を与えた。

やがて新しい報告が入った。伝令係が息も絶え絶えにかけこんでくると、さっと畏まり、叫んだ。

「ワイバーン隊より報告！ 空よりワイバーンがやってきます！」

「応援か？」

司令官は伝令の方を見遣ると、首を傾げた。他の里のワイバーンが応援にかけつける予定は無かったからである。そもそも事実上の奇襲に応援が間に合うわけもない。

伝令係は首を振った。

「人間が乗っています！ 我が方のワイバーン隊と交戦に入りました！」

「なにい！？」

ついにワイバーンの飼育に成功したか。

司令官は目を剥いた。

< 44 > 報酬と(後書き)

現在の持ち物

- ・ ナイフ
- ・ 魔除け効果付き指輪
- ・ 王国の地図
- ・ クロスボウ
- ・ その他

< 4 5 > 強襲（前書き）

巨老人の里に人間の軍勢が攻撃を仕掛けてきた。
エルフ側は迎え撃たんと戦闘態勢に入った。

ワイバーン。翼竜。前足と翼が一体となった飛行に適した竜で、飛行速度や持続距離だけならば龍をも凌駕する。

戦闘能力は極めて高く、凶暴で、たった一匹のワイバーンにより村一つが地図から消えたという話はそう珍しいことではないという。古くから家畜として一部の少数民族 エルフなどに飼育されてきた。

人間も飼育を試みてきたのだが、成功例は無かった。捕獲の難しさ、繁殖の難しさ、飼育の難しさ、調教の難しさと、難しい揃いであったからである。

人間の技術ではワイバーンを飼育できない。

その常識は今日で終焉を迎えた。

ワイバーン隊を率いる青年は手の合図で味方に高度を上げるように指示し、自分の半身にも同じ指示を出した。

人間側はワイバーンの操りに不慣れなせいなのか、戦闘経験が薄いせいなのか、回避に移らずに後を追いかけて高度を上げ始めた。

「いくぞ。空中戦を教育してやる」

ワイバーン隊の隊長たる青年は自身の半身へ語りかけ、急降下を実行させた。

ワイバーンの身のこなしと柔軟な翼が空中で一回転を実現させる。重力の底に体が落ちていく。地に向かって優雅にロールをすれば、のろのろと上昇している最中の人間の乗ったワイバーンの頭をもの一撃で蹴り潰した。

上昇性能が一緒であるならば、先に高い場所にいる方が、より早く行動に移した方が高みに昇れる。ワイバーンの機動性をもってすれば上昇途中で一回転して格闘戦に持ち込むなど造作も無い。だが

人間はそれを知らない。

他のワイバーン隊員も急降下攻撃で一撃を食らわし、各々で戦闘に入っていた。

経験、攻撃手段共に劣る人間のワイバーン隊は、近接戦では圧倒され、射撃においても圧倒されていた。遠距離攻撃が弓しか使えならしい人間と、火炎やら雷撃やらを投げつけられるエルフとでは、射程距離が段違いであった。

すれ違いざまにワイバーンの翼を雷で粉碎すれば、螺旋を描くように落ちると見せかけて誘導し、空中で停止、勢い余って前方に飛び出した人間搭乗のワイバーンの背中を取る。

「やれっ！」

相棒に命じる。ワイバーンが吠え、背中から襲い掛かる。人間を足で鷲掴みにして固定具から引き千切れれば、地面に投げつける。搭乗者の居なくなったワイバーンはあさつての方向に逃げ出した。

ワイバーン隊は対ワイバーン戦闘に慣れていた。なぜなら味方内の訓練として空中戦を行ってきたからである。

残り数騎が不利を悟ったのか、逃げ出した。

青年は追撃を命じた。

人間側のワイバーン隊の勢力は風前のもしびであった。

「ワイバーン隊より報告。敵軍団、約一万！ 植民地人を主力とする大部隊が接近しています！」

「馬鹿な！ それだけの部隊をどこに隠しておけたと言うのだ」

「事実です！ 後方、山岳から少数の部隊の接近も報告されます。正確な数は不明！」

「王国め、本気を出したか？ いや、王国の本隊ではあるまい……巨老人に報告せよ！ 里中に通達。戦えるものは武器を持って！ 女子供を避難させよ！ 急げ、時間がない」

敵勢、一万。

報告を受けた司令室は嵐が訪れたかくや攪拌されていた。

一万の兵というと大したことのないように思えるかもしれないが、その人数が船に乗って押し寄せてくると考えれば途方もない戦力である。打って出るだけの余裕の無いエルフの里には危険極まりない。行動察知の防止、ワイバーンによる奇襲。人間側の行動は今まで考えられなかった戦略性を含んでいた。

岸に船を運び込まれるまで接近に気が付けなかったということは、湖の周囲の見張りが倒されてしまったということだ。植民地人だけで編成されたお雇い軍だけではなく、本職の兵士が混じっている可能性があった。

幸いなことに、里は湖の防衛線の強化をつい先日終えたばかりであった。船侵入防止用の杭、バリスタの増設、罾の設置など。

司令官は、砦の上部の投石器から放たれる岩が放物線を描いて飛んでいくのを見つめた。

まず、射程に優れる投石器による攻撃を行う。ただ岩を放り投げるだけでは命中を期待できないので、面に対して岩礫をばら撒く。小舟の上と言う逃げ場のない足場の上で、霧の向こうから飛来する物体が襲い掛かる。

だがいかに面で制圧できようと、投石器の再装填速度は決して早くない。一万という軍勢は水に垂らしたインクのように広がって、接近してくる。

次に、貫通力に優れたバリスタによる射撃が船を襲う。

鉄板をも容易に貫通する鋭利かつ巨大な鏃が、観測手の指示のもとで照準され、撃ち放たれる。

ぎっしり人が乗り込んだ一隻の真つただ中に鏃が飛び込む。男の

胸を鎧ごと撃ち抜いたそれは、背後の男の腹部すら紙屑のように貫通し、船底に穴を穿った。沈没が始まる。

しかし、いくら投石器とバリスタがあっても、一万という数を削り切るには足りない。

あと少してクロスボウなどの武器の射程に入るといときに、司令官が新たな指示を出した。投石器にそれらが装填され、威力を絞って投擲される。緩い放物線を描き、水面に落ちて中身を飛び散らす。

兵の何人かは気が付くだろう、それが壺であると。だが、直接被害をこうむった船が皆無だった故、構わず進行する。

人間軍の指揮官の一人が異臭に気が付く。水面が臭っている。戦闘中にも関わらず、隙を見せ、考え込んだ。類似するものは油だった。なぜ油が。なおも投石器で壺が投擲されては水面に散っていく。とあるバリスタを指揮する男はじつと腕を組んで待っていた。

そして、小舟の密集した場所に狙いをつけさせた。
号令を待つ。

「放て！」

号令が聞こえた。射撃員に見える位置で手を振り下ろす。

バリスタに装填されていた火炎矢が放たれるや、油と接触し、たちまち火の手が水面を舐めるように侵略して船を包み込む。黒煙があちこちで上がった。

それでもなお進軍は止まらない。さながらリビングデッドが攻撃に怯むことのないように、船は進む。漕ぎ手を失えば兵士が漕ぐ。船を失えば……沈むだけだが。

怪物は船を次々沈めては中身を穿り出して食っている。食欲は底知らず。怯える兵士、怒る兵士、どれも無差別で触手で拉致しては水面に引きずり込む。矢や槍が水中に繰り出されるも、次の瞬間には水泳をする羽目になる始末。

そして、とうとう矢の射程に人間軍が到達した。近すぎて魔術の霧による視覚障害は期待できない。

船上で一斉に弓兵が射撃準備を整え、射掛けてくる。強固な砦の壁には傷一つつけられはしないが、人員に命中すれば被害が及ぶ。エルフ側も応射する。人間側は木の板や盾を防御に使うも、高みから降り注ぐ矢には対抗できず、また一人、また一人で斃れていく。

「ようし射撃中止！ 各員矢を番え、待機！ 魔術を準備せよ」

司令官の大声が響く。伝令が走る。砦中の弓兵達が、バリスタが、矢を番えたまま攻撃を中止した。

これ幸いとさらに船を進める人間軍。

時折エルフ側に矢が飛来するも、射撃を中止して身を守ることに専念している彼らには当たることはありえない。

突如として先頭の船が止まる。勢い余って後続の船が衝突し、隊列が乱れ、うろめきたった。水面下に打たれた杭と杭の間に張られた鎖に引っかかったのだ。動きが止まる。

「放てエー！」

砦の各配置にて号令の聲が高らかになされ、雨あられと矢と魔術の嵐が船の群れへと叩きつけられた。

「バリスタに伝えよ！ 梯子を運搬する船があるはずだ、それを狙撃せよ！」

「はっ」

戦況の報告を受けた司令官は、新たなる指示を伝令に言付けた。砦に侵入するには三つの道がある。

一つ目が砦と湖の岸边をつなぐ扉である。こちらは敵の侵入を予

測して頑丈なミスリル製であり、例え破城槌だろつとへこませるとすらできない強度を誇っている。

二つ目は、迎撃用のバリスタや弓兵などが配置される場所から侵入する道。数で押されれば侵入されること必至なため、接近を許さないように戦うことが肝要である。

三つ目の道は砦の上部を乗り越える道であるが、登り切られる前に矢や魔術などで叩き落とすことが十分可能である。

二つ目の道を塞ぐには、梯子を運ぶ船を沈めてしまつのが最も手っ取り早い。

司令官が覗き穴から外を窺おうと席を立った時、扉が乱暴に叩かれ、頼もしい姿が現れた。

「儂の里に押し掛けるとは懲りん奴らだ」

「巨老人！」

そう、完全武装の巨老人が入室したのだ。

< 45 > 強襲（後書き）

主人公のはずのセージが出てきませんでした。
一万の軍勢はやり過ぎかな？（数字的な意味で）

< 46 > 戦闘は続く(前書き)

人間の攻勢は激しく、多くの血が流れた。
セージは負傷兵の看護を担当したが……

< 46 > 戦闘は続く

巨大な幻想の収束は世界の終焉を予期させた。

大地よりやや遠い地点で蒼天色の雷が渦巻き、水面に居る哀れな獲物達を威嚇した。逃れる術は無い。矢は全て進路を挫かれ、魔術の放火は膨大な電流の波に打ち消された。近接格闘を仕掛けようとするれば一瞬で炭化した。

「？雷光?!」

刹那、雷撃が暴虐となりて解き放たれ、湖面を舐めた。光の放射線が四方八方に伸びた。

湖のあちこちに浮かぶ船は、光線が掠っただけで破壊された。

鎧を着た兵士たちは鍋に詰め込まれた鼠宜しく身を焦がし、反撃の機会を得ることなく水面に沈んでいった。

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

その大男が斧を振るえば、電撃が一筋の光線となり入り、船諸共蒸発させる。体に纏った光が四方に放たれば、鎧など紙屑同然に貫き、身ごと消える。接近すれば魔術で焦がされるか、怪力によって胴体ごと膾切り。

人間側の軍勢は、たった一人のエルフの攻撃によって、数十単位で薙ぎ払われていた。

その大男は大地を蹴るや、電流の余波をばら撒きながら砦の上空へと疾風が如き移動を果たし、背中の剛弓を構える。人知を超えた怪力が発揮され、電撃の込められた鉄杭とも称すべき鏃が放たれる。

湖面に『着弾』。船数隻が木の葉のように吹き飛んだ。

大男　巨老人と呼ばれた男は、正確無比に頭部を狙って飛翔してきた矢を拳で鷲掴みにし、元来た方に射返した。良い腕前を持っていたはずの射手は、回避もままならず頭と胴体の別れを実感し、二度と動かなくなった。

巨老人が着地する。死ぬ思いで岸边に上陸を果たした兵士達の真つただ中に。手には鉄斧。

兵士達が槍を突き出す前に、颯風が吹き荒れた。鉄斧一閃。五人の兵士の首が玩具のように飛び、血肉が粉末となりて飛散した。

巨老人が湖面を睨みつける。ひゅうひゅうと矢が飛んでくるも、どれも当たらない。否、進路を読み切っているのだ。事実、命中弾は斧で払っているのだから。

岩で戦う味方達は不安そうな顔一つしない。里の最高司令官たる男は、最高の戦士でもあるのだから。

巨老人は熊も卒倒する威圧感を放ちつつ立ち上がれば、背中から弓と矢を抜き、おもむろに呪文を口にしつつ、空に射た。

「？射殺せ？」

その一射は天頂を刺し穿たんばかりに上昇するや、意思を持った誘導弾と化して湖面ぎりぎりに降り立ち、巡航した。

口をあんぐり開けて矢を目で追う兵士の真上を通過し、超低空を高速で飛び、突如として切っ先を持ち上げるや、梯子を運ぶ船へと飛び込み、粉碎した。

魔術の誘導に立ち尽くしたかと思われた巨老人は、腹部直撃を狙った矢をあるうことが掴み、眼前で粉々にして見せた。

そして当然のことのように雷撃を放つと、岸边でうろたえる兵士達を調理した。

斧を担ぎ、地に足で刻印を付ける。

「通りたければ、儂を殺してみるがいい！」

髭の先端から火花が散った。

「巨老人……ここにあり！」

一方セージは、後方で戦っていた。

大人の戦場が前線なら、子供の戦場は後方である。

例えば兵士の世話や武器の運搬、飯の準備、治療、その他雑用など、戦うためには必須な労働。人員を戦闘員に割かざるを得ない里では、不足する労働力を補うために子供も動員される。もっとも子供が労働するのが当たり前な時代であるから、疑問を挟むものはない。

現在のセージの仕事は、負傷兵の世話をすることだった。

いくらエルフが皆そろって魔術に先天的適性があるといっても、全員が全員治療魔術を自在に行使できるわけではない。むしろ少ない。魔術を行使し続けると、魂と体がおさらばするような事態を招く。少人数の治療者に対して数十人数百人と治療させたら、末路は死より残酷である。

いかに魔術が有効だろうと、全てを頼り切ることにはできないのだ。最初から全てを魔術で治療するより、ある程度手を加えてからの方が術者の負荷も少なくなる。矢傷ならば、矢を抜いて傷口を清潔な包帯で巻いてから、魔術で治療するなど。

セージが任されたのは、応急手当てを受け、本格的な治療もしくは魔術による治癒を待つ兵士が集められる場所であった。

梯子で登ってきた人間に肩を刺されたという男性の血塗れの包帯

を取り、薬を溶かした液ををかける。

「ぐう……」

「だ、大丈夫ですか？」

兵士の服をした男は苦痛の声を上げ、しかし歯茎を食いしばって耐えた。セージが思わず手を止めてしまうと、男が首を振り、続きを促した。

「続けてくれ……お嬢ちゃん。死ぬ……っ、傷なんかじゃねえ……」

…早く巻き直して、他の奴の看病してやってくれ」

「わかりました！」

男が無事な方の手を負傷した仲間達に向けた。男は気丈にも、笑みを見せる。

セージは怖気付くことなく包帯をきっちり縛り上げると、ペこりと頭を下げて他の人の看病へと走った。運び込まれるのは応急手当てを受けただけの兵士で、皆一様に矢傷であったり、剣傷であったり、骨折であったり、火傷や凍傷などを負っており、悲鳴がひっきりなしに飛び交っていた。

室内は血の臭いや怒号が充満し、担架で運びこまれる者と、治療室へ運び出される者の流れで、静寂が訪れることが無い。

隣の治療室は言うまでもないが、後方の最前線と称すべき状態だった。

セージは同じ組の女の子と協力して、血塗れの包帯を交換する作業と、薬液の運搬や塗布を行った。年長の子供は担架の運搬などの力仕事を手伝った。

本格的な治療は重傷者を優先して行われるので、命に別状の無い人達は苦痛に長時間耐えることになる。

セージは悲鳴や苦悶を目の当たりにした。血を見て、触った。手

が汚れた。何人もが力尽きて死に、運び出された。

自己防衛という言い訳で誤魔化した『死』と、故郷の独立の為に唆されて剣をとった人間達の『死』、そして里と家族を守るために戦ったエルフの『死』は、等しかった。

斬られれば、射られれば、焼かれれば、打たれれば、死ぬ。

死ぬ。

死んでいく。

「……畜生！」

セージは、右腕を丸ごと火傷した上に腹部を刺された男の横に跪くと、両手を広げて治療魔術を施そうとした。男は外傷のショックで昏睡状態に陥っていた。

「？治せ?!」

だが、魔術は起こらなかった。心の乱れもそうだが、訓練不足でうまい具合に力が働いてくれない。傷口を塞ぐ以外の成功例を持たないセージの実力では、火傷は治せない。

「もう、私たちに治せるわけないでしょ！ 早く包帯巻かなきゃ

！」

「うん……」

同じ組の女の子が、てきぱきと包帯を取り換える。今のセージには怪我人の状態を悪化させないように薬液を塗り込み、包帯を取り換える他に無かった。

そして、地獄のような一日が過ぎた。

夜。

銀色の月が昇った快晴の空には色とりどりの星々が輝いていた。

昼間の戦いはどこへやら、皆は静まり返っていた。人間側の軍勢は日が落ちると撤収してしまったのだ。夜戦は不利と悟ったか、それとも兵士に休息を取らせるためか、エルフ側には判断が下せない。いつ船で襲い掛かってくるか分からないのだ。

しかも、灯りを消した船で忍び込もうとする輩がおり、兵士による巡回が交代で行われていた。無論、発見次第殺害である。

湖の対岸には人間の野営地が構築され、焚火が無数に灯っている。星々の輝きに対し、焚火は酷く哀しげだった。

本来なら戦うべきではない、憎しみすら抱いていない国の人たちと戦わされている。エルフの里は摩耗し、植民地は男手を取られて活力を失っていく。得をするのは王国のみだった。

セージの想像する戦争は華々しいものであった。過去形である。RPGのように英雄が剣を振るい、悪を倒す。それがイメージだった。だが、現実とは違った。人が死に、悲しみが増えていく。

わかっていたつもりなのだ。現実には優しくしてくれないし、容赦なく刃を突き立てる存在であると。

セージは無力だった。できると思っていた治療魔術はまるで役に立てず、重傷患者を華麗に救うこともできず、前線で戦果をあげることもできなかった。

勉強も訓練も経験も、戦場では無意味だった。

王国を倒し帰還の糸口を探るという大層な目標はいきなり躓いた。その人物は、見張りの兵士と一言一言言葉を躲すと、足音を立てずに部屋を横切った。

「眠れない？」

「……クララさん」

セージが部屋の隅で眠れずにいると、聞きなれた声が聞こえた。

顔を上げる。白服に帽子を被った女性がいた。記憶に合致する人物がおらず、困惑するのの一瞬。クララだった。

白亜の衣服には血痕が付着しており、クララが治療を担当していたのだと容易に理解できた。

だが、好いているクララを前にしてもセージの反応は希薄で、クララが横に座っても身じろがなかった。

クララが体育座りで俯いたままのセージの肩に手を置いた。

重量がかかる。温かく、こそばゆい。花の香りと、血の香りがした。

「治療は終わったわ。もう……助からない人は除いて、全員が小康状態にあるわ」

「戦争なんですね……」

「ええ……悲しいけど……」

セージは深く重く息を吸いこんだ。新鮮な酸素が肺胞に届き、血中に溶け込む。吐く。内側から外側に気流が生じた。

戦は終わっていない。

ひと眠りしたら、戦いが再開するだろう。

「……………」

願わくば、里が陥落しませんように。

セージの目がしょぼしょぼと開いては閉じるを繰り返す。

そんなセージの頭を、クララが優しく撫でた。やや時を挟み。喉が震え、風が草の葉を撫でるような、弱く甘くせつない唄が零れた。床に寝かせられている負傷兵の何人かが気が付いたが、不満を漏らすことはなかった。

「……………」

美しい唄の中で、セージは眠りについた。

< 46 > 戦闘は続く (後書き)

巨人無双でした。

< 47 > 連合（前書き）

里の戦闘は熾烈を極めた。

一方で世界の情勢は徐々に変わりつつあった。

< 47 > 連合

戦は続いた。

人間の一万という圧倒的な物量は波状攻撃を可能とし、朝方から夕方まで毎日のように繰り返し押し寄せては引いていった。

エルフ側の防備は強力であったのにも関わらず多数の死傷者を出した。だが医療体制の完備や巨老人の活躍により、戦にしては戦死者の数は少なかった。

それでも前回の攻撃よりかは兵力が少なく、練度も低いのである。セージは絶望の中で働いた。戦場に立った多くの人が傷つき、家族の名前を呼んで死んでいった。

敵兵がなだれ込んできたこともあった。武装した男たちが一斉に迎え撃った。敵のある者は脳漿をまき散らして崩れ落ち、ある者は腕を粉碎されて前のめりに倒れ、無残な死体になった。セージは悲惨な現実を目の当たりにし、茫然自失に陥ったが、同じ組の女の子に頬を叩かれて我に返った。

その戦も、ある日突然収まった。

たった一日の間、夜中いっぱいを使って、人間の軍勢は撤収してしまっただのである。

理由を知る術は無かったが、伝令係からの言葉により、軍勢を退けることに成功したのだとわかると、喜びが溢れた。

その夜は宴だった。生き残ったことに対する感謝と、戦った者達への労い、そして死者への鎮魂を込めて。

だがセージの喜びはあつという間に萎れてしまった。宴も楽しくなかった。戦で目の当たりにした残酷な絵が頭にへばり付いて離れなかったのだ。

セージは一人、果物酒の入ったコップを両手で包んで夜を仰いでいた。飲酒は何歳からでもよいというのがこの世界の常識であった

が、子供は少しだけということ一杯だけ渡されたのだ。

めでたい日の甘酒や、父親に舐めさせてもらったビールの泡しか飲酒の経験の無いセージには、甘酸っぱい香りを漂わせる果物酒は飲むのが躊躇われた。

大盛り上がりの大広間。その片隅で、窓の外にぽっかり浮かんでいる月を見つめる。銀色の円形は元の世界と大差ない。

「知ってたか？ 引き上げたんじゃない、別のところに派遣されたのだと」

「ロウさん」

憂うセージの横に音も無く歩み寄ったその不健康風貌は、大容量のゴブレットに並々と注がれた酒を一気に半分にすると、口を拭いた。先ほどまでずつと仲間と酒をカツ食らっていたのに顔色一つ変えない辺り、ウワバミなのかもしれない。

ロウはセージに座るように促し、自分も座った。

身長差や体格の違いから、まるで兄と妹のように見えただろう。

「飲まないならよこせ」

「いやです」

ロウがセージのコップを覗き込み、中身が減っていないことに気が付くと、要求した。

セージは首を振って拒絶すると、飲まれる前に中身を一気に喉に流し込んだ。咽頭がかつと熱くなり、痺れが走った。爽やかな甘酸っぱさが鼻腔を擦る。頬が熱くなってきた。

空のコップを振って見せ、どうだとばかりに鼻を鳴らす。ロウは肩をすくませると、ゴブレットの残量をゼロにした。

「さっきの話、どういふことです」

「酒の一気に飲みは良くないぞ。どれだけ飲めるのかを確かめてからすべきだ。クララなんて一杯でぐでんぐでんだ」

ロウがさらっとクララが聞いたら嫌がりそうなことを披露してくれた。質問に答えてないので、もう一度同じことを復唱する。

部屋の中央で始まった男たちの歌が響いてくる。戦の勝利を精霊に感謝する内容。初めはもの哀しく、後半につれて盛り上がり、最後は女たちのコーラスが入って締めくくるのだ。

「反王国派の国が一斉に行動を起こしたそうだ。連合を名乗って宣戦布告してね、ここを攻めていた連中はとんぼ返りして反王国派の軍討伐に向かったということさ」

ロウはあたかも暗唱するように情勢の変化について語った。地図の件にしても、里の中核となんらかの繋がりがあつたことを匂わせた。そもそも、情報が早すぎる。外部に独自のつながりがあるのかもしれない。

何故情報を教えてくれるのだろうかという疑問は、出てこなかった。あまりにも自然に教えてくれるので、当然のことと受け止めてしまったのだ。

セージは体が火照ってきたのを実感した。酒は弱いようであった。判断力がいつ欠如するか不安になった。飲酒経験の無いので酔いの度合いがわからない。

ロウは、ゴブレットにわずかに残った酒を舌で舐めると、顎に手をやった。白い肌に薄ら髭が生えていた。戦闘中は魔術で治療を行っていたので身だしなみを整える時間が無かったのだ。

「ロウさん。俺たちは……俺たちの里がどんな出方をするのか知ってますか？」

「まるで俺が知ってるみたいないぶりだな」

沈黙。宴の賑わいが空白を埋めた。

「知ってるんでしょ？」

「……んム……………」

「あ、ちなみに独り言なんで気にしないでください」

「そうか、独り言なら仕方ないな。里の上層部は連合に対して手助けを検討しているようだ。エルフの戦力だけではいずれ押しつぶされる。連合も同じく長続きしないだろう。そこで、両者が手を組もうということだ」

打倒できる保証はないがね、とロウは続けると、ゴブレットの紋様に視線を固定した。

「俺も技術指導員として派遣される予定らしい」

「ただの穀潰しじゃなかったんですね」

あんまりと言えばあんまりな物言いであったが、本人が自称したのだから躊躇わず使う。

するとロウはニヤリとニヒルな笑みを浮かべて見せた。

「ああ。何を隠そう里を守る二つの魔術は俺がかけたからな」

「へ？」

「湖の霧と、山岳の死の呪いのことだ」

「嘘……………」

「嘘を言っただろう。こっちは大の付く魔術師なのだ」

湖の霧

向こう岸からは霧がかかって視界が遮られ、こちら

側からは良好な視界が確保される防衛魔術。セージはどのような効力があるのか知らぬが、山岳を守る『死の呪い』とやら。二つの守

りは湖と山という地形を砦に仕立てる強力なものである。詳細を知らないセージでさえ、この二つの魔術的防御が里の防衛上、重要な事柄であることは理解できる。

もし、ロウがその二つの魔術を構築した張本人であるとするならば、秀才むしる天才的な男なのではなかるうか。

そうだとすれば部屋に引き籠ってガラクタを弄るだけの日々を過ごす理由もわかる。必ずなんらかの労働をしなくてはいけないのにしない理由である。魔術の権威であるから、働かなくても許されるのだ。頭脳の価値が労働に匹敵するのだろう。

思い返せば、部屋の自動ドア（？）だったり、監視カメラの役割を果たしていた水晶だったり、勝手に動く鎧だったり、魔術の産物と思しきものを当然のように扱っていた。よく考えてみれば高度な技術が無くてはできない無駄遣いである。

セージの中でロウの評価が一段階上位に繰り上がった。

ふと、メラメラと欲望がこみ上げた。ロウの従者でも弟子でも身分を偽れば王国に近づけるのではなかるうかと。実力を鍛え体が大きくなるまで日々を過ごすという計画をほっぽり出したくなった。

「いつ行くんですか？」

「決まってるない。近いうちには出るはずだ」

ところがロウはセージの浅はかな考えを見透かしたように目を向けると、無表情のまま言葉を発した。

「セージ、君が派遣する人員に紛れ込むことはありえないぞ」

「……やだなあ、そんなことするわけ……」

「仮に選ばれても俺が全力で首を横に振ろう」

「……ふん。いいですよ。実力で這い上がってみせますから。任務中に死なないように精霊にお祈りしときますね」

「ありがとう！ とだけ。俺は死なんよ」

ロウが新たに酒を汲みに行こうと腰を上げた。
セージはコップを持ち上げて見送った。

「はあ……」

ため息を吐き、膝を丸める。情勢は変わりつつあるのに己の力では変えられない悔しさ。下手すれば里に籠っている間に王国が倒れるかもしれない。

目的は王国の打倒であるが、第三者の手によって降されるのは我慢ならなかった。

どうして“神”が中途半端な年齢に転生させたのか。どうして中途半端な能力にしたのか。何もかも恨めしい。

今できることを考える。結論は一つ。

「修業かあ……」

セージはこっそり宴を抜け出して部屋に帰ろうと立ち上がった。ところが組の女の子に見事に捕まってしまった。考えるのが馬鹿らしくなったので、その夜はみんなと楽しんだ。

翌日、セージは酒に弱いことが判明した。二日酔いで頭が痛かったのだ。

< 48 > 新たな旅立ち（前書き）

世界情勢は変化し、歪な平和に突入していた。

< 48 > 新たな旅立ち

戦争から、半年の時間が過ぎた。

あつという間だったと言えばそれまでだが、セージ、里、世界、それらの要素は少しずつ変わり始めていた。王国に反旗を翻した国の結集した『連合』はエルフと正式な条約を結び、諸国に対して圧政を覆すべく立ち上がることを要求した。王国はこの連合を秩序を乱す暴力集団と認定し、後でも先でも協力関係にある国は容赦なく叩き潰すと意気込んだ。世界は帝国主義と反帝国主義に割れた。

エルフの里では技術提供などの面での支援が行われることが決定され、巨老人の里からはロウなどの優秀な魔術師が旅立っていった。余裕のある里からは出稼ぎの意味合いを含めた傭兵が派遣されるらしい。

世相ではエルフは迫害されるものであるが、それはあくまで王国などの宗教国家がお題目として唱えたことであり、王国にいい気持ちを抱いていない国は関係ない。もとより神に近き者として神聖視されるくらいだったのだから。

セージもなんとか派遣員に入れないかとしたが、当然のごとく撥ねられた。

半年の間、王国と連合は不気味なまでに静寂を保った。

王国は国内の経済状況の悪化に伴う情勢不安に陥っていた。一方の連合は王国の軍備に対抗できるだけの兵力を整えられずにいたのだ。よって拮抗状態が続いた。

その間、里では軍備の増強が進められた。水際で食い止めるために鬼のようにバリスタが増設され、登れないように『返し』もつけられた。ごく少数であったワイバーンは増えて、攻撃隊が本格的に組織された。人間がワイバーンの飼育に成功した事例が出てしまったのだから当然のことと言えた。

セージは毎日を普通の子供として過ごす一方で、里の兵士に混じ

つて戦闘訓練を受け、魔術の修行に没頭した。小さな子供が必死に剣を振るい、魔術を唱える姿は、滑稽であったかもしれない。

そんなある日、里と里の人的交流ということで、渓谷の里から一団がやってきた。逆にこちらの里からはワイバーンに乗った一団が旅立った。

歓迎式が開かれた。と言っても定型文を読み上げて一礼する程度だったが。

一心、組総出で参加となったので、列を作って出迎えた。無意識にルエの姿を探したのは秘密である。

それから幾年か年月が経過した。

永遠に続くと思われたにらみ合いは、王国内部で発生した反乱を好機とみた連合の先制攻撃から崩れ去った。植民地軍（王国が屑値で雇った）は他の植民地軍と戦うので精一杯だった。多くの国を支配するためには戦力を分散しなくてはいけないこともあってか、王国を守る兵力は比較的手薄だった。

電撃的に軍を進めた連合であったが、それもやがて止まってしまった。

数多くの軍をねじ伏せては隷属させてきた百戦錬磨の王国本隊が王都への道を阻んだのである。植民地軍を退けることができて、本隊は一筋縄ではいかなかった。総兵力だけで計算すれば本隊は連合国軍に劣っていたが、練度、武器、地形、それらの要素では圧倒していた。

連合国軍と本隊がぶつかり合えば、共倒れは必至だった。双方が消滅したのを見計らって北の国家達が漁夫の利を狙うことも考えられた。

そこで王国と連合は条約を結び、一時休戦した。不可侵条約といくつかの条約を交わして。結局、植民地化された国の解放はならなかった。連合は自国の安全を確認すると、安堵したように軍を下げた。

世界は歪な平和を抱えて時の経過をただ享受するのであった。

エルフ側の出方はおおまか一つだった。

エルフへの迫害を止めさせるために王国を倒すもしくは王政を倒すこと。

とある派閥は連合に働きかけて武力行使を誘発しようとし、またとある派閥は王国内部に工作員を送り込んで民衆を煽った。王国の情勢が不安定なことに付け込んだ工作活動は一定の効果を発揮した。植民地の不満が高まり、反乱が頻発するようになったのだ。それでも王国はそれを抑え付け続けた。元の国土が広いこともあり兵力にはことかかなかった。民衆の不満を抑える為に兵に取る人員を削減していただけだったのだ。

不可侵条約の期限切れと共に第二次戦争が幕を開けた。

連合と王国の軍勢は大河を挟んでにらみ合った。

連合側は研究により技術レベルを王国と同程度まで引き上げており、エルフの加勢も合わせれば、王国軍を凌ぐ実力を有するまでになっっていた。

一方の王国は国内情勢の悪化から士気が低下していたが、植民地軍や追加徴兵分を合わせれば連合をも超える戦力を有していた。

だが、数年の間に台頭してきた北の国家の圧力もあり、戦争は硬直状態に陥っていた。もし王国と連合が戦えば北の国家がやってくるだろうし、王国と北の国家、連合と北の国家が戦っても、やはり同じことが起きる可能性があった。三勢力の戦闘力はほぼ同等であり、釣り合っていたのだ。

こうして、三勢力はにらみ合ったまま兵力だけを悪戯に増やし続ける時代に突入した。

所謂冷戦の時代に入った現在では、エルフの里への干渉は緩くなっていた。エルフ迫害はそのままだが、里への『定期便』は鳴りを潜めていた。

それもそのはず。連合の支配領の中に里の大半を隠すことに成功したのだから。

エルフ側は技術を提供し、連合は里を守る。理にかなった協力体制が安全を作ったのだ。もちろん、大陸の各地に存在する里全てというわけにはいかないが。

小鳥の鳴き声。

朝。体内時計が無音で時を知らせてくれた。
出発の日だ。

瞳を開いた。慣れ親しんだ天井が迎えてくれた。夜中の間に沸いた粘つく唾液を飲み込み、顔を乱暴にごしごし擦る。白い布団を跳ね除けてベッドに腰掛けた。

一片の曇りも無いすらりと伸びた足先は、ぎりぎりのところで床に接していない。綺麗に整えられた爪先は薄らと血の気を帯びており、若さに張り詰めた二の足を飾っていた。

身を包むは男用と区別の無いであろう白シャツと白い下着。布地から覗く腿は瑞々しく、贅肉の類を削ぎ落した健康的な肉の付き方をしていた。

きゅっと引き締まった腰から上は、いまだ成長の余地を残した、布の上からでもしゃぶりつきたくなる魅力があり、曲線美を体現した丘を作っていた。

その女の子は、肩をグルグルまわすとベッドに寝転がり、布団に顔を押し付けた。夜の余韻が睡眠を呼ぶ。このままでは二度寝になつてしまうと布団を退ける。そして、ベッド下の靴を引っかければ、伸びをしつつ立ち上がった。

ブロンドの髪はショートカットに切り揃えられていた。その子の

昔を知る人ならば、なぜ切ったのかと訊ねるであろう。理由はある。一つだけ。

髪の毛を割って伸びる細く尖った耳は幼き頃よりも長くしっかりとしていた。

理知的な瞳、通った鼻筋、ふつくらとした唇など、全体的に均整がとれており、髪型と服装をそれなりのものにすればどこかの名家のお嬢様に見えたであろう相貌であった。

“女の子”は毎日欠かさずやっている軽い運動をすべく、ベッドに座り直すと、両足を広げた。足を広げ、体を正面に倒す。健が伸びる。気持ちよくもあり痛くもある。

「ふう……」

深呼吸をしながら体を起こせば、足の角度を大きくして、左右に上半身を倒す。下着の隙間から内側が覗くも、気にしない。

一通りのストレッチをした後は、筋トレを行う。本格的に鍛えるのではなく、体の慣らし運転のようなものである。

ベッドの上で軽く腹筋をする。一回一回を確かめるように。

次は、ベッドから降りて床で腕立て伏せをする。数百回はせず、十数回で止める。

すると、扉がノックされた。

「セージ君？」

「はい、クララさん！ ちょっと待ってください、準備しますんで！」

“女の子”は扉の外からの声に答えれば、棚から服を取り出し、着込んでいく。ズボン、シャツ、どれも男物。軽く動きやすく作られた鎧を装備、ロングソードを腰に差し、小型二連クロスボウを専用のホルスターに突っ込み留め金で固定する。滑り止め付きの長手

袋を嵌め、魔除け効果のある指輪を付ける。

机の上に纏めておいた私物を背中へのバッグに詰め、最後に靴をタ
ンタタンと打ち鳴らせば、扉を開けた。

変わらず美しいクララが、体の前で手を重ねて待っていた。

「行つて。時間に遅れてしまつわ」

「ええ」

この日、“女の子”ことセージは、里の外へ出ることとなつてい
た。

ロウが派遣された国への追加支援として送られる一団の一人に抜
擢されたのだ。

毎日のように訓練を積み重ねてきた努力があつてこそそのことであ
る。変な目で見られながらも剣を振り魔術を学んできたかいたがあつ
た。

クララには仕事があつた。送別会には出席できなかった。そこで
部屋の前でお別れをすることにした。

クララの手を握る。握り返してくる。しつとりとした肌質だった。
セージは、別れの言葉を言おうとして言えなかった。なぜならク
ララがまるで母親のように、生活の心配をしてくるからである。面
倒くさいとは思わなかった。ありがたくて心が温かくなった。

「ちやんとご飯食べるのよ？」

「わかつてますよ。もりもり食べますからっ」

「うん、よろしい。兄さんによろしく伝えてね」

「はい」

クララはセージの手を握りながら、暫し逡巡し、やがて面を上げ
て胸の中に誘った。

「……おいで」

「あう、クララさん」

「……」

「……」

「……」

「そ、そのお……そろそろ行かないといけないんで……」

セージはクララの胸の中に包まれた。クララは安堵の塊のようだった。優しい匂いがした。照れくさくなって離れると、表情を引き締めて、直立不動をとった。

「行ってきます!」

< 48 > 新たな旅立ち（後書き）

まあ、やらかしたわけですよ。

あまり褒められない手法……「数年後」というキングダムゾーン？
をね。

第二章からは少し大人になったセージ君が主人公となります。

< 49 > ワイバーン旅（前書き）

セージは技術支援団の一員に抜擢され、旅に出ることになった。
足はワイバーンだった。

< 49 > ワイバーン旅

旅の手段は徒歩ではなかった。当然である。仮にも技術支援団ともある者たちに危険な徒歩で行ってこいと言う訳も無い。エルフの里が連合の支配領の中にあるとはいっても、大陸全土がそうではないのである。歩き続ければ、いずれ王国の領域に辿り着く。もしくは物取りやら奴隷商人やらが低丁重にお出迎えしてくれるであろう。寄ってたかつて攻撃を受ければエルフと言えど全滅は免れぬ。

では馬かと言えば、違う。何か。答えは、ワイバーンである。

人間側がワイバーンの飼育に成功しているため、絶対的な安全が保障されているわけではないが、少なくとも地上からの攻撃は届かない。高度と言う防壁を破るのは通常困難を極める。

ワイバーンは巨大なドラゴンと比べれば戦闘能力に欠けるが、飛行能力に関しては優れている。その気になれば操縦者を含めて三人を乗せたうえで二人を足にぶら下げて戦闘機動だったこなすのである。もちろん、足にぶら下げるのは基本的に敵であるが。

一団は、ワイバーン隊に送ってもらうべく、里の最上部にやってきていた。

セージは一団が皆平然としている中で、顔を強張らせていた。他の人が子供のころなどにワイバーンに乗せてもらった経験があるのに対し、剣ばかり振っていたので、初体験だったのだ。

トラック程の空間を優に占有するそれは、独立した腕を持たない飛ぶための生物だった。色合いは深い黒緑。翼の先端、尻尾の先端共に棘が生えていた。全身が硬質な鱗で覆われており、弱点になりうるであろう頭部は皮の鎧で守られている。操縦者の趣味なのだろうか、長い首に青い宝石のついたネックレスがあった。

ワイバーンが、擬音に起こせば『クエエエエエツ』と鳴き声を上げた。腹に響く大音量。耳が痛い。

操縦者が、つまりワイバーンのマスターが、長首を乙女の肌を扱
うように撫でた。鱗の無い口元の柔肉をむにむにしたり、白い角を
ノックしてみたり、ワイバーンは男の胸倉に鼻を寄せてみたり、す
んすんと匂いを嗅いでみたりと、親密さが窺えた。否、親密さを越
えている気がした。愛に片足突っ込んでいると感じたのだ。

男は頬の肉を蕩けさせ、気持ちの悪い声をワイバーンにかけてい
た。

「ようし今日も美人だなお前はー？ んー？ 可愛いぞ！ 可愛
いんだよ！」

『クエエエ……………』

「よしよし！ よしよし！ー！」

『クウウ……………』

この人は何をやっているのだろう。

セージは、一緒に乗ることになった人の横に立って、マスターの
奇行もとい愛情表現にあぐり口を開けていた。この上なく幸せそ
うなので、『早く乗せてくれ』とは言えなかった。

他のワイバーンらが飛びたとうというときになって、ようやく乗
せて貰えた。鎧に足をかけ、マスターの手に掴まって一息に登る。
指示通りに革製の固定器具を装着した。

「君は初めてかい？」

「そうです。飛んだことなくて……………」

後ろに乗った男が、声をかけてきた。もし落ちそうになった時、
後ろから支えてくれるというので、セージは操縦者と男に挟まれる
位置に乗っていた。

酷く緊張していた。知らぬ生き物に身を任せて空を飛ぶことに胃
が痛んだ。己が落下し地面に叩き付けられる想像が頭から離れなく

なっていた。

男が、セージの肩にぼんと手を置いた。

「緊張しなくても大丈夫さ。うちの里のワイバーン乗りは優秀だから 特に彼はね」

「え？」

男が肩に置いた手の人差し指を立てると、マスターの短く刈り込まれた頭を指した。

彼はルンルン気分で地図に目を通しつつ、暢気に歌などくちぐさみ、頭を左右に振っている。ワイバーンは岩の地面に頭を擦り付けていて、どちらにも緊張感が無い。

「……………」

セージは本当に大丈夫かと、ますます怖くなるばかりだった。

一団が全員ワイバーンに乗り込んだ。マスター達は一堂に会し、地図を片手に最終確認を始めた。ワイバーンの体力や体調はもちろん、敵の襲撃、時間帯、風の流れ、もしはぐれた時はどこに向かうべきかなど、手短かに話す。

ようやく戻ってきたマスターの顔は、先ほどとは打って変わって凛々しく変貌していた。ワイバーンの鱗に足を引っかけ鎧にまたがり、てきぱきと身支度を整えれば、空を仰ぐ。晴天、雲一つ無し。

ばむと手を打ち鳴らしたかと思えば、手綱を握った。

「うし、行くぜ。お二人方よ。本日はお日柄もよろしく絶好の旅日和でございます。当旅の案内を務めさせて頂く者です。我ら旅路に幸あらんことを精霊に祈りましょう」

すらすらと口から流れる台詞は丁寧かつハキハキとしていた。

口笛。里の上部の端から順々にワイバーンが翼を広げると、強靱な足を用いて跳躍し、湖に向かって飛び降りた。

セージの乗ったワイバーンも同じく翼を広げた。

「掴まってくれい！」

マスターの言葉に反射的に固定器具を握った。次の瞬間、体が鎧に押し付けられるや、セージは羽になった。放物線よりなお鋭い角度にて上昇し、下降に移行。翼が展開して風を孕む。足元に水面が見えた。

湖面を滑空して速度を得たワイバーンが次に起こしたのは、高度に変換することだった。筋肉が俄かに盛り上がる。猛禽が如き脚部が水平に近づく。揚力が生じた。固定器具がギシギシ鳴る。巨軀はセージの甲高い悲鳴を伴い、空高く舞い上がっていった。

翼が上下に揺れて、大地はみるみるうちに遠ざかる。身を強張らせている間にも高度は上がっていった。木々が皿に盛られたパセリのように小さく見えた。

動かそうに動けない下半身はそのまま、上半身をまわして情報を得る。久しく味わっていなかった高速移動。心臓が高鳴る。

「は、はは……すっげえ！ 飛んでる！」

セージは固定器具に爪を立てているのにも気が付かず、快活な笑い声をあげた。眼下には木の海。上は青い雲。前はマスターの後頭部とワイバーンの首。後ろを向くと、相乗りの男が興味深そうに周囲を見回していた。

ワイバーンの隊列は縦に一定の間隔をとって飛行しているようだった。理由をマスターに訊ねてみると、固まっただけでは全滅する恐れがあるからだそうだった。

空を飛んでいる。ワイバーンという生物の背に乗って。その事実

は、気分を高揚させた。

物足りなさを感じたセージは、マスターにお願い事をした。風に負けないように声を張り上げて。

「スイマセンけど、もっと速くならないですか？ 風を感じたいんです！」

「速くだって？ フン、俺と相棒に速度？ 悪いが体力を無駄に使うわけにいかんのでね。また今度、暇な時に華麗な空中舞踏を披露してやんよ」

マスターはあっさり首を横に振った。要人を運ぶ任務中に危険は冒せない。彼は変わった性格とは言っても、職業意識は持っていたのだ。

ワイバーンの旅路は快適だった。何せ、操縦はマスターに任せておけば、寝ても進むのだ。止むを得ない用事を除けば鎧にお尻をつけているだけで事足りる。朝の清々しい太陽を拝みつつの食事も、また乙なものだった。セージはこの世界に来て初めて楽しい旅というものを経験した。

困ったのは寒さである。何せ風に当たり続ける構造なので、それなりに着込んでいても夜は堪えた。準備のいいことにコートが備え付けられていたので、鎧の上から羽織った。

道中、雨を避ける為に雲を迂回したことを例外にすれば、旅の計画は順調に遂行されたのだった。

数日かけて大陸を行くと、街が見えた。目的の国に到着したのだ。ワイバーンは一団を降ろすと、一騎を残して帰路についた。記録を取りたいという国側の意向を反映して一騎が残ったのだ。

一団は大いに迎えられた。歓迎会が開かれ、酒と美味しい食べ物

が振る舞われたのだった。旅の疲れを癒すにはうつつけだった。興奮気味だったセージが無理して酒を何杯も吞んでぐでぐでんに酔っ払い部屋に運ばれたのはまた別のお話。

数日後、セージはとある人物らと再会した。それも、二人も。

< 49 > ワイバーン旅（後書き）

旅で一話使ってしまった……

次回、なんちゃらとほにゃららと再会！

< 50 > 胸サイズと帰還と再開と（前書き）

セージは二人の人物と再会したのであった。

< 50 > 胸サイズと帰還と再開と

“女の子”の役割は決まっている。要人の護衛である。

実力が認められたとはいえ、所詮は若造。経験を積まなくては実戦では到底役に立たない。里の防衛戦では後方にのみ参加していたので、実際には戦わなかった。そこで比較的安全な任務に就かせ、物事を経験させようと言うことである。エルフ陣営が来るべく戦争に備えているのは明白であった。

セージは部屋に置かれていた一枚鏡と睨めっこしていた。極力男でありたいので、化粧などしないし、服装容姿にも気を使わないのに関わらずである。目にゴミが入ったとか、戦化粧でもない。合わせ鏡で悪魔を召喚する儀式でもない。何をしているかと言えば、部屋の唯一の出入口を施錠しての確認作業である。

上半身裸で確認する対象は、胸だった。

幼い頃は男と同じ体つきだったので考える余地が発生しなかったが、大きくなるにつれて変わってきてしまったのだ。背丈は伸び、体に丸みがついてきて、局所の細部も変わってきた。必然的、いわゆる自然の流れとして胸も成長してきたのだ。

お腹の中央に薄らと凹んだ線のやや上寄り。臍の凹からなぞった先。僅かに浮いたあばらの造形を覆う柔らかな表皮、その上に、腋から始まる、慎ましながら自己主張する膨らみがあり、桜色の円が頂上を彩っていた。

何年もの間親しんできた体の、変化の象徴。体を洗うときだって無視を決め込んできたが、大きくなってきてしまっただけ、目を向けなくてはいけない。

鏡の中で複雑な顔を浮かべる己の、鎖骨の下を見遣る。男性の体だった頃にはありえない丘がある。ため息を吐いた。

「布巻くか。サラシってやつ。……ったく、……胸なんて贅肉いらねーっての」

喉から発せられるは、乱暴な口調に反して濁りの無い声。

ぶつぶつと本心からの独り言を呟きつつ、手ごろなタオルを持ち出し、胸に宛がってみた。胸を圧迫すれば成長を阻害できると踏んだのだ。

「よ、っと」

ひとまず胸に合わせてタオルを押し、屈んで後ろで縛る。だがタオルのようなふわふわした布では圧迫が上手にいかない。悪戦苦闘の末、包帯を持ち出してグルグル巻きにしてみた。胸苦しい。やや緩めてみる。調整、そして調整。胸がぺたんこ……に見える。継続すれば効果が望めるに違いない。

もし大きくなってきたら、きつく巻いてやろうと決めた。

いつまでも上半身裸ではいられないので包帯を解くと、普段着を着込む。要人警護もあるので腰にはロングソードをぶら下げたまま。戦いは機動性を重視しているので、鎧はむしろ無くても良い。

部屋を出ると鍵をかけて、重厚な岩造りの廊下を歩いていく。技術支援団として派遣された一団は、首都より少し離れたところにある湖の畔に造られた古城に居た。既に取り壊しが決まっていた城を研究施設に再利用したそうである。老朽化が進み防衛施設として利用が難しいが、研究施設としては十分である。首都が近いという地理上の利点もあった。

セージは、しばらく前に魔術師として派遣されたロウの居る部屋に行こうと、守衛の男性に道を聞いた。警護の仕事は道中や移動の時は一行だが、城に居る間はロウにつくことになっていたのだ。

城は小規模なものだが、案内表示などある訳も無く、迷いに迷っ

た。防衛上の都合で、内部は入り組んだ構造をしていたのが道を失わせる要因だった。最後には自力で行くことを諦めてメイドに案内してもらった。

ロウの部屋の前に立ち、ノッカーで扉を叩いた。

「どつぞ」

酷く疲れた声が出た。セージは恐る恐る扉を開き、内部に首を突っ込んで、やっと体を滑り込ませた。

部屋は意外にも狭く、予想に反さず散らかり放題だった。木の机は羊皮紙の束が山になっており、里から持ち運んだらしき鎧が二体ほど窓際に立っていた。用途不明の薬品を湛えたガラス製の実験器具。壁は謎の図式をこれでもかと記した広い羊皮紙だらけ。いくつかの国旗は申し訳程度に天井から吊るされていた。部屋備え付けの暖炉は、鞆やら本の山やらで物置状態。部屋を満たす大気は、何やら甘ったるい匂いと埃臭さであり、お世辞にも爽やかなという形容動詞を付けることは、天地がひっくり返っても不可能だった。

総評 汚部屋。

部屋の隅にある机の前で目頭を揉んでいる不健康風貌は、セージが入室すると大あくびを噛み締めつつ、本にしおりを挟み、羊皮紙山の頂上にでんと乗せた。振り返る。不健康、疲労、そして優しさの融合した、老人のような表情が浮かんでいた。

数年ぶりの再会だった。

ロウの容姿はまるで変わっていないかった。エルフは体の絶頂期までは人間と同じように成長するが、あとはゆっくり、非常にゆっくりと老化するため、ロウもクララも外見に老いが無かったのだ。

「ロウさん、お久しぶりですね。本当に汚い部屋です。掃除してください」

「数年越しの再会なんだから、部屋には目を瞑ろうとは思わない

のか」

「まったく、これっぽっちも」

「仕方ないだろう……都合のいい便利屋扱いで、あれもやれこれもやれ、これをこれこれしてくれと助かるなあ……それとこれもお願いね、と“頼みごと”してくれるものでは、片付ける暇もありやしない」

「お仕事ですからね、耐えてください」

「仕事はする。給料も出ているし、里の為にもなる。だがな、朝起きて夜寝るまで仕事漬けは堪える」

「体を鍛えると思えばいいでしょう」

「体力は要らん。時間が欲しい」

二人は、ふつと笑うと、どちらがともなく歩み寄り、がっちり両手を握り合った。かつて身長は見下ろす見上げる位には違っていたが、今はさほどでもない。

セージは白い歯を見せて笑った。ロウの手は冷たかった。

「大きくなったな……ガキっぽさが抜けた」

「大人になったと言ってほしいですね」

ロウは嬉しそうな顔を隠さず手を大きく振れば、部屋の隅で埃を被っていた椅子を配置した。セージは埃を払い、座る。

一変して二人は真面目な雰囲気を纏った。ロウが一冊の小さな本を机から取り出すと、表紙を捲った。題名も筆者も、あるべき情報が記されていない。重要なことを書き留めておくメモ帳らしい。

「それで？ 帰還するという目標は諦めてはいないか？」

「はい。教えてください。あるのか、無いのか」

「端的に言えばある……らしい」

「らしい？」

セージの質問に要領得ない答えが返ってきた。この世界に落とされてから今に至るまでの行動指針の根底を支える重要な問いである。椅子で前のめりになって、両肘を腿に付け、声を落とし、再度聞き直す。

するとロウは細い指を使ってメモの中段に目を通した。セージが覗き込むと、蛇がのたくったような汚い字がびっしり書き込まれていた。

「大昔に遡るそうだ。ある日、突如として虚空に門が開いて人が現れたそうだ」

「エルフですか？」

「いや、対となる手足を持ち、ヒト程度の大きさの生物とだけ……エルフか人間か獣人かどうかも分からん。兎に角、彼らはこの世界に永住したそうだ。その時の門を作った道具こそが違う世界に行く鍵であり……現存し、なおかつ研究機関に保存されていたという確かな情報がある」

「じゃあ、その道具を見つければ……」

「まだ話は終わってない。保存されていたというのは二十年程前の事で、王国が技術を接收した現在では“本物”が無数にあるそうだ」

ロウは、要するにパチモンが沢山あったことだ、と言った。

そしてメモをぱむと閉じると、更に続けるのであった。指を折る。

「俺の調べじゃ本物を名乗るのが十以上はあったね。話そのものがガセと見られたのか、研究対象にすらなっていない。王国各地の博物館やら貴族やらが収蔵してるとよ。よかったな、パクリ易い場所にあって」

「……皮肉ありがとう。その道具の効力が神話だけということは

ないですか？」

神話に登場したものが現代にあるというのは、得てして名前だけの代物であることが多い。帰還の手段に入れるには、確かに使えなくはないけない。

ロウが再びメモを開くと、最後の方のページまで捲って、指を置いた。

「その国は、ある日突然出現して、何の資源も無いのに魔術だけで生計を立てられるだけの技術を有していたと公式の記録にある。目撃例も数多くある。本物と見ていいだろう」

「よかった……もしおとぎ話だけだったら絶望してましたよ」

「どういたしまして。俺の労働も報われるというものだ」

「……報酬が必要ですか？」

「いらん。……あー、そうだな、うまい酒を手に入れてきてくれ。あの女が酒は体に悪いからと茶と水しか飲ませてくれなのでね」

あの女って誰だろうと質問しようとした矢先、部屋の扉がノックされた。ロウが入室を促すと、おずおずといった調子で扉が開いた。

「お呼びされたので参上致しました。ルエです」

登場したのは美青年だった。整った目元と、力のある口元。かっこいいよりも美しいが優先される顔立ち。輝く銀髪は、ゆったりと後頭部で結われている。体付きは大きくなっており、肩幅はがっちり広がった。枯葉色のローブを着込み、腰には魔術増幅作用を有するであろう術文の掘られた短剣がぶら下がっていた。

少年とも言える年齢だった彼は、青年に、もとい立派な男性になっていたのである。

二人は見つめ合い、そして沈黙した。

最初に動いたのはセージだった。椅子をひっくり返し起立すれば
駆け寄って行く。猪のように。

「久しぶりいい!!」

「ぐえっ!?!」

セージが感情と腕力に任せてルエに抱きつきのもり、される側
には体当たりをした。

< 50 > 胸サイズと帰還と再開と（後書き）

ハイパー再開タイム。

タイトルは適当です。纏まってないですけど、あんなもんでいいかなど。

< 5 1 > ダークエルフ (前書き)

セージはルエと再会した。

二人が部屋に戻ってみると……。

< 51 > ダークエルフ

指輪とは特別な意味合いを持つ装飾品である。ネックレスやブレスレットなどとは違う、契約の意味を持つ。それは例えば世界を左右する強大な力を秘めた指輪であったり。

結婚の象徴であったりした。

“女の子”は指輪をしていた。事もあるうに左の薬指に。装飾の少ないそれは魔除け効果を有する実用品であり、結婚の意味合いを含まないのであるが、第三者視点からは結婚指輪にしか見えない。幸いなことに色合いがダークトーンで目立たないが、よく観察する相手には気が付かれる。

セージと再会したル工は、指輪の存在に気が付き、顔を青くしていた。

再会は喜ばしいことだ。男勝りな彼女は美しく成長していて、体当たりを食らわなければ半日は見つめ続けていただろうとル工は確信があった。だが、指輪は喜ばしく無かった。万が一結婚指輪で、セージがにっこり笑いながら『結婚しました』とでも言ってきたら、絶望のあまり自殺を考えるだろう。

ル工がこの城に居るのは、セージと同じ理由であるが、違う理由でもある。実力を養う為に派遣されたのと、ロウに魔術の教えを乞うためである。ロウは大が付く魔術師なのだから。

「任務完了だっ」

「ですね」

厨房に赴いた二人は、メイドに言って美味しい酒をくれないかと頼んでみた。するとどれも出せないが、ロウ様のだけはたくさんあると言われた。ロウが所望であると伝えると、貰うことができた。話を聞いてみると、国側のロウに指示を出す係の役人が酒を吞ませ

るなど命令しているからだそうである。ロウが言っていた『あの女』とはこの役人のことだろうか。

葡萄酒入りの瓶を片手に戻ってみれば、何やら部屋が騒がしい。

二人は扉を叩く前に、そつと耳を密着してみた。

ロウの倦怠感溢れた声と、情熱的な色気を湛えた女の声が木越しに鼓膜を叩いた。

「……君の言う仕事をしているのだからほつといてくれな
いか。それに、じきにセージとルエが戻ってくるぞ。役人の立場と
してはまずいのではと俺は思うがね」

「あん、厳しい顔も素敵ですわあ」

「寄るな触るな抱きつくな！」

「お仕事お疲れでしょう……？ 少しベッドに横になられてはい
かが？ 添い寝いたしますわ」

「……本気なのか？ 冗談なのか？ 籠絡せよと命令でも下った
か」

「お仕事は命令ですわ。親密になりたいのは自分の意思ですの
「気に入らんな」

「では、まじめにお仕事しましょう……夜までねつとりつとり
たつぷり」

「……そうだな、抱きつくな」

「私の地方では友好の印に抱きつくのが普通ですのぞ」
「どこに触ろうとしている！」

「お・き・ら・い？」

「余りごちゃごちゃ抜かすと、その口縫い合わせるぞ」
「お縛り？ やぶさかではありませんわ」

二人は顔を見合わせた。

まるで痴話喧嘩ではないか。

「…………取り込んでいるようですね」

「そうだな、俺らの入る隙間もない」

「湖は初めてですか？ 案内しますよ」

「頼む」

ということと、二人は葡萄酒入りの瓶を小脇に抱えたまま、湖に向かったのだった。

湖は美しかった。乱れの無い水面から覗く底は、清らかなる青色を湛えていた。非番の兵士が釣竿を垂れていたり、子供たちが舟遊びをしている、のどかな風景。二人は城から伸びる棧橋を歩いていった。

よく水面下を観察してみれば、ぼろぼろになった鎧や剣が放置されていた。かつて城が戦略拠点として運用されていた時代の名残であろうか。

セージは腰のロングソードを外し、置くと、棧橋に腰かけた。隣にルエが腰かける。

「それじゃ、会わなかった期間のことを話そうか」

「はい」

話している最中でも、ルエの集中力は指輪に注がれていた。だが聞けずにいた。怖かったのだ。

セージは、ルエが手ばかり見つめてくるのに気が付き、変な奴だと首を傾げた。魔除け効果のある実用品なのだから、欲しいのかもしれないと考え、薬指から取り、掌に乗せる。

「何、欲しいの？」

「そうではなくて…………」

「煮え切らん男は嫌いだぜ。どうしてもというのならあげてもいいけど」

「そうではなくて……そ、それは結婚指輪ではないのかと……」
「へ？」

口ごもりつつ訊ねるルエの顔は、明日にも隕石が落ちることを計算で知ってしまった学者のように蒼白で、今にも嘔吐してもおかしくなかった。

セージはあつけにとられ、暫しぼかんと口を開けつばなしにしていたが、やがて我を取り戻すと、かつてのことを思い出したのであった。すなわち、ルエが自分に好意を抱いているであろうことを。そして内心驚いた。指輪についての態度から察するに、いまだに好意を抱き続けているのであると。

セージは無意識に手をぱんと打ち、大きく頷いた。合点したのだ。指輪を摘まみ、人差し指に引っかけてみせる。

「こいつはただの魔除け。俺は結婚してないし予定もないよ」
「……よかった……」

ほっと胸を撫で下ろすルエに、こういう時は何が何でも動揺をおもてに出さないように振る舞うのではないかとセージはおかしな気分になった。

「……………素直な奴だなあ……………」

ルエがぎくりと肩を揺らした。セージが吹き出した。

二人がルエの部屋に戻ってみると、エルフを含めた物々しい警備

体制が引かれており、すわ侵入者かとびくつくこととなったが、話を聞いてみるとどうもそうではないことがわかった。とあるものが運び込まれたので、やむを得ず厳戒態勢を取ったというのである。

それが運び込まれた先はル工の部屋ではなく、魔術師が魔法陣を組む為に使うという部屋らしい。

二人は大急ぎでその部屋に行ってみた。屈強な兵士が四人も部屋の前に立っており、刺繍で装飾された上品な服を着た女性が苛立ちを隠せず行ったり来たりしていた。

「警備の者です！」

「ロウに師を仰ぐ者です！」

その女性は警備の者を一瞥すると、二人の顔を見て、耳にじつくり視線を注いだ。警備の者に手を軽く振る。

「ロウ様がお呼びだったわ、早くお入りなさい」

扉が、女性の指示で開かれる。次の瞬間、うめき声とも泣き声とも取れぬ絶叫が漏れてきた。二人が戸惑っていると、女性が背中を小突き中に押し込んだ。

部屋は頑丈な石造りを金属で補強した造りとなっており、装飾がまるで見られない。何も知らない人間に感想を聞けば、牢獄のようだと答えるだろう。一人が大の字で寝られる直径の円が部屋の隅からいくつも描かれており、甘い香りやきな臭い香りに加えて埃臭さが漂っている。

その部屋の中央で、眉間に皺を寄せたロウが屈み込んでぶつぶつと言葉を発していた。

二人が歩み寄ろうと一步を踏み出した刹那、暴力的な魔力の奔流が部屋の中央から立ち上った。二人は蹈躡を踏んだ。部屋唯一の不動は、ロウだった。彼は魔力を露として感じさせない佇まいだった。

彼は一步も引かず屈んだ姿勢を取り続けていた。彼の体は、彼の魔術で守られていたのだ。

『それ』に猿ぐつわを噛ませながら、ロウは二人に手招きをした。

「ちょうどいい所に来たな。見てみるといい。本来ならば他の者に補助を頼むのだが……よりによって皆が出払っている時にこいつがやってきた。まあ、俺ならば抑え込めるし、君らでも問題あるまいよ」

「何事です？」

焦ったルエが腰の魔術短剣の柄に手を置きながら駆け寄ると、口ウが手で制した。そしておもむろに『それ』を顎でしゃくった。

「まあ、落ち着くのだな、せっかちな弟子よ。こいつを見てくれ、どう思う？」

「……………!?!」

ルエは絶句した。彼の想像するものが無かったからである。

それはエルフだった。ただし、褐色肌の至る所に刻印をされた痛ましい姿の。薄汚れた布を服の代わりに着込んでおり、起伏ある体付きだった。女性のような。狂ったように暴れているが、魔術により拘束されており、動けないらしかった。

セージが後から追い付き、同じく覗き込むと、絶句する。

セージには見覚えがあった。肌の黒いエルフのことを。RPGなどにはよくダークエルフなる種族が登場するからである。この世界にもいるのかと驚きを隠せないでいたが、『居るのだなあ』という感想を抱いたに過ぎなかった。

拘束されている……………ダークエルフは、猿ぐつわから唾液がはみ出すほど何事かを叫び、手足を縛る光を筋力で引き千切らんと暴れている。時折、魔術が風を巻き起こすが、ロウの手から放たれ

る淡い光によって相殺されていた。瞳に宿るは狂気。黒い髪を振り乱し、脱出せんとする。

セージは、魔術の余波が及ばない領域を見定めつつ、ロウに問いかけた。

「ダークエルフですか？」

「なんだ、それは。ダークエルフなる種族が存在したことは、無い。エルフは、皆一様に白い肌と尖った耳を持つ種族であるとな。それに見てみる、この刻印は古き魔術……強化を示すものだ」

一度言葉を切り、ロウが断言した。

「この子は何者かに改造されたのだろう」

< 51 > ダークエルフ（後書き）

ルエとロウの名を混雑してしまった……修正しました。もし間違っ
てたら報告願います。

< 52 > 解析 (前書き)

改造を受けた女の子をロウが解析し始めた。

ロウは二人を追い出した後、数日かけて解析をした。他の術者が別の場所に行ってしまったっており、弟子であるルエも、護衛のセージも、魔術解析の補佐にはなりえないので、一人でやったのだ。国から派遣されたとある女も魔術は使えなかった。

その女の子の力は、少なく見積もっても訓練を積んだエルフ戦士に匹敵するもので、油断すれば重傷を負わされるであろうことはわかっていた。

ロウは、黒い肌の女の子の拘束魔術を継続すると並行して魔術的な解析を行っていた。更に、時折噴出する色の無い魔力の塊を防壁で受け流す。並行して魔術を行使することは極めて高度な技術であるにもかかわらず、平然としていた。大魔術師の名は、伊達ではないのだ。

岩造りの部屋に、悪魔染みた絶叫が響き渡る。

「つす……………ツ……………！ン、グウウツ！！」

「……………ふむ、洗脳も魔術頼りか……………記憶も弄ったか？」

「がうううぐうううああ！」

「……………なるほど」

猿ぐつわをした女の子は、狂気を隠そうともせず、拘束を引き千切らんと暴れていた。全身に掘られた刻印が光り輝き、魔力を強引に吸い上げている。刻印は古代に用いられていたものであるとロウは見抜いていた。

その黒い肌の女の子は、ロウを親の仇であるが如く睨み、もし拘束が外れれば首筋に飛び掛からんとしている。

ロウは用心を強めたまま、猿ぐつわを外してみた。女の子はゲホゲホせき込むと、魔術を口にした。予想通りの行動。打てば鳴る反射速度をロウが発揮した。

「風よ」

「呷げ」。無駄だ。お前如きの力で俺を揺るがせるなど、不可能だ」

刹那、ロウが魔術を唱えて魔術を四散させた。術を消去する術の行使。相手の術を一瞬で解析できる頭脳があつてこそである。女の子の力は強力だったが、ロウが上回っていた。

ロウが女の子の服を捲りあげて胸元に手を宛がった。丁度心臓がある場所だ。手から妖しい輝きが発せられるや、女の子の体を包む魔術封じ　魔力の吸い上げを途中で阻害した。

魔術が使えないとみるや、女の子は目尻を吊り上げた。可愛らしい顔立ちをしているが、怒り、憎しみ、殺意に溢れているので、城などに好んで置かれる翼の生えた化け物像と大差ない印象となる。がらがらと掠れた声が怒鳴りつけてくる。

「死ね！」

「会話をしないか？　お前さんが洗脳されてエルフ憎しつてのはわかる。だがな、そんなお前さんにもこんなものが付いてるわけだ」

ロウは無表情を維持したまま懐から手鏡を取り出すと、女の子の顔が映る位置に持ってきた。女の子は見た、己の耳が尖っていることを。

女の子の顔に目に見えて動揺が走った。視線が右往左往し、呼吸が乱れる。

「あ、ううううううう……！？　私は……」

「エルフ、だな」

「……………」
「エルフだよエルフ。他に何に見えるんだ」

まごうことなき真実を述べる。いくら改造されて肌が黒くならうとも、エルフなのだ。いくら刻印が捺されようと、エルフなのである。

その真実、事實は女の子にとって受け入れ難きことであるようで、涙を流して否定し始めた。

「馬鹿な！ ありえない……………ありえないありえないありえないありえない、絶対！ 私の親は……………」

「人間からエルフが生まれた記録は古代に遡っても無いな。逆もしかりだ。よく思い出してみるんだな……………思い出せないと命令に従って強引な手段を取ることになる。あと、一日中俺と生活を共にして貰うからな」

解析を進めて、洗脳を解き、刻印を解呪するには時間が入用だった。女の子とて食べて眠らなくては死んでしまう。世話を任せられる人間は少ないので、仕方がなく共に生活しなくてはいけなかった。魔術封じの術だって永遠に続くわけが無いのだから。拘束装備が下等で、封じ込めておけないのが最大の原因であるが。

女の子は理解してか理解せずか、要領得ない馬事雑言をまき散らす。理性が戻るときと、狂気の波があるらしい。

「……………私は……………っ、死ね！ エルフ！！ 死に晒せ、殺してやる！ 外せえ！！」
「やれやれ」

口ウは首を振ると、女の子に眠りの魔術をかけたのだった。

また仕事が増える。

一週間後、セージとルエの二人は、ロウの部屋に呼ばれた。

二人は入室早々、例の女の子についての事でロウを質問攻めにしたが、まずは座れと言われたので腰かけた。

ロウはいつにもましてげっそりした面持ちにて足を組むと、目頭を揉みほぐし、メモ帳を開いた。動作の一つ一つが緩慢で、死人を思わせた。

「結論から言うと、あの子は王国に掴まったエルフの子だった。

古い術……しかもデタラメな上に強引な、魂と肉体を引き剥がしかけたところで止める術　強化の亜種と言っべきか……それと洗脳魔術を使って、エルフを殺せと擦りこまれていた」

「酷い術ですね……」

「そうでもないさ。俺らにとって酷く思えるだけで、あの子を改造した連中には当たり前のことなんだろうよ」

ルエが深刻な顔をし、頷いた。人を強化する術の中でも最低の部類に入るではないかと。

魂と肉体を繋ぐ引力を流用したものが魔力ならば、わざと魂と肉体を離してやれば、魔力は多く生み出される。生への渴望がそうさせるのだ。先天的に魔術に適性のあるエルフならばより強い術が行使できるようになるだろう。だが、魂とは精神であり、肉体から離れれば自我すら危うくなるのは言うまでもない。

セージは居心地が悪くなって、あることを聞けないでいた。椅子の上でもじもじする。女の子はエルフとはいえ王国が差し向けてきた刺客に変わりない。いつ、どこで、いかなる手段で捕まったのかは存せぬとも、『エルフを殺せと擦りこまれていた』のならば、ど

んな処分が待っていても不思議ではないのだから。

ロウはセージの考えを呼んだか、苦い表情を浮かべて、メモ帳の腹を中指で撫でた。

部屋の外で、メイドが窓を開けたらしき音がした。

「あの子は、国側とエルフ側で処分について揉めてな……国側は再洗脳して王国にブチ込めと。エルフ側は治療せよと。保留だそうだから、俺が治そうとしてる最中さ」

「今、会えませんか？」

「会う？」

セージが面会を希望するも、首を横に振られた。

「止めとけ。口を開けば死ねだのくたばれだのしか言わん。それにな……自傷行為をやり始めたわけだ……悪化してる……治療には……時間がかかりそうだ」

ロウはそこまで喋ると机に突っ伏した。羊皮紙に構わず顔を押し付けている。何事かと二人が腰を上げると、ややあつてロウが上半身を起こし、顔をごしごしこすり始めた。奇行。しばらくしてロウが言った。否、言ったよりも、呻いた。

そこでようやく二人は、ロウの目が酷く黒ずんでいることを意識したのである。ただでさえ不健康であるのに、目の下のクマのお陰で不死者が如くである。

「すまない……三日ほど寝てないんだ……部屋のすぐ外にありもしない呉服屋が見えたり……」

「ロウさん、死にそうですね」

「寝てないからな……通常業務に加えてあの女の子の悪態と格闘するのさ……なあセージ俺はよくやっているとと思うだろ？」

「怖いんですけど」

「城の幽霊の噂に加われそうな気がしてきた………そうだ………
…忘れるところだった」

ロウが二枚の紙を取り出すと、二人に渡した。

「お使いを頼まれてくれ」

二人は部屋を出ると、お使用の内容を確認した。

セージはモンスター退治だったのに対し、ルエのはお使用というより雑用だった。国の古文書館に赴いて整理をしろという内容が記されていた。どちらが楽かはさておいて、冒険心の強いセージには整理作業は苦痛に思えてならなかった。

二人は城の前で別れた。

「気を付けてくださいね」

「ルエも、本に埋もれて圧死しないようにな」

< 53 > モンスターと言っけれど (前書き)

セージは、ロウのお使いとして街外れのモンスターを退治することになったのだが……。

< 53 > モンスターと言うけれど

お使いの内容は、街外れの洞窟に潜むモンスターを退治してこいと言つ、要するにお使いクエストだった。そんな用事、現地の人か街の兵士にでも頼めばいいだろうに、セージがやる理由は一つしかない。戦つて経験を積みませようと云つことだろう。

ロウが渡してきた紙切れにはモンスター退治という内容と、位置情報が記されているだけで、詳細が見当たらない。蜘蛛か、スライムか、はたまた幽霊か。セージは情報を求めて街中をほつつき歩き、人に訊ねてまわつた。すると、どうやら巨大な猪が巢食つており、時折抜け出しては畑を荒らしていくそうである。街の兵士達は関わり合いになりたくないらしく知らぬ存ぜぬを突き通した。

街の畑という小規模農園での被害などたかが知れてるし、お役人もわざわざ税金を投じて討伐はしたからない。そうした結果、猪は現在に至るまでぬくぬくと生活を送っている。そういうことだろう。

深夜。月が雲で隠れる天候。

街外れにやってきた“女の子”は、装備品の調子を確認していた。もちろん城には仕事があると言つてあり、街の警邏にも通達しているので、問題が起こることはない。強盗や自警団に絡まれる恐れは否めないが。

「……………ふう……………」

ロングソードを月明かりに晒す。鏡の役割すら果たせる、金属的光沢の美しい剣身。ミスリル製が最高だが、入手は困難だった。無骨な鞘。刃毀れ無し。腰に差す。

使い込んだナイフよし。腰に差す。

二連式小型クロスボウ。弦の張りよし。矢よし。腰の固定具に引つける。

軽装鎧よし。ブーツの紐を結び直し、きゅつと引く。
指輪よし。

セージは頭を振る反動で腰を上げると、頭に黒い布きれを巻きつけた。モンスターを退治するに当たっては、穴倉に接近するまで、察知されてはいけないのだ。

人差し指の根元まで口に突っ込み唾液に浸し、天を指さす。蒸発して熱が奪われていく。風上を探しているのである。ほどなくして風はセージに味方しているのを知った。洞窟のぽっかり空いた入口に対し、逆の方から吹いているのである。接近するに好都合だった。セージは抜き足差し足忍び足で洞窟までの距離を埋めれば、腰のロングソードに手をかけ、入口の横に屈んだ体勢で張り付いた。

選択肢はいくつかある。中に堂々と入っていくか、誘い出すか、大火力で焼き払うかである。最初の選択肢は危険だが、夜と言うこともあり寝ていることが考えられ、討伐はしやすいであろう。第二の選択肢は、相手に対応の隙を与えてしまうが、穴から出た背後を突けるという利点がある。第三の選択肢は、洞窟に火炎を流し込むことで焼き肉にしてやる案であるが、セージの実力では実行に移せないし、万が一にでも内部に人間が居たら、殺人者になってしまう。セージが採用したのは、第二の選択肢だった。

獣が嫌がる金属音、すなわちロングソードを抜き差しすることで誘う。わざとその場で足踏みをして、目標が出てくるのを待つ。

「……きたっ」

気配がした。ロングソードを抜いたまま、洞窟の入り口の横つまり内部から出てくるものにとっての死角となりうる位置に身を隠した。

魔術の発動に備えて、鼻から息を吸いこみ、肺を新鮮な空気で満たす。獣は所詮獣。一度火を放てば、消火はできまい。人のように水を浴びるだの、誰かに布で叩いてもらうだの、考えも付かないだ

ろう。

セージの思惑通りに巨大な猪が鼻を鳴らしながら洞窟から姿を見せた。

ロングソードを使うまでも無く、手を掲げて唱える。

「火よ」

「!?!」

まるでブルドーザーのように大きな毛並が、突如として炎上した。姿かたちの詳細はオレンジ色に沈んだ。阿鼻叫喚。猪はその場に転げると、大暴れして火を消そうとした。

容赦無用。

セージは猪が暴れるときに振り回される牙の範囲を正確に見定め、ロングソードを槍のように使った。刺して、刺して、魔術を放ち、刺しまくる。決して深々と突き刺そうとはせず、先端で殴りつけるように、刺す。

猪の毛は、何かしつとりとして重厚で、火が消えかけてしまうも、その度にセージは魔術で着火した。火力が足りない時は火炎球をぶつけた。

「

!?!」

「まじかよ！」

が、猪もさるもの。全身を焼かれ、刺されながらも蹄を大地に突き立て、野生の絶叫を轟かせた。二つの相貌が憤怒に燃える。火炎と暗闇のコントラストが、地面に影を生やす。

セージは殺気に鳥肌が立つのを感じ、小型二連クロスボウを腰だめに連射した。鋼鉄の鏃が猪の足に突き刺さった。再装填は間に合わない。腰に戻し、次の行動の為に目を凝らす。

猪は死ななかつた。

身を焼かれ、刺されても、死なない。矢を射られても、死なない。猪は、あたかも騎乗した兵のランスチャージが如き圧力で迫り、セージをひき肉に変えて焼き殺さんと突貫した。

「ちっ」

舌打ち。セージは横っ飛びに回避し、砂を握りしめながら機敏に起き上がってロングソードを肩に担いだ。

暗闇に浮かび上がる焰の塊は憎悪をもっとも原始的な表現手段の一つ、攻撃によって示す。独楽のように素早く振り返れば、地を蹄で蹴り、突進する。単純な物理攻撃であるがゆえに、少女一人など容易く殺害できる威力を有している。

車は急に止まらない。勢い付いた猪も急には止まれないし、方向転換もできない。ロングソードを握ったまま猪を正面に斜め右方に前転して躲せば、片膝について身構える。危険を冒してまで斬り込む必要はない。魔術で燃やしていけば、いつか死ぬのだ。

猪の動きが変わった。

勢いつけての体当たりから、牙を用いた近接殴りへと。命が残り僅かなら、回避のしやすい攻撃ではいけないと判断したか。

「らあっ!」

牙をロングソードに突き込み牽制、返す刃で片目を斬り飛ばす。バックステップ。

猪が怯む。目に見えて動きが鈍ってきた。

手をロングソードに翳す。

「“ 火炎剣”！」

魂と肉体の結合力を吸い上げ、別の物に変換する。

瞬間、幼き頃とは比べ物にならない熱量が剣を軸に竜巻となりて発生するや、刃が白熱し、光となった。それは完全に制御されていた。剣身こそ太陽のように輝いているが、柄などは元の形態を保っているのだから。

莫大な熱量に猪は気圧されたも一瞬のこと、真正面から体当たりした。それが彼もしくは彼女の終焉だった。

「お終いだ！」

セージが剣を両手で構え、振り下ろす。熱が爆発した。前に指向性を与えられた魔力が、破壊となりて猪の前半分を跡形も無く蒸発後ろ半分を肉骨片に変えた。衝撃波が同心円状に広がり、地を舐める。頭に巻いた布が飛ぶ。砂埃が立つ。夜の漆黒が翳った。

セージがよろめき、過熱したロングソードを地面に突いてぐつたり蹲った。

背後から沈めるはずが、真正面から戦ってしまった。しかも全力を出した。魔力消費は大きく、おまけに高熱に晒されたロングソードは触れば火傷する温度に過熱していた。ミスリル剣なら十分耐えるのだが、ただの鉄では、下手に扱えば曲がってしまう。魔術だけで剣を構築すると威力に欠ける。そこが困り所である。

セージは肩で息をしつつ、白熱したロングソードを斜に構えて洞窟に潜っていった。

暫くすると、後味の悪い物を見てしまった。

何匹もの小さい猪の子供が一丸となってセージを睨みつけてくるという光景だ。

巨大な猪は母親で、餌を求めて人里にやってきたのではないだろうか。母親なくては生きては行けまい。街の人に報告すれば喜んで狩ってくれるだろう。

「……………はあ」

セージはため息を吐くと、その場を後にした。
お使いは達成したが、しっくりとこなかったのは言うまでもない。

< 53 > モンスターと言っけれど (後書き)

誤字修正しました 9 / 1

【二章簡易設定】（前書き）

色々と追加していきます。

【二章簡易設定】

【情勢】

『王国』に対抗するべく侵略を受けていない国家たちは『連合』を結成し、王国と兵力という剣を突き付けあった。『王国』国内の反乱を好機と見た連合が攻撃を開始。だが王国の本隊という精鋭部隊と衝突すれば、近年力を増しつつあった『北の国家達』に漁夫の利を狙われてしまう恐れもあり、休戦条約が結ばれたのだった。休戦条約失効と共に連合は軍を進めるも、再び『北の国家達』の圧力があり、睨み合いに留まった。『北の国家達』の台頭にともない、三つの勢力のパワーバランスは拮抗、各勢力が兵力を増大し続ける冷戦状態に突入したのだ。

『王国』国内で起きた動乱により、連合との間で戦闘が起こった。二国間は戦争状態に突入。同時に北の国家達に宣戦布告、三勢力は戦争を始めた。

【大陸】

『大陸』 特にこれといって統一された名称は無いが というのは、この世界の大地の大半を成す広大な大地のことである。セージの世界におけるオーストラリア大陸によく似通った陸の形をしている。中規模の大陸や、その他島々と比べれば、まさに世界の全てと称しても過言ではない超大陸である。

いくつかの陸地が星の熱還流によってくっついて出来上がった関係上、大陸の中央は巨大な造山帯によって隔たれている。

本編より

【ブルテイル王国】

国内の反乱や連合との戦いによって国力を落としているが、それで

もいまだに各勢力に引けをとらない大国である。エルフ迫害という政策は引き下げておらず、「捕獲」を進めている。ワイバーンの飼育に成功するなど、軍事技術の発展著しい。大陸の西側が主な領土である。

『ブルテイル王国』 古くは極西で発生した民族を先祖に持つ君主制の大国である。かつては小国に過ぎなかったが、群雄割拠時代を生き残って、勢力を落とした国家を吸収して膨れ上がり、植民地政策で莫大な財を成した。エルフ迫害を推奨することから、エルフ側では王国憎しとの声は大きい。

本編より

【連合】

小さな国家から中規模国家まで、多数の国家からなる連合である。いわゆる軍事的、利権的な同盟軍。エルフに対して迫害を行うことはなく、積極的に技術を吸収しようとしている。大陸の東側に集中している。

【北の国家達】

四つの有力な遊牧民族からなる便宜上の国。ムー族とカルディア族のほかに二つ部族がある。

それぞれが一つの国に匹敵する勢力を有している。

ムー族とカルディア族は商売敵であるため関係は険悪である。

【ダークエルフ】

本来、そのような種族は存在しない。

【セージ】

第一章から成長した姿になった。

一片の曇りも無いすらりと伸びた足先は、ぎりぎりのところで床に

接していない。綺麗に整えられた爪先は薄らと血の気を帯びており、若さに張り詰めた二の足を飾っていた。

身を包むは男用と区別の無いであろう白シャツと白い下着。布地から覗く腿は瑞々しく、贅肉の類を削ぎ落した健康的な肉の付き方をしていた。

きゅっと引き締まった腰から上は、いまだ成長の余地を残した、布の上からでもしゃぶりつきたくなる魅力があり、曲線美を体現した丘を作っていた。

その女の子は、肩をグルグルまわすとベッドに寝転がり、布団に顔を押し付けた。夜の余韻が睡眠を呼ぶ。このままでは二度寝になっってしまうと布団を退ける。そして、ベッド下の靴を引っかければ、伸びをしつつ立ち上がった。

ブロンドの髪はショートカットに切り揃えられていた。その子の昔を知る人ならば、なぜ切ったのかと訊ねるであろう。理由はある。一つだけ。

髪の毛を割って伸びる細く尖った耳は幼き頃よりも長くしっかりとしていた。

理知的な瞳、通った鼻筋、ふつくらとした唇など、全体的に均整がとれており、髪型と服装をそれなりのものにすればどこかの名家のお嬢様に見えたであろう相貌であった。

本編より

実力が認められて技術支援団の警備役に抜擢されている。装備は依然とほぼ変わりなし。

【ロウ】

外見に変わりなし。

現在は連合のとある街にて研究を行っている。

【あの女】

ロウ曰く、あの女。妙に艶めかしい雰囲気を纏った女性。

【クララ】

変わりなし。巨老人の里にいる。

【ルエ】

成長して大人になった。

登場したのは美青年だった。整った目元と、力のある口元。かつこいいよりも美しいが優先される顔立ち。輝く銀髪は、ゆったりと後頭部で結われている。体付きは大きくなっており、肩幅はがっちり広がった。枯葉色のローブを着込み、腰には魔術増幅作用を有するであろう術文の掘られた短剣がぶら下がっていた。

少年とも言える年齢だった彼は、青年に、もとい立派な男性になつていたのである。

本編より

【ジェリコ】

セージが最初に訪れた岩塔の里の長老。初老のナイスガイ。前線で養った戦闘力と指揮能力は定評がある。

【ルーク】

溪谷の里を統べる美青年。ルエの兄である。里を第一に考えている。

【巨老人】

巨老人の里を統べる髭の大男。最強と名高い男であり、軍隊を相手に無双を誇る。

【ヴィーシカ】

全身鎧に大剣を担いだ「鉄の里」の長老。性別不明。
戦うの大好きで脳味噌まで筋肉かと馬鹿にされることもしばしば。
実力が伴っている。

ドラゴンとタイマン張った時にプレスで顔を焼かれ喉も潰してしま
った。

里を實質仕切っているのは妹だそうである。

【エステル】

喪服の壮年の女（外見“が”壮年）。「暗黒谷の里」の長老。

常に喪服。皮肉屋。情報屋。

軍隊に匹敵すると言つ数の諜報員を抱える。

【ボルト】

北の国家達でも手を出さない深き雪山の里を統べる寡黙な長老。

魔術も武器も使わず純白の熊を打倒した伝説をもつ。

【マーレ】

南方の里を統べる長老。豊満な肉体をもつ美女。

大規模な艦隊を運用し、貿易に手を出している。

< 54 > 三國開戦（前書き）

ふとしたきっかけから三國は戦争を再開した。
セージは北へと赴くのであった。

歴史書、特に近代のものでは支配者や独裁者は悪で民衆は正義という役割を担わされている。支配者、独裁者が富を吸い上げ、民衆がそれに反旗を翻して権利を勝ち取る。正しい流れである。より良い待遇と立場を求めるといふ一点において。

ではもし、支配者、独裁者たちが富を得て、なおかつ民衆にも十分な富を配分することができたら、民衆は立ち上がるだろうか。否、ありえない。

『王国』が現代まで独裁体制を保ってこられたのは、植民地という富の供給源があったからである。資源、労働力を奪い、税金を納めさせ、国内の商品を半ば強制的に売りつける。兵力を奪い、更に植民地を増やす。富は国を潤し、戦争の勝利と、国の発展に民衆は狂喜する。血筋から血筋に受け継がれる独裁体制を引き摺り下ろそうと考える輩もでなかった。王国は積極的に公共設備を整え、雇用対策を実施し、福祉にまで力を入れていたのだから。多少の不満はエルフの迫害でガス抜きもしていた。

その安定が崩れたのは『連合』の仕業である。一国だけで敵わないなら、いくつかの国と力を合わせて匹敵させる。極めて合理的な考えである。もくろみは成功し、王国の拡がりは止まった。勇気づけられた植民地も抵抗を示す様になった。経済は不安定になり、国内が荒れ始めた。すると民衆の不満は抑えきれなくなる。民衆は考える。誰が悪いのだ、と。答えは導き出されるだろう、王国を統べる者が道を間違えたのだと。

王国は焦っていた。国民が一斉に反乱を起こせばもはや体制は完全に崩壊する。植民地もいつ反体制の旗を掲げるかわからない。追い詰められた人間は狂気に走る。例えばエルフの改造であったり、例えば古代魔術の研究であったり。

崩壊は、国家の最高機密から始まった。

『王国』の大規模研究機関を収める灰色の城の一つの塔が火柱に変化した。

人の絶叫を掻き消して、羽音が高らかと空気を叩く。己を縛りつけていた檻を、あるはずの無い高温のプレスで焼切った数十匹のワイバーン達は、目を爛々と輝かせながら上空に飛翔するや、混乱して右往左往する兵士らに急降下攻撃を仕掛けて殺害、食欲を満たし始めた。研究中だったはずのエルフ達も、もはや獣のように人に襲い掛かり、あるものは異常な怪力を発して頭を引っこ抜いて血を啜り、あるものは魔術の噴射で岩壁をなぎ倒し、暴力を振るった。

ワイバーン、エルフ、そのいずれもがなんらかの手段で逃げ出したと考えた兵士たちは、各々の武器を携えて、城を防衛拠点に攻撃を始めようとした。だが、城の中で研究していたはずの者達さえ狂い、殺しを始めたため、城は外と内で狂乱の渦に叩き込まれ、防衛もままならぬ。国の最高機密を有する城であり、設備人員共に最高のを揃えていたとはいえ、ワイバーンが火を噴き、エルフが人を食い殺し、普通の兵士ですらモンスターに成り果てる状況は予想しておらず、あつけなく陥落。

エルフと兵士は王国の戦力によって制圧されたも、ワイバーンが空から逃亡。あろうことか連合の領域に侵入して空中戦に発展。にらみ合い状態は完全に崩れて戦闘となった。

連合側からすれば、ある日突然王国から仕掛けてきたようにしかみえない。

いくら『あれは予期せぬ事態である』と主張したところで、そうは問屋が卸さない。核兵器を誤射しておいて言い訳が通らぬと同じである。それが例え発射装置の故障であれ、ヒューマンエラーであれ。

戦争再開。

王国と連合がお互いに潰し合うということが知れ渡っても北の国

家達は沈黙を守ったが、そうはいかなかった。漁夫の利を狙わせない方法はただ一つ。宣戦布告してしまうことである。王国と連合は北の有力国家に対しほぼ同時に宣戦布告。考えていたことは同じだったのだ。理由など、我が国の安全保障上のことか、領土をことか過去のことか、貴国の脅迫にはことか、我らが神がことか、どうにもなる。

かくして、血を血で洗う激戦が繰り広げられることになった。

そんな情勢の変化から、セージはロウの元で警護をしていられなくなった。というより、行かせてくれとせがんだのだ。少しでも戦力は必要だろうと一日中うるさく頼み込んでみると、ロウが折れた。当然というか予想通りというか、ルエがセージについていくと主張して、一時、溪谷の里に許可を取るまでに至ったが、承諾された。ルークの計らいもあった。

それでもやはり実力不足は否めないとのことで、散発的な戦闘しか行われていない北の戦線へと派遣されることが決まった。少なくとも北の国家はエルフを犬畜生扱いしないことも関係しているだろう。

北の戦線。浅く、幅の広い河を挟んで睨み合う戦場にて。

不思議なことに各国が宣戦布告し合った状況であるというのに、北の国家達は連合に対して積極的な攻撃を仕掛けていなかった。逆に、連合も仕掛けなかった。だから、セージの辿り着いた基地は、絶対とは言い切れなくとも安全な戦場ではあったのだ。

ワイバーンから降り立ったセージは、その村の、のどかさ目を見張らなかつた。見張るべき点が見当たらないのだ。麦畑、野菜畑、水車小屋牛小屋馬小屋と家屋、そして藁を入れておく小屋。要するに典型的な田園風景が広がっていた。元の世界で学生をやっていたころの“青年”ならば、欧米風の整った風景に写真の一枚でも残していたかもしれないが、すっかりこの世界に慣れた“女の子”には、退屈な光景だったのだ。

唯一面白い点と言えば、田園風景の真つただ中に基地が佇んでいることであろうか。

この地方は要するに辺境であり、戦略的戦術的に利点の無い場所である。例え占領しても食糧は奪えないし、インフラも整っていないので物資の搬入にも不向きで拠点を作りにくい。だが、一応別国と接しているので基地がいる。そこで、小規模な基地を建てているのである。

ワイバーンが飛び立つ。セージとルエは手を振って見送った。

「やあー遙々遠路いらっしやいましたなー」

やけに間延びした声に振り返ってみると、司令官らしき高級な軍服（ただしヨレヨレ）を着込んだ初老の男が後ろで手を組み現れた。妙に形の悪い煙草を口の端に加え、緊張感が無い。二人を前に、煙草を地面に落として踏み潰す。

セージとルエは、いわゆるオプザーバーであるとはいっても相手は軍人であるとして、直立不動を取った。

「基地の指令の方ですか？」

「そうお固くなりなさるな。こんな僻地にまで軍としてのお堅い規律は要らんよ、エルフのお嬢ちゃん。親戚みたいに仲良くやろう」

「どうも、セージといます」

「おうよろしく。そっちのあんちゃんは」

「ルエといます」

二人とは対照的に、司令官はにこにここと人のいい笑みを浮かべて、砕けた態度だった。手を差し出してきたので順番に握る。軍人と言ふよりも警備員のようなだとセージは思った。傍らに付き添う補佐官も、咎めることなく笑顔で握手を求めてきた。

その後、二人は基地の人達のあいさつにまわって、仕事の確認を

とった。敵国がやってくるのを事前に察知して本国に知らせ、時間を稼ぎ、本隊の到着を待つことが本業だそう、突破された地点の近辺の基地が敵を横から挟み込むようにもなっているそうである。考えてみれば全国土に潤沢な戦力を待機させることなど不可能であるから、至極当然の仕組みであった。

なんだ、暇なのかとセージは思ったが、司令官によるとそうでもないらしい。北の騎兵達が接近しては離れてを繰り返していたり、不審な集団が廃村を占拠していたり、戦争という混乱を狙った盗賊団が目撃されていたり、見えない爆弾を抱えているそうなのである。司令官は帽子を脱いで、毛の薄くなつた頭頂部をぽんぽん叩きつつ苦々しい顔をした。

ここは司令官室。地図やら書類やらばかりの部屋。

「国が後方の部隊を増やしているとはいえ……ここの守りは手薄と言わざるをえないのが現状だね。人手が元々無いのに、やれあれもやれ、やれそれもやっておけとうるさくて、基地の運営や偵察で精いっぱい。廃村の調査も、盗賊団の追跡もできやしないってこつた」

司令官は帽子を被り直すと、二人を見つめた。

「そこで君達が即戦力として働くということだ」

< 55 > 廃村へ（前書き）

セージとルエは司令官から廃村を調査するように指示を受けた。
二人は馬に乗って片道二日間の道のりへ漕ぎ出したのだった。

< 55 > 廃村へ

「あのオツサン、エルフを絶対無敵の超戦士だとか勘違いしてんじゃねーの？」

“女の子”は司令官をオツサン呼ばわりしてみせると、水と食料を左右に積んだ馬の上で、地平線を睨んでいた。エルフだって死ぬのだ。それは自分が何度も死にかけたから知っていた。

セージが与えられた任務は単純であり、基地から馬で二日行ったところにある廃村を占拠する集団の調査を行えというものである。馬に余裕がないとのことで仕方がなく二人乗りをしている。セージは馬を操れなくて、あるうことがルエも不得意だった。消去法で仕方がなくルエに操らせている。

二人乗りをするということは、操縦者の後ろに搭乗者が跨るということである。

ルエは気が気でない。好意を抱いている女性が、あるうことかすぐ後ろで腰のあたりに抱きついてきているのだ。今にも手元が狂って馬を暴走させかねない。前から風が来るのでいい匂いが漂ってくることはないが、何やら背中が温く、柔らかい。言葉を発すれば背筋に息が吐きかかる。

否、これでいいのだ。ルエはしようもない考えをする。

もし、逆だったら？ 即ち、セージが前でルエが後ろの席順である。必然的にセージの腰に背後から掴まる格好となる。『間違い』があつた時、誤魔化しようが無くなる。これでいいのだ。

廃村までは馬で丸二日かかるということで、一日目は緩んだ雰囲気であつた。近くなれば警戒をしなくてはいけないが、遠いのならば良い。万が一、廃村を占拠する輩に捕捉されたとしても、旅の者を装えばいい。

ル工は馬をひたすら廃村の方角へと直進させながら、答えを返した。

「エルフの一般的なイメージ像は単騎で軍を薙ぎ払う姿ですから、司令が僕らに期待を寄せても不思議はありませんよ」

「軍どころか小隊に囲まれたら死ぬる自信があるんだけど……まあいいか。それで方針は？」

「調査とはいっても指令からは王国軍なら排除し、そうでない不穏分子なら追い払えと言われてます。ですが、僕達二人で大人数を相手取るなんて馬鹿げてます」

「夜中に接近、見つかったら即逃亡……」

「調査ですからね。無駄な戦闘は避けるべきです」

馬がぶると鼻を鳴らす。四つの脚が順序良く地を蹴る。ル工の操作が未熟故に速度がちらつき、たまに方向がずれるも、おおまか潤滑に進んでいた。

かばぼこかばぼこ。

鐙というクッションがあるとは言っても、馬が進む際に生じる上下の振動は死なずに、臀部と股を痛みつける。多少の訓練を積んだル工はとにかく、馬に乗る機会すら持たなかったセージは堪えた。

半日の移動をしたところで、セージはル工の肩を打った。
我慢ならなかったのだ。

「なんですか？」

「尻痛い」

「え？」

「尻痛いんだけど、休もうぜ」

「し、尻？」

「うん、尻痛い。いいじゃんかよ、ゆっくりしても罰は当たらないだろ」

馬が止まった。セージはこれ幸いと馬を降りると手ごろな草原を足で慣らして腰を下ろした。困惑するル工を見遣り、すぐ隣の草の座席を示す。廃村の調査という任務には厳密な制限時間が決められていないのだから、ゆっくりしていてもいいだろうと考えたのだ。幸いなことに食糧はあるし、馬と言うアシもある。二人だから交替で睡眠をとることもできる。

ル工は馬から降りると、おずおずとセージの隣に腰かけた。

時刻は昼間と夕方の境目。太陽は徐々に勢力を失って、暗闇と月が台頭し始める時間帯である。羊の綿毛を干切って水に流したような空の元、二人の影は寄り添うように座った。

セージは腰を捻りながら、地面から生えていた草を引っこ抜いた。数年前、里に辿り着くまでと、里から里へ徒歩で旅していた頃は頻繁にお世話になったものだ。葉の先端を見遣り、ぱくりと口にする。セージの奇行にル工が目を見開いた。

「懐かしいわ。昔は食べ物無いときは葉っぱとか食べてたんだ」

「葉を……!？」

次にセージは白い花をつけた雑草を手にとって、干切った。茎を弄ぶ。花弁が一枚落ちた。

「そうそう。お陰でどれが美味しいのか、不味いのはどれか、薬草はどれか、判別できるようになったけど。キノコも食おうとしたっけ」

「……食べたんですか？」

「いや、さすがの俺もキノコには手が出なかった。蜘蛛は食ったけどね。それなりにおいしいけど、淡泊で塩気が足りないのが難点」

旅路の苦勞をさらりと話す“女の子”、キノコと蜘蛛では、蜘蛛

の方がゲテモノ食いであるとは考えもしない。

この異世界において大型の蜘蛛は食べるものではなく、排除するものである。害獣である。もとい害虫である。愛玩用に飼育されることもない。見つけ次第矢を射掛けよと教えられるくらいである。

一般に、蜘蛛は味が悪く、調理に手間がかかるので食用に適さないとされている。にも拘らずおいしいなどと言うのだから、味覚音痴ではないかとルエはよからぬ疑いをかける。

事実であるが、間違いでもある。蜘蛛は仕留めやすいから狩っていたにすぎず、美味しく感じたのは不味いものばかり口に使っていたので味覚が麻痺したからに過ぎない。

セージは蜘蛛の調理法について語ろうとして、止めた。面白い話題ではないからだ。

「俺の話はこの辺にしておいて、ルエの話聞かせてくれよ」

ルエは、後ろでまとめた髪を調整しつつ、頷いた。まともに隣に目をやれないのか、視線は常に自分の膝かつま先に向けられていた。

「僕ですか。いいですよ。あなたと別れた後、僕は兄上に教えを乞いました。この短剣も兄のものなんです。戦争が始まって、僕は大魔術師たるロウ氏の許へ行き、弟子になりました。実質、小間使のような立場でしたが、非常に有用でしたよ」

「で、偶然再会したと………ん？ ちょっと待って。思い出し中」

セージは何やら難しい顔をして腕を組んだ。指を往復しては腕に打ち付けている。こめかみに指をやれば、抉り込む動作。気分を害したのだろうかとルエは内心狼狽する。

きっかり十秒後、セージが面を上げると、人差し指の腹を艶のある唇に宛がった。

「最初あった時、溺れてたじゃん？」
「死にかけてましたね」

思い出されるは、病気を患って意識が朦朧としている最中に熊に襲われ川に飛び込んだこと。飛び込まなければ熊の餌。飛び込めば溺死という究極の二択を迫られたのだ。セージは飛び込むことを選択した。生死の境を彷徨った。救助されたのは、奇跡としか言いようがない。

しかし、今話したいことはそこではない。細部のことだった。セージは唇に重ねた人差し指をエビ反りにしてルエの肩付近に移動した。

「人工呼吸……じゃ通じないか。息、吹き込んだのお前だろ」

ルエの反応は、蜂の巣に爆竹を投げつけたが如くであった。顔面を白黒青赤明滅させ、口を鯉のようにパクパク開閉する。肩の辺りで手を広げる。露骨に目を逸らす。時間をかけていけば、冷や汗を見られるようになるであろう。

意識を失っていたから憶えていないと高を括っていたのに、現実には憶えていて、よりによってこのタイミングで話題に登った。

壊れた蓄音機さながらに口ごもる。

「ま、まさか、ありえないでしょう、僕にそのような医療技術が……あはは」

「慌てるなよ、感謝してるんだぜ。命の借りがあるってことさ」
「……………」

「なんだよ。借りは返すものだから、困ったら頼ってくれってことだよ」

ルエの予想に反し、セージは違つところを話したのであった。
だが話は終わらず、セージがニヤリと笑った。

「初めて奪われたっばいし、帳消しだけどな！」

「っ！？ な、何を！」

「人命救助だから数えないことにするって！」

「やっぱり数え……なんでもないです」

「……ったく、素直すぎるぜ。隠そうともしないというより、隠せない性質なのな、ルエって」

ふと、セージはルエを弄りながら思った。

俺って男とキスしたんじゃないかと。

< 55 > 廃村へ（後書き）

おかしい……ラブコメの匂いがする……

< 56 > 目立ってはいけない (前書き)

廃村にたどり着いた二人は調査を行うことにした。

< 56 > 目立ってはいけない

廃村と言っても、放棄されて数百年経過していたというものは無く、数年前、十年前までは活気ある街だったろうことが容易に想像できる、煉瓦と木と藁の複合住宅群であった。外敵の侵入を防ぐための塀が村を覆っており、粗末ながら見張り台が四隅に設けられていた。

だが、村の周囲は草でボーボー。馬車の残骸やらが散乱し、身を隠す場所が無数に存在したため接近は容易かった。見張り塔に各一人しか配置されていないのも好都合だった。村の正面入り口はそれなりの人数で固められていたので、外壁からの偵察を試みた。もし見つかつて攻撃を受けた場合にはルエが援護してくれるはずだった。壁は酷く壊れており、足掛かりもまた無数にあった。

夜陰に紛れて外壁に取り付いたセージは、顔の上半分を覗かせて内部の様子を窺って見た。

村はしんと静まりかえっており、井戸らしき設備のある中央広場に数十人程が集合して火を焚いていた。村の建物に人気は無い。中央と、見張り塔と、正面入り口以外に人が居ないように思われた。

人の様子を探るには距離が遠く、遮蔽物が多過ぎた。虎穴に入らずんば虎兇を得ず。ルエに借りたロープのフートを降ろして顔を隠せば、外壁を一つ跳びで乗り越え、侵入を果たす。篝火が外壁に据え付けられていれば発見された恐れがあったが、そもそも無かった。暗闇を完全に味方に付け、とある家にお邪魔する。

「お邪魔しまーす……」

扉をそつと開けて身を滑り込ませれば、慎重な手つきで閉じる。ドアノブを乱暴に離すような真似はしない。

部屋の中は荒れ放題ではなく、食器がそのまま机の上に置かれていたり、腐敗の進んだスープ鍋があったり、家具の戸が開きっぱなしだったり、生活臭が漂っていた。玄関の方に足を運ぶと、子供サイズの靴が片方だけ放置されていた。何気なく床を靴で歩くと、埃の積載に足跡が残った。

セージは、かつて観賞したテレビの心霊番組を思い出した。たしか、廃墟が舞台だったはずだ。お決まりのパターンで、車がエンストを起こす。そして最後は失神で幕引きとなるのだ。

それは兎に角、このような感想を抱いた。

まるである日突然人だけが消えたようじゃないか、と。

何か不気味なものを感じ取ったセージは、左手の魔除けの指輪を擦り、窓際から外部を窺った。

焚火を囲む者達は皆一様に粗末な服を着込み、どこかの戦場で拾ってきたとしか思えない切っ先の欠けた剣や、棒の先にナイフを括り付けた即席の槍、木の板を針金で固定した貧相な盾を装備していた。男たちは逞しい体の者ばかりなのに、女子供老人たちは今にも倒れそうなほど疲労感溢れる出で立ちであった。そして、皆一様に首に絞殺痕のような痣があった。

それは、とある身分の者達に特有の特徴であった。

「奴隷か」

セージはそう呟くと腰のロングソードの鞘に触れた。窓の下の陰に身を潜め、腕を組む。

村を占拠しているだけで腰を据えて生活しようとしのないのといい、服装といい、装備といい、何より首筋の痛々しい痕跡といい、奴隷の集団であると断定した。スパイではなからう。スパイなら、もう少し賢く村を使うはずだ。

どこからか逃げ出してきた彼らは、たまたま廃村を見つけて住んだのではないだろうか。

王国や北の国家なら排除も検討に入れなくてはいけないのだが、奴隷では出方を考えなくてはいいなかった。

接触は危険性が高い。エルフのような高値が付けられる種族がこのこと出て行けば、捕まえてやるうと意気込むだろう。ドンパチに発展しかねない。だが、フードを深く被ってロングソードをぶら下げた怪しい格好で出て行くこともまた危険である。奴隷からすれば、追手が村に入り込んだのかと考えるだろうから。取るべき選択肢は一つだけ。

誰にも気が付かれないように村から去ることである。

調査は終了、それでいいではないか。

セージは家の裏から出ると、己が失敗を犯していたことに気が付いた。壁の外側はぼろぼろで足をかける場所があったからよかったものの、内側はつるつると健全さを保っていて、とても登れそうに無かったのだ。生憎壁を登る装備は準備していないし、魔術で空を飛ぶ妙技は会得していない。外敵を迎え撃つための登り台か、見張り塔か、奴隷たちの意表をついて正面出入口から外に逃げるか。

セージが選択したのは、見張り塔をよじ登っていくルートだった。まさか内部から外に出ようとするものが居るとは思われないし、よりによって見張り塔を登ってくるなど考え付くまいと。

塔とは言っても丸太を組んで作った代物で、梯子を登らなくてはいけない。目立つこと請け合いであるが、頂上に行く必要性は認められない。壁の高度を越えたあたりで外側に伝っていけばいいのだから。

映画だと見張り員を『あばよ』と言いつつ突き落とし、下からの銃撃をひらりひらり華麗に躲しつつ爆発炎上する村を去るのであるが、派手なことは何もなかった。

まず、梯子の一段目に足をかけて、登り始める。

「……………ついで……………」

塔は雨風で腐食が進んでいて、丸太と丸太の接合部がギシギシと音を立てた。梯子はつい最近つけられたもののようにだが、作りが荒く、やはり音を立てた。歯の隙間から息を吐く。極度の緊張で手汗が滲む。

見張り員が梯子を覗き込んだら最後、発見は免れない。天に祈るような気持ちで登って、壁を越えた辺りで丸太に足をかけて伝っていく。元々人間が歩くことを想定していない足場は不安定で、やもすれば落下しそうであり、肝を冷やした。時に斜めに突き出た丸太を手掛かりにした。

丸太から壁の上部に乗り移り、手早く外に飛び降りる。

着地の衝撃を足のばねと前転で殺し、腰を低くして駆け出す。

フードを顔から降ろす。尖った耳がぴょんと元の位置と形に戻った。

合流地点までは少し歩かなくてはいけない。見張り塔から見え難いように草むらや大地の窪みを利用して、野犬のように歩む。暗闇という最大の味方の存在があつてか一度も発見されずに脱出に成功した。

大きな三角形型の岩に辿り着いたセージは、ローブを脱ぎつつ、村から見て裏側にまわった。口を布で縛った馬が地面に座り込んでうつらうつらしており、その横にルエが待っていた。

セージの姿を認めたルエはほっとした顔で立ち上がった。

「無事でしたか！ よかった……」

「はいこれ返す」

ローブを脱ぎ去るとルエの腕に返してやって、岩の後ろに胡坐をかいた。ルエは、何やらローブを複雑そうな顔で見つめていたが、座るように促されると、着込んで腰を下ろした。

馬が目覚まして目ヤニの付着した瞳を向けたが、すぐに眠ってしまった。

セージは右肘を右腿にやり右頬の杖とした。

「奴隷が二、三十人いた。首輪はしてなかったし、たぶんどっから逃げてきたんだと思う」

「奴隷が……どこの奴隷かはわかりましたか？」

セージは首を横に振った。更に接近して調べれば会話から出身や経緯、どんな顔立ちなのか、どのような言語なのか、いかなる方言だったのかなどを知ることができただろうが、安全を優先させたので分からなかったのだ。

頬を撫で、半腰となり岩から村の方を窺う。何もいない。腰を落とすと再びの胡坐。

「いや。でも、なんとなく同じ場所から逃げてきたんじゃないかと思う。奴隷の集団脱走で調べれば分かるかもしれない」

「数十人単位となると、限られますし特定は容易かもしれませんが。北や王国以外の国なら……」

「俺らは仕事をこなした。あとどうするかはお偉いさんの判断することです」

「そうですね。悲しいですが、彼らがどうなるかは僕達の関与すべきことではない」

「仮に基地に連れて帰っても養うお金も食糧もなければ仕事場もないしな」

一応、書類に纏めることになっているので、要点を紙切れに書き込んでおく。光源は月の光で事足りた。焚火は熾さない。不安定な地域なので、感づかれなくなかった。

紙を懐にしまったセージは馬の横に吊るされている物入れから携行食と水筒の容器を取り出した。にこにこ笑みを浮かべ、まずは水を一口。

「飯食おう！」

空腹に勝る敵なし。

食べたら夜道を戻るのがだ。

< 56 > 目立ってはいけない (後書き)

文頭の空白に関する見やすさテストやってみた

< 57 > 逃避行（前書き）

二人が基地に帰ってみると、基地が炎上していた。敵の襲撃を受けたらしかった。

この世に安全なところなど無いのだなと実感したのは、基地が炎上しているのを目にしたからだ。遠距離からでも分かる盛大な燃えっぷりで、夜空を赤く化粧していた。

翌日。すっかり炭になってしまった基地の前にて。

安全なことを確かめた二人は基地を調べた。死体も、怪我で動けない者もおらず、馬の一頭も残っていなかった。矢も使われていなかった。どうやら、基地を放棄した後から敵がやって来て燃やし尽くしたようだった。食糧は、近隣の村の備蓄も合わせて全て消えていた。味方が持つて行ったのか、敵が持つて行ったのかを判断することはできなかった。なぜなら、村人も消えていたからである。

腰を屈め、地面を観察する。

「蹄の痕の数が尋常じゃない。基地と村の馬の数を合計しても、こうはいかない。あと、やってきた方角が、俺が正しければ北の方からだ」

“女の子”が北の方角に人差し指を向けると、ルエが頷いた。

「彼らが攻めてきたと考えるのが自然ですね」

北の国家が好んで使う戦法は機動戦術である。戦略的及び戦術的な機動の要は馬である。北から大量の蹄がやってきているから、北の国家が攻めてきたと考えるのが自然だった。

だがセージは首を捻ると、顎に手をやった。

どうしても違和感がぬぐえなかったのだ。

「それにしちゃおかしいぞ……ここは攻める価値のない辺境だったはずだ。次の町までどれだけかかるかも分からない。それに、基地を焼いたのも変だ」

「誰かに使われる恐れを減らすためでは？」

「誰かって、連中が使えばいい。とりあえず燃やすなんてことよ、ここを拠点に使えばよかったはず。なんか変だ。証拠は無いけど……」

「一応、頭には置いておきましょう」

北の国家は馬鹿ではない。攻めるといっものはつまり国家を陥落させるということであり、わざわざ占領する価値の無い街が遠い場所から侵入するより、より近い国境から侵入すればいい。北の国内ならば気が付かれないように移動できるし、対処もし難かるう。

距離が遠ければ兵糧の確保にも手間取る。特に人家の期待できない辺境では、略奪以前の問題であるからに、運搬の必要性が出てくる。

と言つても、全ては推測と憶測によるもので、確固たる証拠がある訳ではない。

戦力呼び寄せるための陽動かもしれないのだ。だとすれば侵攻すると見せかけるだけなので、なんら不自然なことは無い。『狼煙』の代わりに基地を焼いたとすれば不思議どころか合理的である。

補給など関係なく、食糧となる羊でも連れて行軍していたのかもしない。

セージは立ち上がると、これからの事を考えた。基地が無いというのは、身を守ってくれるものが無くなってしまったことと同意義である。もはやここは危険地帯に他ならない。エルフが連合に肩入れしているのは知れ渡っているので、一度エルフとわかるや攻撃を仕掛けてくるだろう。

「で、どうしようっか」

セージは手ごろな基地の残骸を蹴っ飛ばしつつ、ルエに今後の方針について訊ねてみた。返事など解り切ったことだ。基地の残骸を組み直して野営しましょうなどと言うはずがない。

ルエは馬の腹を撫でつつ返事をした。

「連合の方に逃げるべきですね。一番いいのは近場の基地へ向かうことですが……」

「そうだな、基地の場所がわかってれば基地が安全だ。敵に襲われてなければな」

「あと……場所が」

「分からない」

二人は基地の残骸を一瞥した。壁は崩れ、屋根は落ち、家具や扉は砕け、瓦礫と化した家屋。柱は辛うじて直立を保っているが、見る影も無くボロボロ。基地の位置を記した地図は、間違いなく炭になっているだろう。探すだけ無駄というものだ。焼失を免れているとすれば基地の味方の手元にあるだろう。

これからの旅は、敵を避けながら安全圏を目指すと言う危険なものである。

だが、セージの不安は少なかった。ルエという相棒と馬の存在があったからである。少なくとも草を食み、森林を掻き分けて進み、ビクビクして旅をすることは無さそうに思えたのだ。

ともあれ進まなくては旅は始まらない。

セージは馬の傍に寄ると、鐙に手をかけた。燻る基地の臭いに馬が鼻を鳴らした。

「行こう、日が暮れちまう」

「はいー!」

ル工が元気よく返事をすると、最初に馬に乗って手綱を取った。後から乗るセージに手を差し出したが、一人で乗れると言わんばかりに拒まれてしゅんとなった。

後ろに乗ったセージは彼の肩を叩いて発進を促した。

旅で困ったことと言ったら食料の確保である。水は魔術の応用で作りだせたが、食糧はそうはいかなかった。廃村調査用の食糧は全て食べつくしていたため、自力で調達を余儀なくされた。

広大な大地には木も疎らで、食用の動植物を見つけるのは困難だった。

乾燥した風が砂を巻き上げて水分をあっという間に持って行った。水浴びする水源も無く、雨も滅多に降らない。精神力を削る魔術を何度行使しても水は不足気味だった。

安全の確保であるが、北の国家達の軍隊の痕跡が風で消されてしまっており、どの方角が危険かすら見当が付かなかった。目立たないようにすることと身分を隠す以外に策は無かった。

食糧の確保、水の確保、安全の確保、それらが重くのしかかり疲労が蓄積して、旅は酷くかさついたものであった。

やっと見つけたのは野犬の群れだった。飢えた二人は獣のように襲い掛かり全滅させた。血の処理問題はロングソードを高温にして焼切る手段をとった。その日はたまにはいいだろうと盛大に焚火を起こしてバーベキューをやった。

「……………」
「……………」

人間は エルフだが 極度に腹を空かせると一言も喋れなくなるらしい。

セージとルエが焚火の前で岩を椅子代わりに腰かけている。二人揃って焚火を見つめており、視線の先には串肉がこれでもかと並んでいる。野犬は痩せていて肉はあまり多く採れなかったが、数が集まれば話は別である。

肉が美味しくないだとか、調味料が無いだとか、関係ない。空腹を満たせばそれでよかった。キラキラ血走った女の子と青年が焚火の前で微動だにしない光景はさぞ異様であろう。

肉がジユウジユウと油泡を立てている。赤と朱色に晒されて黒っぽい煙を吐き、食欲を誘う匂いを上げている。焦げ目が目立ち始める。野犬が危険な病に感染しているとも限らないので中まで熱が通るまで待つ。

セージのお腹が鳴る。空腹だった。お腹と背中がくっついてしまいうそつとも、お腹が空きすぎて腹が痛いとも言える限界状態。唾液が口内を占領中。

どちらがともなく手を伸ばすと、布を巻きつけて串を取り、肉を食らう。

熱々の金属串に接触しないよう気を配りつつ、肉を歯でほうばる。筋が多いので歯で擦り切り、適量を食む。硬く、小さく、そして臭う肉はしかしすきつ腹にはご馳走だった。

「あちち」

セージは無我夢中で肉を食らっていた。

熱さを唾液で相殺してやり、はふはふと声を鳴らしつつ肉を噛む。じわり広がる苦いような渋いような味わいが嬉しい。思い切って頭

を使って串から肉を食いちぎり、一気に食べれば串を布の上に置き、次の串を取る。ルエは既に二本目に突入しており、中性的な外見をしていてもやはり男性なのだを意識させる食いっぷりを発揮していた。

セージも負けじと二本目を食らい、三本目を取る。ルエは四本目だった。

焚火が体の前面を熱くしていようが構わない。串を取っては食らい、飲み込む作業に没頭する。いつしか肉の数は減少して、最後の一本になってしまった。あると言えばあるのだが、残りは保存用であるからこの場で食べてしまうことは、愚かである。

セージとルエは同時に手を伸ばし、そして同時に串を掴んだ。

上品で、どこぞのお嬢様を思わせる顔立ちを打ち消す凶暴な光を宿した瞳が男を睨む。中性的で優美な顔に二つ存在する優しげな瞳が、食欲に燃えて、女の子の瞳を睨む。

「……………」
「……………」

セージが引けば、ルエが引かれる。ルエが引けば、セージが引かれる。引いて引かれて引かれて引いて。串肉が二人の間を行ったり来たり。この間、一言も喋らない。焚火の中で薪が小さく爆ぜた。火の粉が昇り、夜空の星々に混じる。

どうぞと遠慮する余裕は二人に無かった。だが、腕力で争うつもりも無かった。

すっ、とセージが空いている方の手を握って出すと、ルエも同じく出してきた。

「さいしょはグー！」

セージの掛け声と共に二つのグーが上下するや、各々の描く勝利

に向かつて形を結び、繰り出された。

「じゃんけんぽん！」

「じゃんけんぽん！」

セージ、グー。ルエ、チヨキ。セージの勝利であった。

実は、旅の道中でじゃんけんについて教えたのである。「こんな遊び shouldn't」と言われたので「俺が考えた」と言っておいた。セージのは兎に角、ルエの掛け声はイントネーションが呪文を唱えるそれであり、元の世界でやったら笑いの種にされてもおかしくはないが、ご愛嬌である。

勝者には肉が与えられる。

セージは肉を一口ほうばると、にっこり笑った。

「……………」

「あまり見つめるなよ」

セージは食事を隣から見つめる彼の視線に耐えきれず、そっぽを向いた。しかし、やはり視線を感じる。振り返ればひもじそうな表情でこちらを見つめてくる男一匹。育ち盛りの彼にとって敗北は絶望のどん底に等しかった。

セージはため息を吐くと、肉を半分ほぼ食らい、串をルエの手に握らせた。

「半分やるよ」

「いいんですか？ いいんですか！ ありがとうございますっ！」

幼子のように驚喜する様を見て、可愛いやつだなと思ったのは秘密である。

食事を終えた二人は交替で睡眠をとった。

< 58 > 旅道中にて (前書き)

旅路は続く。

温かさを求めてそれを抱きしめる。硬い構成の周囲を柔らかい物で覆ったようなもの。なんぞや、と鈍い頭は回転を始めた。その前で組んだ手を使い、前面を触る。硬いが、木や金属のような組成ではなく、有機的な弾力が感じられた。次に嗅覚を使う。鼻づらを押し当てて、すすすん鳴らす。埃、使い込まれた布、汗、体臭。

ああ、と唐突に理解する。

これは人の背中だ。瞳を開けると、一面布。顔を離せば、誰かの背中とわかった。

耳を澄ます。断続的な馬の小走りが聞こえてくる。

鈍い感覚が体の上下振動を探知した。

記憶が巻き戻る。ビデオテープのように。

そこでようやく“女の子”は、己が馬に乗って誰かの背中にしがみ付いていると正確な認識を得たのである。誰かと言ったら、ルエ以外にありえない。証拠として、後ろで縛った銀髪が揺れているのを視認した。

片手で顔を擦り、目元を綺麗にする。大あくび。視界が涙で俄かに揺れるとぼやけた。素早く瞬いて水分を飛ばす。首、そして上半身の順番でルエから離れる。首を振ってみれば朝日が眩しいことに気が付く。

瞳を上げてみれば、明るい朱色の球体が地平線から顔を覗かせてあいさつしてくるところが映った。水に飢えた荒涼の大地を清らかなる光が温め始める。足から冷気が昇ってくる感覚を覚え、暖を取ろうとルエに背中に顔を押し付ける。温かかった。

「おはようございます」

「……………おはよう」

ル工が振り返らずにあいさつしてきたので、顔を背中に押し付けたままあいさつを返した。彼の声は酷く憔悴したものであった。

彼は、危険を回避するべく一晩中馬を操っていたせいで、睡眠をとっていないかった。馬とて動物であるから、時々休ませなくては行けない。更に敵襲を警戒して気を張り続けていたのだ、疲労の度合いはピークに達していた。

セージに一晩抱きつかれるという役得を加算しても、精神と体力の疲労は消えない。

朝日が昇って来て、丁度よくセージが目を覚ました。もう馬を止めても良からう。

ル工が手綱を操り馬足を遅くしていき、止めた。馬はぶると唇を鳴らすと、地面の枯草をむしゃむしゃ食べ始めた。草食動物は草さえあれば幸せである。

セージはル工の肩を馬上で揉み始めた。男性の筋肉は硬くて解しにくいことこの上なかった。

「ありがとさん。後は俺が見張るから寝てくれよな」

「……」

こくりと彼は頷き、腰を押さえながら馬から降りると、手ごろな枯葉をベッドに繕って体を横にした。セージは馬から降りると、ぐるりと周囲を見渡して、何もかも居ないことを確かめると彼の横に腰を降ろした。

程なくして、スースー気持のいい寝息が聞こえてきた。覗き込んでみると幼子のように可愛らしい寝顔があった。

乗馬技術さえあれば後部にル工を乗せて移動し続けられるのだが、生憎技術が無いため、交替で進むことができない。だから彼の安眠を護衛するのが仕事である。

干し肉をもぐもぐと食べつつロングソードを研ぎ石で擦る。

ル工が寝てしまつとやることが警戒か食事が装備の整備しかなくなつてしまふ。暇を持て余したセージはナイフを研いで、クロスボウの弦を金具で締め直した。

「ふーむ」

クロスボウを神妙な目で朝日に翳してみる。飛距離、威力共に心許ないが、さつと構えて発射できて、どこにでも持って行ける遠距離攻撃手段としては十分である。二連式なので一発目を外しても二発目があるという安心感がある。

ロウに貰つてからずっと使い続けてきたそれは、黒い塗装と照準器やグリップの滑り止めなど、どことなく拳銃を思わせる改造がされている。実はおそらくこの世界には無い先進的な武器 すなわち『銃』を作つてクロスボウの上位互換として携行せんとした時期があつた。だが、どうにも止めた。実用に耐えない代物が出来上がつてしまったのもそうだが、火薬を調達できないという問題を解決できなかったのだ。それならばよっぽどクロスボウの方が実用的である。

さて、セージは馬の荷物入れから金属片を取り出すと鉄やすりでせつせつせつと削り始めた。三角の先端、後部は細い。完成したものは頑丈な木の棒に差し、固定する。クロスボウ用の矢を作っているのだ。敵を攻撃するだけではなく狩にも使えるから、いくら持つていても損にはならない。

作業に没頭すること数時間。作れるだけ作つたら暇ができる。周囲の警戒をなるべく立ち上がり、目を細めて一周ぐるりと索敵行動何も無し。

座り込み、えつちらおつちらストレッチ。継続して毎日やってきただけあつて、セージの足は180。近く開く。吸つて吸つて吐いて吐いてのリズムで呼吸をしながら、体を右に曲げて、左に曲げる。

「よつと」

続いて前に倒れる。おでこを大地にキス。その体勢のまま手を背中の上でストレッチ。数秒静止後弛緩する。

セージは立ち上がると、荷物からブラシを取り出した。馬の体を綺麗にしてやろうと思ったのだ。

鎧付近が痒かろうと力を込めて擦ってやる。

「よーしよしよし」

馬が喜んでか否か長顔を向けて来た。地面から草を引っこ抜いて差し出すと美味しそうにむしゃむしゃした。顔も擦ってやる。蚤らしき小虫が跳ねたので指で潰す。一通り体を擦ってやった後、潮の塊を差し出す。定期的にあげないと体調を崩すのである。人間も工ルフも塩分を摂らないと健康を害するのと同じである。馬は塩の塊をぱくりと食べた。

一通り馬と触れ合った後は、やはり暇になる。

近場に狩れそうな獲物も居ない。鼠がいればいいのだがと目を凝らす。乾いた大地には小動物どころか虫の一匹すら認めることができなかった。

仕方がないので手ごろな草を千切って成形すると、草笛を作った。吹こうとして、止めた。ルエが睡眠をとっていることを今更思い出したのだ。体育座りとなり一人じゃんけんで時間を潰す。すべての勝負で勝利し、そして敗北した。

「ゲームあればいいのにな」

呟いたセージは、苦笑した。あるはずがない。あつたとしたら充電の手段を工面するのにあれこれ苦労するだろうと考えると愉快になつた。

そして、元の世界に置いてきてしまったゲームはどうなったかと考えた。恐らく遺品として今も部屋にあるのではないだろうか。虚無感が心に広がる。

「……………」

何やら一人でいると気分が沈んでくる。

沈黙して俯くこと数分間。面を上げたセージは起立して近場をウロウロし始めた。石を蹴つ飛ばす遊びもやったが飽きた。投げる遊びも飽きた。いよいよ暇を持て余したセージはロングソードを振るう訓練を開始した。ロングソードより魔術で燃やす方が楽とはいえ、訓練しておくに越したことは無い。

「っ！」

息を吐くや否や両手持ちの剣を斜め上から斜め下に振り、腰の構えで静止、すかさず仮想敵の顔面を突く。もし相手が剣を受けてくれたのなら魔術で燃やす機会が生まれる。だが仮想敵は突きを剣で流して方向を変えれば、力一杯振り下ろしてきたのだった。

咄嗟にバックステップ。仮想敵、セージの剣落としを狙った強烈な叩き下ろしを実行。受け流す技量は無く、止むを得ず後退した刹那、超至近距離からのクロスボウ二連射。

そこで、クロスボウを抜いてしまった自分を発見し、肩を落とす。

「……………駄目じゃん」

セージはロングソードを鞘に収めると、ため息を吐いた。

ロングソードの特訓中にクロスボウを発射するなど、相手が居ないにしろ、柔道の試合に竹刀を持ちだすに等しい蛮行である。一通り剣の扱いは心得ているが、クロスボウをブチ込む戦法が楽で、つ

い腰から抜いてしまう。

そこで、ウーンといううめき声が鼓膜を叩いたのだった。

「おはようー」

セージはルエに声をかけると、干し肉を手渡した。

< 59 > 交渉事がウマくいくためには (前書き)

町にたどり着いた二人だったが、北の国家の軍に町が占拠されてしまった。

< 59 > 交渉事がウマくいくためには

セージの予感は的中したとも言えるし、まるで的外れだったとも言える。

北の国家の特徴である騎兵達が群れを成して北の方角から押し寄せてきたのだ。おかしなことにセージ達が旅してきた間のタイムラグを計算に入れると、辺境の基地の襲撃から時間をあけて本隊が来たようなもので、対処してくださいと言わんばかりの行動ということになる。基地の襲撃 もしくは進軍が陽動だったにせよ、敵方の戦力が集結するまで待つてから本隊を進めるなどと言うのは奇妙である。騎兵の利点である機動性を活かした戦術をふいにしたも同然である。

実は、基地を襲撃したのは北の国家の軍ではなかったのだが、セージは知る由も無い。

なんとか小さな町に辿り着いた二人であるが、通貨も交換できる物品も持っていなかったので、野宿をした。一応、連合国の町なので襲われる心配は無く、井戸を使えば無尽蔵に水が手に入るとあって、のんびりすることができた。念には念を入れて耳は隠して生活した。疲れを癒してもっと大きい街へ逃げる予定だった。

耳は隠したが、外部に耳をやらなかった。

ある夜、それなりの規模を有する騎兵達がどかどかやってきた。町の乏しい防衛戦力と睨み合ったが、衝突すれば騎兵の津波で踏みつぶされることは明白であった。彼らの司令官らしき男と、町の代表者が話し合いに入った。町はいずれ北の国家に受け渡されるだろう。蹂躪されると、食糧や労働力の幾分かを渡して命を助けてもらうの二択しか提示されないだろうから。

町はほぼ占領状態にあった。セージとルエが気が付いた時には既

に町中に兵士がうつろつくまでに事態が悪化していた。

“女の子”は布をローブ風に仕立てた服を纏い、旅商人を装っていた。ルエも同じく旅商人に成りきっていた。エルフは連合所属の戦力であるから、耳を露出させてはならなかった。

なんとか機会をうかがって町から抜け出さなくてはいけないというのに、悪いことに兵士達は町を封鎖して住民一人一人を調べ上げようとしていたのである。もちろん、旅人もである。町で略奪を働かない辺り、統制のとれた誇りある軍隊なのかもしれないが、敵兵となれば話は別であろう。

セージは腕を組んだまま、壁にもたれかかっていた。さつと目くばせをする。

夕日が地面を闊歩する時間帯と、ローブのフードが相乗効果を出し、彼女の顔は暗黒の中にあつた。

「どうする？」

囁く。

町を抜け出そうとすれば、兵士に呼び止められて素性を明らかにせよと言われるだろう。身分証明など必要ない。顔を見せると命令され、フードを脱げばエルフと発覚、捕虜となるか殺されるかである。

早く対処に移さなくては、大勢の兵士に囲まれた状態からの脱出をすることになる。大立ち回り（ドンパチ）は避けたい。

ルエもまた、腕を組み、口を開いた。

「賄賂はどうです」

「いいね。通貨、宝石、貴重品、なんか持つてるか？」

「全く」

「短剣は賄賂になるかね」

「厳しいです」

セージがルエの腰を指さす。ルエは腰の短剣を取り出すと、鞘から抜いた。煌びやか、豪華、と言った表現からは程遠い、術の掘り込まれたそれ。宝石も貴金属の欠片も使われていない質素な短剣は賄賂にならない。ロウの品となれば価値があるかもしれないが、証明したら証明したで怪しまれる。

二人が自給自足の旅を続けてきたことから分かるであろうが、無一文である。通貨の一枚も所持していない。

ミスリル剣があればよかったなとセージは悔やむも、どうにかなるでもない。

唯一価値がありそうなものと言えばそれしかないと二人が一斉に目を向けた先にあったのは、のんびりと地面を蹄で掘り返す馬であった。健康状態も良く、気性も大人しい。毛並も美しい。

「それとも、俺がちよいとばかり色気でも使ってみるとか」

馬の鎧をぼんぼんと叩き、おもむろに提案してみる。胸は無いけどと付け加えて。

セージは美少女である。鏡に映った姿や、男の子の反応などから、己の外見が美しいと理解しているのだ。長旅と戦のストレスで性的欲求の高まった兵士を釣るのは容易いであろう。

だが、ルエが頑なに拒絶した。首を振り、短剣を腰に差す。

「いけません。僕が許しません」

セージが喉をくつくつ鳴らしつつ壁際に戻ると、演技臭く腕を組んで肘でルエの体を突っついた。

「……ふーん、色気を使って呼び寄せたところで服を奪おうかって言おうと思ったのに。いやらしい想像でもしてた？」

「……………」

ル工沈黙す。

してやったり。深読みを誘ってみたところまんまと引つかかってくれた。詳細は口にせず曖昧にぼかすことで相手の想像を擦ってみたのだ。狙いは的中した。

セージはフードの位置を直し、耳に触れて外から見えない位置にあるのを確かめると、頭を振る反動で壁から離れ、馬の手綱を握った。

「ウダウダしてらんないぞ。行くぞムツツリ」

「ムツツリ!?!」

「……大声出すなバカ。とつとと賄賂渡して町から逃げないと、後悔しても仕切れなくなる」

「す、すいません」

セージが歩き出すと、ル工が後ろに続く。そこでふとセージは面を上げると夜空を睨んだ。懸念材料があった。そしてそれは、身の破滅を呼び寄せる可能性を孕んでいる。

「賄賂が通用しなかったらどうしようか」

「命に代えても守ります」

淀みなく答える男に、心中にさざ波が立つ。相手が抱く好意から生まれる意欲であることを理解していても、真正面からキザな台詞を吐かれると、精神も、心の臓も乱れる。

だいぶ体に心が引つ張られてきたか。例えようのない寂寞を味わう。

唇を硬く結び、歩き出す。向かう先は町の外。道を見張る兵士の居るところだ。下調べの結果、一人しか兵士が居ない通路を見つけ

である。

「止めるよ、自分だけ逃げりゃあいい。むしろ里の長老の弟であるお前の方が、俺に守られるべき」

「里は兄が居れば安泰です。僕はしたいことをします」

「俺に価値は無い」

「あります」

「……フン、恥ずかしげも無くよくぞまあ」

道を曲がる。馬は従順に引かれてついてくる。ボロ屋の横を直進。右折、小道から町の外へ出ると、小道にあるこれまた小さな門の前で槍を右に携えた軽鎧の兵士が道を通せんぼしていた。目を凝らしてみると、門の外に馬に乗った兵士があり、ぼーっと空を眺めている。数分前には居なかつたはずだが、今更引けない。

接近してくる怪しい風貌の二人組を目にとめた兵士は、槍を構え、冷たい声を浴びせかけた。

「止まれ！ お前達、何者だ！」

セージはへこへここと頭を下げつつ、平素の男っぽい乱暴な喋り方を封印して年相応な可愛らしい声色を使う。兵士に一步一步距離を詰めた。兵士が退く。一步一步詰める。距離は変わらず。

「お忙しいところゴメンナサイ……私達、旅の商人の者なんです
が、お兄さんと取引したいんですよ」

猫なで声を使ってみる。

セージは背筋に鳥肌が立つのを感じた。自分の声なのである。

「……………そつちのお前はなんだ？」

兵士が仏頂面でル工を顎でしゃくる。門の外にいる兵士がこちらを睨んでいるのが、兵士の肩越しから窺えた。

セージはまたも頭をさげると、口元に柔らかい笑みを浮かべてル工の肩付近をゆっくり叩いた。

「お兄ちゃんです。私たちのことはいいとして、お取引しませんか？」

「……………言ってみる」

セージは、兵士の眼球の奥底で興味の光が蠢くの見逃さなかった。

ここぞとばかりに擦り寄っていくと、兵士の手を握った。硬くてごつごつした手。兵士は振りほどこうとしたが、胸元に引き寄せると大人しくなった。上目遣いに兵士の顔を覗き込む。存外若かった。門の外で監視を続ける兵士が、馬で近寄ってきた。曲者かと警戒しているらしい。

「実はお兄ちゃんが商売で失敗しちゃいまして、すっからかんなんですよお。知り合いの旅商人がすぐそこまで来てるっていうので、家まで送ってもらおうかと」

「それで？」

「だから、お兄さんにこの子をお譲りします。どうです？ それなりのお値段にはなるいい馬でしょう？ ちゃんと蹄鉄打ってあります。そうそう、何を隠そう元は軍馬です。もちろん鎧とブラシなんかも差し上げます」

「……………ふーむ……………」

兵士が馬の検分に入った。言葉通りに蹄鉄は打ってあるし、健康状態も良い。筋肉の付き方、毛並、顔、若さ。田舎で農業に用いら

れる馬とは違つと判断する。

相手に考える隙を与えると怪しまれる。今しがたの説明にだつて致命的な大穴が空いているのだ。疑問を投げかけられるのは時間の問題だつた。

先手を打つ。

セージはセールストークをつらつらと流し終えるや、馬の手綱を握らせてウインク一つ。外に出たいから馬を賄賂に黙ってくれということである。兵士は黙つて手綱を見つめると、おもむるに空を仰いでこつ言つた。

ちなみに空は闇が大部分を覆い隠しているだけではなく、紙を丸めたようなグシャグシャ雲が四割を占めていてお世辞にも『晴れ』
とは言い難い様相である。

「ああ今日は晴れてるなあ」

「おい、そいつらは何者だ」

馬に乗つた兵士が門のすぐ手前までやってきて、セージとルエを順番に指差した。町の外に人を出すべからずと命じられているのだ。すると、賄賂を渡した兵士は馬に乗つた兵士に頷くと、馬を槍で示し、次に町の外を示した。馬に乗つた兵士は小刻みに数回頷くと、さつさと言わんばかりに手をひらひらさせた。

かくして二人は町からの脱出に成功したのだが、馬と言うアシを失つたのであつた。

< 60 > 田卓 (前書き)

各里の長老が集まって今後について話し合った。

「さて、今日集まって頂いたのは他でもありません」

よく通る美声が部屋に投げかけられた。それは議論の始まりを合図していた。

岩造りの部屋に集りたるは、各エルフの里の長老の地位に座る者達である。セージが最初に訪れた里の長老、溪谷の里の長老、巨人、全身甲冑と長大な剣を背負った長老、漆黒のドレスに身を包んだ長老、胸と腰布という薄手の長老、白獣の毛皮服を着込んだ長老など有力な外の長老が勢ぞろいしていた。他の小規模な里は危険は冒せないとのことで参加していないが、代わりの特使が参加していた。

円卓は空席が目立つ。かつては席が全て埋まったが、現在では里が合併したりして減ってしまったのだ。潰されてしまった里もある。

『大陸』 特にこれといって統一された名称は無いが とうのは、この世界の大地の大半を成す広大な大地のことである。セージの世界におけるオーストラリア大陸によく似通った陸の形をしている。中規模の大陸や、その他島々と比べれば、まさに世界の全と称しても過言ではない超大陸である。

いくつかの陸地が星の熱還流によってくっついて出来上がった関係上、大陸の中央は巨大な造山帯によって隔たれている。

エルフの里は『大陸』のあちこちにまるで吹き出物のように分布しており、多くは東側に集中している。理由は簡単である。西側の里の多くは王国に潰されたのだ。

位置関係は大陸の西側が王国、東側が連合国、そして北に件の国家達である。がしかし、東側にも王国の領土は存在するし、西側に連合加盟国が存在し、北には頑なに中立を守り続ける国があり、南

は未開の民族たちが数多くいるなど、それぞれの勢力が一色であるとは限らないのである。

情勢は難しく、今後どう動くかによってエルフの里の行く末が決まってくる。

そこで数年ぶりに長老達による会議が開かれたのだ。

重厚な岩造りの部屋のと真ん中には円卓が置かれ、長老たちが腰かけている。部屋の内外には警備の兵士が詰め、物々しい雰囲気は漂っていた。各長老の前には書類が置かれ、とある青年のところには地図立てがあった。

その青年は懐から棒を取り出すと、長老達に対して意見を求めて、今後どうするべきかを決めるべく地図を指し示した。銀髪を腰まで伸ばし、風変わりな眼鏡をかけた彼は、あたかも女性のような容姿をしていた。ルークである。今回の会議の司会は彼なのだ。

「今後、我々がどう動くかと言うことについてです」

「決まっている」

まず静かに意見を出したのは全身鎧に大剣という物々しい装備の長老であった。その人物の里は伝統的に強い者が長老になるといいう策をとっており、その人物もまた強き者であった。名をヴィーシカといい、鉄の里を治めている。彼、もしくは彼女は彼女は机を拳で叩いた鎧の中を目にしたものは一人もいないとの噂で、事実長老達でさえ未知である。ドラゴンと死闘を演じた際にブレスを吸い込んでしまいい喉が潰れたと語られており、声は酷くザラついた音程の不安定なものである。

ヴィーシカが声高に主張した。

ヴィーシカの考え、希望、思想は一つに収束するのが常である。

一部では戦いしか頭にないのかと蔑まされている。

「殲滅だ。王国軍を一人残らず血祭りにあげるのだ」

「本気で仰ってるの？」

小馬鹿にしたような言葉が紡がれる。一同が顔を向けた先にいたのは壮年の喪服の女。彼女の名前はエステルといい、「暗黒谷の里」を統べている。陰気な印象のある里で知られているが、戦を好まず、言葉による解決を好むことで知られている。里の中でも諜報戦に長けており、スパイの数が軍隊並みという逸話を持つ。

エステルは書類をぺらぺらと捲ると、ベールの奥であからさまな鼻笑いをやってのけた。

「王国にかまけて北の蛮人共は無かったことにするつもりかしら？」

「北も潰す。残らずな」

ヴィーシカは微動だにせず受け答えをした。呼吸で鎧が上下することも無く、まるで銅像が喋っているようだった。

エステルが話にならないとばかりに首を振った。

「それはよいことね。戦力をどう調達するのか興味があるわ」

「北と調停を結ぶ。我々は既に行動に移している」

「舐めないで欲しいわ……私の里も既にやっているの。連合国もそう考えているでしょうね。東と北から挟み打てば大陸から蹴落とすことも難しくない。結べればの話よ。王国が北と交渉している情報を知らないとは言わせない」

エルフ側のスパイの報告では、王国もまた北と手を組んで連合を追い詰めようとしているということが判明していた。いわば北の戦力をなんとか引きこもつと躍起になっているのである。

エステルは首を振ると、やや大げさに肩をすくめた。

「まるでおかしな話よね……宣戦布告した国ともう一度仲良くしましようだなんて。万が一、北が裏切るようなことがあれば、裏切られた方は破滅する。私、博打は打たない主義なの」

「フン、怖気ついたか」

「いいえ？ 内部紛争に権力争い……自浄作用の落ちた王国を崩す手段を模索しているだけだわ」

『ブルテイル王国』 古くは極西で発生した民族を先祖に持つ君主制の大国である。かつては小国に過ぎなかったが、群雄割拠時代を生き残って、勢力を落とした国家を吸収して膨れ上がり、植民地政策で莫大な財を成した。エルフ迫害を推奨することから、エルフ側では王国憎しとの声は大きい。

連合国の結成と反撃で勢力を落とし、王国内部で亀裂が走っている。エステルはそこに付け込んで内部分裂を誘発せんとしているらしいが、歯に物が引っかかったような喋り用だった。

グイーシカが鼻を鳴らした。

「その様子だと王国と北の両方共に話が纏まらなかったようだな」
「……」

険悪な雰囲気漂う二人に割って入るように、巨老人が挙手をした。他の長老達より頭二つ以上抜き出ている彼が手を上げると、天井が相対的に低くなる。

ルークが発言を許可する意味合いで指差すと、巨老人は大きく頷き髭を弄りつつ喋りはじめた。

「儂の考えは、やはり我らが本格的に戦うべきであるということだ」

「大勢を変えようと言う時に、戦場で斧振るって一人一人チマチマ潰しましようという提案なら却下だわ」

ぴしゃりと言いつ放つエステルを内輪のような大きな手で制し、ルークの傍らにある地図を見遣る。

「我らエルフ族の勇士を植民地の人間に見せつけるのだ。彼らが立ち上げれば戦力の不足も補えようぞ」

王国が抱える植民地は大小国以下の部族を含めると相当な人口を有する。もしも労働者や奴隷が反旗を翻して王国に戦いを挑んだら状況は一変するだろう。だが、この提案には穴があった。

エステルが口を開こうとする前に白い毛皮を着た長老が手を挙げ、ルークに発言の許可を求めた。押し黙るエステル。彼　　ポルトが厳かに口を開く。

ポルトは北の国家達でさえ手出しができない雪の深山の里を統べる長老であり、白毛皮の服は己が魔術も武器も使わず格闘術だけで仕留めた熊のものをなめして作ったという伝説を持つ。

「巨老人よ、お主の考えは素晴らしいがいかにして植民地の子犬共を立ち上げらせるつもりなのか」

「植民地に赴き、剣を天に掲げよう」

「耳は削ぐか」

「否、だ」

「是非も無し」

それきりポルトは腕を組んで口をへの字に結んだ。

ポルトは寡黙な人物である。必要なこと以外は喋ろうとしない。だが一同には会話の内容を察することができた。

耳を削がない　　すなわち人間達がよく知る姿のエルフを派遣して植民地に王国に武力を振るうように導こうと言うのだ。王国に対する植民地の不満は高まっており、成功する見込みはある。だが、

危険性はある。ルークが眼鏡の縁を人差し指と中指で持ち上げつつ発言する。

「植民地へ王国が全力で戦力を傾けてきた場合、反抗戦力は飲み込まれてしまうでしょう。そうなれば事前に察知して避けられない限り、捕まってしまうです」

ただでさえ不満が溜まっているであろう王国の軍隊のと真ん中でエルフが放り出されたら、結末はボロ雑巾より悲惨である。徹底的に甚振られた末に比喩表現ではなく本当に地面に埋められるだろう。そうでなければ例のダークエルフのように改造を受けて傀儡化するのがオチである。

エステルが頷くと椅子に深く腰掛け直した。

「そうね、もしエルフが捕まるような事態が起これば、彼らの溜まりに溜まった鬱憤を晴らすオモチャにされてしまうわ。連合国と共同で作戦を遂行しなくては戦力を悪戯に浪費するだけ」

「少しよろしいか」

「どうぞ、ジェリコ氏」

発言の許可を求めたのは、セージが最初に訪れた里の長老だった。彼は背筋をぴんと伸ばし起立すれば、身振り手振りをういて疑問を投げかけた。

「反乱に期待するのは結構だが、そのような不安定な要素を策と言っているものなのか疑問だ。反乱が起こらず、逆に王国に売られたらと不安が残る。それよりも北の連中に期待した方がいい」

「あら、話を蒸し返すつもり？」

「違います。私は別方面からの交渉を考えているのです」

ジェリコは咳払いを一つ零すと、手元の地図を手の裏で軽く叩いた。そこには北の広大な大地が広がっており、四つの部族名が記されていた。

実は、北の国家達というのは総称に過ぎない。四つの巨大な部族と、数えきれない少数の民族がそれぞれに国を自称しているのだ、『北の国家達』として扱っているのである。とある部族曰く、『あの部族は我々が支配しているのだ、あの部族と合わせて一つの国である』。一方、彼らが言う『あの部族』によれば『奴らは我らの奉仕部族である』と、まるで一貫性がない。

かといって弱小集団の寄り集めと侮るなかれ。一度戦闘が起きると各部族間が血のつながりや契約で集結して軍隊と化するのだ。規模も部族という枠を超えており、王国や連合国とタメを張れる。ジェリコは地図を再度叩いた。

「ムー族とカルディア族が対立しているのはご存じの通り。戦争中ということを手を組んでいるが、その昔の確執を忘れてしまったわけではない。ムー族と手を組み、部族を退けることは不可能ではないと考えているわけでありませう。幸いにもムー族は連合諸国と商売をやってきた積み重ねがあります」

ムー族。東西間を行き来する長距離貿易で財を成した一族で、カルディア族とは古くからの商売敵として度々戦闘を行ってきた経緯を有する。また連合諸国とは商売で提携する仲である。

だが、そう事が上手くいくはずがないとルークが指摘すれば、数人が同調した。巨老人、ヴィーシカ、名も無き境界の長老の順である。

「ジェリコ氏、よろしいですか。ムー族と連合の武力的衝突で双方に犠牲者が出ています。ムー族は連合諸国と強い結びつきがあるといっても、血が流れた以上戦いを続けるでしょう」

「あやつらの事だ……連合に自らの力を見せつけたがるに違いない」

「連合に大打撃を与えれば連中の商売もはかどるようになるよ」「手札が必要すな」

ムー族に限らず北の遊牧民は誇りを命より大切にする者が多い。誇りと部族の為なら命を喜んで捨てるので戦場では恐るべきキリングマシーンと化すがこの話はまた別で記そう。

一度戦場で剣を交えた相手は、殺して首を刈り取らなくてはいけない。今更休戦して手を結びましょうと持ちかけても、使者が二枚に下ろされる笑い話が生まれるだけである。

エステルが顎に手をやり、ジェリコを見遣った。

「……なるほどね。特権を取らせるといふことかしら」

「その通りだ。喪服の姫君は聡明であるようだ。特権……とくれば目の色を変えるでしょう。商売敵であるカルディア族を圧倒できるでしょうから」

「……ひよつとして皮肉かしら……まあ、褒められてもうれしくないわ。連合にかけあってみなければならぬわね……特権を一部族に認めさせること……はあ……どうして私が思いつけなかったのか、落ち込むわね……」

「連合を動かすネタをお持ちで？」

「舐めないで。あるわよ。使うまいと仕舞い込んでたとしておきのが」

連合を動かすには対価が必要だった。どんな特権であれ巨額の富が動く貿易に係る事柄なのだから、それに匹敵する事象が入用である。エステルはそれを持っていらっしゃるしかつたが、明らかに渋っていた。

「不足しているのならば私も力を貸しましょう」

「不要よ」

「あー、ちよいとばかりいいかねー」

「マーレ氏どうぞ」

円卓に一本の手が掲げられた。

ルークが発言を許可すると、その人物は頭をポリポリと掻きつつ起立した。

彼女の名前はマーレ。温暖な地域特有の薄着に身を包んだ身体の凹凸激しい美女である。ルークと同年代という若さながら南方の里と人間の部族を統べる有能さで知られ、大規模な艦隊を運用していることでも知られる。

マーレは豊満な肉体を見せつけるが如く右手で左腕を握った。無意識のうちにやっただらしかった。

「話をー蒸し返すわけなんだけど、植民地に立ち上がらせることは私らの里に任せて欲しいんだわ。地図を……やー、ルークさんルークさんお隣失礼しますよう」

「どうぞ」

マーレがルークの横にやってくると、地図を指さして説明を始める。鈴の鳴るような声が部屋に響く。

楢田の爪を地図に宛がい、水色の線を追う。

「ただ反旗を翻せと言ってもお断りするのが人間ってもの。ここで私達が船で川を遡って物資と人員を補充してやって元気をつける。ワイバーンは可愛いけど……じゃなくて運べる荷物が少ないから、船でやった方がいいでしょ。エルフだけ送るよりマシだと思わない？」

植民地は労働力の大部分を担う男手は戦争にとられ、資源は片っ端から王国にとられ、領土は無いも同然の苦しい境遇に立たされている。下は農民から上は政治家まで困窮して置いて戦争どころではない。不満が溜まっていては言っても剣もない矢もない食糧の備蓄も無いという状況では、行動に移す以前の問題である。

そこでマーレはご自慢の船団を利用して物資や人員を輸送しようというのだ。

大陸を流れる大河は一級船であっても楽々通過することができ、大規模輸送にはうってつけだった。

新たな疑問を投げかけたのは、エステルであった。

「作戦は素晴らしいわ。輸送の手間と物資人員は誰が負担するのかと言うことを訊ねたいのだけれど」

「心配は無用」。エルフの志願者は集っちゃうけど、必要物資と経費なんかは私が全て負担する」

「怪しいわ、みんなに頭を下げるのかと思っていただけ」

「せっかくの機会よ？ マーレ印の船がエルフを乗せて国を救った！ 信頼と安心を擦り込めるじゃない」

「たくましいわね……商売上手だわ」

「ありがとう！ ということで、みなさん、志願者の件をお願いねっ」

皮肉ともとれるエステルの言葉にもマーレはにこやかに応じ、着席した。

戦争を左右する議題は消化した。

次は各地の情勢について話し合うべきだった。皆が不足しているものを挙げていき、里同士で融通可能なものを議論した。例えば金属資源。魔術用品。人手。金。余っている物同士の交換の約束など。紙面で議論すると時間だけ食われるのでせっかく集まった今を利用せんとして細かな意見交換も行った。最後には世間話 孫が生ま

れたからどうの、近頃体調がどうのという話もした。

エルフ勢の方針は、北のムー族を懐柔すること。植民地の反乱を誘発し、同時期に連合国軍を進軍して王国軍を蹴散らすことと決まった。正面切って戦闘に参加することは議題に上がることは無かった。エルフの数が少ないのだから仕方がない。

円卓会議が終わった後のこと。

「時間頂けないか」

「あらん、なにかしらヴィーシカ」

会議室の外で二人の人物が話し込んでいた。甲冑姿のヴィーシカと、軽服姿のマーレである。ヴィーシカがマーレを呼び止めたのである。

マーレにはヴィーシカが真剣な顔つきになっているのが兜の奥から漏れ出す雰囲気や文字となり浮かび上がるが如く理解できた。

「植民地へ行く志願者についてなのだが……」

< 60 > 田卓（後書き）

書いてて思うこと。

戦記物？は初めてな上に読んだことが無いので精神力がマッハで削れていく……

やっところさ固有名詞出してみました……どうなのこれ……口調も……

さて次回はあの人物が再登場の予定です。

< 61 > 賞金稼ぎ (前書き)

セージとルエの二人が旅をしていると、怪しげな集団に取り囲まれてしまったのだった。

< 61 > 賞金稼ぎ

戦時中とは危険がつきものである。

治安維持の空白を狙った盗賊や、脱走兵、傭兵かぶれ、スカベンジャーなどが国内外問わず徘徊しているのだ。賞金稼ぎもまた、空気のよりに地上をうろついている。

セージ達が遭遇したのは賞金稼ぎは賞金稼ぎでも、エルフを狩る者達だった。

不幸な出会いはとある町に近づいた時に起こった。

町から何やら一団が出てくる。旅商人を装っていけばれないだろうと高を括った二人に引き寄せられるが如く馬に乗った武装集団がやってきた。彼らは何やら紙切れと二人を見比べているようであった。

ルエが傍らの“女の子”に耳打ちした。

「エルフ側の迎え……とは思えませんね」

「連合の救出部隊にも見えないな……盗賊か？」

警戒を強める二人は、迂闊に動けなかった。

下手に荒事を起こせば相手が攻撃の正当性を得てしまうからだ。

逃げ出そうにも相手は馬でこちらは徒歩。逃げ切れないのは目に見えていた。

馬に乗った彼らが前を塞いだので二人は左右を抜けんとしたが、また馬で塞がれる。大回りしようとしてところ馬で通せんぼ。後退せんと振り返れば、斧を構えた大男が二人馬から降りてこちらを睨みつけていた。総勢十人はいようかと言う集団に囲まれていい気分はしない。フードが耳を覆っているのをさりげなく調べれば、丁寧な口調で訊ねる。旅商人を装うべく鞆を揺らして見せる。

「先を急いでいるのですが……」

するといかにもと言った威圧的な風貌をした軽薄そうな男が馬上で顎をしゃくる下品な動作をした。煤けた緑の鎧が印象的だった。

「お二人さんに時間は取らせねーぜ？ まあ、そのウザッたいフードを脱いでくれれば去るさ」

「フードなんてどうでもいいじゃないですか」

「どうでもいいかどうかは俺らが決める。早くしろガキ」

言うなり男は腰の剣を抜き、切っ先をセージの顔元に近寄せてきた。フードを剣で退かそうと言う魂胆らしかった。手で払えば怪我をする。一步引き、顔をそむけて対処する。フードは生命線である。北の騎兵達がうるつく場所においては耳を隠す重要な衣服なのである。態度から賞金稼ぎの類であると分かったので、フードは取らない。

なぜ居場所がばれたのだろうかという疑問は、今考えるべきではなかった。二人は行動を迫られていた。

セージはドンパチは御免だとニコニコ笑ってみせると、フードに手をかけて降ろした。ただし耳は巧妙に手元で陰に入れることで遮蔽した。ルエもセージに倣いフードを降ろす。

「何も無いでしょ？」

「申し訳ございません。妹は少々反抗期なもので」

『設定上』二人は兄と妹であるため、ルエがセージを妹扱いして頭を小突いた。セージは文句を言わず受けた。

フードを降ろしたことで顔が面に出たが、相手は顔がなかった。

「オイ……ふざけてんじやねーぞ、五数える間にフード取らないと服ひっぺ剥がしてやる。下まで降ろしやがれ」

彼は目を吊り上げ苛立ちを露わにした。二人は悟る。顔を出して追及を引つ込めなかったということは、目的は顔に非ずということであると。耳を見せるとはつきり言わずとも、理解した。彼らは危険だった。ルエは経験がないようだったが、セージはこの手の乱暴者はどうすべきか身に染みて理解していた。

一団の殺気が蔓延し始めたのを感じた。肌が焼かれるようにチリチリとする。首筋に鳥肌が立つ。それとなく手を降ろすと、セージはクロスボウを。ルエは短剣に触る。

セージ、ルエ共にとうの昔に覚悟は決めていた。いつの日かエルフを捕まえてやるうと意気込む輩と相まみえるであらうと。

セージは相手がいちを数える前にルエの横つ腹を突き合図。に、と唇が動く瞬間にはルエはセージの意図を読み取り身構えていた。長年の、とまではいかなくとも同じ釜の飯もとい獣の肉を食らってきたのだ、場の空気と行動一つで情報伝達は可能だった。

「みいーつつ……よーつつ」

取り囲む男達が一斉に武器を抜き出した。多くは剣や槍ではなく、捕縛器具付きの棒や、痺れ薬の類が仕込まれているであらう吹き矢であった。一斉に寄ってたかつて蛸殴りにされれば二人は一たまりも無く地に伏せるだろう。

男は柄を握り直し、更に切っ先をセージの顔に接近させつつ、5を数えた。

「いっーつつ」

「やれー！」

号令があるや、ルエと男たちが一斉に動いた。ルエは自己防衛。男たちは捕縛の為であった。

「「旋風」！」

「……なんつ!? “守りの壁”!!」

ルエが抜剣、短く詠唱した。反射的に軽薄そうな男が魔術で守りを展開した。

短剣が神々しく光り輝いた。術紋がイメージ補強媒体と魔力の効率的運用を補助する。完全な制御化にある風は術者とセージを台風の目に、害をなす存在にのみ牙を剥いた。

馬が転ぶ。積み荷が中身をブチ撒けた。軽装の者は木の葉のように空へ舞い上がり、重装備の者はおもちゃ同然に地面で弄ばれ砂と口付けた。だが中には地面に剣を突き立てて耐える者、馬にしがみ付いて空へ舞うことを防いだもの、魔術による防壁で風を受け流した者がいた。その数、五人。

「やはり、てめえらエルフか！」

男が威勢よく指差した。風でフードが剥がれ落ち、特徴的な尖り耳が露わになっていたのだ。

セージはにやりと白い歯を見せつけてやった。

「ご名答！」

一団を纏める頭らしき軽薄そうな男は、薄い唇を噛み締めてセージに斬りかかった。彼は咄嗟に魔術を唱えて風を防いでいた。人間にも魔術を使えるものは居るのだ。

真正面から力のせめぎ合いをやるのは、馬鹿である。体力に乏し

い女の子の選ぶ戦法として最低のものである。戦いは常にのらりくらりとしてなくてはいけない。

剣をロングソードで迎撃した瞬間、すかさずバックステップを踏んで腰位置からクロスボウを二連射せん。

だが、矢は男の鎧に命中し、ぴたりと止まってしまった。ただの皮の鎧ならば貫通を許すはずにも関わらずである。

男はロングソードによる刺突を実行した。

「無駄だアア！」

「堅い！？ ええい！」

点の攻撃を面で打ち払う。火花が散った。男の突きを只管叩いて落とす。

男の攻勢は剣をまるで槍のように扱っ嫌らしいもので、しかし顔面や腹部を決して狙おうとせず、足や腕などを集中して突くと言う、捕縛を諦めていないことを示していた。

男が腰を引いたその瞬間、空気の塊があたかも鉄砲水のように放たれ、数人を巻き込みつつ蹂躪した。セージが眼球を横に向け、また戻す。背中から風の翼を生やして防御体勢を整えたルエによる魔術砲撃だった。一度風の衣を纏った彼には真つ当な攻撃は通用しない。矢を放てば進路がねじ曲がり、魔術は四散し、斬りかかれれば吹き飛ばされるのだ。ルエに手出しができなくなれば、必然的にセージに攻撃が集中するが、想定範囲内であった。

明白な殺意をもって斧を振り被る大男に、めんどくさそうに手を翳す。

「“ 火炎放射 ”」

元の世界の火炎放射器そっくりな火の迸りが人差し指から生じ、大男を抱擁する。同じ型の斧を握りしめたもう一人の大男にもかけ

てやる。あつという間に火達磨が二つ完成した。地面を転がって鎮火を試みる二人に構わず、飛来する複数の吹き矢を大気の噴射で緊急回避した。イメージはルエの風の翼そのものである。

セージは跳躍し、大気の噴射を用いて放物線を描くことを拒絶した。まるで氷上を滑るが如く低空を高速で飛び、やっそこさ立ち上がった一人の男の横っ腹を斬りつけた。

「ぐおっ……」

「あばよ！」

一撃離脱。

ロングソードを握り直し、大気噴射で方向転換。地に轍を刻みつつ走る、走る、走り、跳ぶ。向かう先は軽薄そうな男。鎧が頑丈なのは承知していた。斜め上から斬撃をもたらす経路を取り突っ込む。男は辛うじて横っ飛びに避けた。だがこれは布石だった。足一本を設置して軸とすればぐるり一回転、魔術を投げつけん。

「“ 火炎弾 ” ！」

「 なん、糞オ ! 」

セージの拳からバスケットボール大の火の玉が発生、男の胴体に吸い込まれた。小爆発。男が仰け反り転倒した。心臓に近い場所に魔術を叩き込んだのだから戦闘はできまいと次の標的を探そうとしたセージに、攻撃を仕掛けてくる者が居た。先ほどの男だった。全身火達磨になるでもなく、あろうことか鎧に焦げ一つ無かった。

驚きを隠せず、不意を突かれた格好となった。

男が剣を振り被る。

「 しゃあああああ ! 」

「 あっ ! ? 」

体重を乗せた正面振り下ろしを捌き切れず剣が手からすっぽ抜け
てしまった。剣は離れた位置に突き刺さった。サブウェポン兼日常
用品であるナイフを抜き、相対せん。

「貰った！」

「甘い！」

横から伸びる槍を寸でのところで踊るようにステップを踏んで避
け、顔面をナイフで斬り付ける。敵が崩れ落ちた。蹴っ飛ばす。

軽薄そうな男は鬼のような顔で剣を操り、無防備なセージの胴体
へ刺突した。

セージは魔力の消費を考慮しない膨大な噴射を実行して飛び上が
ると、軽業師よろしく男の上空を通り背後に跳躍、着地、前転して
柄を握る。剣を回収。腰を落した姿勢で構える。

男がロングソードを弄びつつゆっくりと接近してくる。

セージは見た、鎧が健在なことを。

「……………随分と頑丈な」

「エルフってのは、耳に栄養取られて脳味噌が無いのか？ ドラ
ゴン皮に火を投げつけるアホはお前が初めてだ」

男はあきれた顔でセージを馬鹿にした。そう、彼の着込んだ鎧は
貴重なドラゴン皮製だったのだ。高温プレスにさえ耐えると言う耐
熱性と、鉄の矢を文字通り皮一枚で受け止める強靱な素材で作られ
た一品は、セージの魔術や小型クロスボウを遮断する防御力を誇る。
生半可な打ち込みでは鎧を貫けない。戦術変更を迫られた。

男が右指をパチンと鳴らすや、ルエの砲撃から逃れた一人がセー
ジの背後から強襲をかけた。完全に不意を打たれた。ルエの作り上
げた風の刃が無作法な強襲者を膾切りにしなければセージは死んで

いただろう。鮮血がセージの背中を汚した。敵は倒れ、肉の塊となりて沈黙した。

気が付けば男は仲間を全て失っていた。

セージ一人、ルエ一人を相手取ったら話は違っていたかもしれない。だが、二人だった。それだけだ。

「……………ああ糞、運がねえな……………」

男が天を仰いだ。血と火の臭い充満した戦場の上空に、ワイバーンが舞っていたのだ。数にして十騎がまるでハゲタカのように上空を旋回している。戦場に向かうワイバーンではないことは一目瞭然だった。戦いの場に留まってあたかもこちらを監視しているかのようには思われたからだ。

ひよっこエルフ位ならねじ伏せる自信はあった。事実、今まで何人も捕まえては売りさばいてきたのだから。だが相手が悪かった。頭に殻を乗せたヒヨコと思いついていたが、若き猛禽だっただけのことだ。

敵を一掃したルエが地面に降り立ち、セージがロングソードを正眼に構えてじりじりと距離を詰めていく。

二人が冷たく言い放つ。

「降伏しろ！」

「武器を捨て降伏しなさい！」

男はロングソードを捨てようともせず、目を細めた。

軍属でもないのに降伏したところで殺されるのがオチだからである。所謂賞金稼ぎはしくじれば死ぬと相場が決まっている。

ふてくされた男は懐から金属製の酒入り容器を取り出し、ぐびりと一口。アルコールが口内を俄かに満たし血流に溶けていく。

「するわけねーだろ……」

それが彼の最期の言葉となった。

空から一条の何かが飛来するや胸を串刺しにして後ろに吹き飛ばし、地に縫い付けた。ドラゴン皮をも一息に貫通したそれは、金属と同等の強度を有しているであろう美しい氷の槍であった。男が吐血し、肢体が痙攣した。やがて男は静かになった。地上には馬や男たちの死体と氷と死体の歪なオブジェがあるだけであった。

セージは剣を収めると、上空を仰いだ。青き空を舞っていたワイバーンの群れは一騎が螺旋を描いて降下に移ると、次々と残りが後を追いかける格好で地上に向かってきた。高度が一定になると翼が大きくはためいてほぼ垂直に着陸した。

ワイバーンに乗っていたのは、エルフだった。

大きな宝石の付いた杖を傍らに携えた一人のエルフがワイバーンから飛び降りると、にっこり笑った。

「見つけるのに手間取ってしまったわ。久しぶりね」

「ヴィヴィ！？」

< 61 > 貴全様ぞ (後書き)

【苦しいです、評価してください】

< 62 > 船旅（前書き）

セージはヴィヴィと再会した。

“女の子”と一行は船に乗っていた。戦闘装束は脱いで高価な衣服に身を包んで。

セージは見慣れぬ風景をぼーっと眼球に映していた。警備、帆に風を送ることなど、仕事があることにはあったが、当番ではなかった。要するに暇だった。船にあった本はあらかた読んでしまったし、訓練しようにも船内は狭すぎた。せめて陸地ならば話も変わっただろうに。

ヴィヴィと再会した後、ワイバーンで一路大河へとやってきたセージとルエは、エルフと連合国が共同で遂行する作戦に参加したのだ。エルフ側の方針が変更となり支援から攻勢へ変化が起こったらしいが、詳細を知ることができなかった。

作戦はこうだ。貿易船を装い侵入して植民地からの特産品を詰め込むと見せかけて兵や兵糧を水揚げするのだ。ブルテイン王国内部の役人を買収して口止めも忘れず行っていた。戦争状態にならないなら外交問題になるだろうが、戦争中なら極論なんでもありである。国際条約なる優しい約束ことも無い。要は勝てばいいのだ。後は歴史が判断してくれる。

植民地に侵入した後は、現地住民を誘導して反乱を起こさせ、連合国軍と共に進軍を開始する。

しかし、大規模な艦隊がわいのわいのと大河を遡り始めれば、ブルテイン王国に気が付かれてしまう。装甲化された砲船を使うのも論外である。そこで抜擢されたのは高速性能の高い商船だった。

と言っても所詮は民間の船と変わりない。それに河川では機動性を活かすこともできない。もし大軍が押し寄せてきた場合、相手がただの手漕ぎボートでも陥落するだろう。求められるのは感づかれ

ないことである。緊急時にはワイバーンが駆けつける手はずになっているが、あくまで最後の手段なの言うまでもない。

セージは金属製の水筒に口を付けると、気まぐれに従い足を動かした。南洋特有の浅黒い肌をした屈強な船員にあいさつ。焦げ臭い廊下を通って、階段を登る。

ノブを握り、開けようとして力不足を認識し、肩で押す様にして開ける。外気が扉の隙間から流入して抵抗力となったのだった。

船の最上階は、見張り場でもあり休憩所でもあった。遠眼鏡とクロスボウを装備した船乗りが四隅に立っており、中央には廃材の机と椅子があり、トランプ（絵柄と枚数が違うが）遊びに興じる船員がたむろしていた。

キョロキョロと視線を彷徨わせてみたところ、その人物がいた。

エルフは外に出る際には耳を隠すよう言いつけられているのでフード付きローブを着込んでいて顔は見えなかったが、後ろ姿だけで判別できた。なぜなら背中に宝石の付いた大杖を背負っていたからである。

船員らの好奇の視線を無視し、歩み寄らん。

「ヴィヴィ」

「セージ？ どうしたの、眠そうな顔しちゃって」

「眠くは無いけど……暇で」

ヴィヴィが振り返った。身長はヴィヴィの方が高いので視線が水平にならない。

ませた雰囲気があった彼女も成長を遂げて、すっかり大人びていた。

とりあえず二人は船内に戻るとヴィヴィの部屋に向かった。すぐに上陸するとあって部屋は小奇麗に整理整頓されていて、個人の性格を窺い知れるようなものの置き方がされていない、いわばデフォルトの状態だった。

二人はローブを脱ぐと椅子でくつろいだ。

「……………」

「？ 何かしら」

「や、なんでもない」

セージはじつとヴィヴィの姿に魅入っていた。ヴィヴィが首を傾げ訊ねてきたので曖昧に誤魔化す。

出会ったときは肩までしかなかった髪は腰まで伸び、末端が緩やかに波打っていた。濃いブロンドの流れが光を反射してシルクのように表情を変える様は、一つの芸術品だった。また、両左右から髪をとって編み上げてあった。

瞳は深いグリーン。狩人さながらの力を内包していながら、水流に研磨された宝石が如く魅力を放っていた。魅惑の魔術チャームを使っているわけではない。造形の美しさが成す自然の魔術とでも言おうか。瞳はもちろん、通った鼻筋、眉、ふつくらとしていて血の気色の唇、どれもが淡い輪郭の顔に寸分の狂いも無く乗っており、遺伝子の成す奇跡を感じさせた。

セージがつい見てしまう部分はある意味で兵器だった。

品のいい衣服を押し上げる、たわわに成長した果実が二つ。丘などという生易しい単語では表現できないそれらは大陸の東西を隔てる山脈が如く隆起していた。上からなだらかに線を描いて降り、頂上から急に麓に辿り着く。腕の位置が変われば柔軟に形を変える。肺に空気が入れば微かに上下した。

ヴィヴィは足を組んでいた。肉付きのいい、しかし贅肉の無い美脚が交差している。彼女らしく動きやすい簡素な靴を履いていたが、活発な印象を強調していた。

セージはヴィヴィを見つめる一方、内心では混乱状態にあった。精神が男性ならば女性を好きになってもおかしくはないが、体は女

性である。ただでさえ精神が男性とも女性とも言えぬ灰色に佇んでいたところに、強烈な恋愛感情を抱いてしまい、アイデンティティが揺らいでいた。クララの場合は憧れと母性だったのに対し、ヴィヴィに抱いたのはloveだったのだ。

気の迷いと一蹴するのは容易いが、果たしてこの感情は偽りか真実か判別が付かなかった。

再会の喜びと誤認していると心を納得させた。

「本当に久しぶりよね。基地が燃えてるの見て、もう会えないのかなと思ったのだけれど、無事でよかったわ」

「回収されたらいきなり別の作戦への参加って厳しいって」

「同感。私も別のところで戦ってたらある日ワイバーンに乗ってエルフを呼び集めに行けって命令が来たの。情報の場所に居なかったら自力で探せって、もうくたくたよ」

「でもかつこよかった」

「褒めても何も出ないわ。お茶もお菓子も切らしちゃって、お水しかないの。残念ね」

二人は打ち解けて話していた。昔は丁寧な喋り方をしていたセージも砕けた風に会話をする。

どうやらヴィヴィは別のところで任務についていたところ、ワイバーンでエルフの回収を行えと命じられた後、植民地侵入作戦に参加しると追加で命令を受けたらしい。命令に次ぐ命令。移動に移動を重ねた彼女は疲労を湛えていた。セージも同じく疲労していたが、船で寛ぐうちに和らいでいた。

「そうそう、魔術は使えるようになった？」

「鼻血は吹かないよ。熱風吹かせるけど」

「今度機会があったら模擬戦でもやりましょうよ。私の成長っぷりを見せてあげるわ」

「うげ……昔ボロ負けしたのに勝てるかなあ」

「剣を使うの？」

「うん、射撃はへたっぴだし、槍は性分に合わないし、かつこいいし」

「かつこいいからって剣……セージらしいわね」

「ヴィヴィの杖って魔術専用？ 殴れそうだけど」

「一応殴れるわ。でも魔術用なので殴ってたらいくら替えがあっても足りなくなっちゃうじゃないの。うん……今度補強してもらおうと」

「殴る気マンマン？」

「唱えて殴れる魔術師ほど頼もしいものはないでしょ」

成長したのは魔術だけじゃないよなと、本人が聞いたら憤慨しそうなことを考える。

あからさまに胸を見れば怪しまれる。かといってチラチラと時折目を向けても怪しまれる。理性でもって頭ごと制する。

いずれにせよ船内で模擬戦は不可能なので、陸に上がってからになりそうだった。

セージは視線を逸らし丸い窓から外を覗いた。風景は相変わらずだった。

「戦争はどうなるんだろう……」

「さあね。殺して殺されて平和が作れるなんて虫のいい話だけど、やらなきゃやられるわ。頬張られたらあごの骨をカチ割るのが原則でしょ」

ぼつりと呟いたセージに、ヴィヴィが肩の辺りで両手を広げた。

< 62 > 船旅 (後書き)

時間がかかってしまった……

< 63 > 鎧の人物（前書き）

船旅を続けるセージは鎧を着込んだ人物と出会ったのであった。

< 63 > 鎧の人物

植民地と一口に言っても想像されるような奴隷国家というわけではない。

ブルテイン王国のやり方は国家を丸ごと併合してしまうのではなく、武力的制圧、もしくは経済的に掌握した後で政府上層部や王族貴族たちを脅迫して傀儡化するというものである。名目上、相手国側が『自発的に』従っているとされているが、他国は白い目で見ている。

であるからして王族貴族領主は植民地の人間なのだが、ただ富を差し出すだけの日々を送っている。

そこで、戦後の優位性を約束するような密約を持ちかけたらどうなるだろうか？

答えは言うまでもない。言うまでもないが、一端の兵士として運用されるセージたちにとって世界情勢はマクロの領域であってミクロの視点においては話題にはなっても考慮すべき事象になりえなかった。

船旅は順調だった。

貿易船は裕福な商人らの“支援”のもと、道中で堂々と街や橋を通過しながら、内陸へと向かいつつあった。

セージはヴィヴィ達女性陣にいわゆる女性的な衣服を着せられそうになったので逃げまわった。上陸して早々に戦闘をおっぱじめるわけにはいかないので、ある程度はフリをしなくてはならない。つまり、商人になりきらなくてはならない。にも拘らず年頃の娘が貧相な服装のままでは疑われる。ある程度はいい服を着なくてはならない。

頭脳では着る必要性を認知しているセージであったが、本能的に嫌がった。まだ成長の途上であるがために男の子にも見えなくもなはいとはいえ、いずれは体が女性のそのものになる。そう、いずれは

女性の服を着なくては不自然に見える時がやってくるのだ。

世の中には成人しても男だか女だかわからない人物も存在するが、セージは現在進行形で女性寄りだった。ならば未来でも女性寄りの容姿に成長するであろう。

たとえば胸が出てしまったら？ 明らかに胸があるのに男の格好をしていては、変人も変人、異端と取られても不思議ではない。宗教的文化的な違いを許容するエルフ族とはいっても、男の子は男の格好、女の子は女の格好という縛りは明白に存在する。処罰は受けないまでも変な奴という目で見られる時がやってくるであろう。

しかしセージは、戦いに身を投じた戦士であれば格好に縛りが無いことを知っていた。

力のなさを痛感したという理由もあるであろうが、無意識では戦士ならば女性を感じさせることなく生きていけるなどと考えているのかもしれない。もっとも本人はそのようなことを熟考しないし、考察もしないが。

セージが彼女らのピンク色空間から抜け出してすぐに、それと遭遇した。

なぜ今まで気が付かなかったのかと思うくらいに存在感のあるもので、しかし周辺の人はまるで気にした様子がなかった。

船の最後部に、巨大な鎧が佇んでいるのだ。

その鎧の人物は、肩背中から布きれを垂らし、腰などには旅の装備をして、いかにも商人の護衛を装っているものの、鉄の塊としか言いようがない剣を背中につけ、腕を組んで過ぎ行く景色を見つめ続けるさまは、城を守る衛兵のようであった。

フルプレート装備に、斬ることのみを目的としているであろう鉄塊剣を背中にぶら下げ、まるで微動だにせずその人物は、少なくとも素人ではないであろうことが容易に感じ取れた。

しかもただの鎧ではなかった。分厚く、黒光りしており、各部分には補強のためである金属板がベタベタと打ちつけられていた。肩、頭、膝には突起物があり、体当たりや蹴りの際に刺突効果を付与す

るのだらう。

剣も、尋常なものではなかった。肩幅に迫らんばかりの剣の幅に、成人男性と比べても頭一つ高い身長と同じか少し超えるかという刃渡り。ギラギラと日を反射する刃はびっしりと魔術文に覆い尽くされ、異様な雰囲気を纏っている。

そして装備の主も普通とは程遠かった。仁王立ちする人物の背中から香る、戦士のオーラが目に見えんばかりであった。

不自然だったのは、雰囲気こそベテランだというのに、装備一式が新品であろう光沢を放っていたことである。つい最近こしらえましたと言わんばかりなのだ。

「不思議だ」

声が出た。ガサガサと掠れた低音。酷く聞きづらく、くぐもっていた。

鎧の人物の声と認識したのは、次の言葉が紡がれたときになってからだった。

「切れた糸を繋ぎなおした……。一度切れた糸を完全に繋ぎなおした？ 馬鹿な」

「あの、何の話ですか」

独り言とも語りかけとも取れる言葉が発せられた。謎めいていた。セージは訝しげに眉に皺を寄せながら、そっと鎧の隣に並んで過ぎていく風景を見つめた。

再び鎧が唸り声に酷似した言葉を発した。

あたかも鎧に意思が宿りしゃべっているかのようだった。無論、兜の奥に陽光を反射して煌めく双眸があり、確かな呼吸のもとに甲冑が膨らんで歪んでいるからには、中に人がいるのであるが。

「なんでもない。それよりも我と話しているのはよくない」

「なぜです？」

「よくないからだ」

「はあ、よくわかんないですけど」

何やら誤魔化そうとする鎧の人物に、これ以上の追及は無意味とみたか、セージは押し黙った。

その時、やっとセージを追ってきたルエが艦尾に姿を見せ、鎧姿を一瞥した。彼は驚かなかつた。すたすと寄れば、セージに声をかけた。

「ここにいたんですか、探しました」

「おーっす。女の子たちがさー、ドレスやらひらひらした服やら着る着るうるさくつてさー。逃げてきちゃった」

「そ、そうですか。それは残念ですね」

「残念も何もよかつたくらいだよまったく」

セージは振り返ると柵に体重をかけるような姿勢をとり、上着の裾をひらりと捲った。男女兼用の やや男性よりの活動的な衣服からこじんまりとしたお臍が みえずに中着が覗いた。ルエの視線が一瞬固まるのをセージは目にしながら、内心『楽しいなこれ』などと不適切な考えを起こしていた。

ルエはいかにも惜しそうに視線を逸らせば、鎧の仁王像に目を戻した。

驚きはなく、ただ情報を得んとする目つきだった。彼の瞳は鎧から剣に移る。

ルエが声をかけた。

「こんにちは」

「……………また会ったな、悩み多き青年よ」

「以前も言いましたが兜を外して頂けませんか」

「だが断る。これは私の顔である。私の頭である。それに船に乗るときに身分証明は済ましてある。不審人物ではないのだからいいではないか」

鎧は饒舌に反論を並べると、カチャカチャと音を立てながら艦尾から俊敏に歩き去った。何やらその様子は、知られたくないことがあるから場を立ち去ったと言わんばかりであった。

セージは唇に手を当てて考察を試みたが、すぐに諦めた。

ルエがセージの横に並び、なにやら手で囲いを作って顔を寄せてきた。内密な話があるのだろうと察し、耳を貸してやる。エルフ式の内緒話の定番、耳を引っ張って方向を変えるやり方で。

「僕の見立てが正しければ、彼　もしくは彼女は長老の一人です」

「冗談だろ……」

ナンセンスだとセージが首を横に振った。里を指揮すべき長老が前に出っ張ってくるなどありえない。よほど戦いの実力があるか、里の指揮をほかの者に任せられる環境下に無い限りは。

ルエは一瞬言いよどむと、人差し指で宙を撫ぜるようにして鎧が去った方向を指した。

「いいえ。長老の一人が該当します。そのお方は血筋で里の長に据えられ、実際には妹が里を仕切っていると言われます。そしてその方は怪力を誇り、戦場では巨大な剣を背負って縦横無尽に駆け巡るそうです」

「それって」

「はい。あの大きさの剣を背負いながらさらに鎧を着こんで平然としていられる人を、僕は一人しか知りません。鉄の里の長、ヴィ

「シカでないかと」

「はーんなるほどねー。でもわざわざ危険な任務に出っ張ってくるもん？」

「ヴィーシカが危険を好むのは周知の事実ですから」

「なるほど。任務の成功率は100に近づいたようなもんかな」

「だといいんですけど」

二人が深刻な顔をしている一方、鎧の人物はまた違う場所で船から見える陸を睨みながら腕を組んでいた。

よし、バレてないなどと能天気なことを考えているとはさすがのセージとルエにも予想できなかった。

< 63 > 鎧の人物（後書き）

知らぬがなんとやら。

リハビリとして書きかけのを完成させて投稿しました。二か月ぶり
でしょうか？

次回からは上陸して行動を開始します、予定では。

< 64 > 賊という名前の遊撃

極秘裏に兵力を上陸させる計画は頓挫することもなく、逆に怖いくらいにとんとん拍子に進んだ。

内陸の都市に横付けする形で船団は停泊して、街を取り仕切る権力者の庇護のもと、着々と戦闘準備を整えていく。陸の主力戦力と同期して行動を起こさなくては効力が半減するので情報伝達も忘れず。

現代社会ではあまり考えられないことであるが、この時代において村町街は独立した一つのコミュニティであり、小さな国である。

国家という頭でつかちの権力者が軍隊をちらつかせて国への所属を求めているからやむを得ず国家に属するのであって、税金を絞られ、わけのわからぬ戦争に人を取られ、そこで国の誇りがどうのこのたまわれても嫌になるのが道理である。

ましてや街を取り仕切るのが商売人であるならば、話は早い。いつの時代においても商売人が欲しがる『特権』を約束してやれば首がもげるまで縦に振る。

という経緯を持って、その街は連合側の拠点へと一夜にして姿を変えていた。

と言つても、単に意識が変わっただけで、人口も、街の構成も、何もかも変化がないのであるが。

エルフ問題も、かたが付いた。ケチな懸賞金よりも特権による莫大な利益の方が得だからであろう。もとより『王国』が勝手にエルフが有害などと訳のわからぬことを並べたのが始まりであり、明らかに有害でもなんでもないのは周知の事実だったからだ。

注意すべき点は情報の漏えいだ。街が丸ごと寝返ったことが知られたら最後、大軍が押し寄せてくる。

だがしかし人の行き来を規制してはいずれ事実が露呈してしまう。

動きをせき止めればいかに鈍い旅人でも気が付くだろう。

よって行動は流水が如く行われることとなった。

上陸地点の街をそれとなく強化する班、商人を装い旅をして各都市に向かい説得する班と、遊撃任務に就く班に分かれるのだ。

もししくじれば内側と外側からかき乱すという戦略が塵に還る。

二度目は許されない。だからこそ慎重に慎重を期しているのだ。

無論セージは後者の遊撃任務班に志願した。断じて商人の娘かにかとして女の子の格好をしなくてはならないと知ったからではない。

遊撃隊はルエ、ヴィヴィ、そして身分がさつそくバレている謎の鎧人物と、その他十数名からなる班である。遊撃隊は他にも十隊ほど組織された。

一行は、あたかも盗賊のように『ブルテイル王国』の戦力を削ぎ落とすように注意を受けた。本戦力として行動をしては、上陸がばれてしまうからだ。頃合いを見計らい合流して、陸上の本隊と共同で作戦を行うのだ。

出発当日。

服の上から布のマントを纏いフードをきつちり被った一行が街外れの小高い丘の上にあった。皆揃って馬に跨り、大河のうねりの途中に錨をおろして停泊している船団を見ていた。

馬にはそれぞれ荷物がぶら下がっており、旅商人の擬装用に品物が詰め込まれている。

ルエの馬に跨ったセージは、船団と街並みを眺め、のんびりとあいさつをした。

「さらば同胞よ、旅立つ馬はつて奴か」

脳裏によぎるのは巨大な戦艦だったが、この世界で戦艦と言えば木造だ。間違っても波動を放つようなものは存在しない。

セージら一行の姿はやがて丘の上から消えた。

闇夜に紛れて距離を詰めた。もう少し近づければ、剣で斬りかかれよう距離にまで。

セージ、ルエ、そして数人の兵士たちは、帝国の兵士詰所の裏庭に忍び込んでいた。

前方、約10mの地点に、軽武装をした警備がいた。彼は襲撃など予想もしていなかったのだらう、のんびりとした様子で地面を爪先で穿り返していた。飽きたのか夜空の星を仰ぐ。

「……………」

鼻から乾いた大気を吸い、口を広げて甘く吐く。

セージはナイフを抜いた。すり足忍び足。口笛を吹きつつ夜空を見上げている兵士の背後に近寄る。刹那、凶器をスツと宛がった。振り返ろうとした兵士の口を塞ぎ、喉を横一文字にかき切る。

ナイフの刃が皮をねじ切り、肉を裂き、神経と血管を途切れさせ、気管を断つ。

魚の腹を切ったような手ごたえ。

どつと血が溢れ、噴水のように真上に噴き出た。あらかじめ用意しておいた布で抑え、血が周囲を汚さぬように縛る。今まさに死んでいく真つ最中の警備兵の瞳がセージを睨んでいたが、やがて焦点が遠くに飛んだ。

迅速に死体を地に横たえれば、手を振り、兵士らに馬屋と武器庫に忍び込むように合図する。

べとつく血を手の甲で払い、死体を引きずっていき、『賊』を演出するために工作を開始する。これまたあらかじめ用意しておいた手斧を肩に振り落とし、腹にも斬りこむ。物言わない顔面も殴って

おく。服装を乱し、懐の金銭を奪う。

あまり手際がいいと『賊』にしては、と良からぬ噂を招きかけない。乱闘の末に殺されたと演出しておくのだ。

いかにも張り倒された感を醸し出すために服を砂で汚し、庭の小規模な畑に転がしておく。

その間に仲間の兵士たちは馬屋に忍び込み馬の口を縛って連れ出し、兵器庫から物資を奪い燃やすという算段である。

セージは見つかつてはいかんと、庭の物置小屋の裏に身を潜めた。すぐそばには寄り添うようにルエの姿があった。

セージは血なまぐささに顔をしかめつつ、囁いた。

「ちよろいもんだ、まったく」

「攻め込まれるなんて思いもよらないですからね」

二人は押し黙った。仕事の最中に雑談するなど賢いとは言えないからだ。

セージは自らが殺めた男に視線を落としていた。かつては一人殺すのにも随分と後悔の念に駆られたものだが、現在では当たり前のように殺せた。

殺しに覚悟などいらなかったのだと今さらになって追憶してみる。慣れと摩耗と必要性、それだけで人は命を奪えるのだ。

無残な死体は黙して語らず、ただ肥料になるばかり。

空は満点の夜空。青い月。澄んだ空気。外はこんなに綺麗なのに、服に付着するのは鮮血。

「悪く思っなよ……っつと、そろそろか」

仲間たちが馬を引き連れて庭の外に出た。セージはルエの肩を小突くと、魔術の準備に取り掛かった。

イメージするのは火だ。ルエも火をイメージした。必要なのは火

火力よりもお手軽な『火種』。適性が無くとも、魔術さえ使えるなら誰にでも扱える初歩の初歩。

手元に生じた赤い灯をその辺に放り、点火。腰の剣を抜剣すれば、クロスボウを詰所の窓に二連続ぶち込み、鬨の声を上げた。

ウオオオオオオオオオツ！

仲間たちが一齐に声を上げて、火矢や岩を詰所の建物に投げつける。敵襲を悟った兵士数人が戸口を開けた次の瞬間、四方八方、暗闇から矢が殺到し、蜂の巣にした。

すっぽりと黒布に身を包んだ仲間たちは、接近戦を仕掛けるようなまねはせず、矢を射掛け、建物を全焼させんとした。二人も加勢した。魔術の作動を悟られてはいけない。あくまで火矢を用いたと演じて。

窓の中、柱、その他。

時に松明に火を移し、投げ込む。建物の中から矢の応射があったが、当たるわけがなかった。めくら撃ちにやられるような素人は、いないのだ。

セージが三人ほど射殺したあたりから、兵士が逃亡し始めた。暗闇の四方から矢が飛んでくるだけで敵しいのに、建物に火が回り始めては抵抗するだけ馬鹿馬鹿しいと考えたのだろうか。一人が逃げ出せば、堤が洪水で崩れるように、次々に暗闇に飛び出して消えていく。

セージは手でメガホンを作り、吼えた。

わざと喉に力を込めて、声帯を轟かせた。

「よし野郎共、引き上げだ！！」

オオオオオ！！

仲間達が同調して大声を張り上げる。

威勢のいい掛け声をあげてみれば、胸が高鳴った。セージはすぐに装備を整えると燃え盛る建物を背に脱兎が如く駆けだし、離脱し

た。引き際が肝心だ。グダグダと留まっただけでは騒ぎを聞きつけたほかの兵士や街の防衛隊が駆けつけてくる。

仲間たちは手際よく奪い取った馬に乗ると、わざと身を晒すようにして疾駆する。

ルエが馬に乗ると、手を差し伸べてきた。握って背後に飛び乗る。彼の腰に手をまわしながら、背後を振り返る。小さき地獄とでも称すべき火災現場が確かに地上にあった。陽炎に晒された地上に影が揺らいでいた。

「手筈通りに散ってくれ！」

セージはルエの肩を小突いて指示を与えながら、仲間たちの馬列に声を張り上げた。

仲間達　と言ってもごく数人が　は馬に命じてバラバラの方向に舵をとった。

馬は車のようなものだ。文字通り強力な馬力で脚部をまわして地を蹄で蹴り付けて推進するからには、痕跡が残ってしまう。大勢で近間隔を巡航しては追尾してくださいと言わんばかりの線を残すだろう。

このたびの襲撃は成功と言えるだろう。

馬を操りながら、ルエがぼつりと感想を述べた。彼からしたら率直に言葉を発したに過ぎなかったのだろうが、セージにとっては恣意的に投げかけられたとしか思えないセリフを。

「まるで男性みたいでしたよ」

「……………」

夕風のように押し黙り、ああそうだなと適当な返事を返す。景色を眺める気分でもなく、ルエの服の皺を睨む。

喜んでいいのか、悲しんでいいのか、それとも笑えばいいのか。

とりあえずセージは二連クロスボウに矢を込め直しながら、夕飯のリクエストを求められたので『なんでもいい』と答える子供のようには言葉を口にしてみた。

「男だからな」

「なら、僕は女ですね」

「冗談じみた口上に乗せた言葉は、正しく冗談として受け取られたようだった。

セージはルエが前を見ていなくてはならないことを利用して、彼の後ろ纏めの髪の毛を弄った。体の細さと中性的な容姿、後ろ纏めいわゆるポニーテールの組み合わせは、女性ものの服を仕立ててやれば、女性と錯覚する気配を孕んでいた。

諺ではない意味で後ろ髪を引かれたルエは、手綱を握ったまま、背中を前にやることで抵抗した。

「んん？ 女装したいの？ 色男。髪なんて結んじやってさー、

そっちのケあるんじゃないの」

「ありませんよ！」

「機会があつたらやつてみようぜ。俺の服を……お前でかくなつたから入らないか、残念」

セージはそれとなくルエの肩幅や腰回りや腹の太さをペトペト触って測って、言った。

二人は雑談を交わしながら馬に乗って一路味方のもとへと走り去った。

< 65 > バレてないですよ (前書き)

一行は帝国の交易路破壊のために潜入を行うことにした。

< 65 > バレてないですよ

合流地点は街外れの古い教会だった。かつてこの地に存在した神を祀ったという場所は、見るも無残に燃えがらになっていた。詳しい過去を知る術はなかったが、酷く焼け焦げていることから、火事があったか、放火されたのだと理解できた。

セージとルエが戻って少しして、分かれた仲間も教会にやってきた。物資調達班もやってきた。

ここは教会堂のメインフロア。

神を祀り、祈りを捧げる場所。その空間は奇しくもキリスト式の教会に酷似していた。

「……………なぜ我が参加してはならぬのだ……………」

鎧の人物　　ヴィーシカは教会の朽ちた椅子に腰かけ、唸り声をあげていた。意気消沈していた。黄昏ていた。襲撃に参加する旨を告げてみたところ、ほぼ全員から反対意見を食らい、物資調達を行う羽目になったからだ。

ヴィーシカは己の足元に視線を落とし、次に背中 of 剣を引き抜くと、置いた。もはや鉄板に取っ手がくつついているとしか表現できないサイズのそれを片手で易々と抜いて床に置けるヴィーシカの腕力はいかほどか。

「むう……………戦いに来たのに戦ってはならぬと言われてしまうと。はな。なにが原因なのだ」

そう、その者は戦うために危険の大きそうな最前線をわざわざ選

んで『お忍び』でやってきたというのに、これまでやったことと言えは船上警備と食料調達だけだった。

頭を悩ませる鎧の疑問に、答えるものがいた。

「そりゃ、長老さん。仰々しい装備の賊なんざ怪しすぎるからじゃないの」

鎧がガシャガシャやかましく背後を振り返れば、ラフな格好のセージがいた。

セージはとことこ歩いてくると鎧姿のすぐ隣に腰かけ、足を組んだ。ショートカットの可愛い女の子と、素材を岩に変えれば神殿に飾れそうな外見をした鎧の人物が同じ椅子に腰かけているさまは、第三者が居たのならば面白おかしく映るだろうか。

ヴィーシカは剣の柄を手で弄びながら首を振った。

「我は、長老ではない」

「嘘付き。話に聞いたけどフルアーマー装備の上にそのデカブツ振り回せるのって一人くらいしかないだよ」

見てわかる程度には鎧の肩が震えた。なんてわかりやすい反応だろう。漫画のような反応に危うく唾液が噴き出そうになった。

長老とは思慮深く賢いものと思っていたセージだが、多少の認識修正が必要と分かった。ヴィーシカという長老はお世辞にも賢くないし、会話術に長けているでもなかった。

ヴィーシカは剣を弄っていたが、俯き、もそもそ言葉を漏らした。

「原因は鎧と剣だったのか……妹の話聞いていればよかったな」

「普通の服を持ってないの、長老さん」

「平素から鎧を着こんで生活しておるからに、普通の服などない」
どんな日常なのか。セージは鎧を着こんだ人物が『いい朝だ』と言いつつベッドから起き上がり、ご飯を食べ、仕事をして、鎧の上から水浴びをしてベッドに入る想像をしてみた。変わり者などという領域を突破している。

「……用意してこなかったと……？」

「うむ。外見さえ誤魔化せばいいであろうと思ってな……む
？ いま、私のことを馬鹿だと思ったな？」

「はい」

「はいじゃないぞ。はいじゃない。自覚はある。脳味噌も筋肉と馬鹿にされてきたのだから」

「なら、俺が用意しますよ。成人男性の服ならすぐに」

「それで構わぬ。それと、もしあるのならば仮面のようなものが欲しい。私の顔は火傷が酷くてな、醜いのだ」

「あれば用意します。声も火傷で潰してしまったというのは、本当ですか」

「ウウム、そうだ。首をなます切りにしてやらんとしたら火を噴かれてな……顔に喰らってしまったのだ。吸い込んだのもその時だ」

セージはここで思った。頭は良くないが、話しやすい人であると。そしてなぜ戦場に来たのかも理解した。頭がよくないことを自覚しているからこそ戦場に身を投じてきた長老なのだろう。名声通りの実力があるのであれば非常に心強い。実力と戦力不足に苦しんできた経験を持つだけに、名高い戦士の存在は胸に一滴の希望となりて注ぐようであった。

ヴィーシカは剣を傍らの椅子に斜めに立てかけると、座ったまま肩を落とし、猫背にてセージの顔を見つめた。

「時に、いいか。名は……たしか」

「セージと言います」

「セージ……いい名前だ。時に聞きたいのだが幽体離脱の術でもしたことがあるのか？」

脈絡のない質問に怪訝な顔をする。幽体離脱の術なるものを試した記憶は無かった。

足を組み替えて、前かがみでヒソヒソと聞き返す。

ヴィーシカが右手と左手を重ねるようなジェスチアを交えつつ説明をし始めた。この時点ではまだ核心に迫られるとは思ってもしなかった。

「どういうことです」

「セージ、君の魂は私の感覚では妙な繋がり方をしているのだ。一度切って繋げたとしても言おうか。他人の魂を持ってきたようなはつきり表現するのならば……」

「中身が別人だと……そう言いたいので？」

苦笑に疲労をふんだんに塗して本心を偽装した、口の端がぎゅっと引き攣る表情が？女の子？の顔に広がった。鎧姿には、少なくとも表面的な表情はない。

鎧がギシギシ音を立て、両手をコツンと合わせた。

「ウム。実に高度な術だが、魂だけ抽出して加工、別の肉体と結合し直せば、そのような繋ぎ目のある魂になるであろうよ」

ヴィーシカが言葉を切ったところで、視界に移りこんだ人物がいた。教会堂の隅で熱心に話し込む二人に興味をそそられたらしきルエがやってきたのだ。近くに寄れば、話が聞こえるだろう。必然的に。

セージの心に焦燥感が湧いた。魂の違和感どころか中身が別人だったことまで看破していることを聞かれたら、ルエがショックを受けるのではないだろうかと確信があったからだ。オカルト話は科学社会においては笑い話だが、魔術社会では本気で捉えられる危険性がある。

セージは脊髄反射的に、上半身の振りで下半身を引きずって椅子の上を滑るとヴィーシカの至近距離に侵入して、肩を引き寄せようとして予想以上の質量に諦め、自分からさらに寄って口止めせんとした。

「今の話は内密にお願いできますか」

「なぜだ」

「……、に知られたくないので」

「？ いいだろう」

セージはルエを顎でしゃくった。ヴィーシカは一拍置いて承諾した。

危ないタイミングでルエが二人の隣に腰かけた。

「服の相談事ですか？」

「んーそうそう。長老殿が服をご所望」

「長老ではない。ともあれ服が必要だ。戦装束で戦に望めんのは残念であるが」

ルエはセージの核心に迫る情報が飛び交っていたことなど露知らず、フムと息を吐いて唇を触った。

「我々の任務はかく乱であって戦争ではありません。今のところ。目立つ鎧は論外だったので……服は用意しましょう」

「かたじけない」

ヴィーシカが身を縮めるようにして感謝した。

三人をよそに、遊撃隊のメンバーが教会の中央に集まり始めていた。まだ若い男を中心に何やら作戦会議を開こうとしているようだ。三人が雰囲気を読んで集まると、会議が始まった。

隊長　すなわち隊を率いる男の提案により、方針が決定した。次の目的地は交易の中継地点として栄える商業都市。情報では、『帝国』の商人の輸送路でもあるそうである。ここを叩き、『賊』の力を見せつけて不安を煽ってやるのだという。

武闘派のヴィーシカが顔を顰め、同類らしきヴィヴィも残念そうだった。

が、都市だけに防衛戦力が駐在しているとわかると、二人とその他戦闘大好きな連中はこぞって喜んだ。

「え、そういう連中ばかりなの？」

「そうですよ？」

「そうなのか」

「そうなんです」

驚愕の表情というより呆れの表情を浮かべたセージがポカンと口を開いて傍らのルエに尋ねてみると、当たり前のことではないかと言わんばかりに返された。

積極的に敵地に乗り込んで遊撃を行うような連中が戦いの嫌いな連中ばかりな訳があるのか？

ふと浮かび上がる疑問があった。

会議の途中、意見はないかと隊長に求められたのを見計らい、拳手する。

「まさか都市の防衛戦力と真正面から力チ合おうっていうんですか？　無謀にもほどがあります」

「安心しろ。街に潜入して弱点を探る」

「我々はエルフですよ、バレます」

「バレん。なあ、魔術師」

隊長が言葉を投げかけた相手はヴィヴィであった。彼女は周囲の視線を真つ向から受けつつも、こほんと咳払いをして、懐から何やら三個の地味な指輪を取り出した。

隊の中の数人が、オオツと珍しいものを見たような反応を示した。飾りも無く、銀製でもミスリル製でもなく、あたかも鉄パイプを輪切りにして加工したようなシンプルを極めた指輪は、セージの目からは何の効力も持たないおもちゃに見えた。

特徴があるとすれば、太い線と細い線と楔型を組み合わせた複雑怪奇な幾何学的な文字が刻み込まれていることだろうか。

ヴィヴィはその中から一つを白い指先で摘みあげると、掲げた。たちまち文字列が淡く輝き、楔型文字が指輪を横に等速度で滑り始めた。

「身隠しの魔術の亜種、外見を偽装する恒常性の指輪よ」

「へえ〜」

一同が驚いた。魔術は主に戦闘にしか用いてこなかったセージは『なんかすげえ』としか思わず、ベクトルの違う驚きの声を上げた。何やら周囲の様子がおかしい。あるものは口を覆い、あるものは腕を組み、あるものは隣の人物と議論に興じ始めている。

いったい、魔よけの指輪とどう違うのだろうか。

試しに尋ねてみることにした。

「すごいのか、あれ」

「はい。魔術の有無に関わらず持つ限り恒常的に外見を偽装するアイテムは姿隠しのマントや変化の術に相当する高度なものです」

と説明されてもセージはいまいち理解していないようで複雑な顔をしているが、例えば火。一瞬の点火はたやすくとも、長時間大火力ともなれば燃烧の要素を十全に満たさなくては、火は成立しない。更に火に指向性を与えて推力を生み出すなどとなれば、より高度な技術が無くてはならない。

ヴィヴィの持つ指輪はその高度な技術で作り上げられた一品であった。

指輪さえしていれば外見を自在に偽装できるのならば、暗殺から諜報まで楽々でこなせるであろう。

なぜ彼女が持っているかは話題にのぼらなかったが、この一連の作戦のために大金はたいて準備された品であることは、ほとんどの人間が気が付いていた。

議題は、その指輪を誰が嵌めるかということだった。

ニヤリ、あからさまな企み笑いを浮かべたものは、ヴィヴィ。強き者。汝の名前は女。

「私と、ヴィーシカ氏と、セージを推薦します」

「おいまて我はヴィーシカでは」

まさかの暴露に慌てたのはヴィーシカその人だったが、誰一人驚きもしなかった。バレバレだったからだ。むしろ『やっぱり』という微妙な雰囲気すら漂った。

鎧の人物もといヴィーシカは周囲に発覚してはいないかと恐る恐る視線を配ったが、様子のおかしさにコミカルな動作で停止した。

提案に異を唱えたのは隊長である。彼は腕を組んで首を振った。そしてもう一人、ルエも反対意見を唱えようとしたが、タイミンクを見失い、上げかけた手を下げた。言うまでもないが自分が付き添うという案をぶちまけようとしたのだ。

「セージは若すぎる」

「魔術と戦闘なら私とヴィーシカ氏で十分です。それに彼女はいずれの心得もありますしまるで使えないというわけではありません。若さでいったらあなたも若いじゃありませんか」

「……む。だがなあ。みんなはどう思う？」

若さを指摘された隊長は一瞬キョトンとしたが、すぐに真顔に戻り、セージの顔をじっくり観察したのち、多数決を求めた。結果は半分と少しがセージの参加に賛成を示した。あっさり決められて、セージの意思が介在しなかった。

ことが終わって指輪を渡されてから、

「俺行くのか……」

と納得したような納得しないような顔で参加を承諾した。

実は一連の採決はヴィヴィが裏で手回しをしていたのだと、セージが気が付く余地は無かった。

「ふふふふ」

人知れず笑う女、ヴィヴィ。

船でできなかつたあれやこれやをやるうと画策していたのだ。

懐には銀貨。裏切り？ いいえ、欲望の証です。

< 65 > バレてないですよ (後書き)

ヴィーシカさんはドジっ子というか天然。

次回、ヴィヴィ、セージ、ヴィーシカで街に潜入します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0711u/>

神なんて死んでしまえ

2012年1月6日04時46分発行